

# 岐 阜 城 跡 3

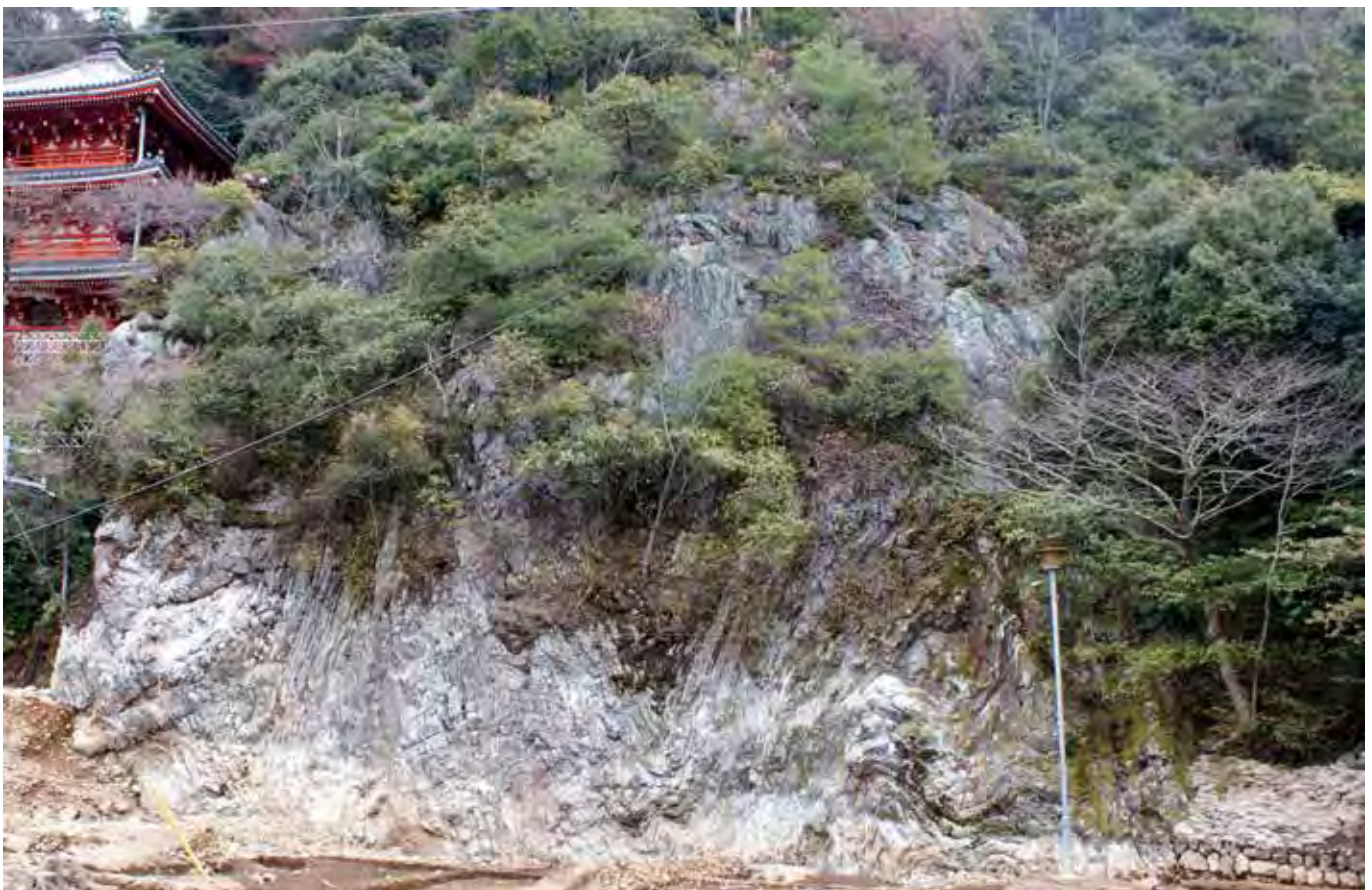
— 史跡整備に伴う発掘調査 —

2015

岐阜市教育委員会  
(公財)岐阜市教育文化振興事業団



調査区全景(南西から)



加工された岩盤1(南西から)





調査区全景オルソ画像(南西から)



調査区全景オルソ画像(北西から)



調査区全景オルソ画像(南から)

# 例 言

1. 本書は国史跡岐阜城跡及び岐阜城千畳敷遺跡に所在する埋蔵文化財の発掘調査の報告書である。
2. 調査は史跡整備のための内容確認を目的としたもので、岐阜市教育委員会が実施した。そのうち発掘調査に関する業務の一部を（公財）岐阜市教育文化振興事業団に委託して実施した。
3. 調査期間及び調査組織は以下のとおりである。

## 調査期間

現場調査	平成25年6月19日～平成26年3月24日
整理・報告作業	平成26年4月1日～平成27年3月24日

## 指導組織

### 史跡岐阜城跡整備委員会（平成25年4月1日設置）

中井 均（日本城郭史）	滋賀県立大学 教授
小和田哲男（日本中世史）	静岡大学 名誉教授
丸山 宏（庭園文化史）	名城大学 教授
坂井秀弥（日本考古学）	奈良大学 教授
麓 和善（日本建築史）	名古屋工業大学大学院 教授

### 史跡岐阜城跡整備専門委員会（平成25年4月1日設置）

仁木 宏（日本中近世史）	大阪市立大学大学院 教授
高木 洋（日本考古学）	前岐阜市歴史博物館館長
中井 均（日本城郭史）	滋賀県立大学 教授
山村亜希（歴史地理学）	愛知県立大学 准教授
仲 隆裕（日本庭園史）	京都造形芸術大学 教授
武田 純（造園）	岐阜県立国際園芸アカデミー 客員教授

## 調査組織

### 岐阜市教育委員会

教育長	早川三根夫
事務局長	島塚英之（平成24年4月1日～） 若山和明（平成26年4月1日～）
社会教育課長	内堀信雄
同 信長学・市史編さん係長	高橋方紀
同 主査	井川祥子

### （公財）岐阜市教育文化振興事業団

理事長	大見富美雄
埋蔵文化財調査事務所長	青山武彦
同 副所長	恩田裕之
同 常勤嘱託員	梅村大輔、高見哲士

4. 調査参加者は下記の通りである。

調査補助員 青木小夜、川橋靖子、横井聡子

作業員 安藤久子、伊藤キミヨ、伊藤憲二、上田たかえ、臼井喜七、江崎隆己、大西千鶴子、大洞勝巳、面手 勝、神谷保行、川島行彦、河野靖夫、後藤勝利、後藤公志、鈴木真由美、鷺見米子、関 秀子、高崎和夫、



高橋龍雄、田中真美、辻 春美、土川 裕、平井典子、廣瀬孝一、向井康子、  
毛利 徹、安田浩美、山田正一、山田秀雅、領家正己、渡辺貞子

5. 発掘調査の進行は、内堀・高橋・井川（社会教育課）の指導の下、恩田・梅村・高見（埋蔵文化財調査事務所）を中心に実施した。

6. 遺構図版作成、遺物整理、遺物図版作成、写真図版作成は恩田が行った。

7. 本書の執筆者は下記のとおりである。第5章の自然科学分析は冒頭に記した。全体の編集は恩田が行った。

大下 永（岐阜市教育委員会社会教育課）（第1章）

井川祥子（第2章第1節、第6章第1節）

恩田裕之（第2章第2・3節、第3・4章、第6章第2節）

仲 隆裕（京都造形芸術大学教授）（第7章）

8. 現地での測量作業は（株）イビソクに委託した。

9. 自然科学分析は（株）パレオ・ラボに委託した。

10. 遺物の写真撮影はアートフォト右文に委託した。

11. 出土遺物について下記の方に御教示いただいた。

山茶碗・瀬戸美濃産陶器 藤澤良祐（愛知学院大学教授）

12. 現地調査及び整理作業の過程で下記の各氏及び各機関に多大なるご指導とご協力を賜った。深く感謝する次第である。

文化庁：市原富士夫、青木達司

岐阜県教育委員会：松野晶信

有識者：尼崎博正、池上裕子、小野健吉、白幡洋三郎、鈴木正貴、高屋麻里子、玉井哲雄、  
飛田範夫

13. 調査記録及び出土遺物は岐阜市教育委員会が保管している。

## 凡 例

### 遺 構

1. 図中の方位は真北を示し、座標は世界測地系に準拠した。

2. 遺構図の縮尺は、1/50を基本とし、一部は1/25とした。

3. 遺構の略号は下記の通り用いた。

SD：溝 SK：土坑 SV：石垣・石積み・巨石石組み SVX：石列

SR：池泉遺構 SS：通路 SX：石敷遺構・集石遺構・その他

### 遺 物

1. 遺物実測図の縮尺は、1/3を基本とし、銅製品の一部を1/2、石製品の一部を1/4とした。また瓦は1/4、銅銭は1/2とした。

2. 遺物実測図中の一点鎖線は施釉範囲を示す。

3. 土師器皿のトーンはタール痕を示す。また、ナゲ調整は実線で示した。

4. 遺物観察表の口径および底径については、括弧の値は復元値である。土師器皿における口径と器高の実数は、最大値と最小値の平均値である。

5. 遺物集計表の集計値は接合後の破片点数である。

# 目 次

第1章 岐阜城跡の地理的・歴史的環境	
第1節 立地と環境	1
第2節 岐阜城の歴史	4
第2章 発掘調査の経過	
第1節 調査の経緯	7
第2節 調査の方法	7
第3節 調査の経過	8
第3章 遺構	
第1節 基本層位	10
第2節 調査地区（平坦地）と遺構の概観	12
第3節 検出遺構	16
第4章 遺物	
第1節 遺物の概要	38
第2節 出土遺物	39
第5章 自然科学分析	
第1節 池泉遺構S R 1・榊状遺構S X 25の珪藻化石群集	82
第2節 池泉遺構S R 1の花粉分析	87
第3節 池泉遺構S R 1出土の炭化種実	91
第4節 石垣S V 30前面の堆積土の植物珪酸体	93
第5節 榊状遺構S X 25埋土の寄生虫卵分析	94
第6節 池泉遺構S R 1整地層の放射性炭素年代測定	95
第6章 発掘調査成果のまとめ	
第1節 A地区の構造	98
第2節 出土遺物の傾向	100
第7章 考察	
史跡岐阜城跡の庭園遺構に関する所見	102
写真図版	111



## 挿図目次

第1図	周辺の遺跡	3
第2図	グリッド配置図	9
第3図	基本層位柱状図	10
第4図	土層模式図	11
第5図	山麓居館跡地形復元図	13
第6図	遺構配置図	14
第7図	加工された岩盤1 立面オルソ画像	16
第8図	池泉遺構S R 1 (北東部) 実測図(1)	19・20
第9図	池泉遺構S R 1 (北東部) 実測図(2)	21
第10図	池泉遺構S R 1 (北東部) 実測図(3)	22
第11図	池泉遺構S R 1 (北東部) 実測図(4)	23
第12図	池泉遺構S R 1 (北東部) 実測図(5)	23
第13図	池泉遺構S R 1 (北西部) 実測図	24
第14図	集石遺構S X 40・礎石23・24実測図	27
第15図	石垣S V 31~33実測図	28
第16図	石垣S V 7 土層図	30
第17図	石垣S V 30・階段S X 42・虎口状遺構S X 43実測図	31・32
第18図	石垣S V 30・集石遺構S X 45土層図	33
第19図	礎石28~31実測図	35
第20図	柵状遺構S X 25実測図	36
第21図	石垣S V 21実測図	37
第22~39図	遺物実測図(1)~(18)	47~64
第40図	珪藻化石分布図	86
第41図	分析土壌サンプル採取位置図	88
第42図	花粉分布図	90
第43図	暦年較正図	97
第44図	遺構のまとめ	99
第45図	出土遺物集計グラフ	101

## 別添図目次

別添図 1	山麓居館跡地形測量図
別添図 2	A・E地区全体図
別添図 3	A地区遺構図
別添図 4	A地区土層図(1)
別添図 5	A地区土層図(2)
別添図 6	池泉遺構 S R 1 実測図
別添図 7	石垣 S V 7・集石遺構 S X 44 実測図

## 表目次

第 1 表	平坦地一覧	12
第 2 表	遺構一覧・構成表	15
第 3～15 表	遺物観察表 (1)～(13)	65～77
第 16・17 表	遺物集計表 (1)・(2)	78～81
第 18 表	珪藻分析試料一覧	82
第 19 表	珪藻化石産出表	85
第 20 表	花粉分析試料一覧	87
第 21 表	産出花粉孢子一覧表	89
第 22 表	炭化種実一覧	91
第 23 表	植物珪酸体個数	93
第 24 表	寄生虫卵分析試料計量値	94
第 25 表	放射性炭素年代測定試料および処理	95
第 26 表	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	96
第 27 表	各地区の出土遺物集計表	101



# 写真図版目次

巻頭図版 1 発掘調査区全景／岩盤遠景

巻頭図版 2 調査区全景オルソ画像

写真図版 1	調査区全景オルソ画像	111
写真図版 2	調査前風景／完掘状況全景	112
写真図版 3	完掘状況平坦地／平坦地北／池泉遺構 S R 1	113
写真図版 4	池泉遺構 S R 1	114
写真図版 5	岬状遺構 S X41／景石 4・7～10	115
写真図版 6	石垣 S V29／礎石 26・27／石敷遺構 S X47	116
写真図版 7	石敷遺構 S X47／池泉遺構 S R 1／集石遺構 S X40・景石 5	117
写真図版 8	池泉遺構 S R 1 底断面／礎石 23・24／岩盤／石垣 S V31・32／石垣 S V33	118
写真図版 9	石垣 S V 7	119
写真図版 10	石垣 S V 7／集石遺構 S X44／柵状遺構 S X25／礎石 28～31	120
写真図版 11	礎石 28～31／南斜面遺構	121
写真図版 12	南斜面遺構／虎口状遺構 S X43／石垣 S V30／階段 S X42	122
写真図版 13	階段 S X42／石垣？／E地区全景／石垣 S V21／現地説明会風景	123
写真図版 14～17	出土遺物写真（大窯製品）	124～127
写真図版 17～18	出土遺物写真（輸入陶磁器）	127・128
写真図版 19～20	出土遺物写真（土師器皿）	129・130
写真図版 20	出土遺物写真（土製品・石製品）	130
写真図版 21	出土遺物写真（大窯天目茶碗）	131
写真図版 22	出土遺物写真（大窯小天目茶碗・小碗・小杯・皿）	132
写真図版 23	出土遺物写真（大窯大皿・鉢）	133
写真図版 24	出土遺物写真（大窯德利・建水・水指）	134
写真図版 25	出土遺物写真（大窯搦鉢）	135
写真図版 26	出土遺物写真（大窯香炉・風炉・加工円盤等）	136
写真図版 27	出土遺物写真（染付・外面）	137
写真図版 28	出土遺物写真（染付・内面）	138
写真図版 29	出土遺物写真（青磁・白磁・中国製陶器）	139
写真図版 30	出土遺物写真（土師器・土師器皿・土製品・石製品・山茶碗）	140
写真図版 31	出土遺物写真（古瀬戸製品）	141
写真図版 32	出土遺物写真（瓦・銅製品・鉄製品）	142
写真図版 33	珪藻化石の顕微鏡写真	143
写真図版 34	産出した花粉化石	144
写真図版 35	炭化種実	145
写真図版 36	植物珪酸体	146

# 第1章 岐阜城跡の地理的・歴史的環境

## 第1節 立地と環境（第1図）

岐阜市は岐阜県の中南部に位置する中核都市で、岐阜県の県庁所在地である。地勢は北側の美濃山地と南側の濃尾平野に大きく分けられ、その境界部分、長良川が形成した岐阜扇状地の左岸扇頂部付近にある金華山（標高 329m）に岐阜城は築かれている。

金華山周辺における旧石器時代～縄文時代の遺跡は、東方の日野・寺田遺跡（218・219）が挙げられる。瀬戸内技法のナイフ形石器の接合資料や縄文時代草創期の土器、尖頭器が確認されている。その他、縄文時代の遺物が確認されている周辺の遺跡としては鶯谷遺跡（182）、美殿町遺跡（188）、琴塚遺跡（282）等がある。

弥生時代では前期の遺物が長良川北岸の鷺山蟬遺跡（124）で散見されるが、明確な遺構が確認され、遺跡が増大するのは中期以降のことである。日野・寺田遺跡では周辺から木製鋤が発見されている他、掘立柱建物群が検出されている。金華山南方の梅林小学校遺跡（196）、華陽小学校遺跡（260）、荒田川流域の江東遺跡（251）等で遺物が確認されているが、いずれも本格的な調査は行われておらず、その実態はよくわかっていない。瑞龍寺山の南斜面では、享保年間に銅鐸が出土したと伝えられており、現在は上加納銅鐸として東京国立博物館の所蔵となっている。また金華山南方の瑞龍寺山頂遺跡（185）は弥生時代の墳墓であり、棺型に削り抜かれた岩盤が現存する。ここでは舶載の「長宜子孫」銘内行花文鏡が弥生時代後期の遺物とともに出土している。

続く古墳時代には、金華山と周辺の山々に古墳が造られるようになる。瑞龍寺山周辺では上加納山古墳群（181）、権現山古墳群（180）、金華山東方では日野第1・2古墳群（200・201）等が築かれる。金華山でも千畳敷遺跡2次調査で横穴式石室（千畳敷古墳）が確認されており、周辺に古墳が点在していたと考えられる。この時期の集落跡は長良川南岸では明確に確認されていないが、北岸の鷺山周辺の遺跡や城之内遺跡（123）では弥生時代終末期から古墳時代にかけての住居跡等が多く検出されている。

7世紀後半になると、岐阜市域にもいくつかの古代寺院が建立される。厚見寺跡（193）は現在の瑞龍寺周辺にあったとされる古代寺院で、境内には長さ2.7mを測る大型の塔心礎（県史跡）が残されているほか、周辺から「厚見寺」「厚見中林寺」の文字を型押しした瓦も見つかっている。このほか、大宝廃寺（244）、鍵屋廃寺（173）、長良廃寺（城之内遺跡）の存在が知られている。古代には鷺山周辺に東山道ルートがあったと推定されているが、特に鷺山蟬遺跡では緑釉陶器や二彩陶器、銅製の巡方が出土していることから、周辺に方県郡の郡役所の存在が推定されている。金華山東方では平安時代後期の灰釉陶器を生産した日野窯跡群があるほか、千畳敷遺跡においても2・3次調査で土坑とそれに伴う土師器等が確認されている。

中世では金華山北東山腹の日野不動洞遺跡（278）において、14世紀末から15世紀前葉を中心に7基の中世墓が確認されており、蔵骨器として使用された古瀬戸四耳壺、瓶子が出土している。千畳敷遺跡でも铸造関連の遺構や梵鐘の鋳型、「大寺」と書かれた墨書土器などが出土しており、中世段階の金華山西麓には伊奈波神社に関係する寺院施設があったと推定されている。長良川北岸では鷺山蟬遺跡で大規模な堀が確認されているが、この場所は戦国時代の蟬土手城館が築かれる位置とも重なっており、古代から引き続いて重要な地域であったとみられる。

15世紀後半以降になると守護所の存在が顕在化してくる。革手・加納（15世紀後半～16世紀初頭）、福光（16世紀初頭～前葉）、枝広（16世紀前葉）そして山県市の大桑（16世紀第2四半期頃）



と転々と場所を変えることが特徴である。革手・加納は史跡加納城跡（262）、下川手遺跡（263）、水主町遺跡（255）、東川手遺跡（265）が相当する。近世加納城の本丸の位置には、15世紀後半の守護代・斎藤氏の居城である中世加納城が立地していたと推定されており、この段階の土塁を確認している。福光は鷺山市場遺跡（100）、鷺山仙道遺跡（122）、下土居北門遺跡（98）、正明寺城之前遺跡（95）、鷺山蟬遺跡が相当する。守護城下の地割を示す土地区画の溝が各所で確認されており、総合すると一辺120mを一区画として碁盤目状に広がっていたと考えられている。鷺山蟬遺跡では同様の区画に沿った堀と土塁に囲まれた城館が確認されており、これが「蟬土手城館」と呼ばれる居館跡であったとみられている。枝広は城之内遺跡が相当する。城之内遺跡では城館の堀が検出されており、その規模は一辺180m以上と推定される。埋土からは中国銭や中国製磁器等が納められた竹行李が2つ出土した。堀には砂が厚く堆積しており、洪水により廃絶したことを示唆している。

当報告書の調査対象地である金華山西麓の岐阜公園一帯は千畳敷・千畳敷下と呼ばれ、斎藤道三、織田信長等歴代城主の居館が在った場所であると伝えられている。また、史跡岐阜城跡周辺部山城の岐阜城周辺砦群（281）には、砦跡と推定される平坦地や石垣等の遺構が分布している。金華山西側の岐阜城下町遺跡（175）は中世から戦国にかけては稲葉山城・岐阜城の城下町として栄え、幕府直轄領を経て尾張藩領となった近世以後は商工業の町として発展する。城下町は、総構が周囲に巡らされ、その北側に接する長良川周辺には、水運の基点として川湊と尾張藩の川役所があった、中河原遺跡（280）がある。

関ヶ原合戦の前哨戦で岐阜城が廃城になった後は、南部に加納城（262）とその城下町が造られ、中山道の宿場町としても栄えた。現在の岐阜市域はこの加納城下町と岐阜城下町の、2つの町が核となって出来上がっている。

#### 【参考文献】

岐阜市 1980『岐阜市史』通史編原始・古代・中世

岐阜市教育委員会 1987『寺田・日野Ⅰ』

（財）岐阜市教育文化振興事業団 2002『鷺山仙道遺跡』

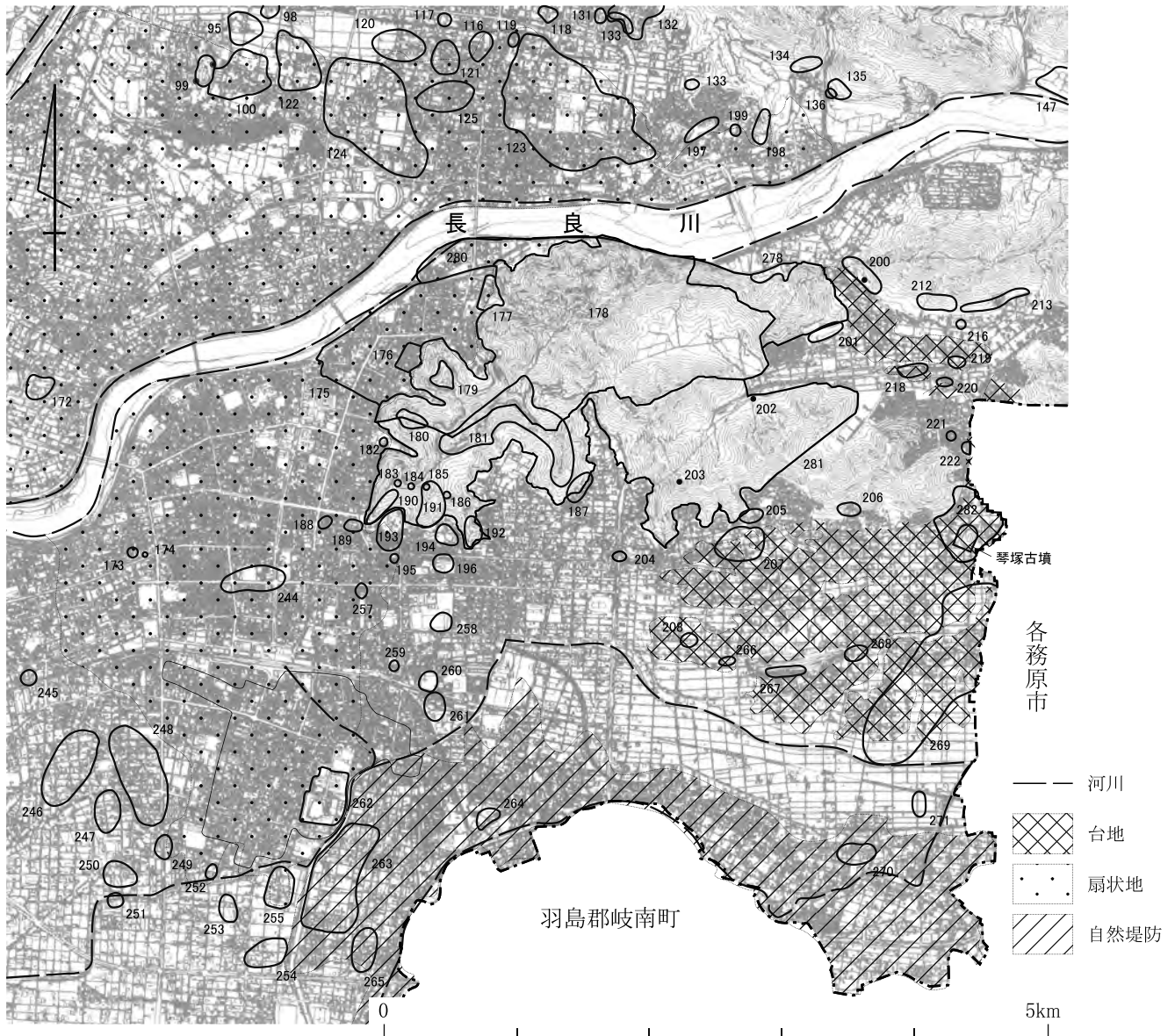
岐阜市教育委員会・（財）岐阜市教育文化振興事業団 2003『史跡加納城跡』

岐阜市教育委員会・（財）岐阜市教育文化振興事業団 2003『平成13・14年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』

内堀信雄・鈴木正貴・仁木宏・三宅唯美 2006『守護所と戦国城下町』高志書院

岐阜市鷺山第二土地区画整理組合・（財）岐阜市教育文化振興事業団 2007『鷺山蟬・鷺山仙道遺跡』

岐阜市教育委員会・（財）岐阜市教育文化振興事業団 2009『岐阜城跡』



95 正明寺城之前遺跡	古代～中世	176 岐阜奉行所跡	近世	200 日野第1古墳群	古墳	251 江東遺跡	弥生
98 下土居北門遺跡	古代～中世	177 岐阜城千畳敷遺跡	古代～戦国	201 日野第2古墳群	古墳	252 大野遺跡	弥生
99 鷺山古墳群	古墳	178 岐阜城跡	戦国	202 蛭塚古墳	古墳	253 茜部本郷A遺跡	古代～中世
100 鷺山市場遺跡	古代～戦国	179 北洞古墳群	古墳	203 岩戸山古墳	古墳	254 茜部本郷B遺跡	古代～戦国
116 福光東A遺跡	中世	180 権現山古墳群	古墳	204 二軒屋遺跡	弥生	255 水主遺跡	古代～戦国
117 福光東B遺跡	弥生	181 上加納山古墳群	古墳	205 北一色古墳群	古墳	257 溝旗町遺跡	弥生
119 長良天神遺跡	弥生	182 鶯谷遺跡	縄文	206 野一色古墳群	古墳	258 鶴田町遺跡	弥生
120 鷺山治郎丸遺跡	古代～戦国	183 水道山遺跡	弥生	207 北一色A遺跡	中世	259 竜田町遺跡	弥生
121 太田遺跡	古代～戦国	184 瑞龍寺山西遺跡	弥生	208 北一色B遺跡	古代～中世	260 華陽小学校遺跡	弥生
122 鷺山仙道遺跡	古代～戦国	185 瑞龍寺山頂遺跡	弥生	212 船伏山古墳群	古墳	261 祈年町遺跡	弥生
123 城之内遺跡	縄文～戦国	186 瑞龍寺山東遺跡	弥生	213 日野窯跡群	奈良	262 加納城跡	古代～近世
124 鷺山蟬遺跡	古代～戦国	187 岩戸古墳群	古墳	216 日野北石神遺跡	縄文	263 下川手遺跡	古代～戦国
125 福光花ノ木町遺跡	古代～戦国	188 美殿町遺跡	縄文	218 寺田遺跡	旧石器～弥生	264 上川手遺跡	中世
131 龍門寺遺跡	縄文	189 殿町遺跡	弥生	219 日野遺跡	旧石器～古墳	265 東川手遺跡	古代～戦国
132 龍門寺古墳群	古墳	190 瑞龍寺山第1古墳群	古墳	220 寺田轟遺跡	旧石器	266 平塚古墳群	古墳
133 長良窯跡群	奈良	191 瑞龍寺山第2古墳群	古墳	221 雨池遺跡	弥生	267 前一色古墳群	古墳
134 志段見第1古墳群	古墳	192 瑞龍寺山第3古墳群	古墳	222 雨池東遺跡	旧石器	268 前一色遺跡	縄文～弥生
135 志段見第2古墳群	古墳	193 厚見寺遺跡	古代	244 大宝庵寺	古代	269 長森岩地遺跡	古代～中世
136 長良志段見遺跡	古代～中世	194 篠ヶ谷遺跡	弥生	245 荒屋前遺跡	弥生	270 藏前遺跡	中世
147 長良古津遺跡	古代～中世	195 金園町遺跡	弥生	246 六条北遺跡	古代～中世	271 高田遺跡	古代～中世
172 東島寺屋敷遺跡	中世～戦国	196 梅林小学校遺跡	弥生	247 六条南遺跡	古代～中世	278 日野不動洞遺跡	中世
173 鍵屋庵寺遺跡	古代	197 雄総第1古墳群	古墳	248 六条東遺跡	古代～中世	280 中河原遺跡	中世～近世
174 鍵屋古墳	古墳	198 雄総第2古墳群	古墳	249 加納梅田町遺跡	古代	281 岐阜城周辺岩群	中世～戦国
175 岐阜城下町遺跡	戦国～近世	199 護国之寺遺跡	古代	250 六条遺跡	古代～中世	282 琴塚遺跡	旧石器～中世

第1図 周辺の遺跡

## 第2節 岐阜城の歴史

### 永禄 10 年まで

岐阜城跡の範囲は、金華山の山城とほぼ同一であり、古くは稲葉山と呼ばれていた。この山の南に続き、美濃平野に面する瑞龍寺山には、弥生時代後期の墳墓、瑞龍寺山頂遺跡がある。

また古墳時代には、山尾根筋や山麓部に多数の古墳が築かれる。山麓居館跡の発掘調査でも、第2次調査において石室が発見された千疊敷古墳がある他、登山道沿いにおいても近年の分布調査によって新たな古墳が発見されている。古代では、山麓部の第2次調査において、灰釉陶器・ロクロ土師器を廃棄したと思われる土坑や地鎮遺構が検出されている。

続いて中世に入ると、第3次調査において発見された「大寺」墨書小皿や梵鐘鋳型、石積み、五輪塔、古瀬戸といった遺物・遺構などから、西側山麓部では寺院らしき宗教的施設が存在が推定される。その他、金華山の北東山腹に、多数の古瀬戸四耳壺・瓶子が出土した中世墓群、日野不動洞遺跡がある。以上により、この山城は古くからこの地域の人々にとって重要な墓域であった。

また、稲葉山の麓にある丸山は、伊奈波神社の旧社地であったとされている。一条兼良の紀行文『藤河の記』には、舟で因幡山の麓を過ぎ、この山は因幡社の縁起にある山である、と記している。この「因幡山」は、立地的に現在の伊奈波神社の付近ではなく、丸山ないしは金華山を指していると考えられ、伝承を裏付けるものと言える。前述の3次調査で検出された宗教遺構も、ここにあった旧伊奈波神社に関連した宗教施設である可能性がある。いずれにしても、古代・中世の人々にとって、この山は大きな信仰的な意味を持っていたことが分かる。

城郭利用については、建仁年間に二階堂山城守行政が初めて城を築いたとする伝承があるが（『美濃明細記』など）、確実に利用されていたと分かるのは大永5年（1525）である。このとき長井氏が主家の土岐頼武・斎藤利隆を追放した事件で、南麓の瑞龍寺が戦地となっているが、『朝倉家伝記』によれば、朝倉勢が守護方について、「稲場山ノ城」を攻撃している。

後の天文8年（1539）ごろ、斎藤道三によって伊奈波神社が丸山から現在の地へ移されたと伝えられ、この時までには稲葉山に築城が行われたと考えられる。道三は、同21年ころ守護・土岐頼芸を追放するなど、本格的に美濃を実効支配した。

天文23年（1554）、道三は息子の義龍に家督を譲るが、その2年後には義龍に討たれてしまう。義龍は国内の安定・整備に努めたが、尾張の織田信長との緊張が高まる中、同4年（1561）に病で急逝する。跡を義龍の子・龍興が継いだ。同7年（1564）、稲葉山城が竹中半兵衛重虎（重治）と安藤伊賀守守就に一時奪取された。

### 織田信長の入城 ～関ヶ原合戦まで

永禄10年（1567）、信長は稲葉山城を落とし、龍興を追放して、小牧山から居城を移した。同年の9月から12月にかけて、信長は多くの禁制・安堵状を出して、戦乱で逃亡した百姓・町人の還住と新領地の治安回復に努めている。また、この頃から「天下布武」印を使用するようになり、町の名を井口から岐阜へと改めた。翌年の伊勢出兵に始まる対外戦や、足利義昭を西庄の立政寺に迎えて幕府再興の計画に着手するなど、軍事・政治的戦略が大きく展開していった。義昭の征夷大將軍への補任と二条の御所造営、伊勢長島攻め、延暦寺焼き討ち、義昭追放、朝倉・浅井氏の滅亡、本願寺攻撃、長篠合戦などは、岐阜在城時代の出来事である。

天正3年（1575）信長は家督を嫡子の信忠に譲って岐阜城主とし、翌4年（1576）に近江の安土城へ移った。天正10年（1582）信長・信忠父子が本能寺の変で死亡した後は、岐阜城主は秀吉による人事のもとに置かれることになるが、城主は転々と変わっている。

最後の城主・織田秀信は慶長5年（1600）の関ヶ原合戦の際に西軍に属した。そのため岐阜城は、合戦の前哨戦で東軍の標的となり、8月に落城した。

### 関ヶ原合戦以後、近世の岐阜城跡

関ヶ原合戦に勝利した家康は、岐阜城を廃し、西国の守りとして、南方の平地に加納城を築いた。岐阜城の櫓・館の礎石・石垣などはこの時とり壊され、加納城建設のために使用されたといわれる。城を失った岐阜の町は、加納藩領ではなく、徳川蔵入地（直轄領）となった。慶長6年（1601）に大久保石見守長安が美濃国奉行となり、旧城の地を離れた南西、靱屋町・米屋町辺りに陣屋を置いた。元和元年（1615）木曾山及び木曾川・飛騨川流域の要地が尾張藩へ引き渡され、同5年（1619）に岐阜町は美濃国内142箇村とともに同藩へ加増された。

金華山は尾張藩主の「御山」として一般の立ち入りが禁止され、奉行所に山廻り同心が置かれて普段の見回りに当たった。歴代藩主の岐阜御成の際には、鶴飼見物とともに登山・鹿狩りなどが催された。『増補 岐阜志略』には、千畳敷を見た後、百曲から登山した安永6年（1777）、七曲口から登り百曲口へ下った後、千畳敷へ入った天保14年（1843）などの藩主視察の記録がある。江戸後期の様子を描いたと思われる『岐阜御山附近図』には、山と平地の間に柵がめぐらされ、所々に冠木門が描かれる。また伊奈波神社蔵の『稲葉山城趾之図』には、山頂の矩形階段状の石垣、尾根筋の施設を囲む石垣、山麓居館部分と思われる長方形の区画などが見える。現在残る地形と一致するところが多く、当時の、遺跡としての岐阜城跡の状況をよく表していると思われる。

しかし、江戸時代を通じて、山と山麓の城主居館があった部分、及びその前面の平地には、大規模な施設は建設されなかったと考えられる。

### 近現代の公園整備

明治に入り、金華山は官林となり、一転して土地利用が進むようになった。明治10年（1877）富茂登村に、岐阜中教院が開院した。岐阜公園内の北寄りで行われた第3次調査で「中教院」と記された染付坏が出土している。ここは板垣退助遭難の地として有名である。

山麓は近代都市公園として整備された。明治15年（1882）に公園設置の請願・認可がなされ、21年（1888）に開園式が行われ、26年（1893）に市に移管された。37年（1904）に名和昆虫研究所が京町から移転し、40年（1907）に記念昆虫館が竣工している。また、金華山の山頂には、43年（1910）に三層木造トタン葺きの模擬天守が建った。

大正期には再度岐阜公園の整備が行われ、大正3年（1914）に再度、開園式が行われた。その翌年に公園の西北長良川を渡る長良橋が鉄製橋に架け替えられたが、この廃材で大正6年（1917）三重塔が山腹に建立された。翌7年（1918）には中教院が公園から移転し、10年（1921）にかけて跡地に相撲場・運動場・庭園が造設され、板垣退助像が建立された。大正8年（1919）には名和昆虫博物館が開館している。

第二次世界大戦後は、公園開発が再び盛んになる。昭和30年（1955）に金華山ロープウェー建設されている。また明治期に建てられた模擬天守は、昭和18年（1943）失火により焼失してしまうが、戦後の天守復興気運の中、昭和31年（1956）に現在のコンクリート造の天守が再建されている。昭和38年（1963）には金華山ドライブウェーが建設されている。その他、昭和中期には県立図書館、水族館、児童科学館などの施設建設が相次いだ。これらは昭和末から平成にかけて、老朽化・機能移転により解体されている。現在まで続く文化施設としては、昭和60年（1985）に岐阜市歴史博物館が、平成3年（1991）に加藤栄三・東一記念美術館が開館し、現在へと至っている。しかし、これら開発のため、山麓居館や山上部の城があったと推定される場所は、その多くが公園・施設整備がなされ、地下の遺構は大きく影響を受けたと考えられる。



## 近年の発掘調査と岐阜城跡の重層的価値

昭和59年（1984）織田信長居館伝承地の西側山麓部において、第1次発掘調査が始まった。調査によって、信長は斎藤氏時代に造成された地形をベースとして利用しつつ、再造成と施設の建設を行ったことが推測された。調査に続く史跡整備事業では、検出された居館入口の通路を復元した。その後、公園整備に伴う2次・3次調査では、信長・斎藤氏段階の遺構、それ以前の宗教施設や古墳等が検出され、この場所が城郭として利用される前は、宗教施設として利用されていたことが確認できた。

平成19年度より、内容確認のための第4次調査が行われており、山麓居館に関する多数の石垣や庭園遺構、建物の礎石等が検出された。遺物としては、陶磁器の他、戦国期の瓦や焼けた壁土等が出土している。このような調査の進展により、調査成果に基づく遺構の状況と、ルイス・フロイスや山科言継などの訪問記録との対比がより出来るようになった。また、発掘調査と同時に、山林部の分布調査を実施したところ、山中の砦跡と思しき多数の遺構が確認された。その多くは「稲葉城趾之図」に描かれている砦跡と対応するもので、文献調査の成果と合わせ、山全体が城域であることが判明した。これらの成果を受け、岐阜城跡は平成23年に国史跡に指定されている。

岐阜城跡は、岩盤地形・植生・動物等、豊富な自然を有している。景勝地として古くより多数の歌に詠まれ、山上眺望など景観的な価値も高い。また、前述のように古くからの信仰価値の高い山でもある。その他、山麓部の岐阜公園は近代以降の公園整備の課程を色濃く残したもので、公園としての価値も高い。このように岐阜城跡は城郭の価値の他にも、多様な価値が混在した史跡であることが分かる。

### 【参考文献】

- 黒川真道編 1915『美濃国諸旧記 全 濃陽諸士伝記 全』 国史研究会
- 平塚正雄編 1937『濃州徇行記 濃陽志略』 一 信社出版部
- 平塚正雄編 1932『美濃明細記 美濃雑事記』 一信社出版部
- 平塚正雄編 1931『新選美濃志』 一信社出版部
- 矢崎正治編 1934『尾濃栗見聞集・岐阜志略』 大衆書房
- 松田毅一・川崎桃太訳 1978『日本史』 中央公論社
- 松田毅一監訳・東光博英訳 1998『十六・七世紀イエズス会日本報告集』 第Ⅲ期第3巻 同朋舎出版
- 松田毅一監訳 1987『十六・七世紀イエズス会日本報告集』 第Ⅰ期第2巻 同朋舎出版
- 松田毅一監訳 1988『十六・七世紀イエズス会日本報告集』 第Ⅰ期第3巻 同朋舎出版
- 岐阜市教育委員会・（財）岐阜市教育文化振興事業団 2009『岐阜城跡』
- 岐阜市・岐阜市教育委員会 2012『史跡岐阜城跡 保存管理計画書』

## 第2章 発掘調査の経過

### 第1節 調査の経緯

岐阜市では、平成18年度に岐阜市総合計画、金華山・長良川まると博物館構想の下、岐阜城と岐阜城下町を含む地域である金華地区を対象として、『岐阜町発祥の地・まちなか歩き構想』を策定した。これは、岐阜の地に溶け込む魅力を掘り起し、心の豊かさを感じられるまちづくりの実現を目的としたものである。同時に策定された岐阜公園基本計画では、「信長の時代を語る岐阜公園」をテーマに公園整備を行う方針が示された。その中で岐阜城千畳敷遺跡（岐阜城跡山麓居館跡）については、発掘調査による内容確認の実施と、その効果的活用の検討を行うこととされている。合わせて調査の現状や成果を市民等に広く公開し、観光資源として活用することが方針に盛り込まれた。

上記の計画を受け、岐阜市教育委員会では、平成19年度からは館の全体像を明らかにするために4次調査を開始した。当初は遺跡の内容確認のためのトレンチ調査であったが、平成25年度からは史跡整備事業を推進するため調査を行っている。

調査主体は岐阜市教育委員会社会教育課であり、業務の一部を（公財）岐阜市教育文化振興事業団に委託して実施している。

4次調査期間中の平成22年1月に岐阜市教育委員会から文部科学大臣に史跡指定の意見具申が行われ、11月19日に国文化審議会の答申を受けた。平成23年2月7日付け文部科学省告示11号により、岐阜城千畳敷遺跡を含む金華山一帯（約209ヘクタール）が国史跡に指定された。

平成23年度には史跡岐阜城跡の保存管理方針や現行変更等の基準を示した『史跡岐阜城跡保存管理計画』、平成24年度に今後の史跡整備の基本的な方針及びその手法の概略、事業計画等をまとめた『史跡岐阜城跡整備基本構想』、平成25年度にサイン計画の基本的な方針等を定めた『史跡岐阜城跡サイン計画』、平成26年度には具体的な整備、公開、活用、体制に関する計画、今後の事業計画を示した『史跡岐阜城跡整備基本計画』を策定した。

平成19・20年度の調査成果については、平成21年度に報告書『岐阜城跡』、平成21～23年度は平成24年度に『岐阜城跡2』として報告されている。本報告書では平成25年度の調査成果を報告する。

### 第2節 調査の方法

調査を行うにあたり、「史跡岐阜城跡整備委員会」および「史跡岐阜城跡調査専門委員会」を発足させ、検出された遺構の評価やその解釈、発掘調査の方針等について専門的見地から指導を受けながら実施している。両委員会は年3回程度開催し、さらに検出された遺構に応じて委員や有識者に個別に指導を求めた。また、文化庁文化財部記念物課、岐阜県教育委員会社会教育文化課にも方針についての指導を受けた。

掘削作業は人力により行った。基本的に戦国期上層面の1面のみ調査にとどめたが、一部サブトレンチを設定して下層遺構の確認を行っている。遺構埋土や遺構上面を覆う焼土層等については、保存の観点から半裁もしくは部分的な掘削にとどめている。埋戻しの際には遺構面上に不織布を敷いた上、砂で埋め戻し、遺構の保護をはかっている。

図面は基本的に1/20縮尺で作図した。一部の平面実測図及び土層断面図を手作業により行っているが、平面図、立面図、断面図とも三次元レーザー測量により作図した。

写真は中判カメラ（6×7）の白黒・ネガカラー、一眼デジタルカメラ、35mmネガカラー一眼カメラにより撮影している。その他、調査進捗状況の映像記録として、月1回程度のペースでハイビジョ

ンカメラによる撮影を行った。

測量に際しては、座標は世界測地系の平面直角座標系（第Ⅶ系）、水準は東京湾平均海面（T.P. + 値）を基準としている。土層の色調については『新版標準土色帳』を用いた。

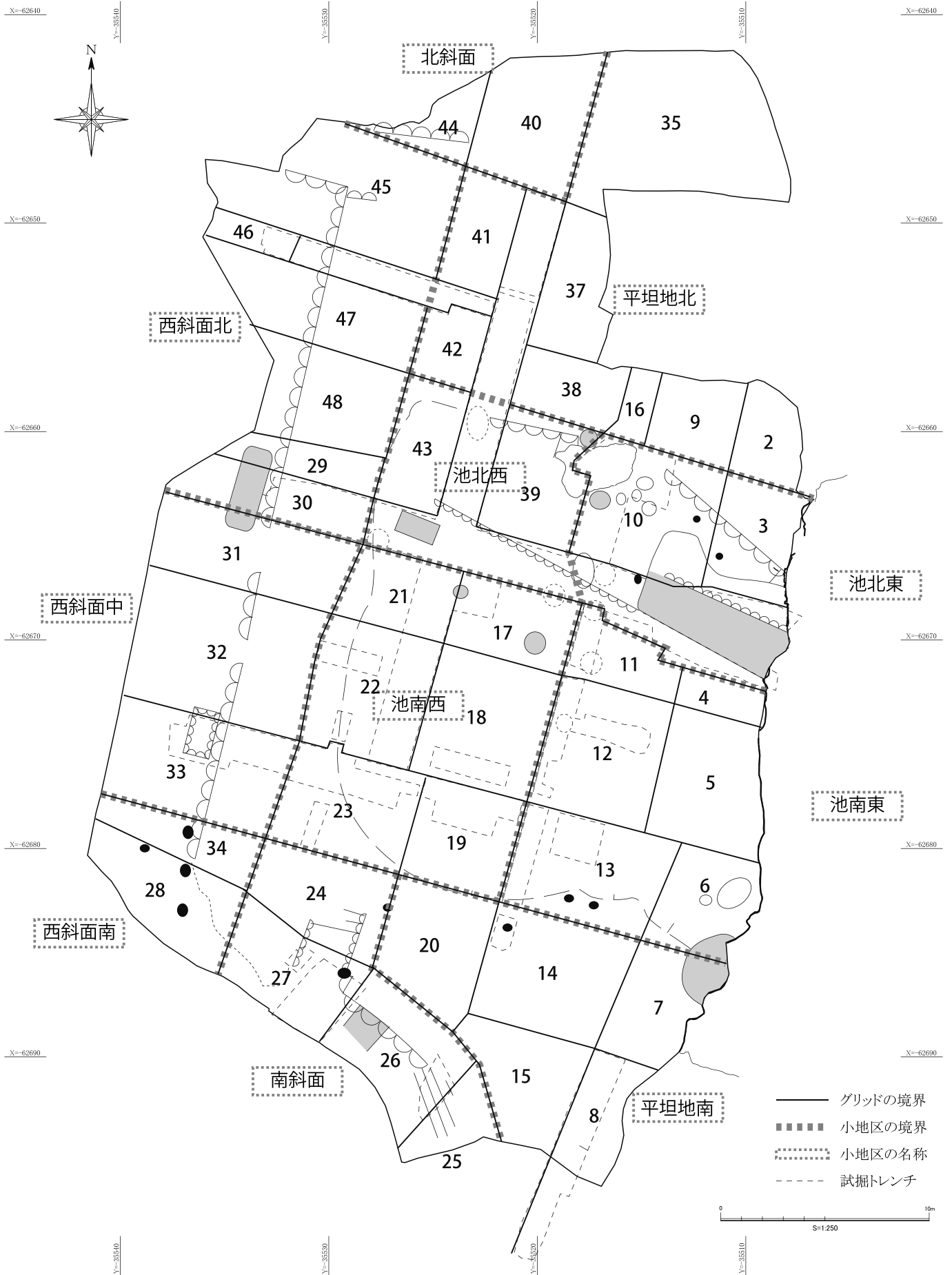
また調査方針に基づき、発掘調査の過程や成果を広く市民に公開するため、現場周辺にのぼりや木製フェンスを設置し、見学しやすい雰囲気作りを行うとともに、現地事務所の一部を発掘調査案内所としてパネル展示や映像による紹介等を行った。

### 第3節 調査の経過

調査は平成25年6月19日より、調査区内の樹木伐採作業から開始し、7月1日に同作業が終了した。同日フェンスを設置、機材の搬入等準備作業を経て、7月16日重機を用いて、現代に造られた登山道の盛土掘削作業を開始した。重機掘削終了後の7月18日より、人力による掘削を開始した。排土はベルトコンベアでE区平坦地に仮置きし、積み込み・搬出・処分を委託して行った。

人力掘削は調査区東端である岩盤際から行い、8月上旬に池泉遺構南で礎石、集石遺構、景石を検出した。9月4日には集中的な豪雨に見舞われ、山から発掘調査区内へ大量の雨水が流れ込む被害に遭った。この際、岩盤に滝状となって雨水が流れ込む様が観察できた。過年度の試掘トレンチ調査で示された池泉遺構底部までの掘削が終了したが、完掘と判断できるまでには至らなかった。10月1日に第1回史跡岐阜城跡整備専門委員会、10月2日に第1回史跡岐阜城跡整備委員会が開催され、各委員の現場視察が行われ、池泉遺構に関しては先行トレンチを設定し、下層の状況を確認し調査を進めるとの方針が示された。先行トレンチでの土層観察の結果、さらに掘り下げる必要が判明したため、全体的に掘削を行い、池泉遺構底部を検出した。11月上旬、池泉遺構北東部において石垣（SV29）を検出した。さらには池底が岩盤に向かって広がっていることが確認でき、掘削を進めた。それと同時に11月27日より西斜面南半の掘削を開始し、まずは重機を用いて表土掘削を行い、順次人力によって石垣（SV7）を検出していった。12月10日には第2回史跡岐阜城跡整備専門委員会が開催され、委員による現場視察が行われた。委員会で示された石敷遺構（SX7）の断割調査を行う方針に従い、翌日より実施した。その結果、下層で新たな石敷遺構（SX47）を検出した。12月11日より南斜面の掘削を開始した。重機を使用できるスペースがなかったため、表土から人力によるものとなった。12月下旬には石垣（SV30）を検出し、数日後には階段（SX42）を検出した。1月中旬より北斜面の調査に着手した。2月上旬西斜面北半の掘削を開始し、石垣（SV7）の検出を進めた。2月24日、第2回史跡岐阜城跡整備委員会と第3回史跡岐阜城跡整備専門委員会の合同開催が行われ、各委員の視察があった。2月26日、報道機関への発表を行い、3月1日に発掘現場の一般公開を実施した。その後写真撮影、片づけ作業を行い、3月12日から調査区の埋め戻しを開始した。方法は、遺構面全体に不織布を敷き、その上に砂を敷設し、シートで全面を覆った。3月20日に機材の搬出をもって調査を終了した。

記録は、調査区全面を委託してレーザー計測で行った。現地での計測作業は12月3～6日、1月23～27日、2月25・26日の3回に分けて行い、随時図化を進めた。



第2図 グリッド配置図

# 第3章 遺構

## 第1節 基本層位 (第3・4図)

本報告書では、平成19～23年度の成果をまとめた報告書『岐阜城跡』・『岐阜城跡2』に掲載した基本層位に準じて報告する。

岐阜城千畳敷遺跡は、現代までの長きにわたり、槻谷の谷川によって形成された扇状地を削平、盛土をして、人工的に段々の平坦地を造り出している。よって、過去の調査においても複数の整地層を確認しているが、戦国期（上層・下層）と近現代のものに大別できる。両者の間の自然堆積層や戦国期上層廃絶前後の時期と、戦国期を上層（上面が第1遺構面）と下層（上面が第2遺構面）に細分し、以下のとおり基本層位とした。これは、以前の調査と同じで、今回の調査区だけでなく遺跡全体を通しての基本層位となる。

### I層 (近現代堆積層)

近代以降と確定できる土層。成因は岐阜公園整備に伴う整地層や、山からの崖錘堆積物などによる自然堆積層である。

### II層 (自然堆積層)

主に山からの崖錘堆積物により形成された自然堆積層、主な堆積時期は近世から近代と考えられる。

### III層 (廃絶前後の堆積層)

遺構廃絶直後の堆積や、その後の片づけや整地によるとみられる層。遺構構築後、廃絶までの自然堆積層もこれに含んでいる。

### IV層 (戦国期上層整地層)

第2遺構面廃絶後に形成された整地層で、第1遺構面の基盤となる層である。A・B・C・E地区では上面に一部火災の跡がみられる。遺構面の存続期間は最長、永禄10年（1567）から慶長5年（1600）頃と推定している。

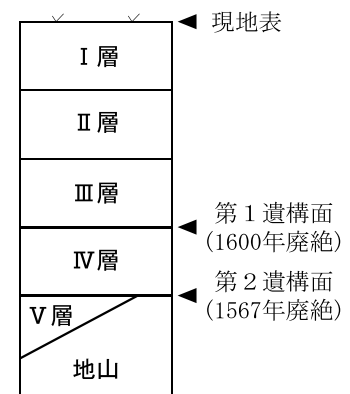
今回の調査区内では、池泉遺構の底に広範囲にわたり整地層が形成されている。これも戦国期上層の整地層の一部と捉え、IV（SR1①）層、IV（SR1②）層・・・と表記した。

### V層 (戦国期下層整地層)

第2遺構面の基盤となる層である。A地区では遺構面上面の被熱は確認できないが、IV層中に大量の焼土・炭化物が包含されることから、廃絶時に被熱している可能性が高い。廃絶時期は永禄10年頃と推定している。

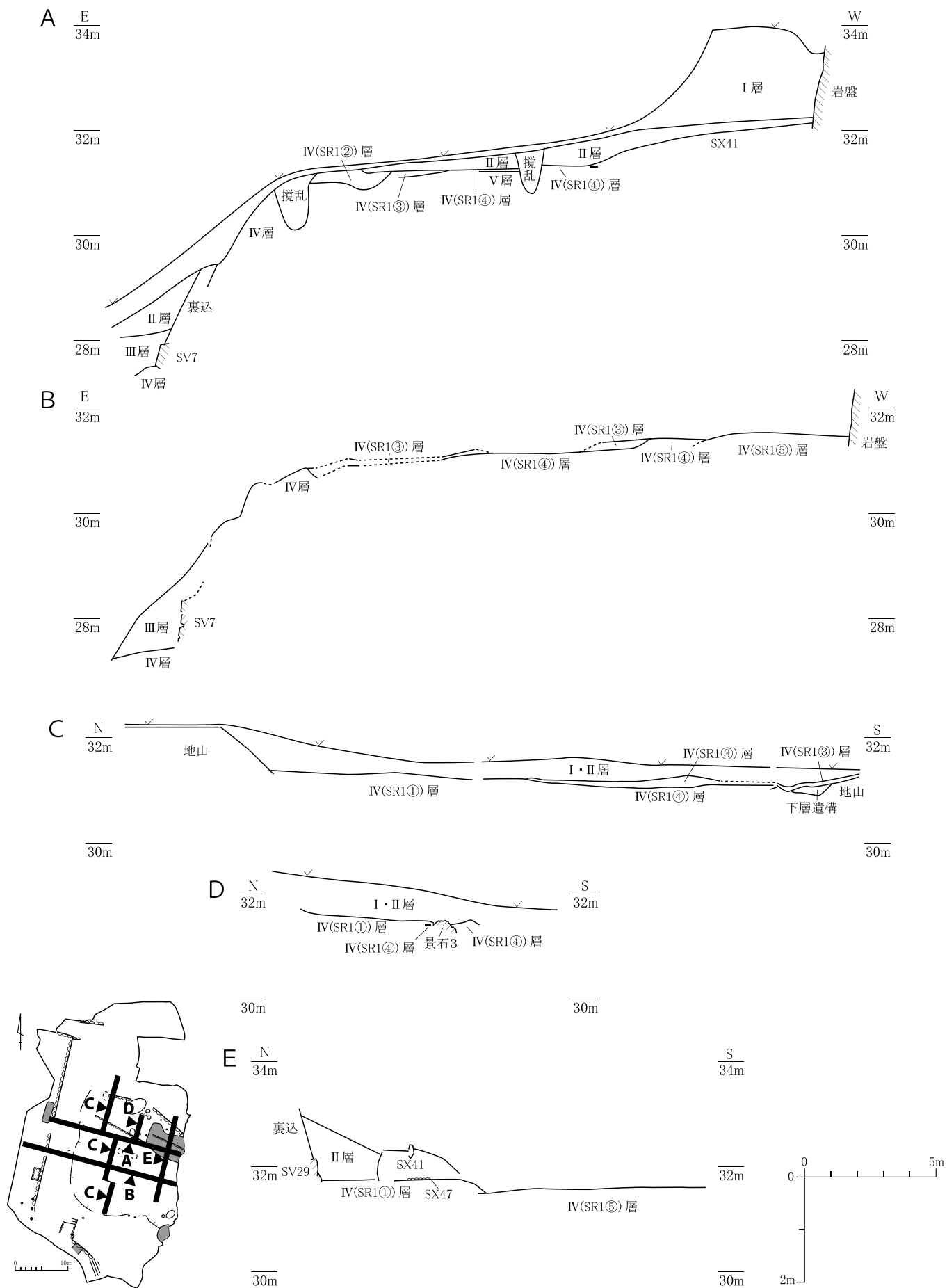
### 地山

A地区平坦地北半や南端で確認できる砂礫層。北半は崖錘堆積物、南端は谷川による扇状地堆積物と考えられる。今までの調査では遺物が包含されておらず、地山と考えている。



第3図 基本層位柱状図





第4図 土層模式図

## 第2節 調査地区（平坦地）と遺構の概観（第5・6図）

山麓居館跡（岐阜城千畳敷遺跡）では永禄10年から慶長5年までに構築された平坦地の様相が、これまでの発掘調査によって明らかになりつつある。『岐阜城跡』においてその復元図が提示され、新たな成果により『岐阜城跡2』で修正がなされている。今回の調査で新たに判明した所見から再度修正を行うとともに、A・E地区の位置を確認しておきたい。各平坦地の概要は下表のとおりである。

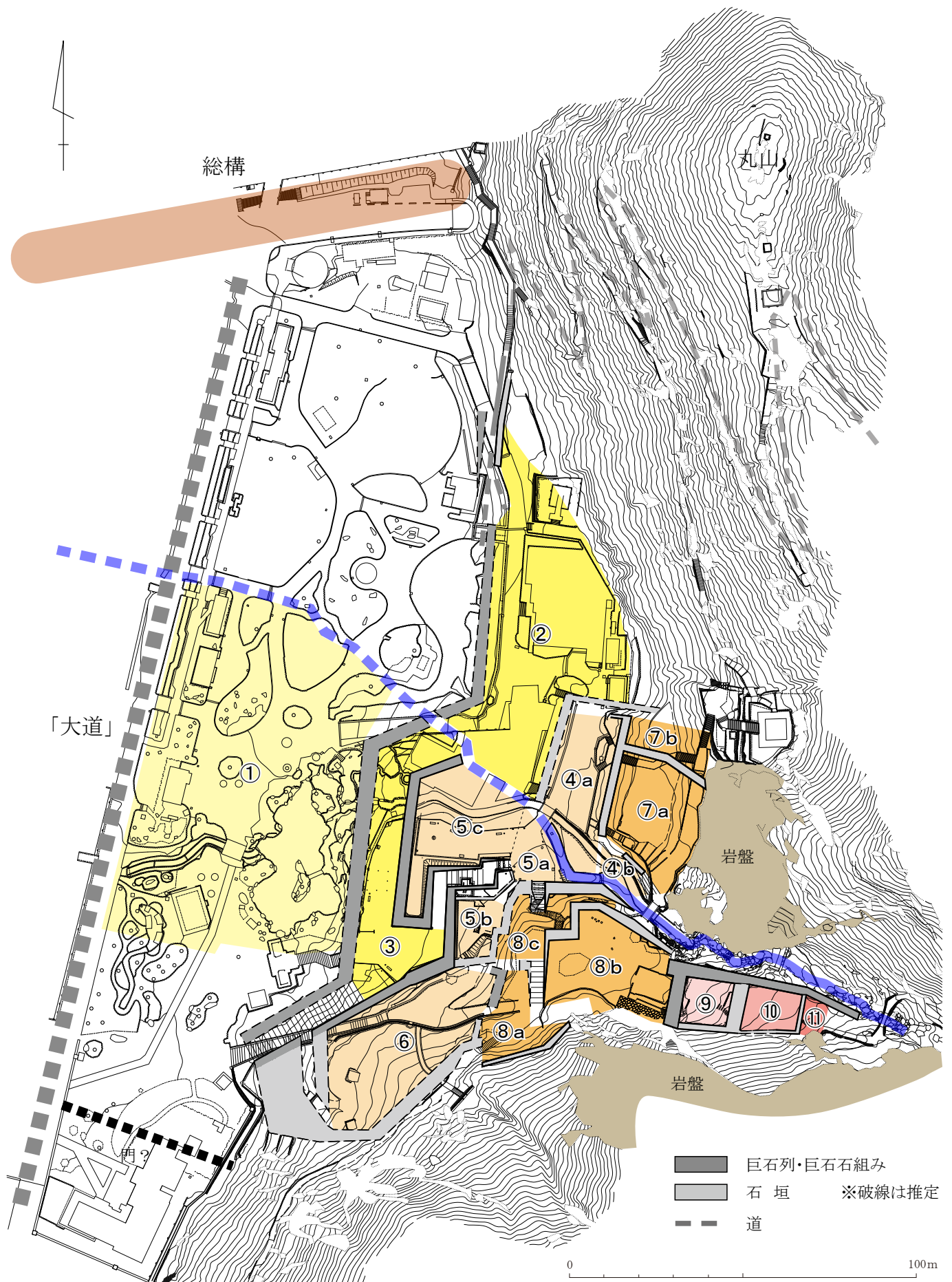
今回の調査地区はA地区と呼称している平坦地⑦とE地区の平坦地④である。平坦地⑦は遺跡のほぼ中央を東西に流れる谷川（槻谷）の北側で、その中でも最奥の平坦地にあたり、東には岩盤が屹立する。平坦地④は平坦地⑦の西直下に位置し、それぞれ第3段目、第4段目に当たる。調査区のほとんどは平坦地⑦が占めるが、西端と南端で平坦地④を検出し、また西側のトレンチも平坦地④の西端に位置する。

平坦地⑦では、これまでの試掘調査で庭園の一部や西端の石垣などを確認していた。今回の調査は、結果として平坦地⑦のほぼ全面にわたった。その結果、平坦地上の中央には池泉遺構があり、一部が加工された岩盤から水を引いていた可能性が高いことを確認することができた。また、池泉遺構の北側と南側では、礎石建物を検出、あるいはその存在を想定させる所見を得ることができた。外郭ラインについては、北端においても石垣を検出し、西端の石垣は一直線に長さ33mに渡ること、南端では石垣、階段、虎口状遺構が構築されていることを新たに確認した。南端の遺構群は、平坦地④や平坦地⑧とを繋ぐ動線を明らかにするものである。

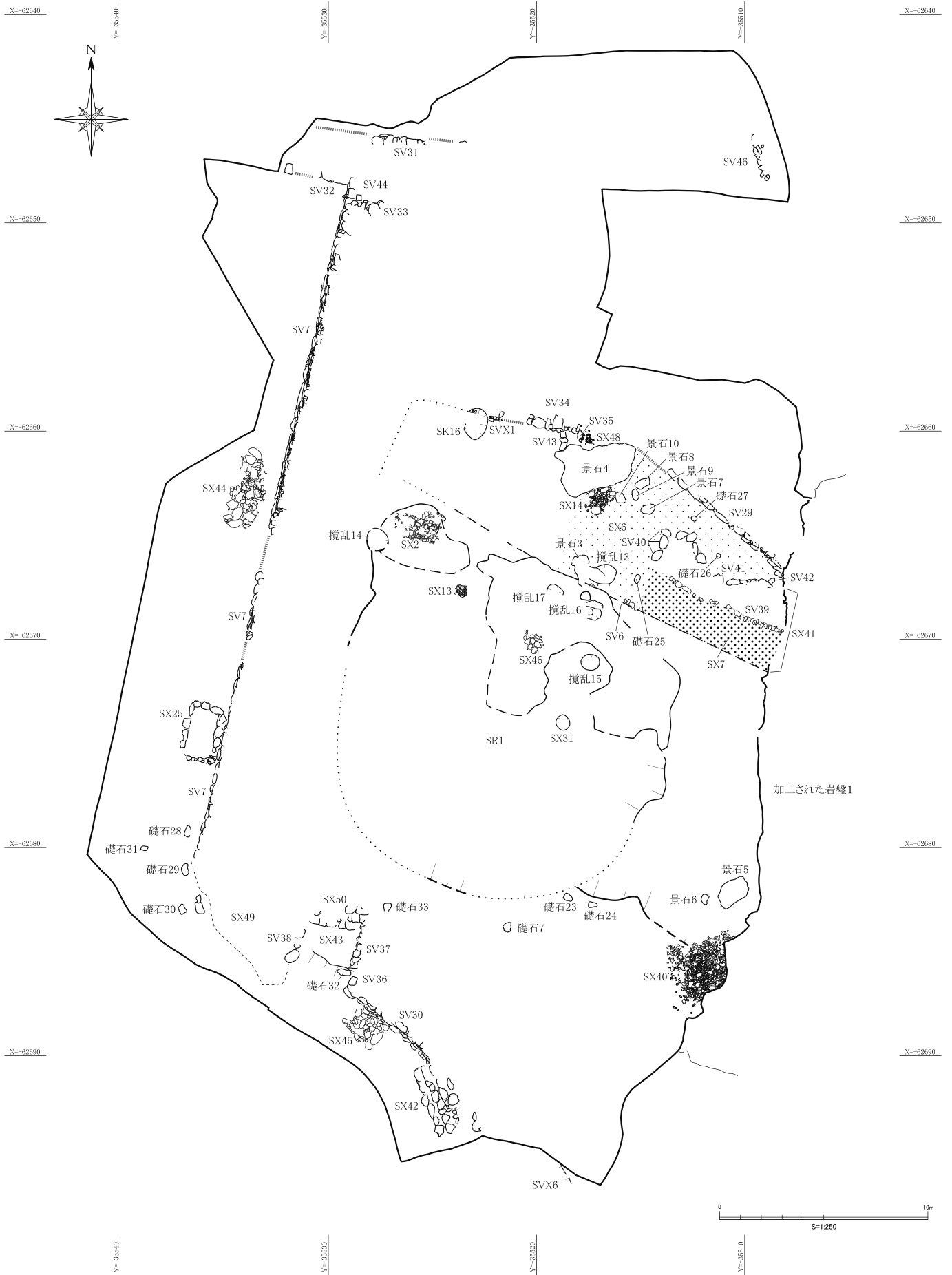
平坦地④は、平坦地⑦の西から南にかけてL字状に広がるが、平坦地⑦の西と南では標高差が見られる。平坦地⑦の直下に当たる東端で検出した礎石建物、柵状遺構周辺では27.5～28.5mであるのに対して、南側では29.1～29.4mを測る。高低差の境界と見られる盛土S X 49辺りが攪乱されているため詳細は不明であるが、段差が構築されていた可能性が高い。また平坦地④の西端では石垣が直線的で、平坦地⑦の西端であるSV7とほぼ平行に構築されていることも確認することができた。

平坦地番号	段	調査区	細分	標高(m)	推定面積(m <sup>2</sup> )	主な出土遺構・遺物
①	第1段	F地区		18.2～19.0	6,000	井戸
②	第2段北	2次調査区周辺		24.0～25.0	2,400	州浜状遺構・竈
③	第2段南	1次調査区		22.5～23.5	850	巨石列・土塁
④	第3段北	E地区	a	27.5～28.5	600	礎石・柵状遺構
			b	29.1～29.4	100	集石遺構
⑤	第3段南	1次調査区	a	27.0	200	礎石
			b	27.5	200	
			c	25.5	600	
⑥	第3.5段	D地区		29.1～29.4	1,200	
⑦	第4段北	A地区	a	31.0～31.5	750	池泉遺構・礎石
			b	32.0～33.0	180	周辺で多量の遺物出土(→建物?)
⑧	第4段南	C地区	a	33.3～33.5	800	礎石・金箔貼り飾り瓦
			b	33.5～34.0	200	池泉遺構・礎石
			c	30.3	200	礎石
⑨	第5段	B I 地区		39.2～39.5	200	半地下式建物
⑩	第6段	B II 地区		44.5～45.0	230	水路・礎石
⑪	第7段	B III 地区		47.5～50.0	230	池泉遺構

第1表 平坦地一覧



第5図 山麓居館跡地形復元図



第6図 遺構配置図

地区		種類	遺構	概略
1. 加工された岩盤			加工された岩盤1	
2. 池泉遺構SR1	【SV6以北】	(1)	石列SV6	SX41南端
		(2) 池北側の護岸	石垣SV29・石列SV42	SR1北東岸
			石垣SV34・35・石列SV43(・根石列SVX1)	SR1北岸
			石敷遺構SX48	景石4の付け根
		(3) 岬状遺構SX41	石敷遺構SX7	SX41上部
			石列SV39	
			石列SV40・41	SX41護岸(西)
	石敷遺構SX47		SX41下層・改修前	
	(4)	石敷遺構SX6	SV6以北SR1底直上	
	(5) 景石	景石3		
		景石4		
		景石7～10		
		景石抜き取り痕？	(集石SX14・土坑SK16・攪乱13)	
	(6) 礎石建物	礎石25		
礎石26・27		被熱・柱痕		
【SV6より南】	(1)	集石遺構SX40	SR1南岸	
	(2) 景石	景石5・6		
		集石遺構SX13・46	景石根石？	
		景石抜き取り痕？	(SX31・攪乱14～17)	
	(3)	集石遺構SX2	排水施設？	
3. A地区平坦地北				
4. A地区平坦地南	(1)	礎石23・24	SR1の南	
	(2)	礎石33	SX43の東	
	(3)	礎石7	礎石の基礎？	
5. A地区北斜面		石垣SV31	A地区北辺	
6. A地区西斜面	(1)	石垣SV7	A地区西辺	
	(2)	石垣SV33	SV7北端から東折・改修前	
	(3)	石垣SV32・44	SV44北端から西折・改修後	
7. A地区南斜面	(1) 石垣	石垣SV30・36	A地区南辺・湾曲	
	(2) 階段	階段SX42	A地区－E地区	
	(3) 虎口状遺構SX43	階段状遺構SX50・石垣SV37・38・礎石32		
	(4) 盛土	盛土SX49		
8. E地区平坦地(④a)	(1) 礎石建物	礎石28～30	被熱	
		礎石31	被熱	
	(2)	樹状遺構SX25		
	(3)	集石遺構SX44	排水施設？	
(4)	溝状遺構SD7	改修前		
9. E地区平坦地(④b)		集石遺構SX45	排水施設？	
10. E地区西斜面		石垣SV21		
下層遺構		不明遺構SX8 土坑SK27 土坑SK28 石垣SV8 溝SD8 通路SS3	砂利の硬化部分・A1トレンチ 池西中央の攪乱壁面 平坦地南の攪乱壁面 A8トレンチ A12-7トレンチ	

第2表 遺構一覧・構成表



### 第3節 検出遺構

#### 1. 加工された岩盤1 (第7図)

A地区の東端に位置するチャートの岩盤で、西面が直立する。西面の南北長約30m、高さ約20mを測り、立面形は台形状である。ほぼ垂直に切り立った西面は、人為的な加工と考えるが、直下の土層状況から戦国期上層段階のものではなく、より古い時期に行われた可能性がある。西面の壁面には、2箇所溝状の加工痕らしきものが認められる。うち北側のものは、岩盤上部で、角度が水平に近い溝状の凹みとなってさらに東へ延長していることが確認できる。後述する石敷遺構S X 7と集石遺構S X 40はこの直下に位置する。豪雨時にはこの位置で雨水が流れ落ちる様子が観察でき、庭園が機能していた際も水を流した可能性が考えられる。安全性が確保できないことと樹木が障害となり、測量も困難であるため上部については未調査であるが、A地区の性格を考察する上で欠かすことができない要素である。

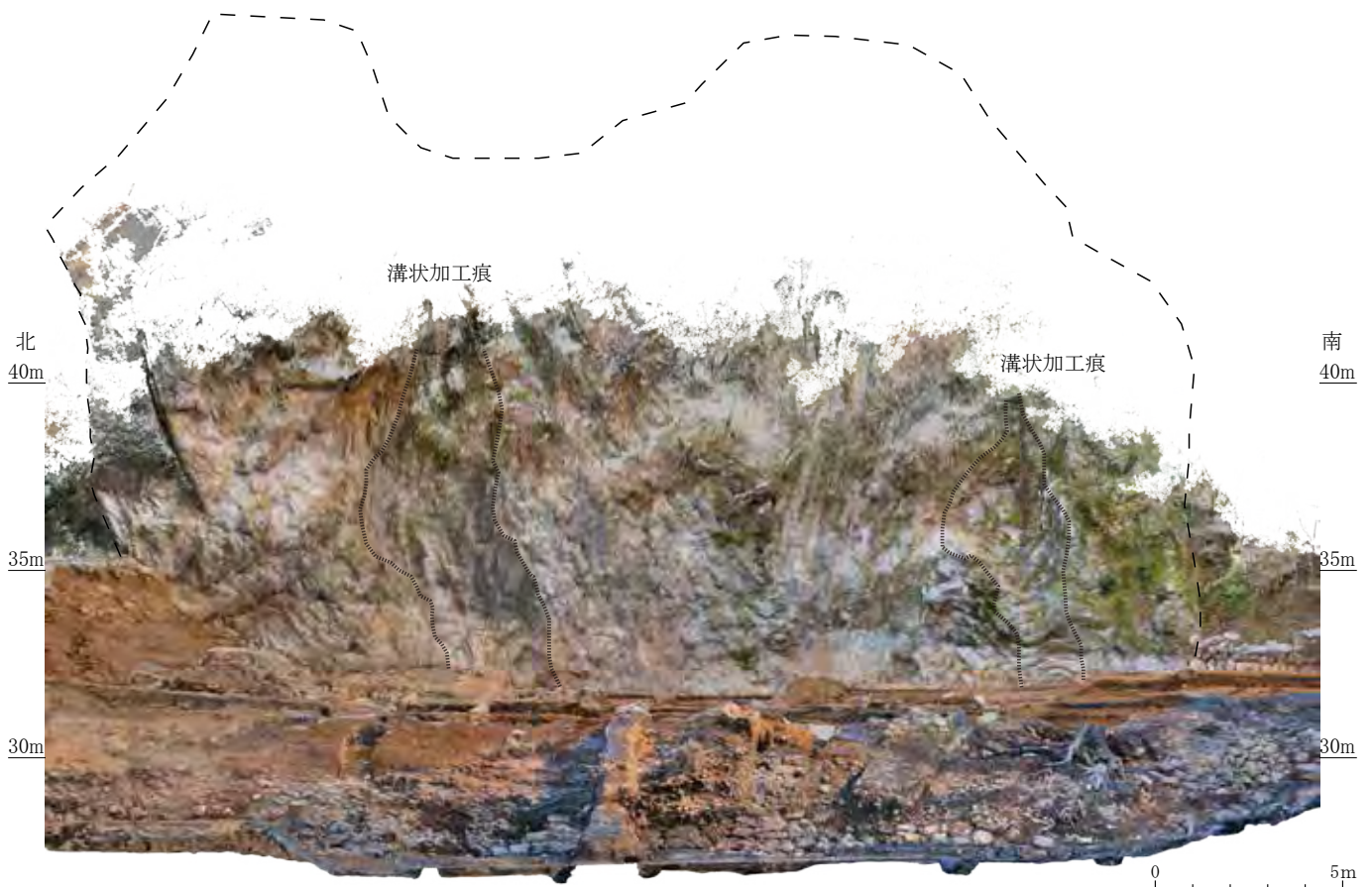
#### 2. 池泉遺構S R 1 (別添図3～6)

##### 【概要】

池泉遺構S R 1は、A地区平坦地の中央で検出され、南北約21m、東西約20m、形状はおおよそ正方形を呈する。北端は石垣S V 29と石垣S V 34で護岸され、東端は岩盤までである。後世の攪乱により、南端と西端には顕著な施設は検出されなかったが、これは景石の抜き取りによる攪乱の可能性がある。

##### 【構造】

S R 1内には付随する施設が多数確認できた。個別の遺構の詳細は後述するが、東西に延びる石列



第7図 加工された岩盤1 立面オルソ画像

S V 6 を境に、大きく北と南に分けられる。北側は一段高く、底に異なる土を用い、上面には円礫が敷設されている。北岸は石垣 S V 29・34 によって護岸されており、景石も多く設置されている。一方の南側の底には円礫による石敷は見られないが、南岸に隣接する礎石 23・24 周辺で円礫が敷設されており、州浜が形成されていた可能性がある。

#### 【池底】（第 4 図・別添図 6）

池底の様子は、敷設されている土の色調、質、混入物により、以下の 5 種類に分けられる。①炭混じりの暗灰色土②暗灰色土③角礫混じりの黄色土④炭混じり（焼土偏在）の褐色土⑤黒褐色土である。層序は、⑤→④→③→②かつ⑤→④→①であることを確認した。

①層は灰色～黒褐色を呈した極細砂～細砂である。確認出来る範囲は、北を石垣 S V 29・34 とし南は石列 S V 6 までである。西半は、現代に造られた階段とそれに附属する通路によって削平されており明らかでない。層上面には円礫が敷設されている。上面のレベルは、東半が 31.4～31.8m、西半が 30.9～31.3m である。②層は暗灰色を呈した細砂である。範囲は集石遺構 S X 2 の周辺のみに広がる。層上面のレベルは 30.9～31.3m。③層は黄色～黄褐色を呈した径 5cm～10cm の角礫をまばらに含んだ中粒砂～細砂である。層厚は位置によって異なるが 5cm～20cm。確認できる範囲は S R 1 の中央から西側及び南側に広がる。層中には礫（チャート）が多く含まれており、硬く締まっている。③層は S R 1 の縁辺に沿って包むように確認できること、岬状に突出する箇所があることが特徴として挙げられ、凹凸をつけて緩やかに上がっていく池底・岸辺の可能性はある。層上面のレベルは 30.8～31.5m。④層は褐色を呈した極細砂～細砂で焼土・炭を多量に含んでいる。層厚は多少の差異があるが 10cm 前後。表面に現れるのは、S V 6 南の小範囲であるが、③層の下全てで確認できるのに加え、①層の下にも認められる。池泉遺構の基盤とした層で、北側で高く、中央で凹み、南でまた高くなる。層上面のレベルは 31.1～31.5m。⑤層は黒褐色の極細砂である。範囲は S R 1 の中央岩盤際で確認できる。この層は④層の下へ潜り込んでいくが、調査区西の攪乱壁面において類似した層は確認できない。したがって、いずれかの地点で収束あるいは潜行するものと思われる。層上面のレベルは 31.5～31.8m。全体として⑤層北東角と南東角 (31.8m) が最も高く、西端 (30.8～30.9m) が低い。

#### 【導水と排水】

石敷遺構 S X 7 が接する位置の岩盤には人工的と見られる溝状の加工痕が認められる。調査中、豪雨に見舞われた際、この位置で岩盤上部から滝のように水が流れ込んできた。同様な状況は S R 1 南東端に位置する集石遺構 S X 40 とその位置の岩盤にも見られた。岩盤に穿たれた加工痕と石敷・集石遺構のセットが S R 1 の北東端と南東端に位置するという状況を考え、この 2 箇所から水を引いていたと推測した。S V 6 を境に段差が生じる点からも S V 6 以北は水を流す空間、S V 6 より南は水を溜める空間という機能的な差が推測できる。排水施設として明確なものは確認できなかったが、北西で集石遺構 S X 2 と S X 44 がセットとなって機能した可能性とともに、南側では集石遺構 S X 45 もその可能性が考えられる。

#### 【科学分析】

池底を形成する土壌及び池底上の自然堆積と見られる土壌で珪藻分析を行ったところ、①層上に堆積していた粘土層 (No. 1～6) からはジメジメとした陸域を伴う沼沢湿地環境、③層 (No. 8)、④層 (No. 7, 9) からはジメジメとした陸域環境が復元された。①層上の方がより湿地的ではあるが、全体的に常に滞水をしていたような状況では無いようである。

また、④層中の炭化穀粒で年代測定を行ったところ、51.6% の確率で AD1522-1575 の範囲に入る測定結果が得られた。④層は S R 1 の基礎となる整地層であり、池泉遺構が信長入城 (1567 年) 直後に構築された可能性が高いと考える。

## 【石列SV6以北の遺構】

### (1) 石列SV6 (第8図)

0.1~0.3mの大きさのチャートを立て並べた石列で、南の面が揃い、北側が5cm程度高くなる。SV6を境界に北と南では様相が大きく異なる。北側は①層を底とし、石敷遺構SX6が敷設されているのに対し、南は1段低くなり、③層あるいは④層を底とする。また南ではSX6のような円礫の石敷は見られない。SV6の北で水が流れ、南で滞水する境界を示している可能性が高い。

### (2) 池北側の護岸

SR1の北辺で検出した石垣SV29と石垣SV34を主とする施設。北辺の中央には景石4が配され、その東にSV29、西にSV34が構築されている。両石垣は直線的に造られるが、それぞれ角度が異なっている。

#### ・石垣SV29・石列SV42 (第8~12図)

SV29は残存長さ7.2m、残存最大3段の石垣で、西端の石材が抜かれていると考えられる。石材は全てチャートで、石垣の残存部を見る限り、東半より西半の方が大きな石材を使用している。裏込めが存在し、ほぼ全て角礫で構成されている。裏込めの高さから見て、石垣は2m以上の高さがあったと考えられる。前面は①層によって整地されている。

南西側には50石近くの転落した石材が出土した。石垣は裏込めの崩落礫層と転落石で埋没していたが、池底に自然堆積したと見られる黒色粘質土直上に礫層が堆積していたことから、廃城時に解体された可能性が高い。礫層中には土師器皿や大窯製品など遺物が比較的多く出土した。「寛永通寶」が1枚出土しているが、土層の堆積状況や他の出土遺物から見て混入した可能性がある。

石列SV42は、SV29東端で直交する石列で、2石が残存する。階段状を呈しており、SX7の東端(岩盤際)からSV29前に水を流した際の流路の可能性はある。

#### ・石垣SV34・35・石列SV43・根石列SVX1 (第13図)

SV34は東西方向に長さ2.6mにわたり検出した。東端は南方向に直角に折れ曲がり(SV35)、景石4に接続する。裏込めが存在し、角礫を主として使用している。平成20年度の調査で検出された根石列SVX1は、SV34の根固め石と見られ、その場合長さ4.5m以上を測るが、それより西は攪乱により不明である。

SV35の長さは0.5m、その前には石列SV43があり、階段状を呈する。SV42と構造が酷似しており、水の流路の可能性が考えられる。

#### ・石敷遺構SX48 (第13図)

景石4の北、SV35の東で検出した、円礫を敷き詰めた遺構。石の大きさは2~3cmと極めて小さく、検出範囲は東西0.7m、南北0.5mである。SV35上に流路を推定した場合、SX48上も水が流れたと推測できる。周囲は後世に削平されており、SX48は溝状遺構の底である可能性も考えられる。

### (3) 岬状遺構SX41 (第8~10図)

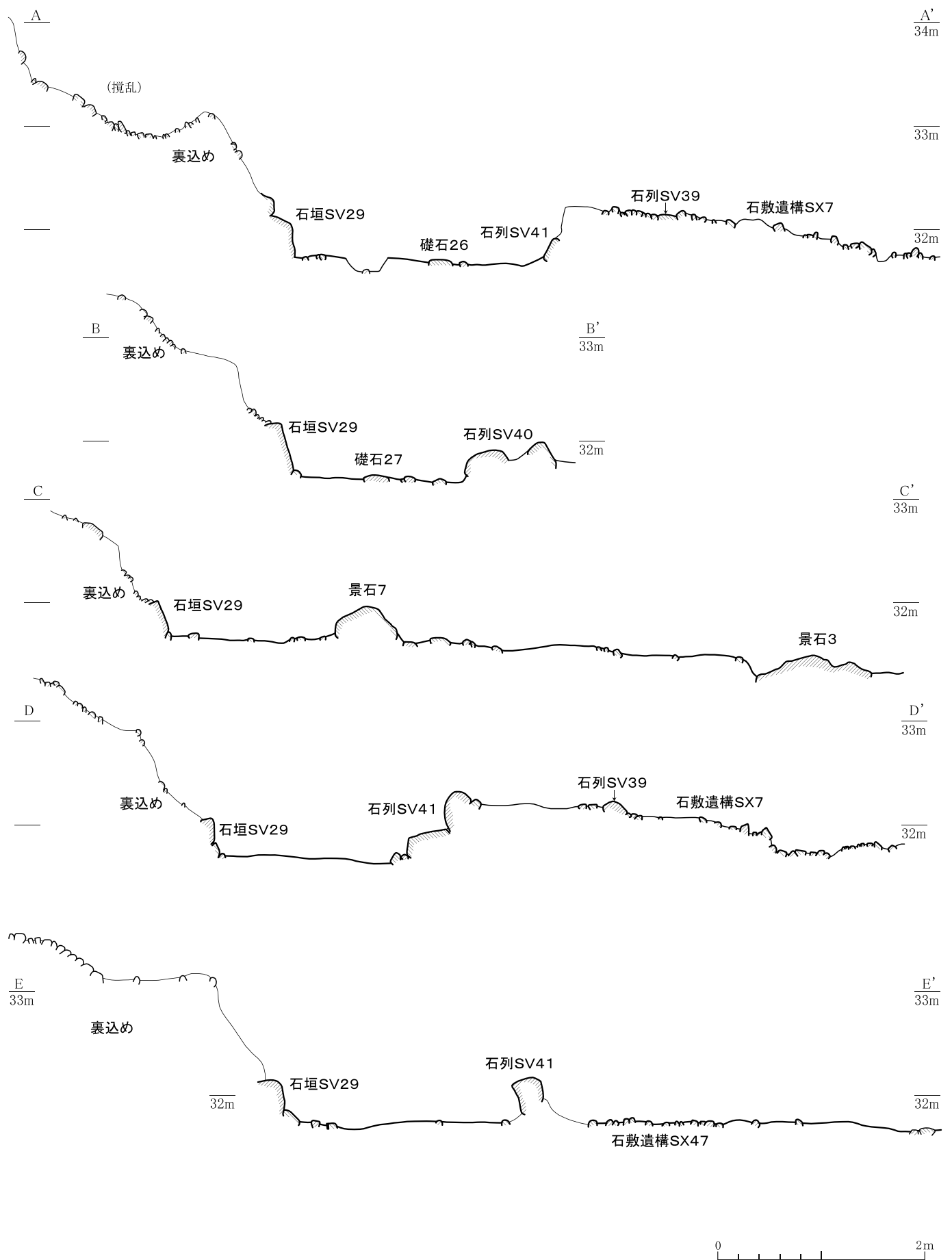
SR1の北東で検出した半島状の遺構。石敷遺構SX7、石列SV39、石列SV40・41で構成され、岩盤から西へ延びる。長さ7.1m、最大幅4.3m、最小幅2.9m、高さ0.5mを測る。南端は石列SV6、北端は石列SV41、西端は石列SV40、東端は岩盤で画され、上面に石列SV39と石敷遺構SX7が構築される。断割調査の結果、下層に石敷遺構SX47を確認した。

#### ・石敷遺構SX7 (第8~10図)

長さ7.1m、幅約1.9m、SX41上で東西方向に広がる石敷遺構。円礫が多く使用され、北東部分が最も高く、南・西に向け低くなる。北端は石列SV39で画されると見られる。南端は石列SV6の延長までと思われるが、石などは検出されない。SX7の位置は岩盤に施された溝状加工痕の直下に当

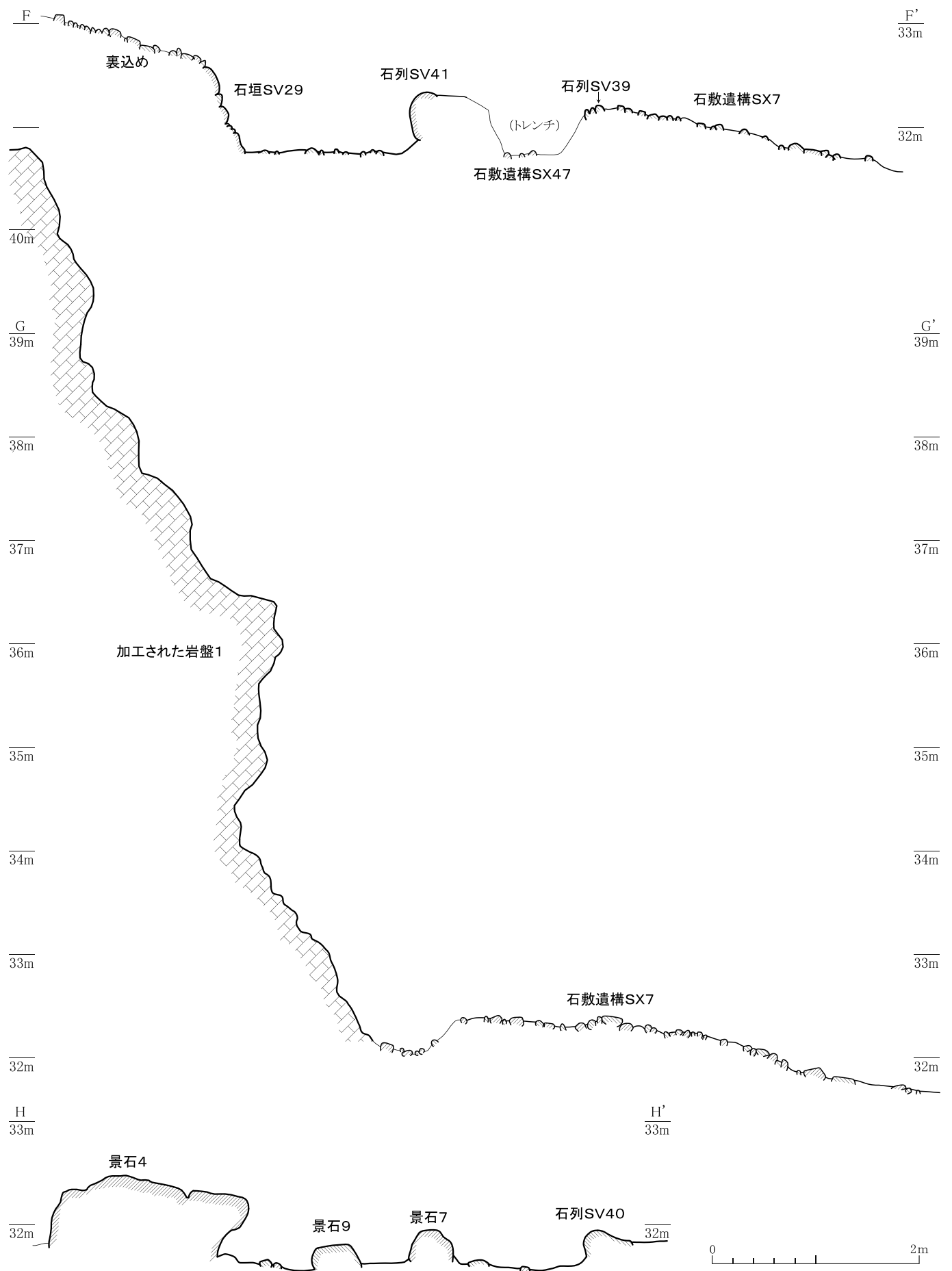


第8図 池泉遺構SR1(北東部)実測図(1)

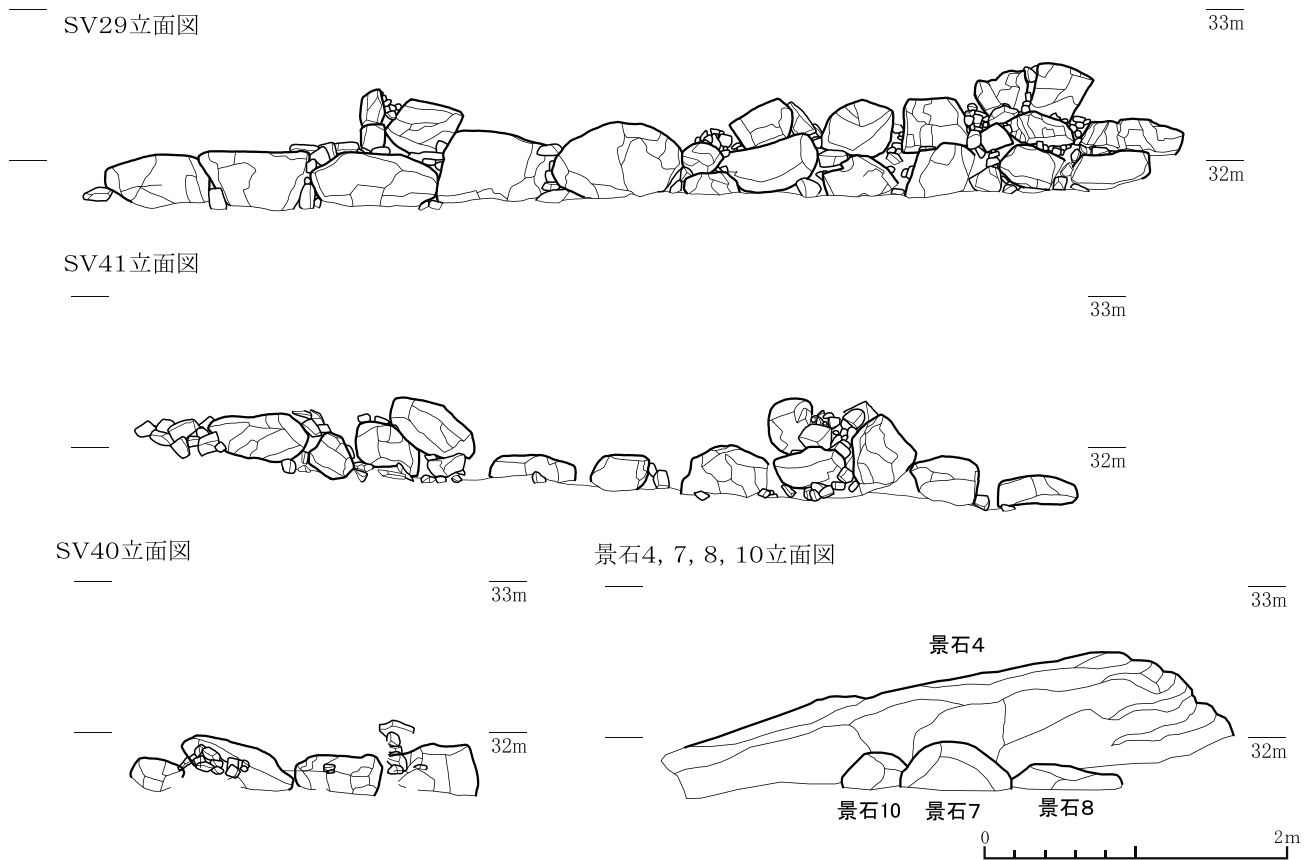


第9図 池泉遺構SR1(北東部)実測図(2)

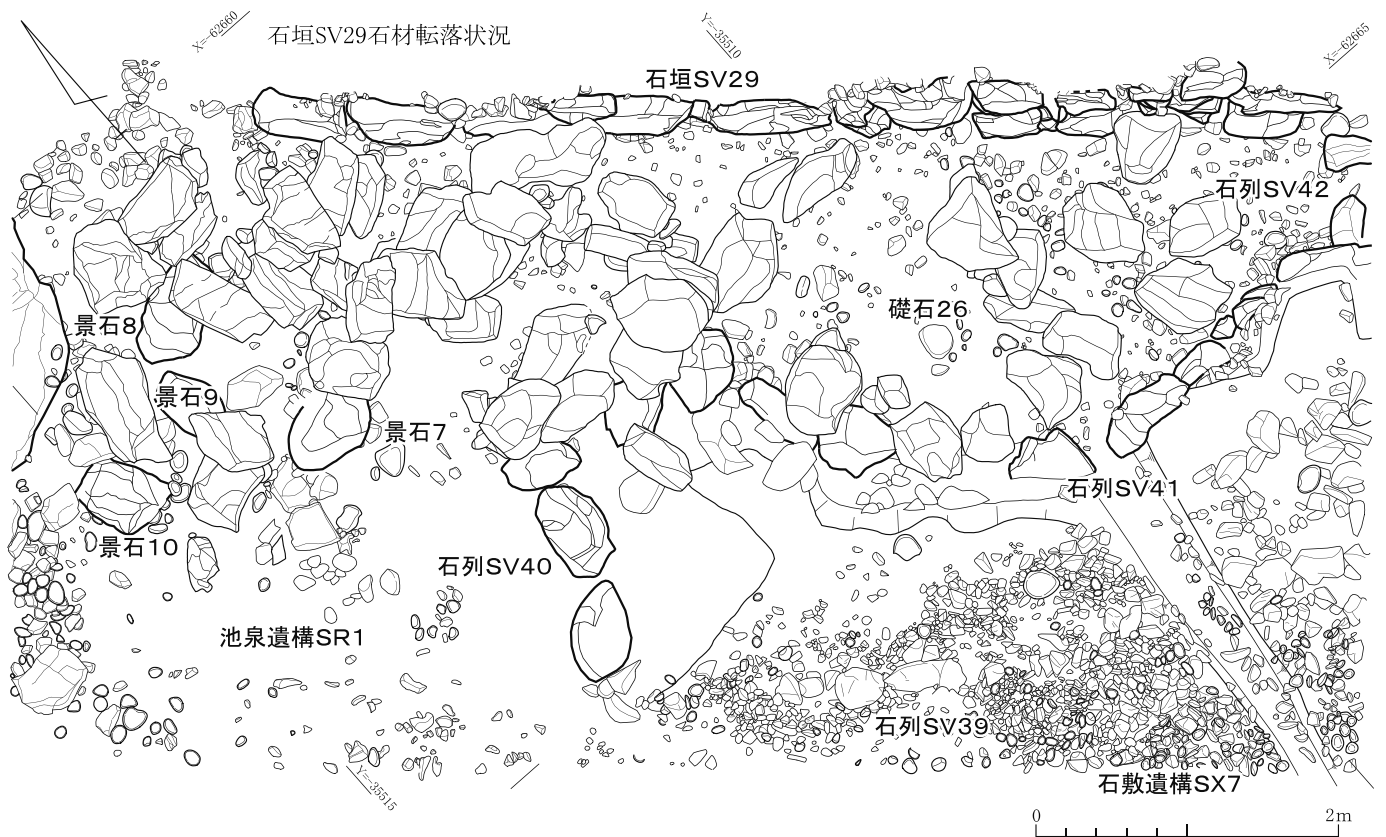




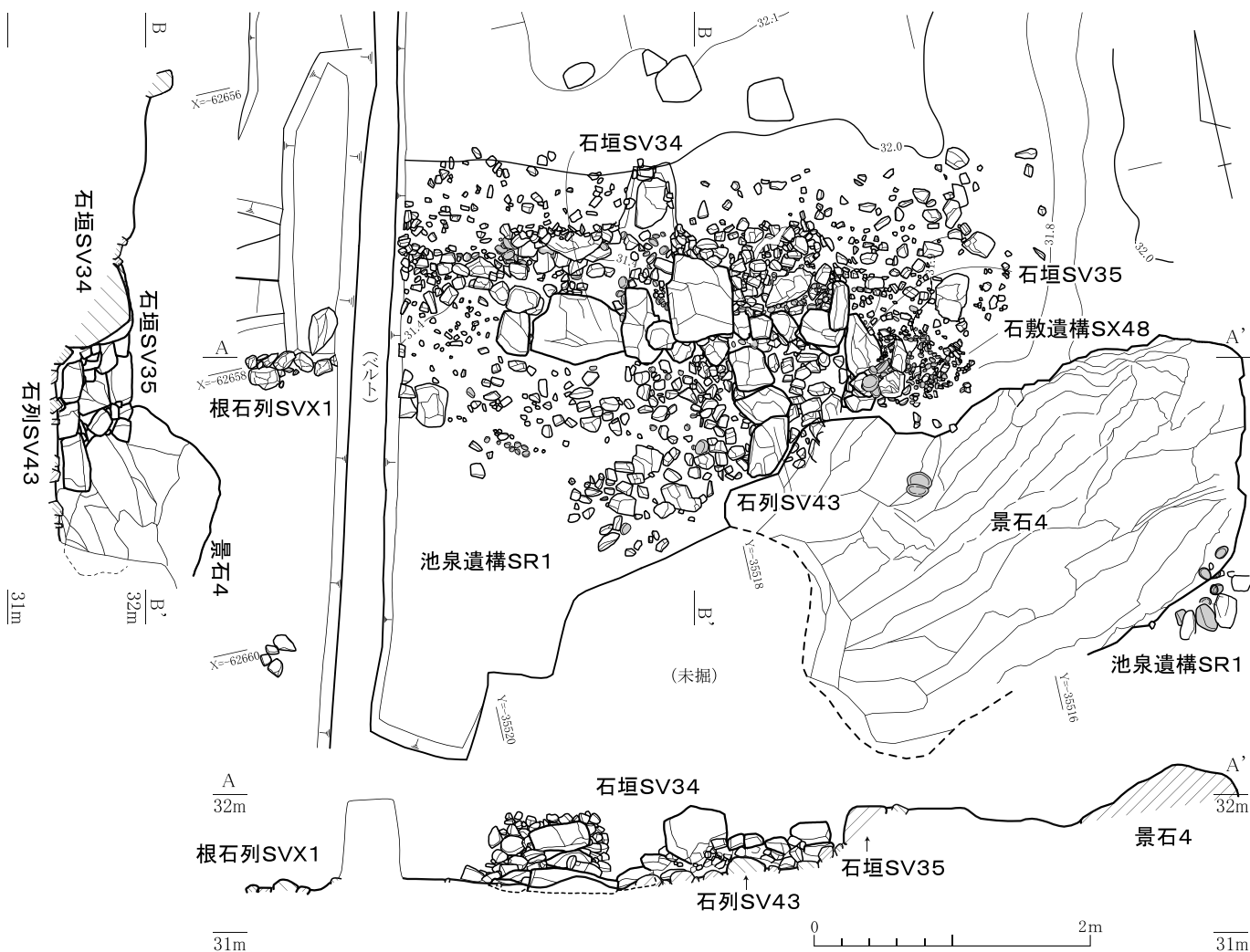
第10図 池泉遺構SR1(北東部)実測図(3)



第 11 图 池泉遺構SR1(北東部)実測図(4)



第 12 图 池泉遺構SR1(北東部)実測図(5)



第13図 池泉遺構SR1(北西部)実測図

たり、水流を受ける施設であると同時に州浜として構築された可能性が高い。

・石列SV39(第8~10図)

石敷遺構SX7の北端に並ぶと見られる石列で、長さ6.1mを検出し、北側の面が揃う。大半がチャートであるが、2石のみ円礫が用いられる。円礫の内1石は被熱しており、礎石のようにも見える。石敷遺構SX7は州浜の可能性が高いが、その北端の境界を成す石列と考えられる。

・石列SV40・41(第8~12図)

岬状遺構SX41の西端(SV40)と北端(SV41)を護岸する、①層に伴う石列。L字状に屈曲し、湾曲しながら、岩盤方向に延びる。SV40は3石、SV41は11石が残存し、石材は全てチャートである。SV40の長さは2.3m、SV41は6.2mでS字状に湾曲している。

・石敷遺構SX47(第8~10図)

岬状遺構SX41の下層で検出した円礫のみの石敷遺構。検出長南北2.1m、石は密集して敷かれており、上面がほぼ平坦である。石垣SV29前面の①層に繋がる可能性がある。南端は途切れており、その南0.6mの位置で南下がりの段となる。SX47直上から土師器皿片が出土し、また粘土質の土が石敷を覆っていた。岬状遺構はIV層のある時期に新設されたことが明らかとなった。

(4) 石敷遺構SX6(第8~10図)

①層上面に敷設される円礫の石敷遺構。SV6の北、SV29の南の範囲に分布していたと考えられるが、散在的にしか残存しない。

#### (5) 景石 (第8～11図)

景石及びその可能性がある石を6石、根固めの可能性がある集石遺構1基、抜き取り痕の可能性のある土坑状遺構2基を検出した。

##### ・景石3

石列SV6のライン上で見つかったチャートの巨石。設置痕は見られず、石の大半がIV層以下に埋没しているため、作庭前にあった巨石を景石として取り込んだ可能性が高い。不定型な形状であるが、おおよそ長さ1.8m、幅1.2m。石列SV6と一連で段差を形成している。

##### ・景石4

SR1の北端に配置された長さ4.0m以上、幅2.4m、厚さ0.7mを測る板状のチャートの巨石。石の東、南、西は池に面するが、北側には陸地に繋がる土橋状の部分があり、景石全体が岬状に池へ突き出すように配置されている。

##### ・景石7～10

岬状遺構SX41と景石4の間に設置された景石で、いずれもチャートである。景石7の平面形は、長径0.7m、短径0.5mの楕円形、角が取れた円礫状の石材で、石垣の石材とは明らかに異なり、選別されている可能性が高い。石材の下は拳大の角礫で根固めが成される。景石8は長さ0.8m、幅0.4m、景石9は長さ0.5m、幅0.3m、景石10は長さ0.5m、幅0.4mを測る。石垣SV29と岬状遺構SX41の間を経て、景石4に向かって流れる水がこれら景石の間を通り、南へ進路を転進する所と見られる。景石8～10は角礫で、SV29の転落石の可能性も否定できない。

##### ・景石抜き取り痕?

景石の根固めの可能性がある遺構としてSX14、抜き取り痕の可能性のあるものとしてSK16・攪乱13が挙げられる。SK16、攪乱13は深い土坑状のもので、掘り込み面はI層中である。公園造成の際、景石を抜き取った可能性があると考えられる。

#### (6) 礎石建物 (第8・9図)

SR1北東の岬状遺構の近辺で3基の礎石を検出した。いずれも①層に伴うものである。

##### ・礎石25

石列SV6の北側、石列SV40の西で検出した礎石。長径43cm、短径26cmの円礫。被熱痕は見られない。上面のレベルは31.60mである。

##### ・礎石26・27

石垣SV29の南、石列SV41の北で検出した礎石。礎石26は長径25cm、短径20cm、礎石27は長径約30cm、短径約25cmの円礫で、上面が丸く平坦ではない。石の大きさや特徴が酷似しており、同一建造物の礎石である可能性が高い。中心の間隔は約2.1mを測り、方向は石垣の向きとも合致しない。礎石26は石自体強く被熱しており、中央には黒色化した約15cm角の柱の痕跡が見られる。また、周囲には焼土や炭が多く堆積する。上面のレベルは礎石26が31.70m、礎石27が31.67mである。礎石25の位置とも合致せず、建物の大きさや位置を推定することが難しい。石垣SV29上部からの懸造の建物の礎石である可能性も考えられる。

##### 【SV6より南の遺構】

『岐阜城跡』の落ち込み状遺構SX15、『岐阜城跡2』の景石抜き取り痕32～38は、今回の調査で攪乱と判断した。

#### (1) 集石遺構SX40 (第14図)

SR1の南東端、岩盤に接して構築された、円礫と角礫が半々で構成される集石遺構。南北3.0m、東西2.2m、平面形は半円形を呈する。岩盤が谷状に凹んだ直下に位置しており、水を受ける施

設の可能性が考えられる。断割を行っていないため明らかでないが、土坑の中に石を詰め込む構造である可能性が高い。

#### (2) 景石 (第14図・別添図3・6)

景石及びその可能性がある石を2石、根固めの可能性がある集石遺構2基、抜き取り痕の可能性のある土坑状遺構5基を確認した。

##### ・景石5・6

景石5は、SR1南東端の岩盤近くで検出した長径1.6m、短径1.0mのチャートである。石は多くが池底に埋没しており、作庭前からこの位置にあったものを、景石として庭に取り込んだ可能性が高い。景石6は景石5の南西に隣接し、長さ0.5m、幅0.3mを測る。

##### ・集石遺構SX13・46

SX13は平成19年度の試掘調査で検出されたもので、SR1中央やや西寄り、径0.5mのほぼ円形の集石遺構。礫の大きさは比較的小さい。SX46はSR1のほぼ中央で検出された集石遺構である。南北0.8m、東西1.0mの長円形で、礫の大きさは20～30cm程度の大きな角礫で構成される。

##### ・景石抜き取り痕?

景石の抜き取り痕の可能性のあるものとしてSX31・攪乱14～17が挙げられる。いずれも深い土坑状のもので、掘り込み面はI層中である。公園造成の際、景石を抜き取った可能性があると考えられる。

#### (3) 集石遺構SX2 (別添図3・6)

SX2は平成19年度の試掘調査で検出されたもので、SR1の北西に配置され、東西1.2m、南北1.0mを測る。長方形を呈した集石遺構で角礫が主体であるが、円礫も含まれる。周囲は灰色粘土(②層)が分布するが、ここでしか見られない特殊な土である。SR1の排水施設の可能性があると考えられる。

### 3. A地区平坦地北 (別添図2・3・5)

石垣SV29・34以北の平坦地北地区では、表土下約2～3cmで砂礫層が検出される。平成20年度の試掘調査で同層の断割を行っているが、遺物も出土せず、土質も崖錘の自然堆積層と考えられることから地山と判断した。本来、地山自体が一段高くなっており、南端が石垣によって護岸されていた所を、公園造成の際、削平されたものと考えられる。段の直下であるグリッド43やSV7を覆う崩落礫層中の遺物も北の方が多いことから、この部分に建物が存在した可能性が高い。

### 4. A地区平坦地南

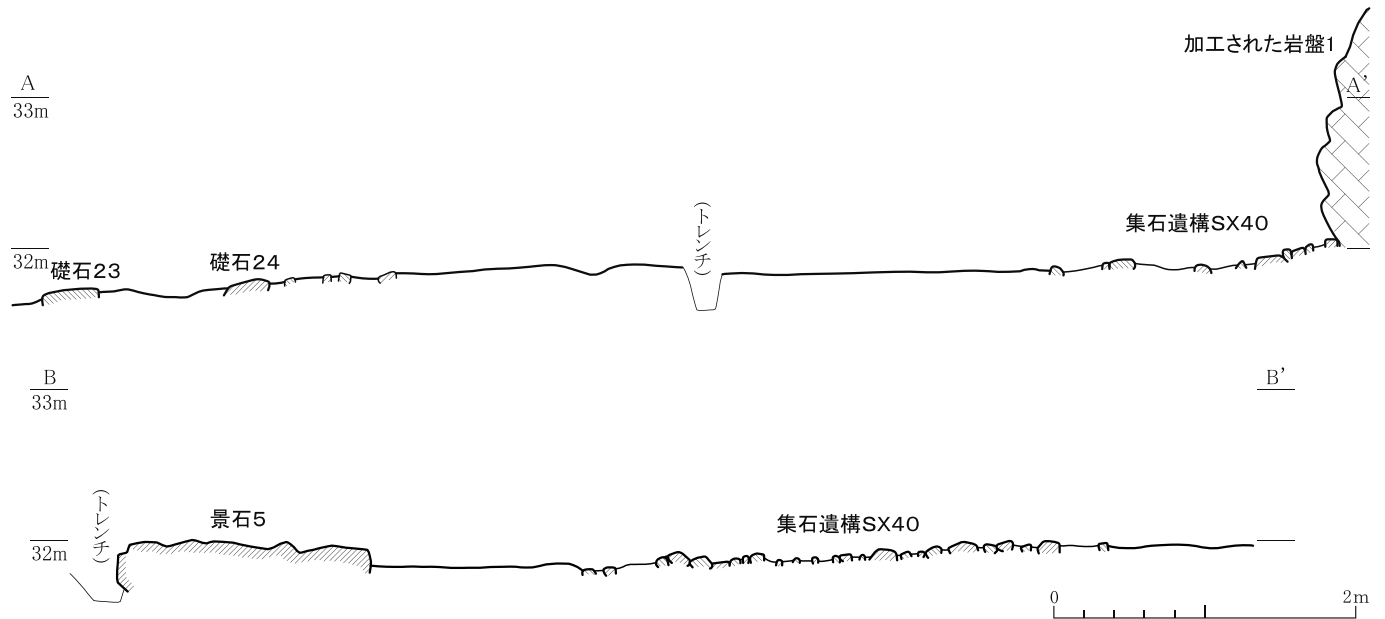
SR1の南の平坦地は、公園造成に伴う通路などで削平がされており、遺構の残存状況は良好でない。『岐阜城跡2』でSR1の関連遺構として報告された通路状遺構SS3と溝状遺構SD8であるが、今調査では③層で意図的に埋められた下層遺構と考える。③層が池底の整地層であるという現段階での解釈に乗っ取った理解である。

#### (1) 礎石23・24 (第14図)

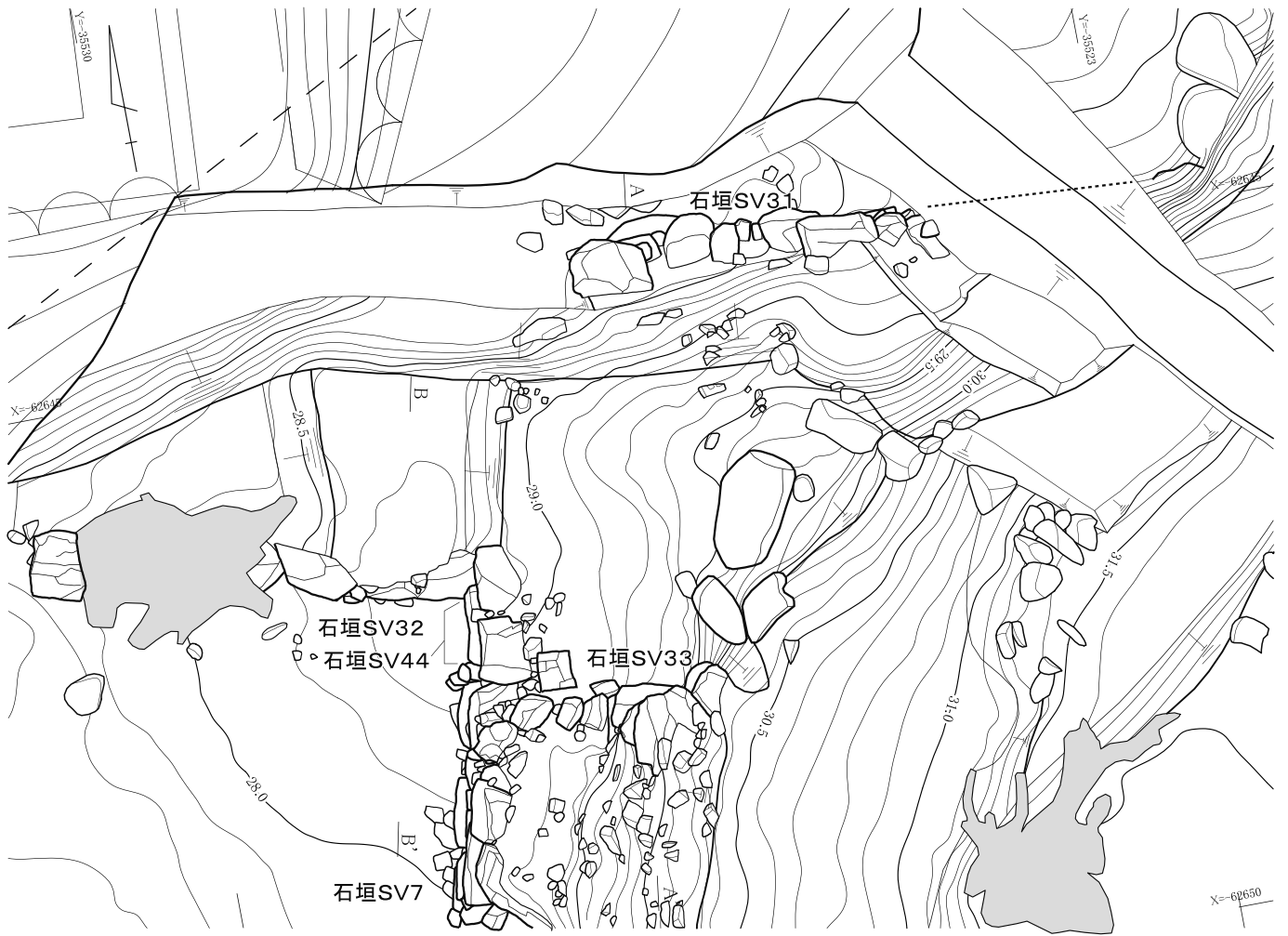
SR1の南端に近接して検出した円礫の礎石。礎石23は長径44cm、短径32cm、礎石24は長径42cm、短径28cm、両者の中心の間隔は約1.2mを測る。上面レベルは礎石23が31.73m、礎石24が31.78mである。両者とも被熱痕は見られない。周囲には長さ10cm前後の円礫が散在しており、州浜状に敷設されていた可能性がある。

#### (2) 礎石33 (別添図2・3)

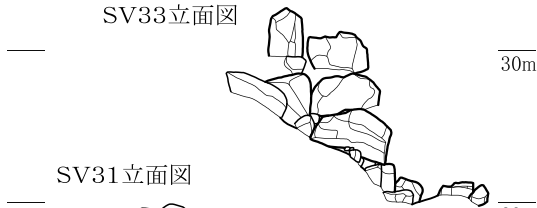
虎口状遺構SX43の北東で検出された円礫の礎石。東西37cm、南北41cmを測り、上面のレベルは31.20m、被熱痕は認められない。北側の未掘部分に、対応する礎石が残存する可能性とSX43に関連する可能性がある。



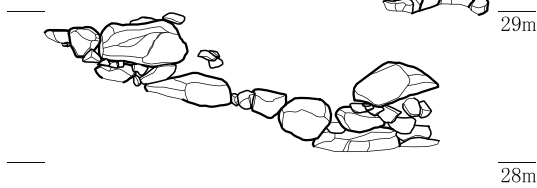
第14図 集石遺構SX40・礎石23・24実測図



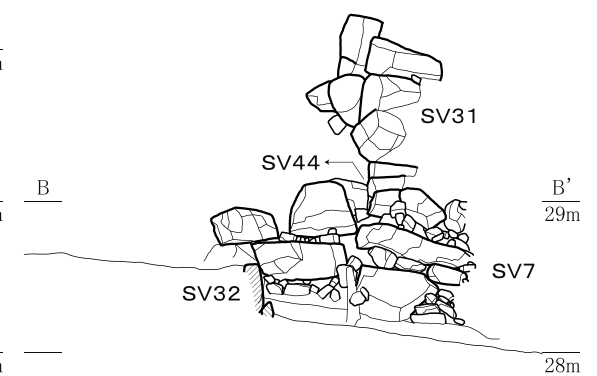
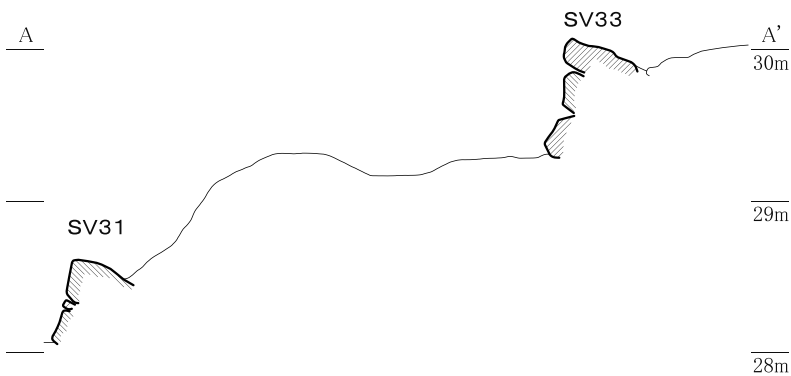
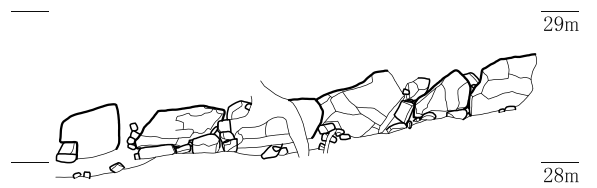
SV33立面图



SV31立面图



SV32立面图



第15图 石垣SV31~33实测图



### (3) 礎石7 (別添図2・3)

礎石23の南西、平成23年度の調査で上面が平坦なチャートが検出されている。石自体、IV層中に埋没していた可能性が高く、礎石そのものとは考えにくいですが、礎石の基礎の可能性が考えられる。

## 5. A地区北斜面

### ・石垣SV31 (第15図)

A地区の平坦地北端を支える石垣。確認できた長さは4.6m、残存は最大2段、高さ0.5mを測る。裏込め礫は見られない。東方向へさらに延長するが、大量の土砂に覆われており、安全上の理由で今回の調査では検出を断念した。

平成元年の工事立会の際、SV31の西の延長方向で北面の石垣を確認している。SV32とともに構成される土塁状遺構(幅約2.5m)が西方向に延びている可能性がある。

## 6. A地区西斜面

### (1) 石垣SV7 (第16図・別添図7)

A地区の平坦地、西端を支える石垣。長さ33.2m、残存部分は最大5段、高さ最大1.3mを測る。裏込め礫の残存高さから判断すると、高さは2.3m以上、A地区平坦地まで石垣が積まれていたとすると約3.5mとなる。北端は東へ直角に曲がっていたと考えられる(石垣SV33)。石材は1石のみ砂岩が使用されているが、それ以外は全てチャートである。裏込め礫の9割以上は円礫で、わずかにチャートの角礫が混じる。また、石材と石材の間の間詰めとしても円礫が使用されている。

埋没状況は次のとおりである。SV7前面はE地区の平坦地であるが、SV7の際を残して大部分は公園造成に伴い削平されている。残存する遺構面直上には炭・焼土が混入するシルト質の土(III層)がわずかに堆積し、その上に崩落した石垣石材及び裏込め礫(III層)が大量に堆積する。この状況はSV7の北端から南端まで同様で、III層中には多量の遺物(土師器皿・大窯製品・中国製磁器等)や貝殻が包含される。このことは、廃城時に石垣石材を抜き取った際、裏込め礫や石材が崩落し、一気に堆積したものと考えられる。礫層に土壌がほとんど含まれていないため、A地区西辺に土塁等、土による構造物があったとは考えにくく、遺物が大量に包含されていることから、SV7直上に建物等があった可能性が高い。なお、SV7の前、E地区平坦地直上に堆積するシルト質の土の一部は、南斜面SV30の前に堆積していた土に似ている。SV30前の土壌は自然科学分析の結果、プラント・オパールが検出され、土壁が崩落したものと推測しており、SV7直上も同様に土壁を有する構造物が存在したと考えられる。

### (2) 石垣SV33 (第15図)

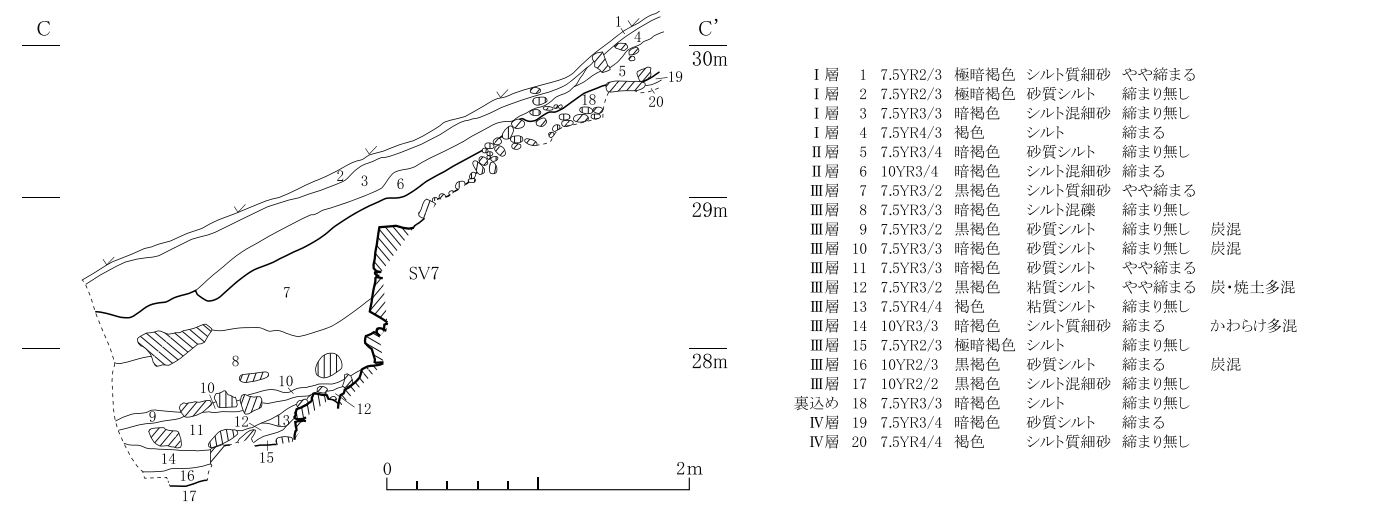
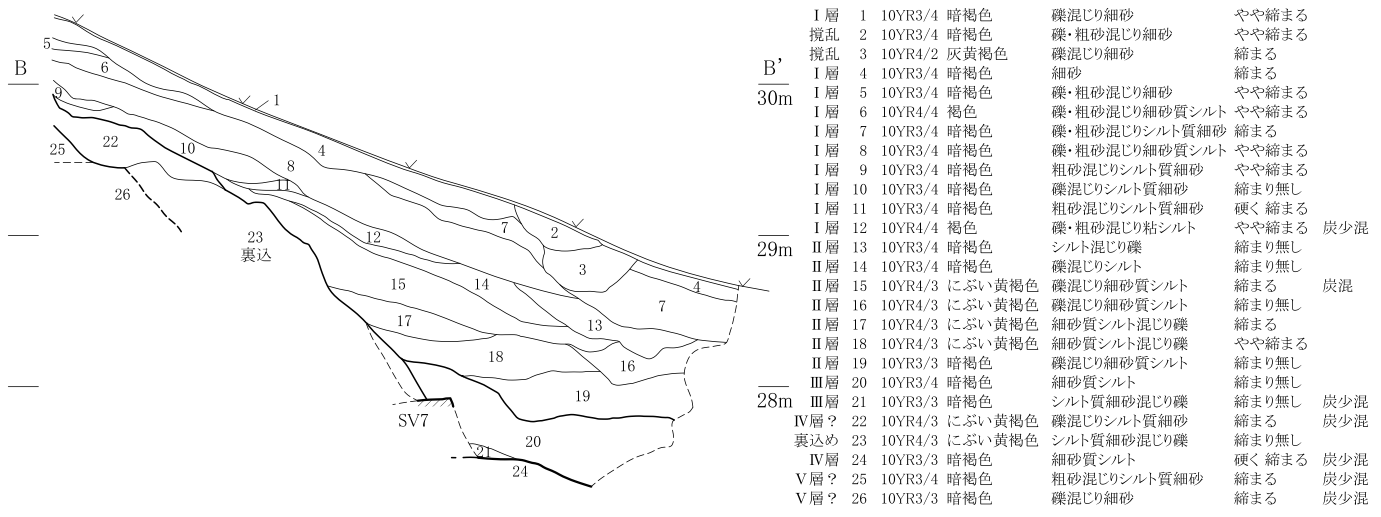
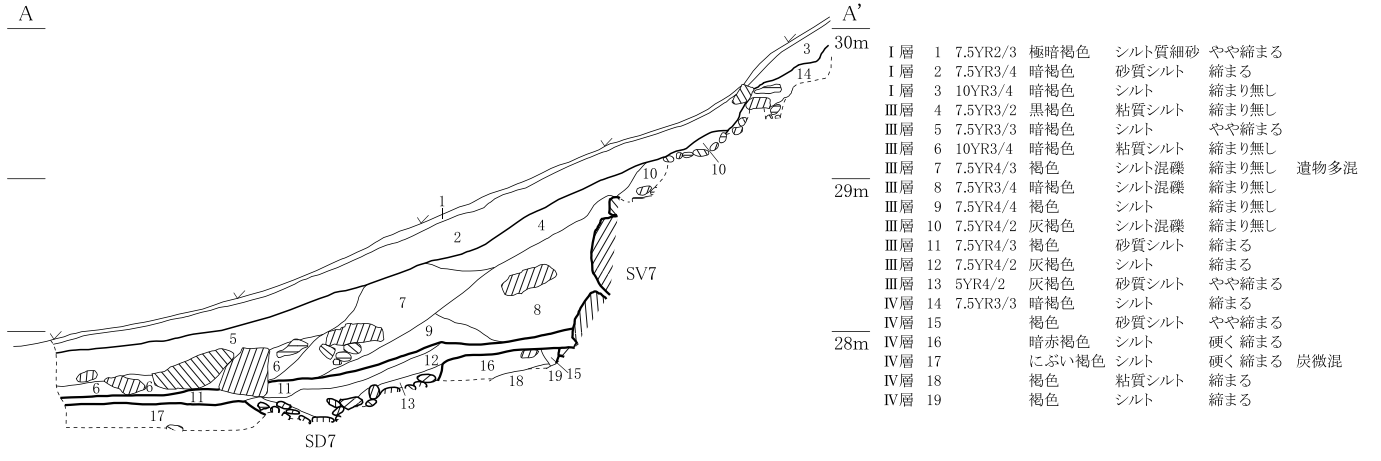
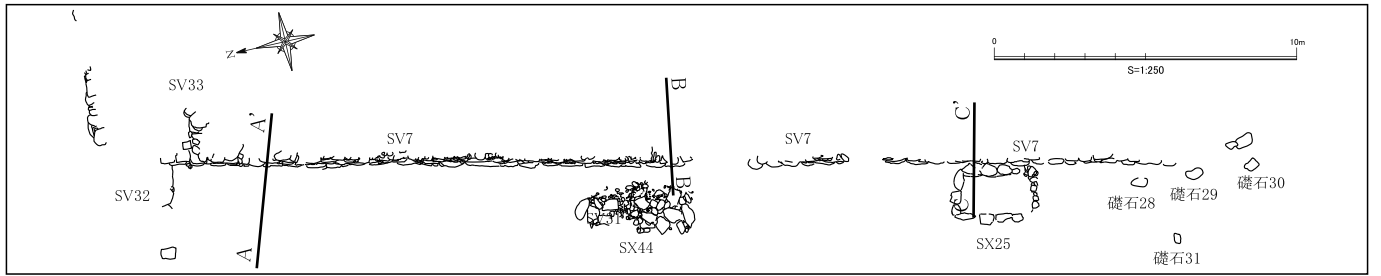
SV7北端から東へ延びる北面の石垣で、長さ1.6mを確認した。築造当初のSV7の終端と見られ、のち改修によって埋没したと考えられる。よって、本来SV7と一体で構築されたものである。

### (3) 石垣SV32・44 (第15図)

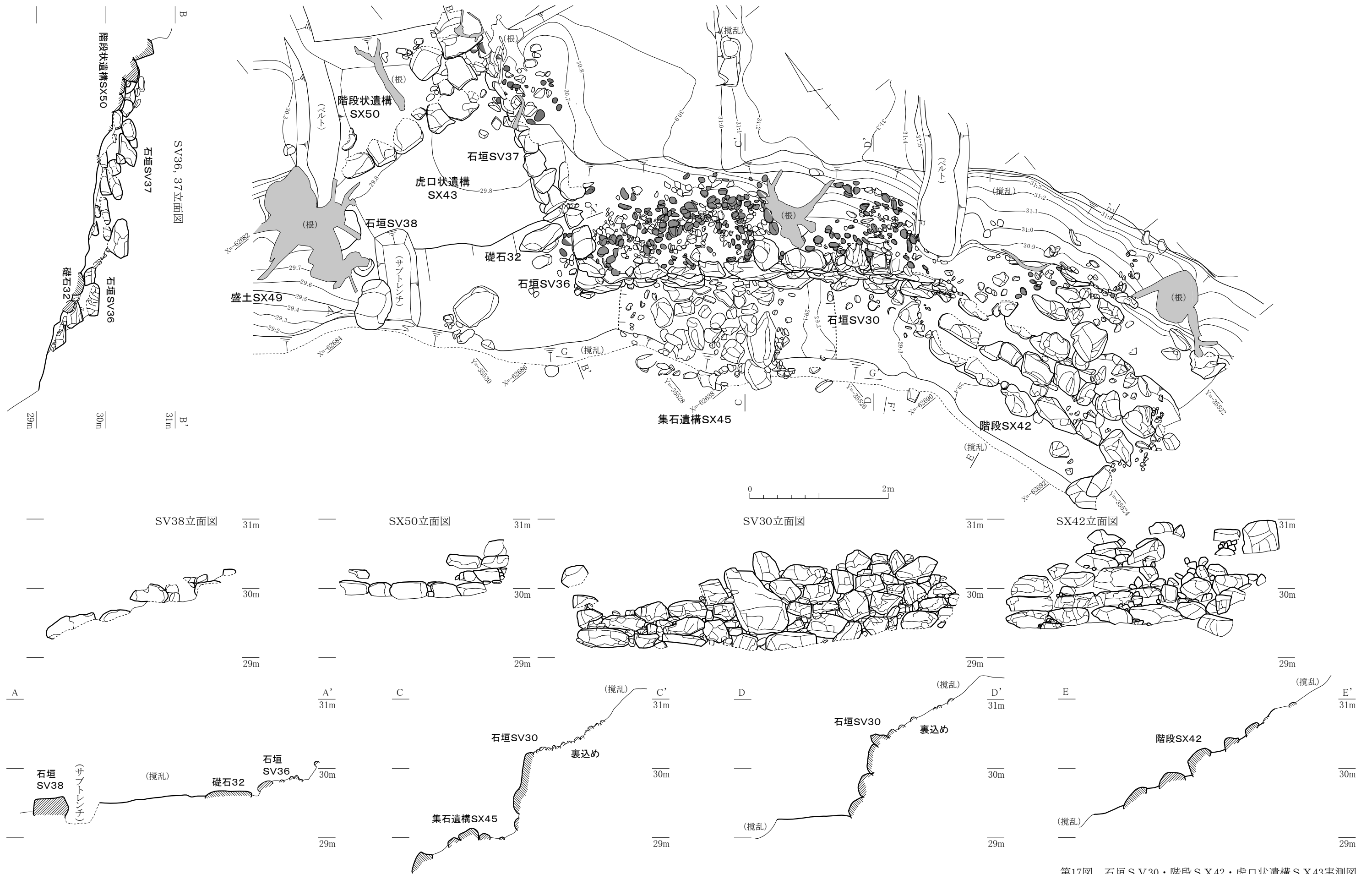
SV32は、改修によって構築された東西方向の石垣、SV44はその東端で南へ直交する石垣である。石垣SV33を埋没させた後、SV7を0.6m、石材1～2石分北へ延長し(SV44)、西方向へ直角に折れ曲げている(SV32)。SV32の残存の長さは3.1m、最大段数は2段。裏込め礫は見られない。平成20年度の試掘調査で、円礫が詰まった溝状遺構(SD7)を埋没させる改修の痕跡を確認しているが、SV32はその改修時の整地層を基礎にして構築されている。SV32は、SV31とともに、西へ張り出す土塁状遺構を形成するが、塀などの基礎である可能性が考えられる。

## 7. A地区南斜面

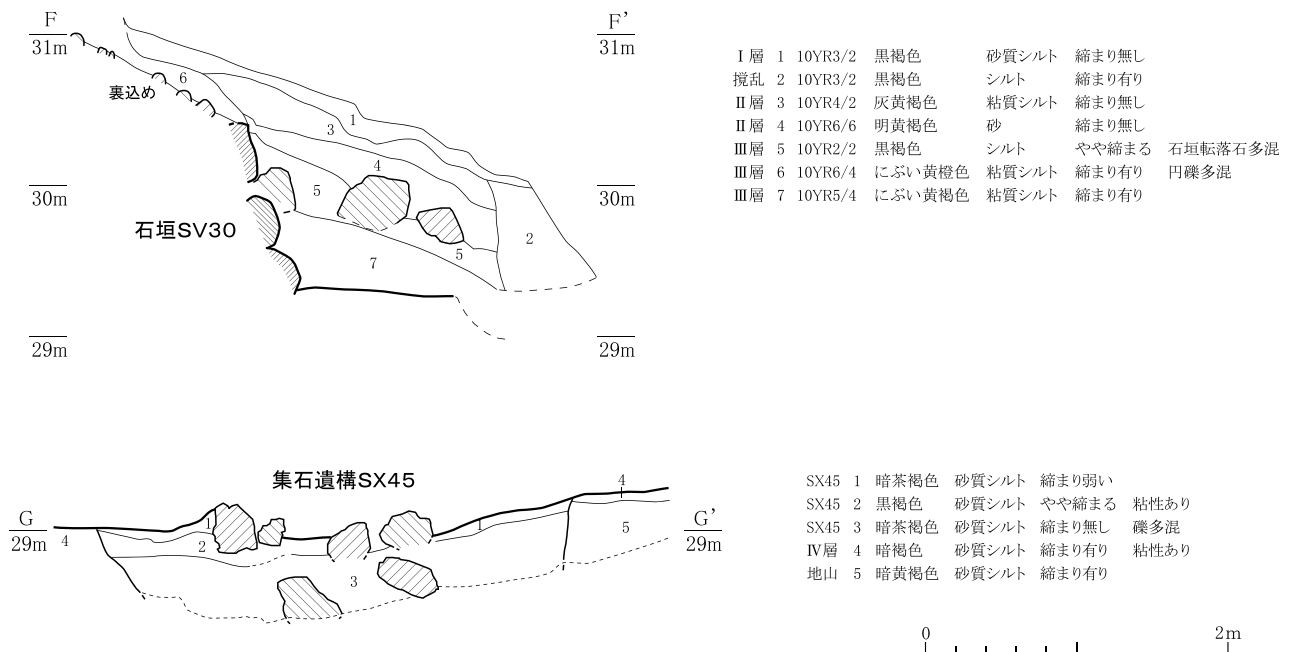
この地区では主な遺構として、石垣SV30と階段SX42、さらに虎口状遺構SX43を検出した。3基の遺構は、一体で構築されており、全体に緩やかな弧を描くレイアウトとなっている。SX43の西



第16図 石垣SV7土層図



第17図 石垣SV30・階段SX42・虎口状遺構SX43実測図



第18図 石垣SV30・集石遺構SX45土層図

は、盛土（整地層）しか残存しない。南側が水路攪乱により破壊されているため、規模や端部の構造は不明であるが、土塁状の張り出し（盛土SX49）が南へ延びていたと考える。なお、『岐阜城跡2』で報告されている通路状遺構SS2は、裏込め礫の上面を誤認したもので欠番とする。

(1) 石垣SV30・36（第17・18図）

SV30は、A地区の平坦地の南端を支える石垣で長さ5.5m、平面形は緩やかに弧を描く。残存部分は最大5段、高さ約1.5mを測り、裏込めの残存高さから、当時の高さは1.7m以上と想定できる。石材は全てチャートで、中央に高さ95cm、幅75cmの立石を配するのが特徴である。西端は北へ延びるSV36と直交する。SV36の長さは1.9m、残存部分は最大3段、高さ0.6mで、一部が石垣SV37と重なる。両者とも裏込め礫は円礫が主体であるが、SV7と比べ角礫の割合が多い。

SV30の大部分は、崩落した石垣石材及び裏込め礫で埋没していたが、東端の石垣前面の遺構面直上には北から南へ流れ込んだように黄白色粘質土が堆積していた。この土壌の自然科学分析を行ったところ、イネのプラント・オパールが多く検出され、土壌中に稲藁が混和されていた可能性が認められた。直上の平坦地に、土壁を用いた構築物があった可能性が高い。これら層中には多くの遺物（土師器皿・大窯製品・貝殻等）が包含される。

(2) 階段SX42（第17図）

石垣SV30の東に位置する、E地区の平坦地とA地区の平坦地を繋ぐ階段。石段は6段分が残存し、幅3.5m、高さ1.5m、奥行き1.8mを測る。下から1段目と2段目が完存しており、1段目は6石、2段目は8石の石を並べている。踏み面の奥行きは約40cm、段差の高さは20～30cmである。石材は全てチャートで、幅50～60cm、奥行き25～40cm、高さ20～30cmの大きさのものが多く、規格性に富む。SX42の石材の並び自体は直線的であるが、石垣SV30とは約30度の角度をなす。

(3) 虎口状遺構SX43（第17図）

石垣SV30の西に位置する遺構。石を4段に並べた階段状遺構SX50と、その南の平坦部、平坦部の南東角に設置された礎石32などから構成される。平坦部の南はE地区平坦地まで整地層による斜面となっている。全体の幅（東西）は3.7m、長さ（南北）3.3mを測る。東辺に石垣SV37、西辺には石垣SV38が構築されているが、これらとSX50の石は直交しない。SV38の1石のみ砂岩である

が、それ以外は全てチャートである。

S X50の残存段数は4段、高さ0.7mを測り、完存する一段目は5石の石が並べられている。石材の大きさは、幅35～50cm、奥行き35～45cm、高さ20cm前後のものが多く、上面が平坦な石を選別しているようで、面も綺麗に揃う。その南の平坦部は幅（東西）2.6m、長さ（南北）1.9mの規模で、上面は硬く締まっている。礎石32は平坦部の南東角に配置される長径69cm、短径31cmの大型の円礫である。S X50の石材は直線的に配列されているが、石垣S V30とは約30度の角度をなす。この角度はS X42と同じで、左右対称に配置されているようである。

礎石32の上面のレベルが29.67m、S V30前面の遺構面（E地区平坦地上面）は29.15mで、礎石は約50cm高く位置している。礎石とE地区平坦地の間には斜面が形成されているが、登坂路というには傾斜が強すぎ、S V36を見る限り、後世の攪乱の結果とも考えにくい。よって当時も同様な斜面があった可能性が高いが、これまでの調査成果を鑑みると極めて異色な状況である。現在のところ、E地区からA地区に至る虎口状の構造ではないと考え、水路を越え、南隣のC地区へ至る橋の基礎を想定している。

#### （4）盛土S X49（別添図2・3）

虎口状遺構S X43の西、S V7南端までの間に検出した盛土。石垣や石組みの石材や裏込め礫のような礫層は見当たらない。先述したように、土塁状の張り出しが南へ延びていたと推測できるが、水路攪乱により端部が破壊されているため、規模や構造は不明である。検出した盛土は横断面で、最大となる付け根部分の幅は推定5.5mを測る。平成26年度、谷川の対岸に当たる位置において確認調査を行ったところ、裏込めを持たず、盛土と同時に構築された石組み状遺構を検出した。S X49もこれと同様の石組みが存在した可能性と盛土のみで構成された可能性がある。

### 8. E地区平坦地（④a）（第5図）

#### （1）礎石建物

##### ・礎石28～30（第19図）

石垣S V7の南端で、南北に直線的に配置された3個の礎石を検出した。礎石28は長径54cm、短径29cm、上面レベル27.65m、礎石29は長径59cm、短径36cm、上面レベル27.69m、礎石30は長径48cm、短径41cm、上面レベル27.68mを測る。礎石30に接して攪乱が掘削されており、壁面で礎石設置の工程を確認することができた。整地面上面から径1.0m、深さ0.3mの穴を掘り、埋めながら石を設置している。礎石30の厚さが24cm以上と厚いこともあり、高さを調整しながら据え置いたと見られる。

礎石28～30のラインより西は焼土・炭が多量に包含される土で覆われており、また礎石29と礎石30それ自体も被熱している。礎石29の被熱痕は、上面中央に南北19cm、東西17cm、ほぼ正方形の範囲以外は赤化したもので、柱の痕のみ被熱していない。一方、礎石30は、上面中央に南北13cm、東西16cmの範囲がタール痕のように黒色化したものである。このような差異の原因は明らかでないが、前者は柱が燃え残ったのに対し、後者は柱のみが焼けたと考えられる。

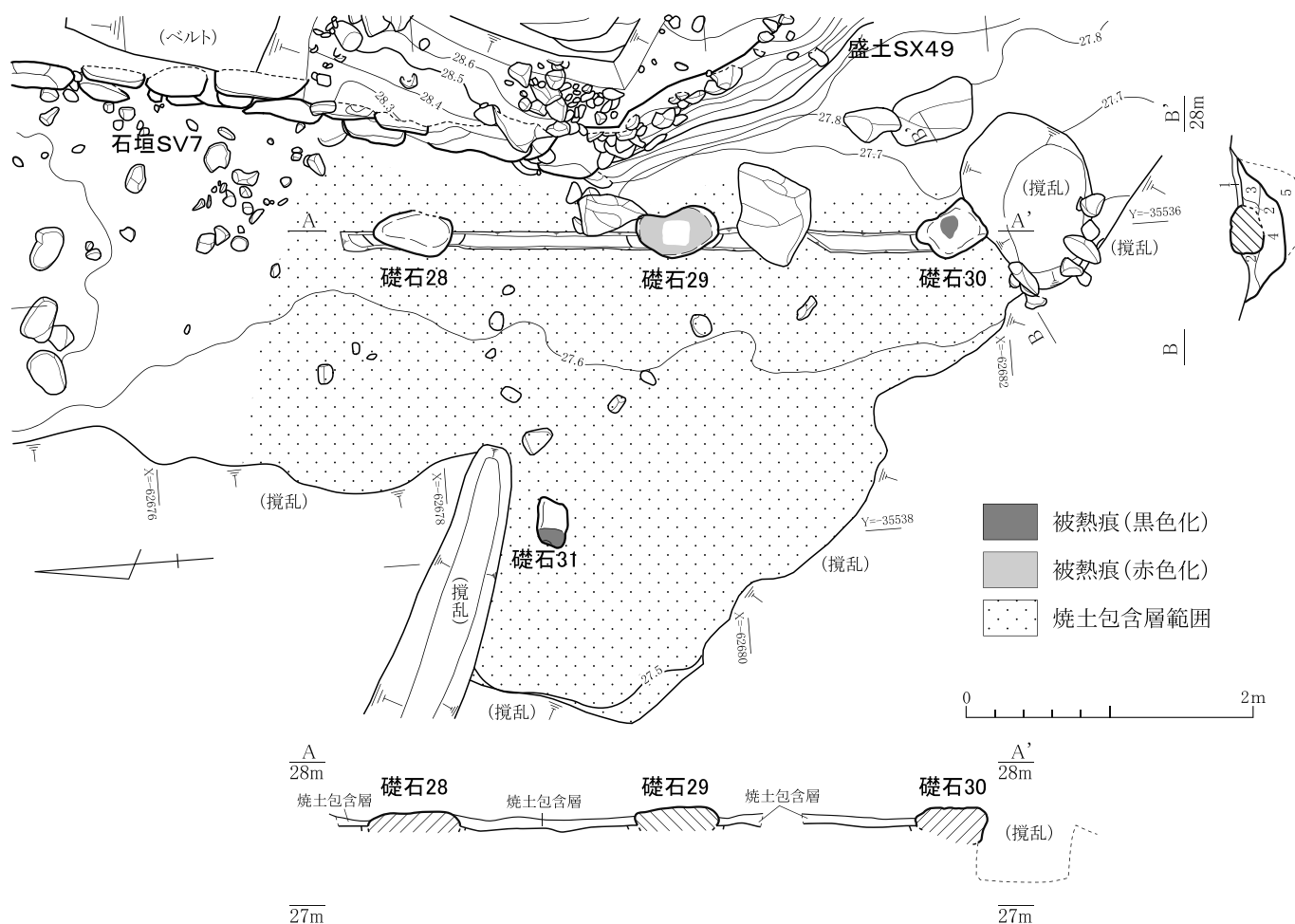
礎石28と29の間隔は1.8m、礎石29と30の間隔は1.9mを測る。隣接する石垣S V7とは方向が異なり、1次調査で検出された礎石群と方向が同一である。

##### ・礎石31（第19図）

長径35cm、短径21cm、東西方向に長く設置されている。上面のレベルは27.55mである。礎石28～30と同一面に設置されており、かつ同一層で覆われていることから同時期に機能したものであるが、位置や間隔が合致しない。上面の西半分が赤化している。

#### （2）柵状遺構S X25（第20図）

南北2.3m、東西1.2m、深さ0.7mを測り、石垣S V7と平行する石組みの遺構。東・北・西は40



第19図 礎石28～31実測図

～60cm位の大きな石材を並べて、壁面を構築しているが、南壁は15～20cm程度の石材を用いる。石材は全てチャートである。東壁で2段、北・西壁で1段、南壁で4～5段が残存し、東壁・西壁と南壁のコーナー部は、石が存在しないが、石組み全体が土坑状の掘り込みの中に構築されており、一連の遺構である可能性が高い。埋土は東から西へ流れ込むように堆積しており、出土遺物もSV7を覆うⅢ層出土のものと様相は同じである。また内部から出土した笏谷石製の鉢と同一個体と見られる破片(735・755)が、SV7を覆うⅢ層から出土していることから、同時に埋没した可能性が高い。ただ、出土した土師器皿の完形度が高い点が特徴的である。

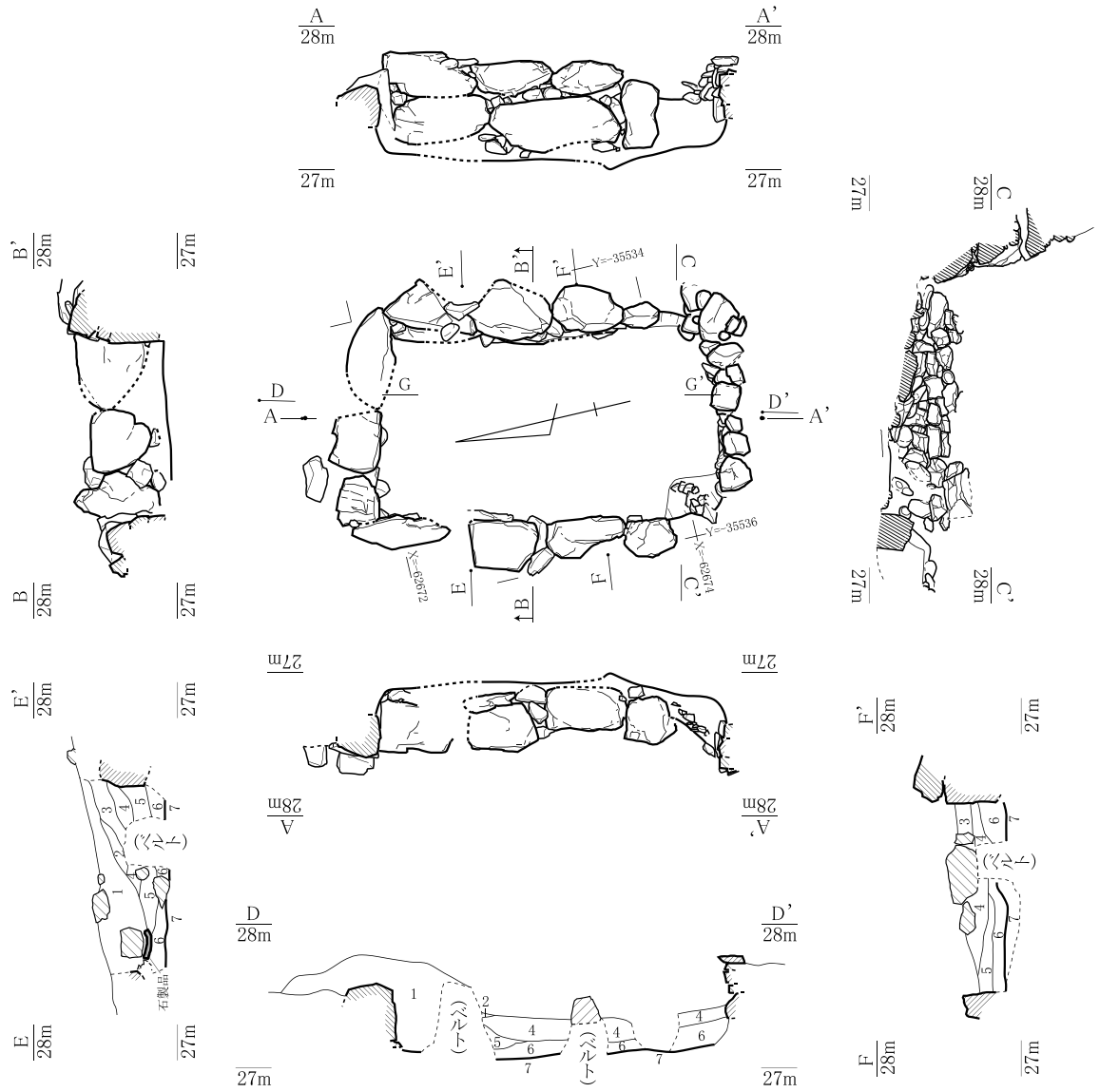
埋土に粘質土の堆積が見られないことから、水溜りのような施設の可能性は低いと考える。また寄生虫卵分析を試みたが検出されなかった。遺構の性格は不明である。

### (3) 集石遺構SX44 (別添図7)

石垣SV7の中程、E地区平坦地に構築された南北4.0m、東西1.5mの長方形の範囲に集石する遺構である。主軸がSV7と平行する。北端、南端の短辺には、辺に平行するように石材を設置していると思われる。主たる石の大きさが約50～80cmと大きなものが多く、SV7の転落石が集中したものである可能性も否めない。この位置のA地区平坦地には、池底に灰色粘質土(SR1②層)が部分的に敷設され、集石遺構SX2が配置されているところで、排水を受ける施設の可能性も考えられるが、断割調査等を行っていないため、詳細は不明である。

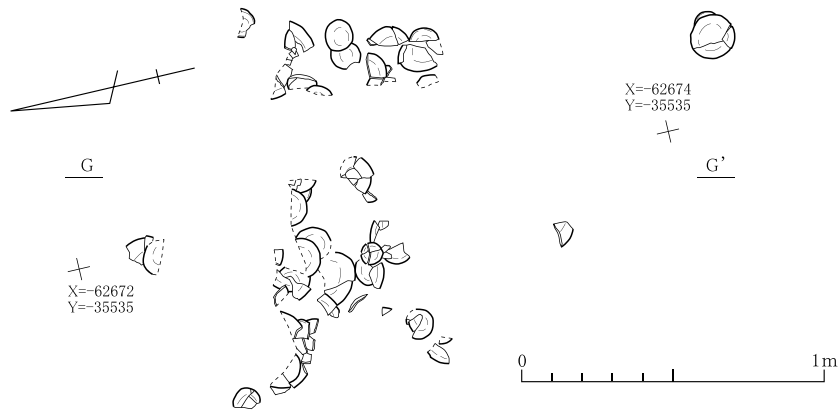
### (4) 溝状遺構SD7 (第16図・別添図7)

平成23年度の断割調査で検出した、検出幅約1.0mの円礫が充填された溝状遺構。土層観察の結果、SD7はSV7と同時に構築されていることが判明している。SD7を埋めている整地層は、石



- |            |       |          |         |
|------------|-------|----------|---------|
| 1. 5YR3/1  | 黒褐    | 礫混じり細砂   |         |
| 2. 2.5Y8/2 | 灰白    | 細砂       |         |
| 3. 2.5Y3/1 | 黒褐    | 中粒砂混じり細砂 | 焼土等多く包含 |
| 4. 5YR5/3  | にぶい赤褐 | 小礫混じり細砂  |         |
| 5. 10YR3/1 | 黒褐    | 細砂       | 遺物多く包含  |
| 6. 10YR3/2 | 黒褐    | 礫混じり細砂   |         |
| 7. 5Y5/1   | 灰     | 粗砂       |         |

遺物出土状況



第20図 樹状遺構 S X 25 実測図



垣SV32の基礎であり、SV32新設の際、埋められたと考えられる。全体像が不明なため、詳細は明らかでない。

### 9. E地区平坦地(④b) (第5図)

前項礎石28~31のレベルが27.5~27.7m、石垣SV30の前面のレベルは29.1~29.4mとE地区平坦地の中で1.5m程もの高低差があることが判明した。どこかで段差を設けている可能性が高いが、攪乱により確認することはできなかった。

#### ・集石遺構SX45 (第17・18図)

石垣SV30の前面で検出した集石遺構。南北残存長約1.5m、東西約1.6mを測り、方形を呈するが、南は水路の攪乱により破壊されている。石材は一辺30~50cmと大振りな石が主体で、石材の一部はSV30の基底石の下に設置されている。攪乱の壁面にて、東西3.2mを測る土坑状の掘り方を確認することができた。構築順序はSX45→SV30であることは明らかであるが、工程差か時期差かの判断をすることができなかった。SR1の排水施設の可能性も考えられる。

### 10. E地区西斜面

#### ・石垣SV21 (第21図・別添図2)

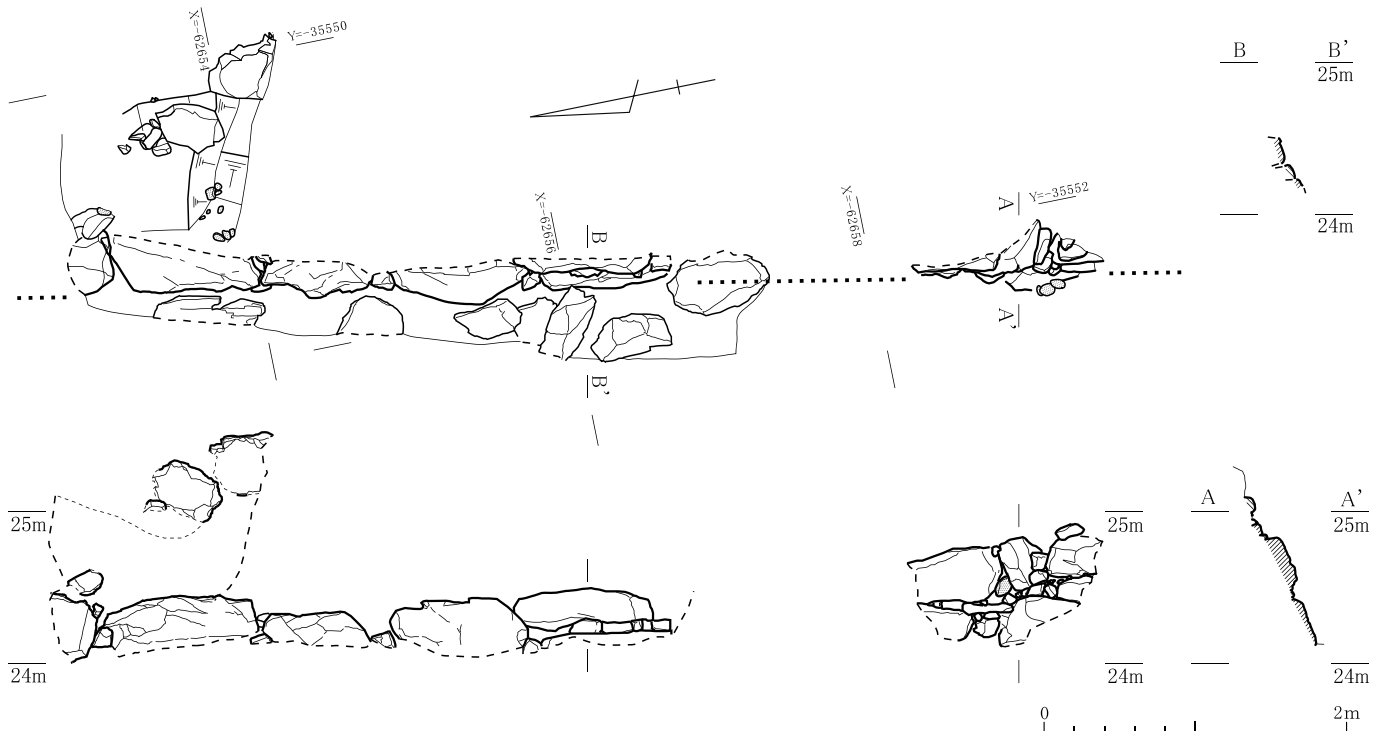
E地区の平坦地、西端を支える石垣。検出長さ約6.4m、残存部分は最大2段、高さ最大0.4mを測る。裏込め礫のレベルから、高さ1.6m以上と推測される。裏込め礫は円礫を使用している。A地区西の石垣SV7とほぼ平行し、石材はSV7より大きい。崩落した石垣石材及び裏込め礫で埋没していたが、層中には比較的多くの遺物(土師器皿・大窯製品・中国製磁器・貝殻等)が包含される。

なお、平成23年度の調査(E2トレンチ)で検出し、『岐阜城跡2』で石列SVX7、石敷遺構SX26と報告されている遺構は、それぞれSV21の延長、SV21の裏込めと判断した。

### 11. 時期不明の遺構

#### ・石垣SV46 (別添図2・写真図版13)

調査区の北東角において、全てチャートによる石垣を検出した。層位的には近代以降のものと思われるが、積み方は古相な印象を受ける。



第21図 石垣SV21実測図

## 第4章 遺物

### 第1節 遺物の概要

陶磁器類や土師器皿の分類や年代観については、岐阜市が従来用いている基準に従った（註）。

#### 1. 瀬戸美濃産陶器

戦国期の遺物のうち、瀬戸美濃産陶器（大窯製品）が占める割合は約10%（15,605点中1,516点）である。これは『岐阜城跡』の15.7%、『岐阜城跡2』の約14%と比べて低い。過去の調査がA～D地区に渡っているのに対し、今調査はA地区が大部分を占めることが起因している可能性がある。つまりA地区は平均的な出土傾向より、瀬戸美濃産陶器の占める割合が低い可能性である。

器種別に言えば、播鉢が1番多くて379点、次いで天目茶碗239点、丸皿216点、徳利168点と続く。碗類の総数は278点、皿類は501点と皿が多い。

出土場所での傾向は、1,516点中856点と西斜面からの出土が半数を超える。

#### 2. 輸入陶磁器

戦国期の遺物のうち、輸入陶磁器が占める割合は約4%（582点）で、その内訳は染付55%（321点）、青磁7%（40点）、白磁36%（207点）、中国製陶器8点、朝鮮製陶器6点である。

器種別には染付碗76点、染付小杯10点、染付皿75点、青磁碗15点、青磁皿12点、青磁鉢3点、白磁碗10点、白磁小杯16点、白磁皿86点を数える。碗は染付が多く、皿は染付及び白磁が多い。碗の総数は101点、皿は173点と皿が多い。

中国製陶器のうち7点は華南三彩の破片で、平成20年度出土の鍔付皿と同一個体の可能性が高い。それ以外では壺が出土している。朝鮮製陶器はいずれも小片で、碗と瓶類と見られるものが出土している。

#### 3. 土師器皿

出土遺物のうち最も多いのが土師器皿で、13,143点、全体の81%を占める。土師器皿は内面のナデ調整を観点として、底部と体部をナデ分け、体部は横方向にナデる（ヨコナデ）B類と、ナデ分けをしない（一方向ナデ）C類に大別でき、さらに細分されるが、岐阜城千畳敷遺跡で大多数を占めるのがB2類とC2類である。B2類は795点、C2類は3,932点出土しており、口縁部が1/8以上残存するもので計測した口径の平均は、B2類が12.8cm、C2類が10.1cmとB2類の方が大きなものが多い。B2類はさらに細分されているが（註）、判断しにくいものが多いこと、どの分類にも属さないものが一定量あることから、今回は採用しなかった。

#### 4. 瓦

瓦の出土は102点と極めて少ない。種類は丸瓦9点、平瓦53点、軒平瓦2点、飾り瓦1点である。出土位置は西斜面の南半が圧倒的に多い。

軒平瓦は『岐阜城跡』のA類、飾り瓦は無文の棟板瓦と考えられる。

- （註）（1）渡辺博人 1984 「美濃須衛古窯跡群における須恵器編年」『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』  
（2）藤澤良祐 2008 「第2章 東濃型山茶碗の形式編年」『中世瀬戸窯の研究』  
（3）小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No. 2  
（4）上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類と年代」『貿易陶磁研究』No. 2  
（5）上田秀夫 1982 「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2  
（6）藤澤良祐 1993 「瀬戸・美濃大窯の編年」『瀬戸市史陶磁史篇四』  
（7）井川祥子 2006 「美濃中世後期土師器皿の分類と編年」『守護所と戦国城下町』

## 第2節 出土遺物

### 1. 平坦地北（第22図）

1～35はグリッド42のⅠ・Ⅱ層から出土したものである。1～15は大窯製品で、1は外面に鉄釉と錆釉が施された内反高台の天目茶碗で第3段階に比定される。2は外面に鉄釉と濃い錆釉が施された小天目茶碗、3は鉄釉の小杯でともに第2段階のものである。4は灰釉の端反皿で第1段階、5・6は灰釉の丸皿で第2段階、7は鉄釉の稜皿で第2～3段階である。8・9は内面が無釉、外面に錆釉が施された第1～2段階の水指で、同一個体のもものと見られる。10は鉄釉の徳利で第3～4段階、11・12は錆釉の播鉢でいずれも第3段階後半である。13・14は錆釉が施された風炉で、同一個体のもものとみられる。第3～4段階と考えられる。15は無釉の炆器質の花生で詳細な時期は不明である。16～18は染付碗で、17は内面に四方襷文、外面に暗花文が施される。19・20は白磁皿、21は華南三彩の鏝付皿の底部である。内面は緑色釉を基調とし、底部と体部の境界に黄色釉、底部に褐色釉が施される。外面は体部に緑色釉があるが、底部は無釉である。平成20年度の試掘調査で出土したものと同一個体の可能性が高い。22～32は土師器皿で、22～24が内面体部をヨコナデするB2類、25～29が一方方向ナデのC2類、30～32がロクロ成形のものである。33は円盤状の銅製品で中央に穿孔される。34は古瀬戸製品の四耳壺で灰釉が施される。35は土師器の皿か。36～39はグリッド37のⅠ層から出土した。36は大窯製品の風炉で錆釉が施され、13・14と同一個体の可能性が高い。37は鉄釘、38は石製品の硯、39は連房製品の播鉢で第10・11小期に比定される。

### 2. 池北東（第22・23図）

40～53は石垣S V29の南、池底に自然堆積したと考えられる粘土層中から出土した。40・41・46～49が大窯製品で、40は内面無釉、外面に錆釉と鉄釉が施された徳利である。41は錆釉の播鉢で第3段階後半に比定される。46は鉄釉と錆釉が施された小天目茶碗で第1段階、47は内面に錆釉、外面に鉄釉が施された徳利で第3～4段階、48は錆釉の播鉢で第4段階前半、49は錆釉の甕を円形に加工した加工円盤である。42と50は染付の大皿で、同一個体の可能性が高く、体部で外折するツバ皿である。43・51はB2類の土師器皿、44・52・53はC2類の土師器皿、45は器種不明の土師器である。

54～60は石垣S V29を埋没させていた礫層中から出土した遺物である。54～57は大窯製品で、54が鉄釉の天目茶碗で第3段階、55は灰釉の丸皿で第2段階、56は鉄釉の稜皿で第2段階、57は錆釉の花瓶で第1～3段階のものである。58・59は土師器皿で、58がB2類、59がC2類である。60は銅製の寛永通寶である。61は礫層の上のシルト層が出土した大窯の天目茶碗で、内面に鉄釉、外面に鉄釉と錆釉が施される第2段階のものである。

62～64は岬状遺構S X41の断割調査の際、盛土中から出土したものである。62・63は大窯製品で、62は外面に鉄釉と錆釉が施される天目茶碗で第3段階後半、63は鉄釉の丸皿で第3段階前半のものである。64は染付碗でE群に分類される。65はS X41上面の石敷遺構S X7直上から出土した大窯製品の播鉢で第4段階前半、66はS X7を覆うⅠ層中から出土した寛永通寶である。

67～73は池泉遺構S R1を覆うⅡ層中から出土した。67～69は大窯製品で、67・68は鉄釉の天目茶碗で、67は第2段階、68は第3段階に比定される。69は錆釉の風炉で第3～4段階に比定される。13・14と同一個体の可能性が高い。70は染付小杯、71は白磁小杯、72は鉄釘、73は灰釉陶器の碗である。

74～79はS R1を覆うⅠ・Ⅱ層中から出土した。74～76は大窯製品で、74は鉄釉の天目茶碗で第3段階後半に比定される。75は内面に鉄釉、外面は無釉が施され、削出高台を有し、第3段階前半に比定されるが、器種は不明である。76は内外面とも緑釉が施され、第2段階に比定されるが、器種は不

明である。77は白磁小杯、78・79は土師器皿で、78がB 2類、79がC 2類に分類される。

80～98はS R 1を覆うI層中から出土した。80～83は大窯製品で、80は小天目茶碗で、内面に鉄釉、外面に鉄釉と錆釉が施される。高台は削出輪高台で第1段階に比定される。81・82は灰釉の端反皿でいずれも第1段階、82は口径16cm程の大型品である。83は無釉の灯明皿で第2段階に比定される。84は染付皿でB 2群に分類される。85・86はC 2類の土師器皿、87は土製品の土錘である。88～90は鉄釘である。91は近世陶器と見られる小皿で、口縁部のみ鉄釉が施される。92～98は錆で癒着して出土したもので、92～96・98は銅製の寛永通寶、97が鉄製の銭貨と見られる。

### 3. 池北西 (第24図)

99～117は石垣S V 34の前に堆積していたI・II層中から出土した。99～107は大窯製品で、99～101が天目茶碗である。99・100は内外面ともに鉄釉が掛けられるが、外面の体部下半は露胎で、いずれも第3段階後半に比定される。101は鉄釉の天目茶碗で第4段階前半である。102は灰釉の端反皿で第1段階、103は灰釉の丸皿で第3段階前半、104は灰釉の稜皿で第3段階後半に比定される。105は内外面とも鉄釉が施された徳利で第3～4段階のものである。106・107は錆釉の播鉢とともに第3段階後半である。108は常滑産陶器であるが、器種は不明である。109は染付碗E群、110は白磁ツバ皿で体部に刻文が施される。111は白磁染付の皿で、体部に刻文、見込みに圏線が描かれる。112～114は土師器皿で、112・113がC 2群、114がD類である。115は鉄釘、116は銅滓、117は内外面とも錆釉が施される陶器で古瀬戸後期の壺か。

118～142は池泉遺構S R 1を覆うI・II層中から出土した。118～127は大窯製品で、118～121が鉄釉の天目茶碗である。118は第1段階で、119は外面腰部に錆釉、120は外面腰部に薄い錆釉を施す内反高台のもので、119・120は第2段階、121は第3段階に比定される。122は鉄釉の小天目茶碗で第3段階後半である。123～126は灰釉の丸皿で、123～125が第2段階、126が第3段階前半である。123の見込みには印花文が施される。127は鉄釉の稜皿で、削込高台を有し、第3段階前半に比定される。128は染付皿E群である。129～140は土師器皿で、129～131がB 2類、132～136がC 2類、137～140がロクロ成形のものである。141はロクロ成形の耳皿である。142は円盤状の土製品である。

### 4. 池南東 (第24・25図)

143～145は断割調査中に出土したもので、池泉遺構S R 1に堆積するIII層あるいは底に敷設されたIV層中に相当する。143・144は大窯製品で、143は鉄釉の第3段階の天目茶碗、144は鉄釉で第2～3段階の舟徳利である。145は朝鮮製と見られる陶器の碗である。

146～160はS R 1に堆積するIII層出土の可能性が高い遺物である。146・149～152は大窯製品で、146は内面に鉄釉、外面に鉄釉と錆釉が施される内反高台の天目茶碗で第3段階後半に比定される。149は鉄釉の天目茶碗で第3段階である。150は無釉の灯明皿で第1段階、151は鉄釉の鉢で詳細な時期は不明、152は錆釉の鉢で第3段階後半のものである。147はC 2類の土師器皿、148は不明鉄製品である。153は染付皿でC群と考えられる。154は白磁皿E群、155は華南三彩の鏝付皿で、内面に緑色釉と黄色釉、褐色釉が施され、外面には緑色釉が見られる。156は朝鮮製陶器と見られる碗である。157は不明鉄製品、158は179と同種のもので、銅製の菊花皿の底部である。内面には格子が刻まれており、高台部にあたる部品とはピン状のもので固定されている。159は石製の基石(白)である。160は鉄釉が施された古瀬戸後期IV段階の口広有耳壺である。

161～164はS R 1に堆積するIII層あるいは覆土のII層から出土した。161は大窯製品の無釉の灯明皿で第3段階後半に比定される。162はB 2類、163はC 2類の土師器皿、164は石製の基石(黒)である。

165～167はS R 1を覆うII層から出土した。165は大窯製品の天目茶碗を円盤状に加工した加工円

盤、166は錆釉の鉢である。いずれも詳細な時期は不明である。167は東濃型山茶碗の碗で大畑大洞4号窯式新段階に比定される。

168～181はSR1を覆うII層もしくはI層から出土した。168～171は大窯製品で、168は灰釉の端反皿で第1段階、169・170は灰釉の丸皿で、169が第3段階前半、170が第3段階に比定される。171は内面鉄釉、外面無釉の加工円盤で、丁寧に円形に加工されている。172～175は白磁で、172が小杯、173～175が皿で、いずれもE群である。176はC2類の土師器皿、177は鉄釘、178は鉄製品の鉢である。179は158と同種の銅製品である。内外面とも金が鍍金されている。内面中央に配置される凸状の円板の表面には格子が刻まれており、周囲は花卉状に成形される。外面の中央には端部が閉じた筒状の部品が取り付けられ、中央をピン状のもので固定している。菊花を模したもので、鉄漿皿もしくは紅皿と考えられる。180は銅銭の「天聖元寶」であろう。181は内面口縁部のみ鉄釉、外面に鉄釉が施された古瀬戸後期III・IV段階の水指である。

182～201はSR1を覆うI層出土の遺物である。182～189は大窯製品で、182・183は共に鉄釉が施された第3段階前半の天目茶碗である。182の外面腰部は露胎、183は薄い錆釉が施され、内反高台を有する。184は灰釉の丸皿で第2段階、186・187はともに付高台を有する灰釉の皿で第2段階に比定される。188は錆釉の鉢で詳細な時期は不明、189は鉄釉の茶入で第3段階である。190～192は染付で、190は小碗、191は碗のE群、192は皿でB1群である。193は青磁碗、194は白磁小杯、195は白磁皿である。196・197はC2類の土師器皿。198は灰釉陶器の皿、199は東濃型山茶碗の碗、200は古瀬戸製品後期I・II段階の四耳壺、201は銅製の寛永通寶である。

202は攪乱から出土した緑色片岩の破片である。

## 5. 池南西 (第25図)

203は断割調査中III層もしくはIV層から出土した土師器皿C2類である。

204・205はSR1を覆うII層もしくはIII層から出土した。204は染付碗E群、205は白磁皿である。

206～212はSR1を覆うI層もしくはII層から出土した。206～208は大窯製品で、206は第2段階の無釉の灯明皿、207は第3段階後半の香炉で外面のみ灰釉が施される。208は内外面に錆釉が施された祖母懷壺である。209は染付碗である。210・211は土師器皿C2類、212は不明鉄製品である。

213～243はSR1を覆うI層中から出土した。213～222は大窯製品で、213・214は鉄釉の天目茶碗で、213は第3段階後半、214は第3段階に比定される。215は第1～2段階の灰釉の小杯で、底部は削込高台である。216・217は灰釉の丸皿でともに第2段階、218は灰釉の内禿皿で第3段階後半である。219は内外面に鉄釉が施された水注と見られる。220・221は播鉢で、220が第3段階前半、221は第3段階後半である。222は第3段階後半の香炉で、外面底部以外に灰釉が施され、3方向に脚が付く。223～225は染付で、223・224は碗E群、224は外面に暗花文が描かれる。225は皿B1群である。226は青磁碗で外面に鎬連弁文があり、227は青磁で器種は不明である。228・229は白磁皿E群である。230～239は土師器皿で、230・231はB2類、232～237はC2類に分類される。238はロクロ成形のものである。240は銅製品で飾り金具か。241は元祐通寶、242は石製品で基石である。243は尾張型の山茶碗6型式である。

244～251は攪乱から出土した。244は土師器皿C2類、245は大窯の灰釉の皿、246は大窯の播鉢、247は染付碗、248は白磁皿、249は土師器皿B2類、250は鉄釘、251は大窯の灯明皿である。

## 6. 平坦地南 (第26図)

252～256はI層もしくはII層から出土した。252・253は土師器皿で、252はB2類、253はC2類である。254は鉄釘、255は東濃型山茶碗、256は銅製の寛永通寶である。

257～275はI層から出土した。257～262は大窯製品で、257～259は鉄釉の天目茶碗である。257・

258は第1段階、258は削出輪高台を有し外面腰部に濃い錆釉が施される。259は外面腰部が露胎で第3段階後半に比定される。260・261は小天目茶碗で、260は第3段階後半、261は外面腰部に薄い錆釉が施される第3段階のものである。262は灰釉の丸皿で第4段階前半である。263は染付皿、264・265は土師器皿C2類である。266・267は土製品の土鈴である。268・269は軒平瓦で、268は中心飾りに子葉文、外へ向かい唐草文が3転する。268はA類、269はA類と見られる。270は須恵器の短頸壺、271は尾張型山茶碗の碗、272・273は東濃型山茶碗の碗である。274・275は古瀬戸製品で、いずれも外面に灰釉が施される壺である。

276は攪乱から出土した大窯の鉄釉の天目茶碗で第3段階のものである。

## 7. 北斜面 (第26図)

277～289はI層から出土した。277～281は大窯製品で、277・278は鉄釉の天目茶碗で、277が第1段階、278は第2段階である。279は灰釉の丸碗で第3段階後半に比定される。280・281は第2段階の灰釉の丸皿である。282は白磁皿E群である。283～287は土師器皿で、283～286はC2類、287はロクロ成形のものである。288は「淳化元寶」、289は東濃型山茶碗の碗である。

290～292は攪乱から出土した。いずれも大窯製品で、290・291は鉄釉の天目茶碗で、290が第1段階、291が第4段階後半である。290は外面腰部に錆釉、291は露胎である。292は灰釉の丸皿で第3段階前半に比定される。

## 8. 西斜面北 (第26～30図)

本項8から次々項10までは石垣SV7を埋没させていた土層から出土した遺物である。前述したようにSV7全面には多量の礫層が堆積していたが、これは石垣を取り壊した際に崩落した裏込め礫・石材と考えられる。礫層中には多量の遺物が包含されており、平坦地から石材や裏込めと共に落下、混入したものと考えられる。よって廃城時の一括遺物に限りなく近く、重要な遺物群といえる。北、中、南と地区分けをしたが、土層の性格としては全て同一のものである。

293～520はSV7前面に堆積する崩落礫層(III層)から出土したもので、293～380・382～389は大窯製品である。293～313は鉄釉の天目茶碗である。293・294は外面腰部に濃い錆釉が施される第1段階後半のもの、295・296は第1段階のもので、296は削込輪高台で濃い錆釉がある。297・298は第2段階で、298は内反高台で濃い錆釉が施される。299～301は第3段階後半のもので、299は薄い錆釉、301は内反高台で腰部が露胎である。302～312は第3段階のもので、311が輪高台、306・310が内反高台、外面腰部の施釉は、309が濃い錆釉、310・312が薄い錆釉、306・307・311は露胎である。313は第4段階前半で外面腰部は露胎である。314～325は小天目茶碗で、317が灰釉、他は鉄釉で施釉される。314・317・319・320・321が輪高台、318が内反高台である。外面腰部の施釉は314・321が濃い錆釉、315・316・318・322が薄い錆釉、317・319・320・323～325が露胎である。314～316は第1段階、317が第1段階と見られるもの、318が第2段階、319が第3段階後半、320～324が第3段階、325が第4段階前半に比定される。326は鉄釉の小碗で第3段階、327は鉄釉の小杯で第3段階である。328・329は灰釉の端反皿で第1段階後半、328の見込みには印花文がある。330～343は灰釉の丸皿で、330が第2段階前半、331～337は第2段階、338～342は第3段階前半、343は第3段階のものである。344～347は第3段階後半の灰釉の内禿皿で、いずれも削込高台を有する。348は鉄釉の稜皿で第2～3段階である。349～351は無釉の灯明皿で、349が第1段階、350が第2～3段階、351が第4段階である。352～354は付高台の灰釉の皿で、352・353が第2～3段階、354が第3段階である。355・356は鉄釉の徳利で、355は第3段階、356は詳細な時期は不明である。357は錆釉が施される水指・建水で第3段階前半である。358・359は詳細な時期が不明な水指で、358は内面を除いて錆釉、359は内面を除いて鉄釉が施される。360～381は播鉢で、360が第1段階後半、361・362が第2段階、363～

366が第3段階前半、367～375が第3段階後半、376が第3段階、377～380が第4段階前半、381は連房第2小期に比定される。382・383は外面底部を除いて鉄釉が施される壺で、382が第1～2段階、383が第2～3段階のものである。384・385は香炉で、384は底部を除く内面のみ灰釉が施され、脚が付く第3段階のもので、385は内外面とも黄瀬戸釉が施される第4段階前半のものである。386は錆釉が施される鍋のものと見られる蓋で、第4段階前半に比定される。387は外面のみ錆釉が施される炆器質の茶壺を加工した円盤である。388・389は錆釉の風炉で、388が底部、389は胴部で抉り込みの部分が残存する。いずれも第3～4段階で、前出のものと同一個体の可能性が高い。

390～405は染付で、390～396は碗である。390～395はE群で、392～395は饅頭心の底部を持つ。392は外面に暗花文が描かれ、396は五彩で外面に赤、緑、黒色で絵が、内面は呉須で四方襷が描かれる。397は小碗、398・399は小杯である。400～405は皿で、400・401がB1群、402～404がE群、405は碁笥底を有しC群に分類される。406～412は青磁で406～408は碗、409は内面にシノギが施される輪花風の皿である。410は壺と見られる体部片で内外面に文様が施される。411は高台内のみ白磁釉が施され、呉須で圏線が描かれる皿である。412は青磁と見られる碗である。413～422は白磁で、413～414が碗、415・416が小杯である。417～422は皿で、端反形のもの(417～419)と内彎形のもの(421)がある。422は内面に呉須で圏線が描かれる。423は中国製陶器でいわゆる華南三彩の鏝付皿の口縁部である。外面は緑色釉、内面は緑色釉をベースに黄色釉を施している。平成20年度の試掘調査で出土したものと同一個体の可能性が高い。

424～507は土師器皿で、424～446がB2類、447～500がC2類、502～504がロクロ成形のものである。505・506はA類の可能性が高く、507は鋳滓が付着している。

508・509は土師器で、508が内耳鍋、509は鍋である。510～512は鉄製品で、510が釘、511・512が刀子である。513・514は不明銅製品、515は鉄滓である。516は平瓦で、凹面前側に面取りが施される。517は赤彩のある壺の破片、518はロクロ土師器の椀、519は東濃型山茶碗の碗、520は古瀬戸製品の灰釉の平碗である。

521・522は同地区I層から出土したものである。521は土師器皿C2類、522は平瓦である。

## 9. 西斜面中(第30～35区)

523～688は前項で記述した崩落礫層(Ⅲ層)と同じ層から出土したものである。

523～571は大窯製品である。523～530は鉄釉の天目茶碗で、523は第1段階後半、外面腰部以下に濃い錆釉が施される。524は第3段階前半で外面には薄い錆釉、525は第3段階後半で外面腰部は露胎のものである。526・527は第3段階ともに内反高台で、526は外面腰部が露胎、527は濃い錆釉が施される。528・529は第4段階前半で外面腰部は露胎、530は第4段階後半で外面腰部が露胎である。531～534は小天目茶碗で、531は第2段階、内反高台で外面腰部に濃い錆釉が施される。532は第3段階前半で外面腰部に濃い錆釉、533は第3段階で外面腰部は露胎のものである。534は第4段階前半で外面腰部は露胎である。535は第4段階前半の丸碗で、削出輪高台を有し鉄釉が施されるが、外面腰部以下は露胎である。536は灰釉の端反皿で第1段階前半、537は灰釉の反り皿で第3段階後半である。538～545は丸皿で、540が鉄釉である以外は灰釉が施される。538・539は第2段階、540は第2～3段階、541～544は第3段階前半、545は第3段階後半である。高台は538・541・542・545が付高台、540が削込高台、543が削出高台を有する。546・547は灰釉の内禿皿で、ともに第3段階後半である。548は無釉の灯明皿で、第2段階である。549は第3～4段階の錆釉が施された鉢で、口縁端部のみ無釉である。550～553は大皿で、550は第3段階前半、全面に薄い鉄釉が施された炆器質のものである。551は第3段階後半、内面が無釉、外面に薄い鉄釉が施され、外面にはヘラケズリが認められる。552は第4段階前半、全面が無釉、炆器質のもので、内外面にヘラケズリが施される。553は第4段階前



半、全面に錆釉が施され、外面のみヘラケズリが認められる。551・552が平底、553が削込高台を有する。554は折縁大皿で第4段階前半、全面に錆釉が施される削込高台のものである。555・556は徳利とともに第3～4段階のものである。555は鉄釉、556は錆釉が施される。557～571は播鉢で、557が第2段階、558～561が第3段階前半、562～566が第3段階後半、567・568が第4段階前半、569が第4段階後半、570・571が第3～4段階のものである。572は連房第1小期の播鉢、573は備前産と見られる徳利である。

574～585は染付で、574～579が碗である。574は端反碗でB群、576・577は饅頭心でE群に分類される。579は内面に四方襷、外面が五彩のもので、396と同一個体の可能性が高い。581～585は皿である。581は端反皿でB1群、583～585はE群である。586～588は青磁で、586・587が皿、588は鉢と見られる。589～593は白磁で、589～591が碗、592・593が皿で、591の外面には連弁文が施される。

594～662は土師器皿で、594～607がB2類、608～659がC2類、660・661がロクロ成形のものである。662は外面にヨコナデが施される薄手のものである。B1類か。663・664は土師器で、663が鍋、664は羽釜である。665は瓦質土器の羽釜と見られる。666・667は土製品で、666は犬形の土製品、667は十能の把手と見られる。668～670は石製品でいずれも砂岩製である。668が上臼、669・670はふいごの羽口である。669には鋳滓が付着し、ともに被熱痕が認められる。671・672は鉄製品で、671が釘、672は刀子である。673～675は銅製品の銭貨、673は不明、674は「嘉祐通寶」、675は「至道元寶」と見られる。676～681は瓦で、676が丸瓦、677～681は平瓦である。679の前端部には面取りが施される。682～684は壁土で、683には板材の小舞、684には竹の小舞の圧痕が見える。

685は須恵器の蓋、686～688は古瀬戸製品で、686は外面に灰釉が施された水注、687は灰釉の四耳壺、688は灰釉の梅瓶である。

689～691はI・II層、692はI層、693は攪乱から出土した。689は染付碗、690は白磁皿、691は尾張型山茶碗である。692は大窯の灯明皿で、炆器質で錆釉が施される。693は鉄釘である。

694～736は柵状遺構S X 25埋土中から出土した。埋土の堆積状況を観察すると、S V 7の埋没過程と大差はなく、一連の堆積と考えられる。694～701は大窯製品で、694～696が天目茶碗である。694・695ともに第2段階のもので、外面腰部は薄い錆釉が施される。696は第3段階後半のもので、内反高台、外面腰部は露胎である。697は灰釉の内禿皿で第3段階後半、削込高台で見込み中央部だけ施釉されていない。698は第2～3段階の中皿で高台は付高台、全面に鉄釉を施し内面のみ所々に藁灰釉が掛けられる。699は第3段階の建水で、内外面とも上半部に鉄釉が施されるが、口縁端部は無釉である。700は第3段階後半の耳付水注で全体に鉄釉が施される。701は第3段階後半の播鉢である。702は産地不明の炆器質の大皿で全体に錆釉が施される。703・704は白磁で、703が小杯、704が皿である。705～732は土師器皿で、705～715がB2類、716～732がC2類である。733は土師器の耳皿、734は土製品の土鈴である。735は笏谷石製の鉢で、755と同一個体と見られる。推定で口径60cm、器高19cm、底径41cmの浅く大きい皿形に近い鉢と考えられる。736は尾張型の山茶碗である。

737・738は礫層ではないIII層中から出土したもので、ともに土師器皿C2類である。

## 10. 西斜面南 (第35・36図)

739は断割調査中、IV層と考えられる黒色土から出土したもので、土師器皿B2類である。

740～755は面上に堆積する礫層ではないIII層中から出土したものである。740～746が大窯製品で、740は第2段階の天目茶碗、高台は内反高台で外面腰部は薄い錆釉が施される。741・742は灰釉の折縁皿とともに第4段階前半、741は削出高台で、742は内面にソギが入る菊皿である。743は第3～4段階の鉢で、内面は鉄釉、外面は口縁部から腰部に鉄釉、底部に錆釉が施されるが、口縁端部は無釉である。744は内面に錆釉、外面に鉄釉が施される徳利で、第3～4段階である。745・746は播鉢

で、745が第3段階前半、746が第4段階前半である。747・748は染付皿で、747がE群、748がB1群と見られる。749は中国製陶器の焼締の壺で、外面の口縁部から腰部に掛けて鉄釉が施されるが、その他は露胎である。750・751は土師器皿C2類で、752は丸瓦、753・754は面取りが施される平瓦である。755はⅢ層と見られる土層から出土した笏谷石製の鉢で、735と同一個体と見られる。

756～785はI層もしくはII層から出土したものである。756～774は大窯製品で、756～759が天目茶碗である。756・757は第2段階で、756は内反高台を有し外面腰部は薄い錆釉が施されるが、内面底部は使用痕があり、釉が残存していない。757は外面腰部に濃い錆釉が施される。758は第3段階前半で外面腰部は薄い錆釉、759は第4段階前半で外面腰部は露胎である。760は鉄釉の丸碗で第3段階のものである。761は第4段階前半の鉄釉の筒形碗である。被熱しているため、断定はできないが、瀬戸黒茶碗の可能性もある。762～765は丸皿で、763が鉄釉、それ以外は灰釉である。762は第2段階、763は第3段階、764・765は第4段階前半である。高台は762・764が付高台、765は削出高台である。766は第1段階の無釉の灯明皿である。767は灰釉の皿で第3段階である。768は錆釉の鉢で詳細な時期は不明である。769～772は徳利で、769・770が第2～3段階、771が第3～4段階、772は詳細な時期が不明である。769・771は鉄釉、770・772は鉄釉と錆釉を使用している。773・774は播鉢で、773が第3段階前半、774が第4段階前半のものである。775・776は染付皿で、775がB2群、776がE群に分類される。777は朝鮮製陶器で蕎麦茶碗である。778～783は土師器皿で、778・779がB2類、780～783がC2類である。784は古瀬戸製品の壺の蓋で、内面に錆釉、外面に灰釉が施される。785は連房製品の灯明皿で錆釉が施される。

786・787はI層から出土したものである。786は土師器皿C2類、787は鉄釘である。

#### 11. 西斜面 (第37図)

石垣S V 7を覆う土層のうち、詳細な出土位置が不明な遺物である。788～793は前述と同じ崩落礫層から出土したものである。788は大窯製品の壺で、外面と内面口縁部のみ錆釉が施される。詳細な時期は不明である。789は染付皿E群である。790～792は土師器皿で、790がC2類、791・792がロクロ成形のものである。793は古瀬戸製品の播鉢である。

794～803はI層から出土したものである。794・795は土師器皿C2類である。796・797は鉄釘、798は五輪塔の空風輪、799・800は同火輪である。いずれも花崗岩製で、799の下面には自然面が残存し、円礫を使用していることが分かる。801は染付皿E群、802は常滑産陶器の鉢と見られる。

#### 12. 南斜面 (第37・38図)

803～820は石垣S V 30を覆うⅢ層中から出土したものである。803～813は大窯製品で、803・804が天目茶碗、803は輪高台を有する第1段階のもの、804は第3段階前半である。805は灰釉の小天目茶碗、外面底部は露胎で第4段階前半である。806～810は灰釉の丸皿で、806は第2段階、807～809は第2～3段階、810は第3段階前半である。811は第3段階前半の輪花皿で鉄釉を施釉後、灰釉を流し掛けている。812は第3～4段階の徳利、内面は錆釉、外面は鉄釉が施される。813は第3段階後半の播鉢である。814・815は染付皿で815はE群、816は白磁皿である。817は瓦器で火鉢か。818は平瓦、819は常滑産陶器の甕、820は東濃型山茶碗の碗である。

821はI層から出土した大窯第3～4段階の徳利で、内面に錆釉、外面に鉄釉が施される。

822～828は虎口状遺構S X 43を覆うⅢ層中から出土したものである。822～824は大窯製品で、822が鉄釉の小杯で第3段階のものである。823は灰釉の丸皿で第3段階前半、824は第4段階前半の播鉢である。825～827は土師器皿で、825はB2類、826・827はC2類である。828は平瓦である。

829～844はS X 43上のI層もしくはII層から出土したものである。829～836は大窯製品である。829は鉄釉の天目茶碗で第3段階、830・831は鉄釉の小天目茶碗で、830が輪高台を有し、外面腰部

に濃い錆釉を施す第1段階のものである。831は外面腰部に濃い錆釉を施す第2段階のものである。832・833は灰釉の丸皿で、832が第1～2段階、833が第2～3段階である。834は第3段階の鉢で、内面は鉄釉、外面は腰部以上に錆釉、下半は露胎である。835は灰釉の香炉で第3段階である。836は錆釉が施されたもので、器種は不明である。837は染付碗のE群、838は青磁皿である。839～842は土師器皿で、839がB2類、840・841はC2類、842はロクロ成形のものである。843は無文の棟飾り瓦と考えられる。表面は平滑で、裏面はへら状のもので浅く凹みが作られている。穿孔が1箇所確認できる。厚さ2.9cm。C地区で出土したものと製作技法が酷似する。844は灰釉陶器の椀である。

845～856は石垣SV30から階段SX42にかけてのⅢ層から出土したものである。全て土師器皿で、845はB2類、846～856はC2類である。

857～872は前段と同じ範囲のⅠ層もしくはⅡ層から出土したものである。857～861は大窯製品である。857・858は鉄釉の天目茶碗で、両者とも内反高台を有し、外面腰部は露胎である。857は第3段階、858は第4段階前半である。859は鉄釉の鉢で第3段階、860は播鉢で第4段階前半である。861は内外面とも鉄釉と錆釉が施され、削出輪高台を有するが、器種は不明である。862は染付皿E群である。863～867は土師器皿で、863がB2類、864～866はC2類、867は耳皿である。868は瓦器で火鉢か。869・870は鉄釘、871は銅製品の切羽、872は古瀬戸瓶子で内面に錆釉、外面に鉄釉が施される。

873～876は南斜面の表土もしくは攪乱から出土したものである。873は大窯製品の鉄釉の鉢で第3段階のものである。874は大窯製品の灰釉の端反皿で第1段階、875は染付碗E群、876は土師器皿M4類である。

### 13. A地区 (第38・39図)

この項では詳細な出土位置が不明なものを報告する。877～887はG11のⅣ(SR1④)層から出土した可能性が高いものである。877～881は大窯製品である。877～879は天目茶碗で、877は内反高台で外面腰部に濃い錆釉を施す第2段階、878・879は第3段階のものである。880は灰釉の第2段階の丸皿、881は鉄釉の第2～3段階の皿である。882は白磁小杯、883・884は白磁皿、885・886は土師器皿C2類、887は東濃型山茶碗である。

888～899はA地区のⅠ層から出土したものである。888～895は大窯製品である。888・889は鉄釉の天目茶碗で、ともに第3段階後半、888は外面腰部に錆釉、889は露胎である。890は灰釉の丸碗で第1段階、891は灰釉の丸皿で第3段階後半である。892は第3～4段階の建水で内面口縁部と外面に鉄釉が施される。893は錆釉の風炉で第3～4段階である。894は鉄釉の耳付水注、895は内面口縁部と外面に錆釉が施される土瓶の蓋で、ともに詳細な時期は不明である。896は染付皿F群、897は青磁の盤あるいは鉢、898は白磁碗で外面に鎬連弁文が施される。899は古瀬戸製品の灰釉の瓶子である。

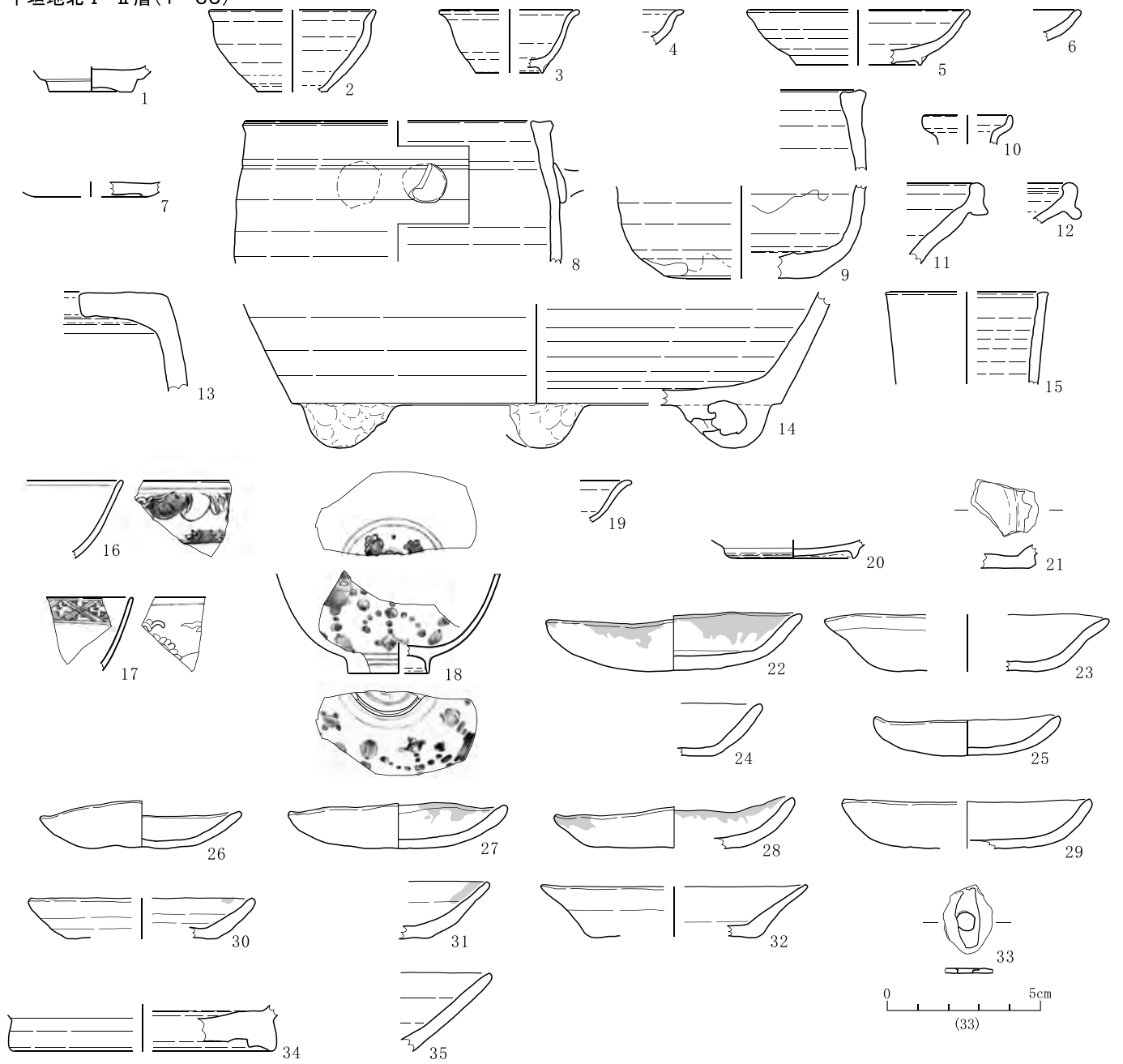
900はA地区の攪乱から出土した銅製品の銭貨で「開元通宝」である。

### 14. E地区 (第39図)

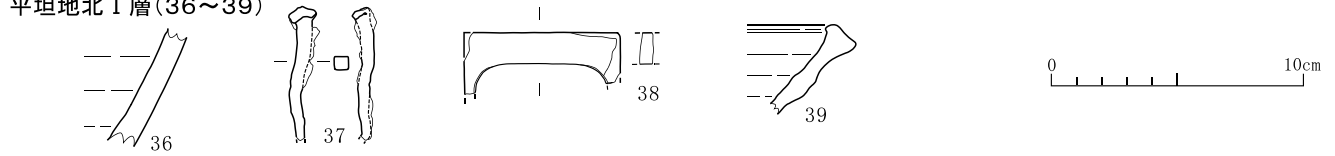
901～904はⅠ層あるいはⅡ層から出土したものである。いずれも土師器皿で、901・902がB2類、903・904がC2類である。

905～915はⅠ層から出土したものである。905～907は大窯製品で、905・906が鉄釉の天目茶碗、ともに第3段階後半、外面腰部は露胎である。907は灰釉の丸皿で第3段階前半である。908は染付碗E群、909は染付皿C群である。910～915は土師器皿で、910がB2類、911～915がC2類である。

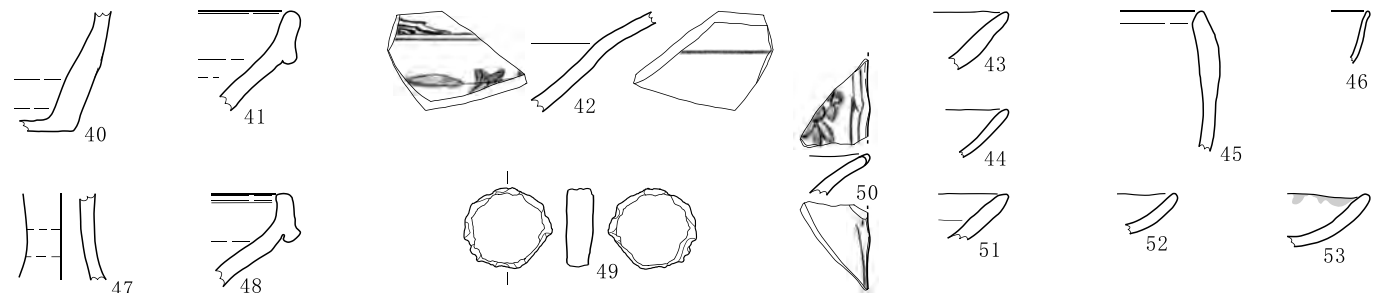
平坦地北 I・II 層(1~35)



平坦地北 I 層(36~39)

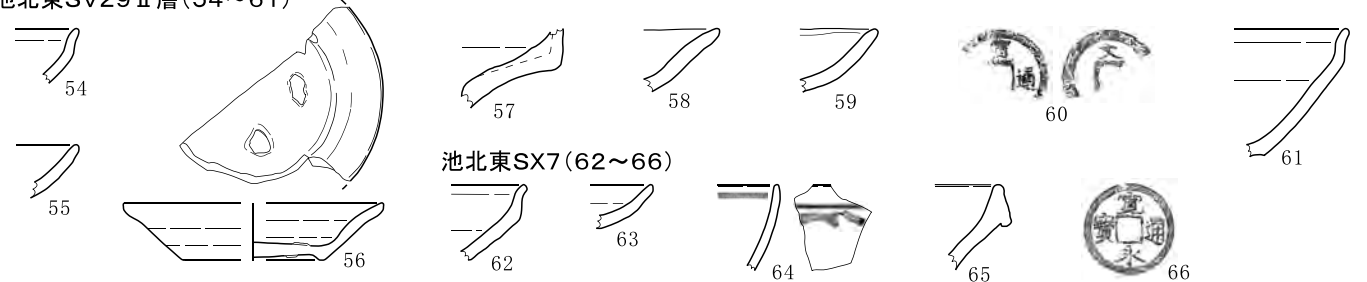


池北東SV29Ⅲ層(40~53)

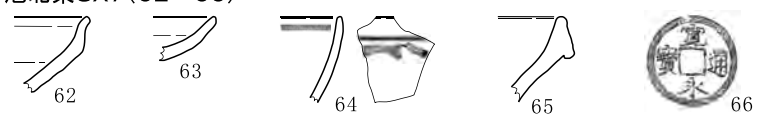


第 22 図 遺物実測図 (1)

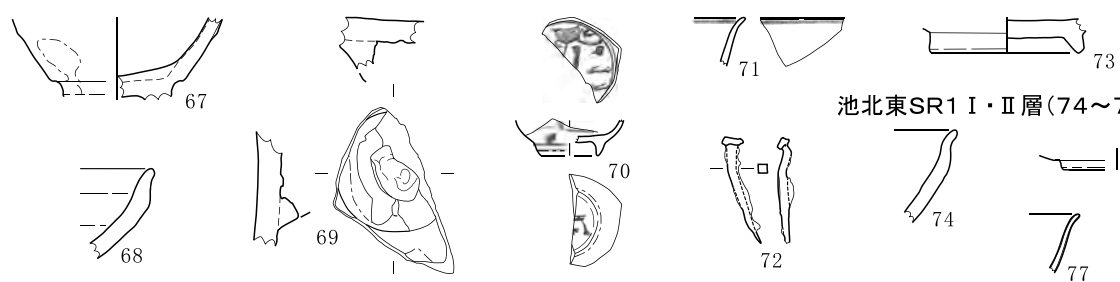
池北東SV29 II層(54~61)



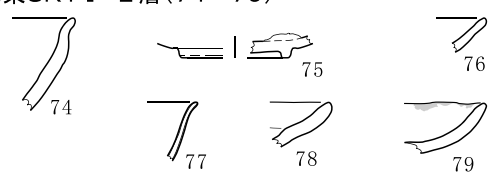
池北東SX7(62~66)



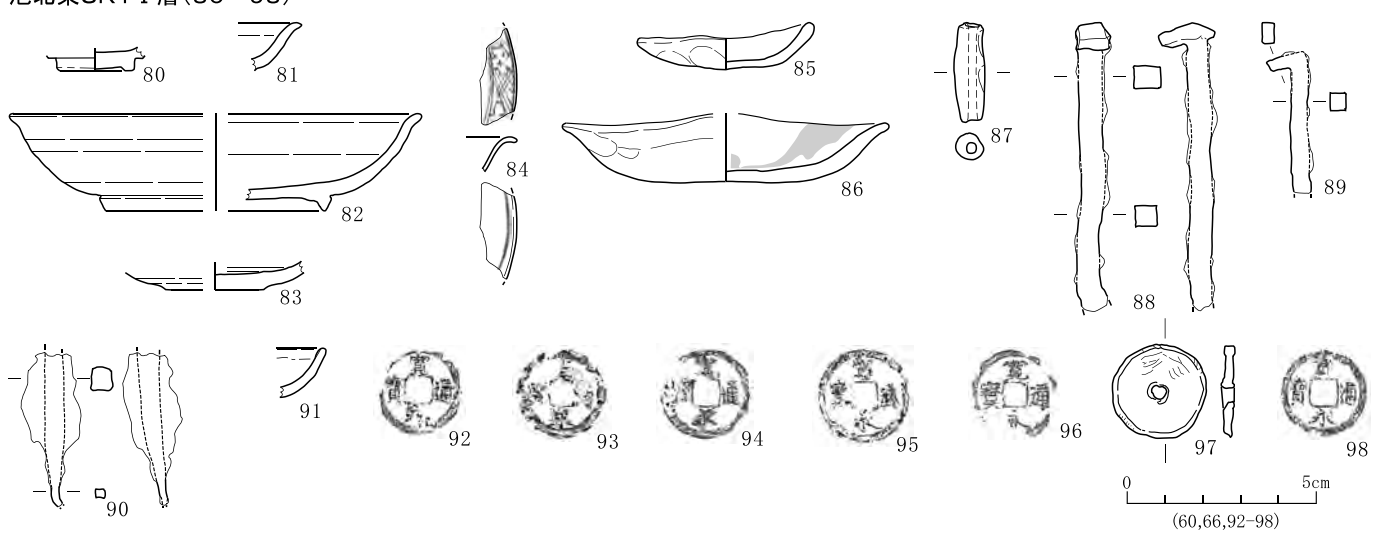
池北東SR1 II層(67~73)



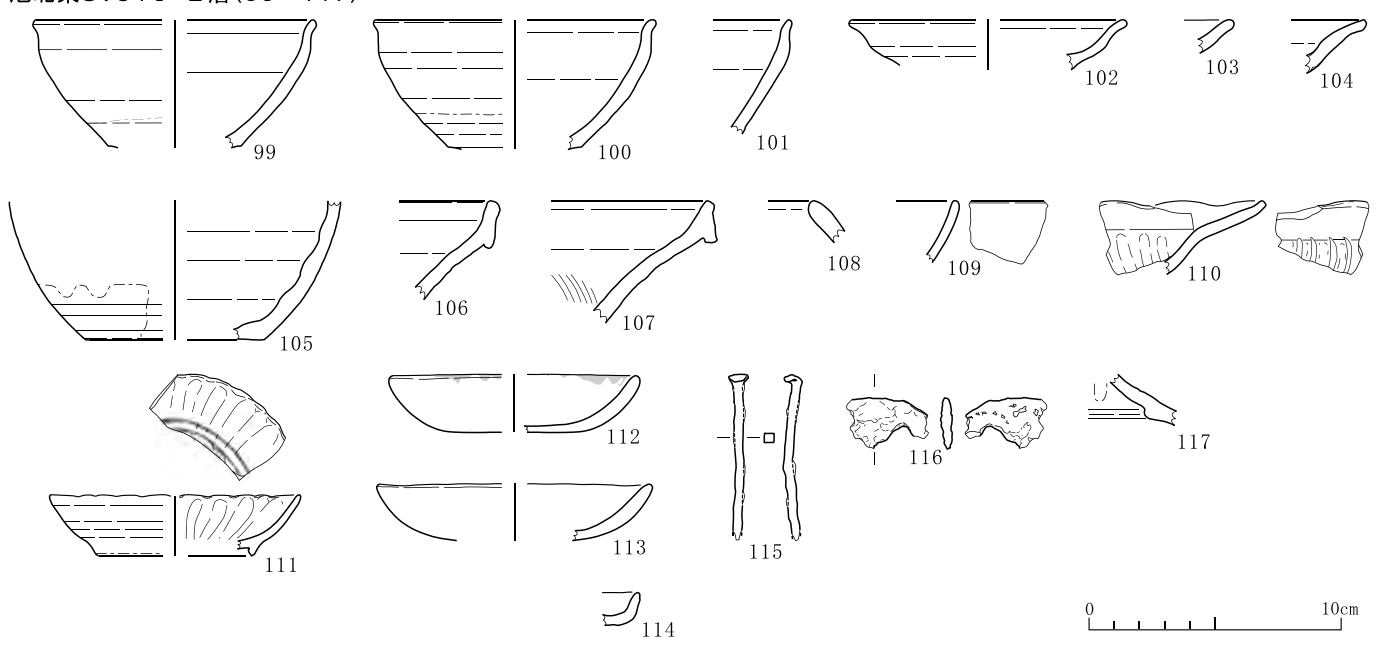
池北東SR1 I・II層(74~79)



池北東SR1 I層(80~98)

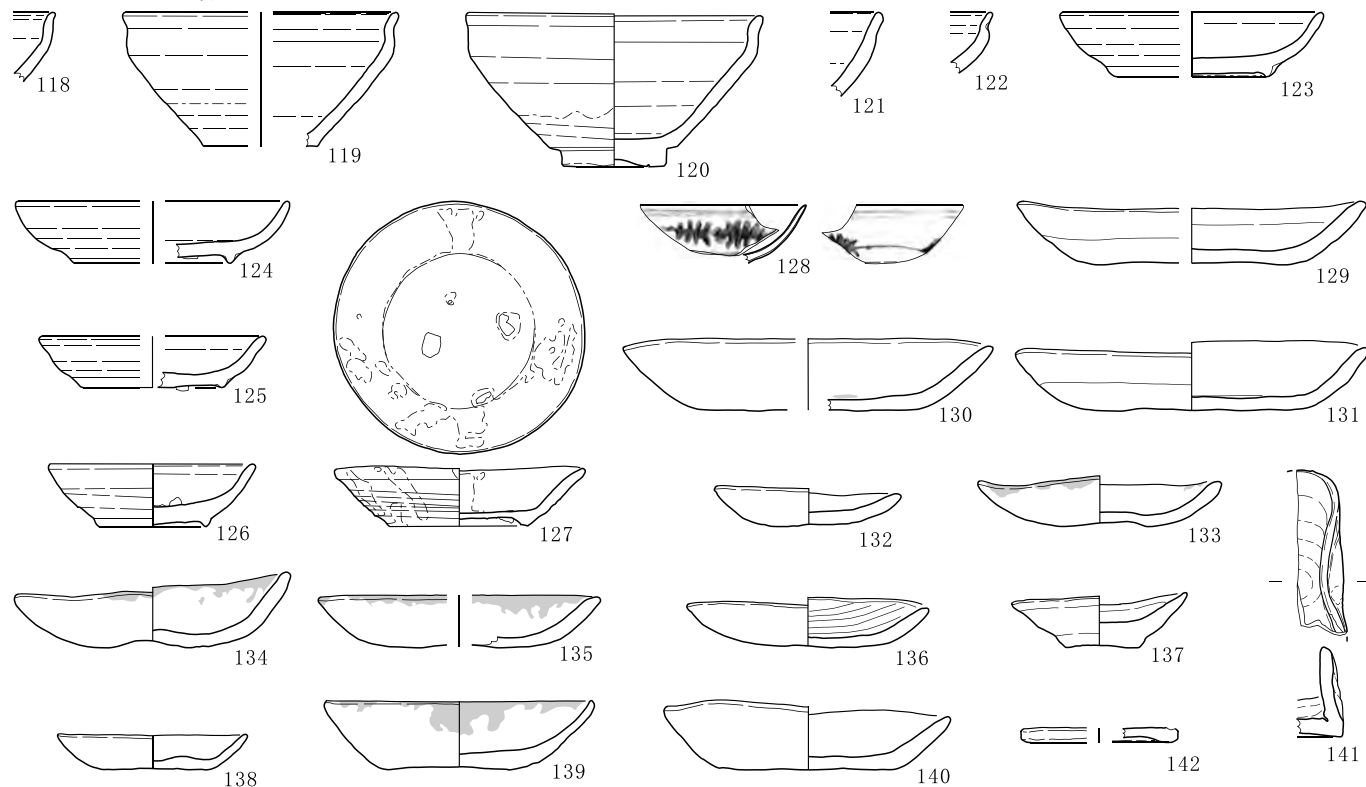


池北東SV34 I・II層(99~117)



第23図 遺物実測図(2)

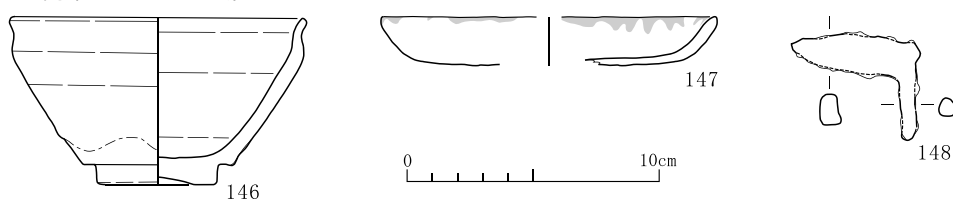
池北西SR1 I・II層(118~142)



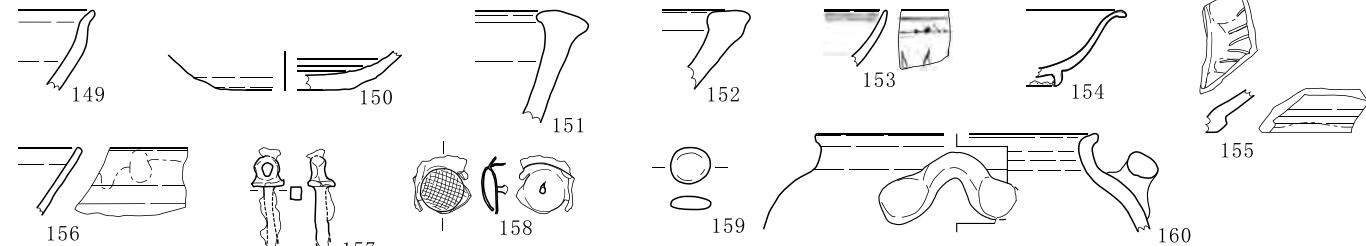
池南東SR1 III・IV層(143~145)



池南東SR1 III・III?層(146~148)



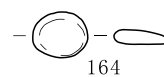
池南東SR1 (II・) III層(149~160)



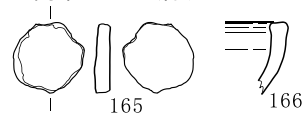
池南東SR1 II・III層(161~163)



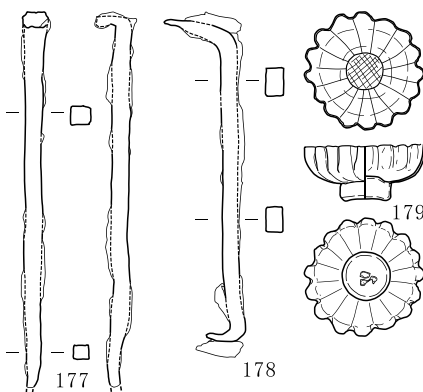
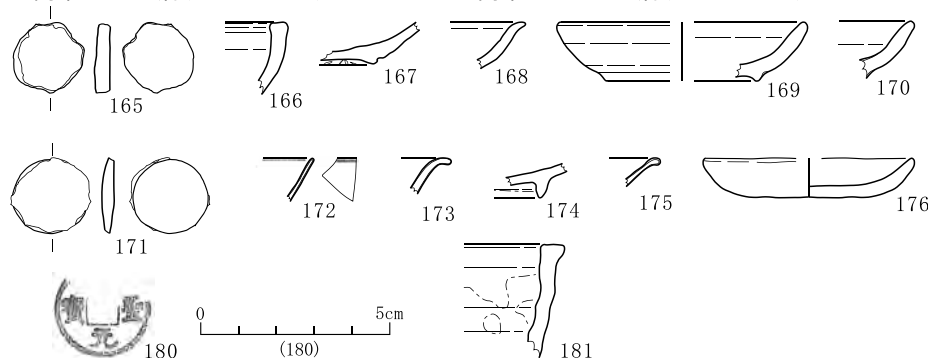
池南東SR1東西サブトレ(164)



池南東SR1 II層(165~167)

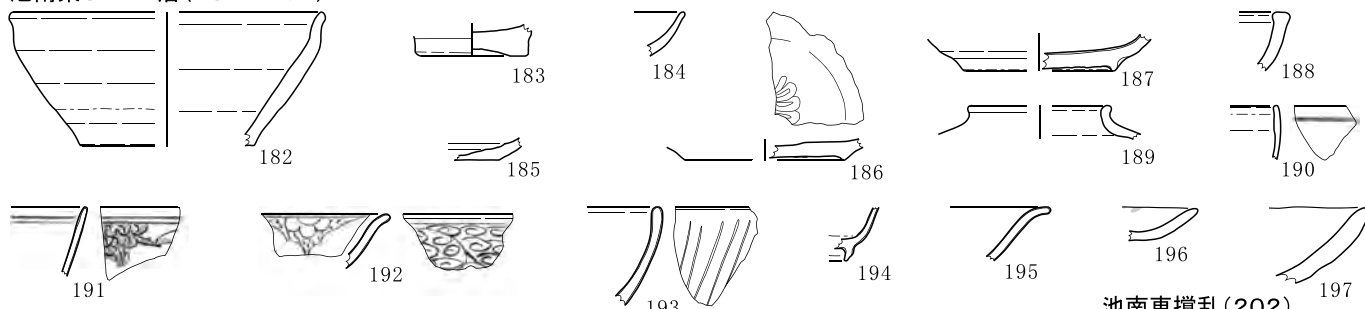


池南東SR1 I・II層(168~181)

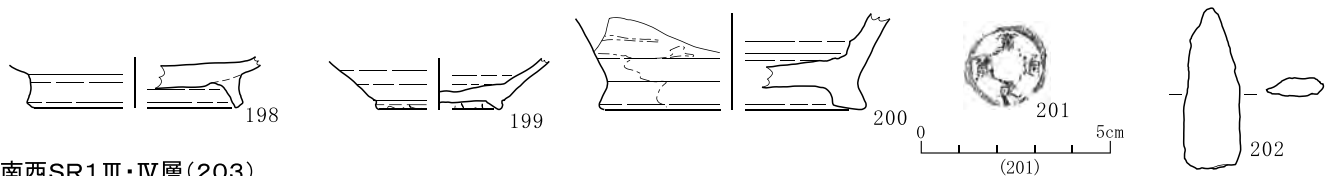


第24図 遺物実測図(3)

池南東SR1 I層(182~201)



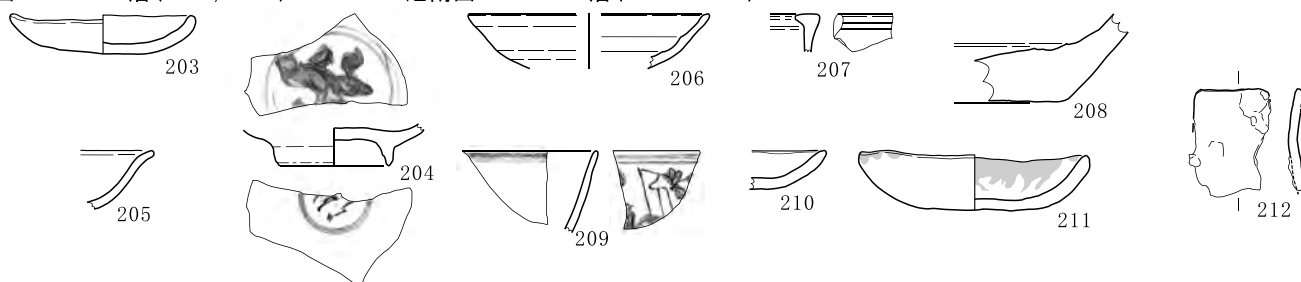
池南東攪乱(202)



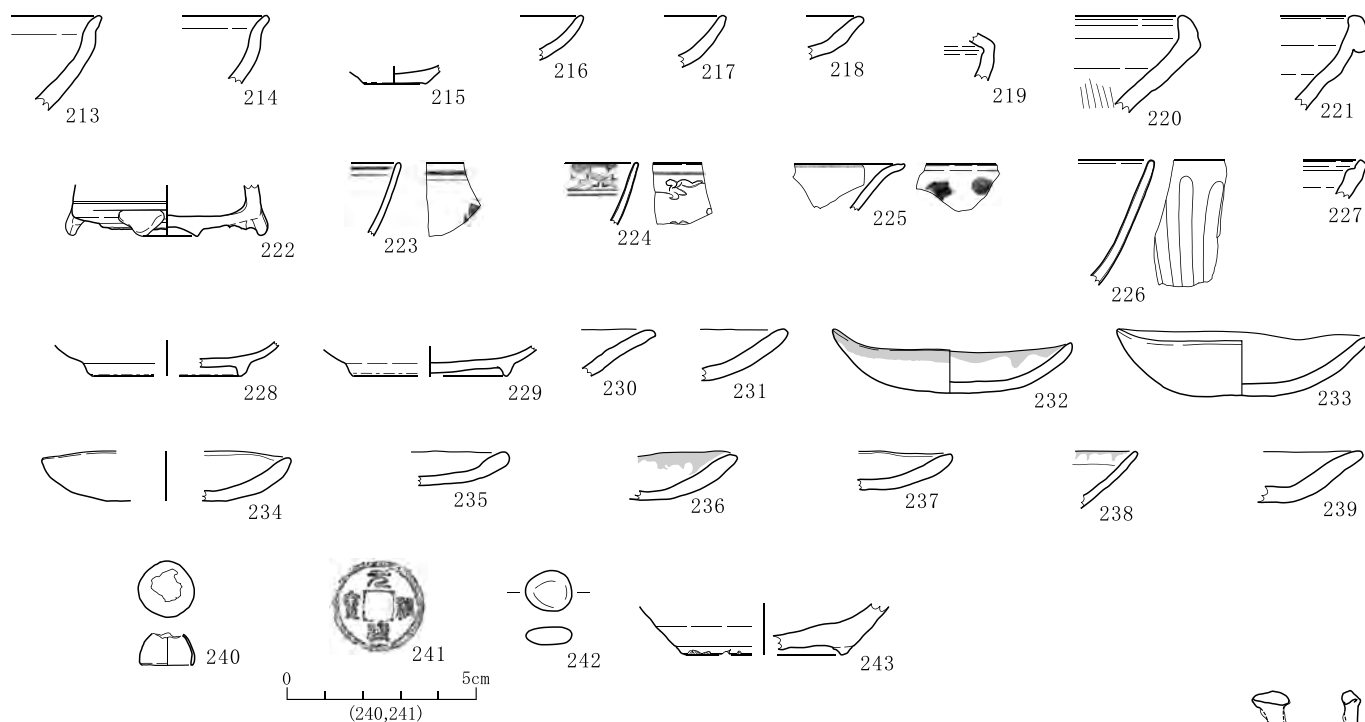
池南西SR1 III・IV層(203)

池南西SR1 II・III層(204, 205)

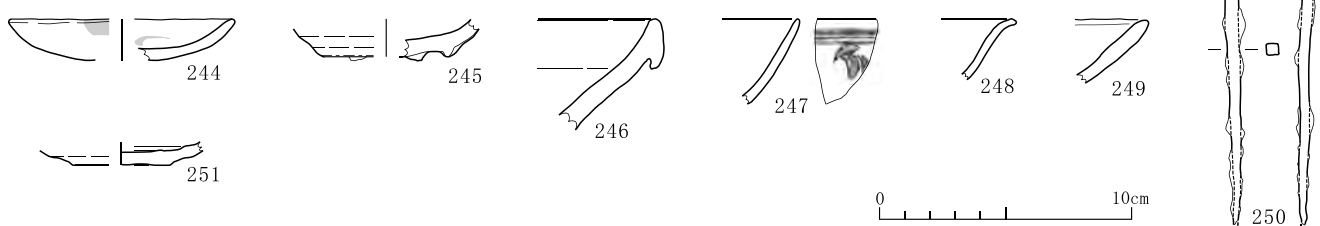
池南西SR1 I・II層(206~212)



池南西SR1 I層(213~243)



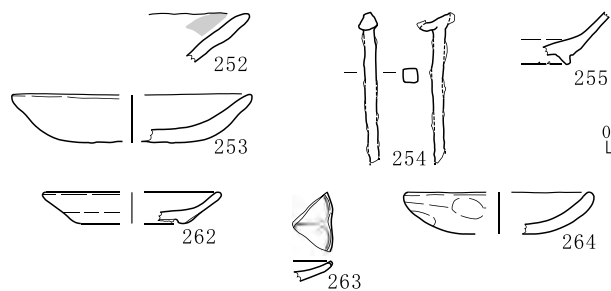
池南西攪乱(244~251)



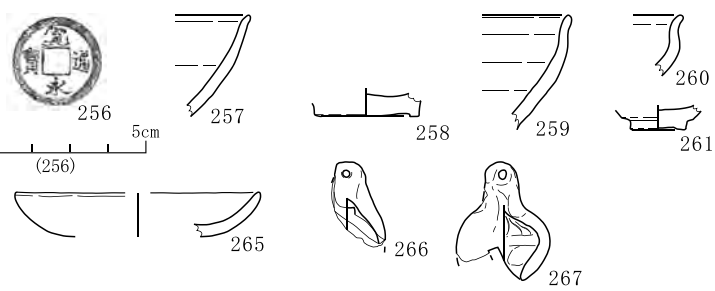
第25図 遺物実測図(4)



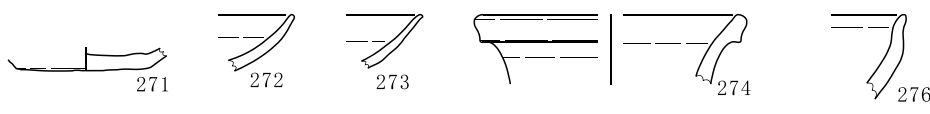
平坦地南 I・II 層 (252~256)



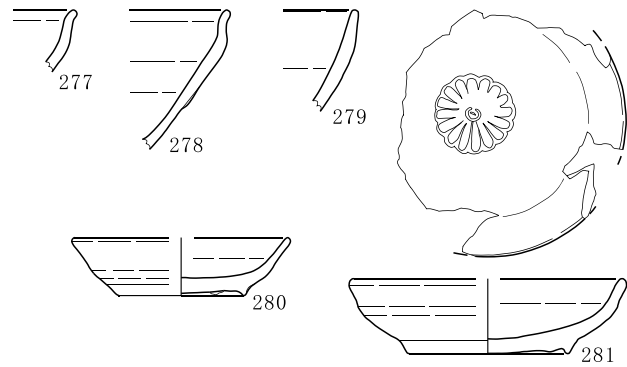
平坦地南 I 層 (257~275)



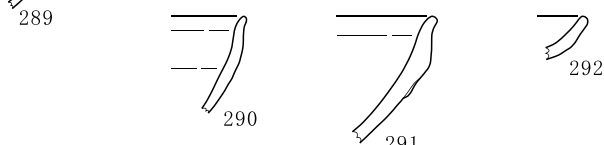
平坦地南攪乱 (276)



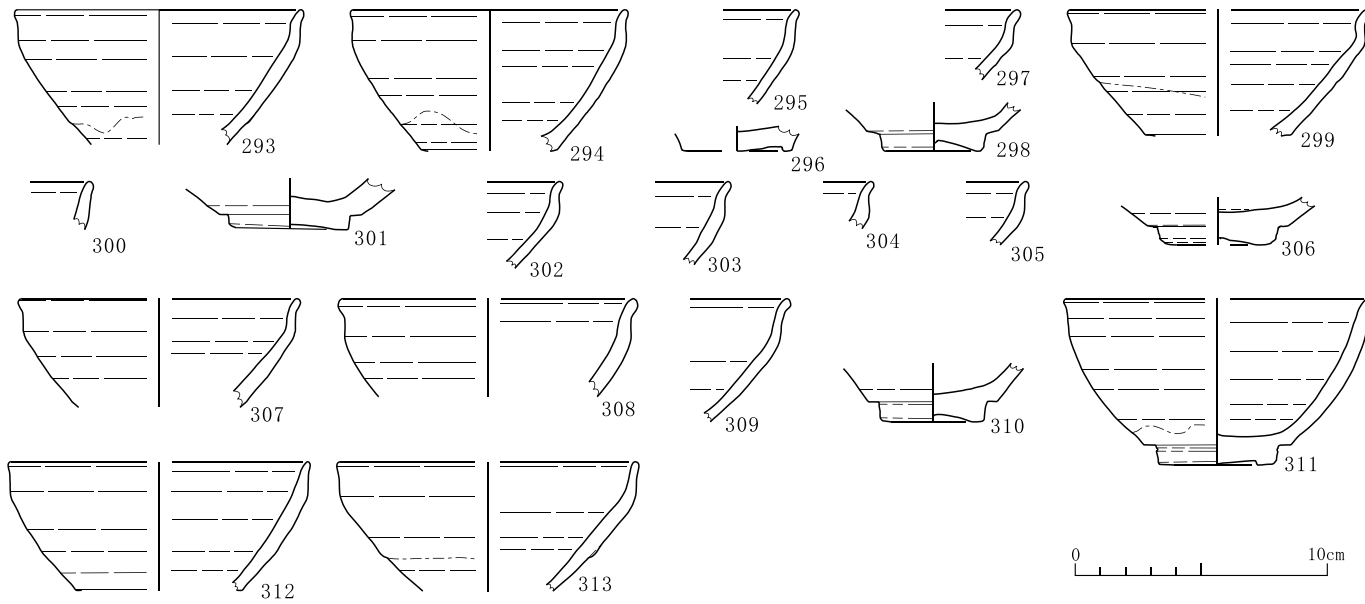
北斜面 I 層 (277~289)



北斜面攪乱 (290~292)

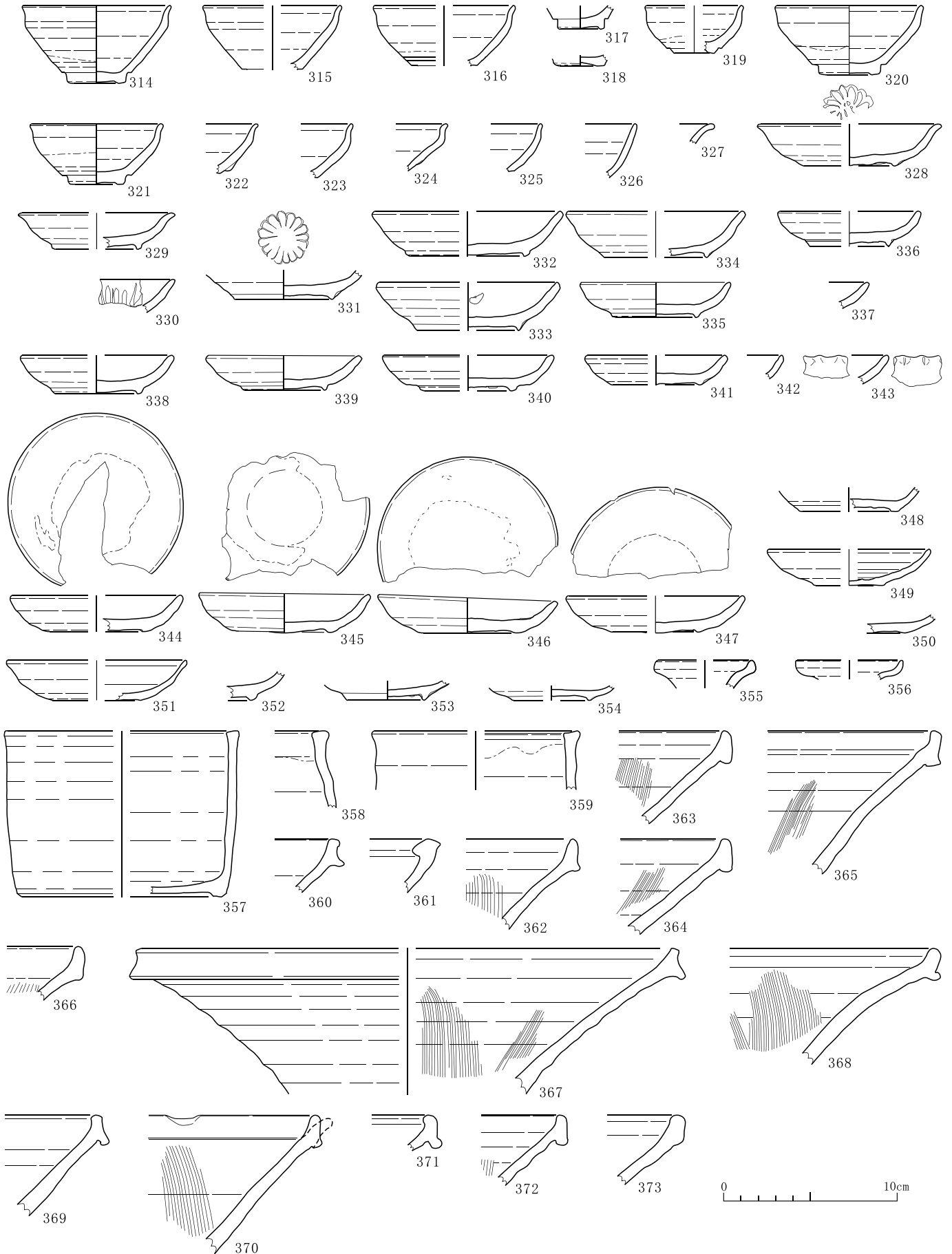


西斜面北SV7Ⅲ層 (293~313)



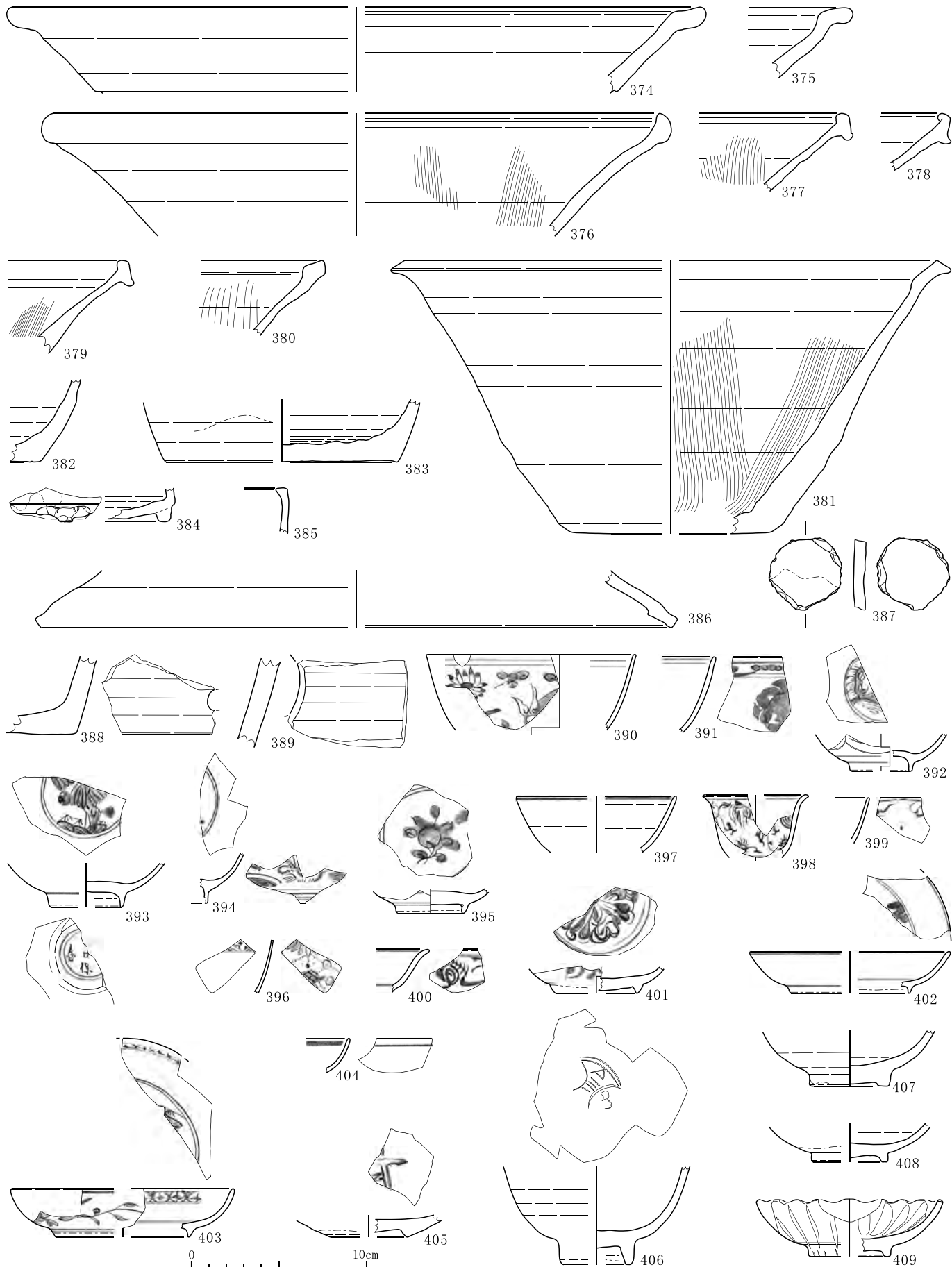
第 26 図 遺物実測図 (5)

西斜面北SV7Ⅲ層(314~373)



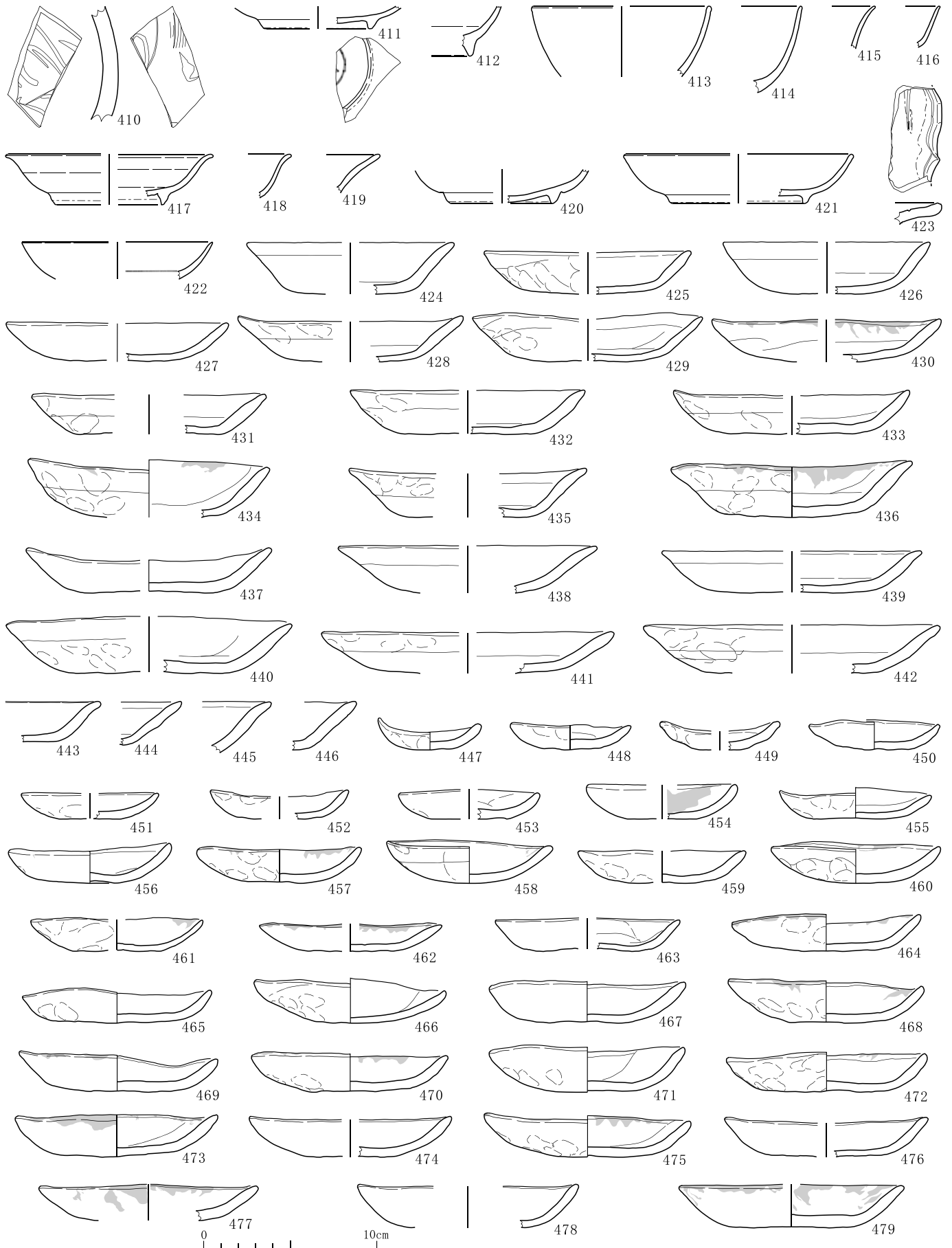
第27図 遺物実測図(6)

西斜面北SV7Ⅲ層(374~409)



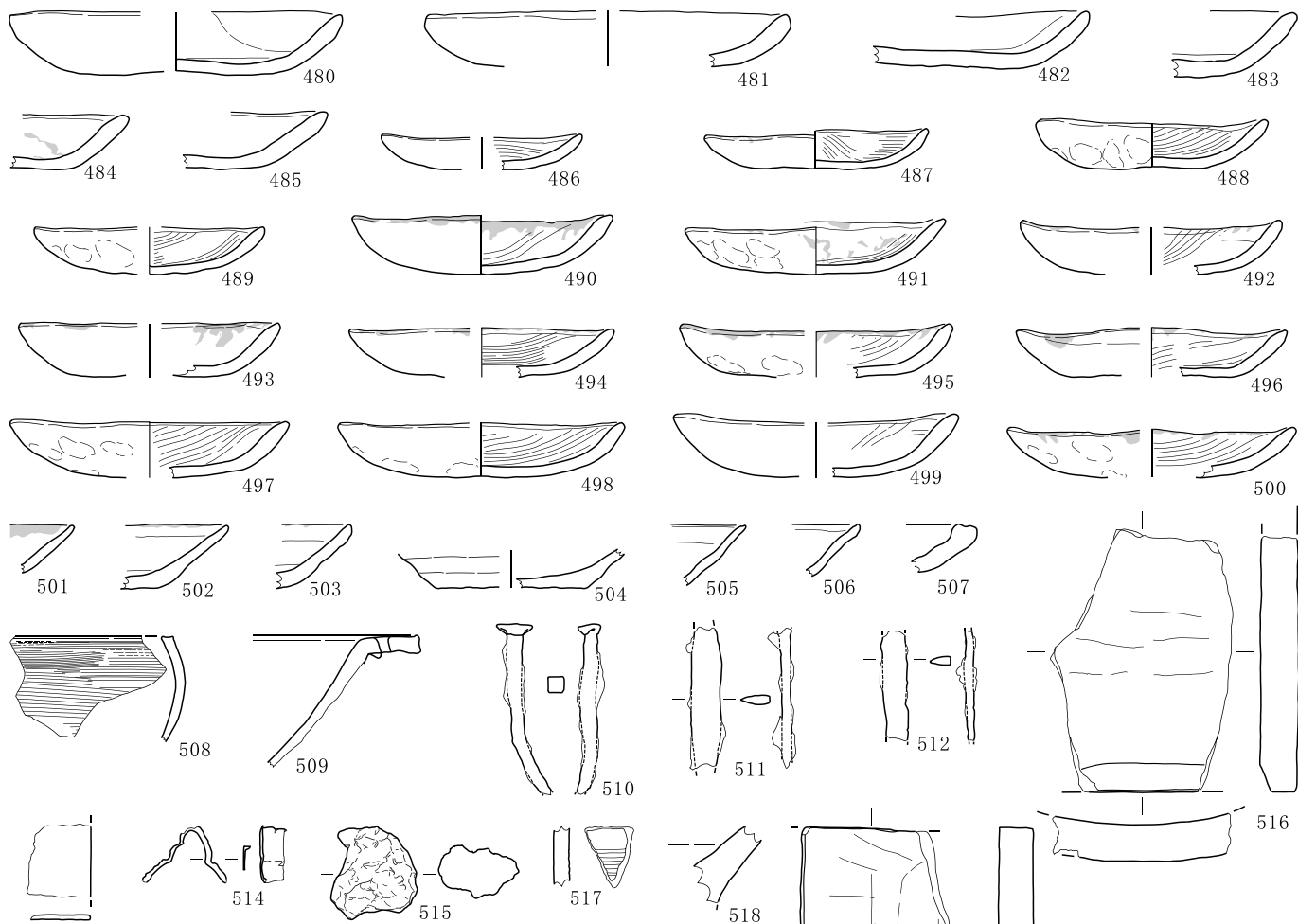
第28図 遺物実測図(7)

西斜面北SV7Ⅲ層(410~479)

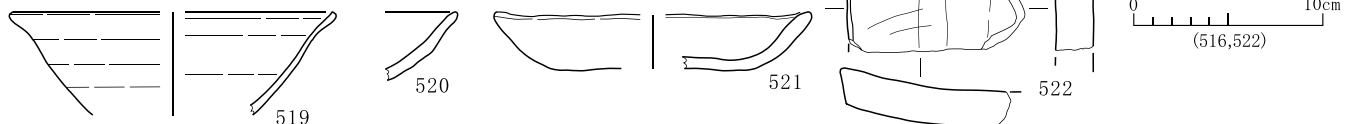


第 29 図 遺物実測図 (8)

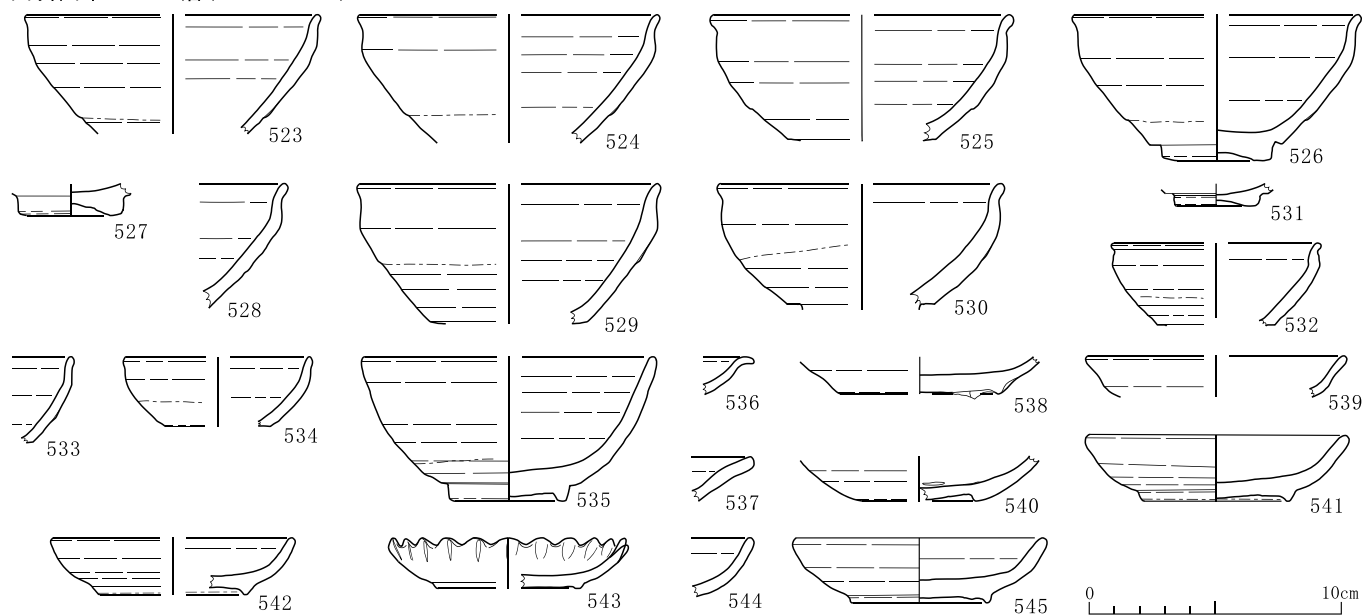
西斜面北SV7Ⅲ層(480~520)



西斜面北SV7Ⅰ層(521~522)

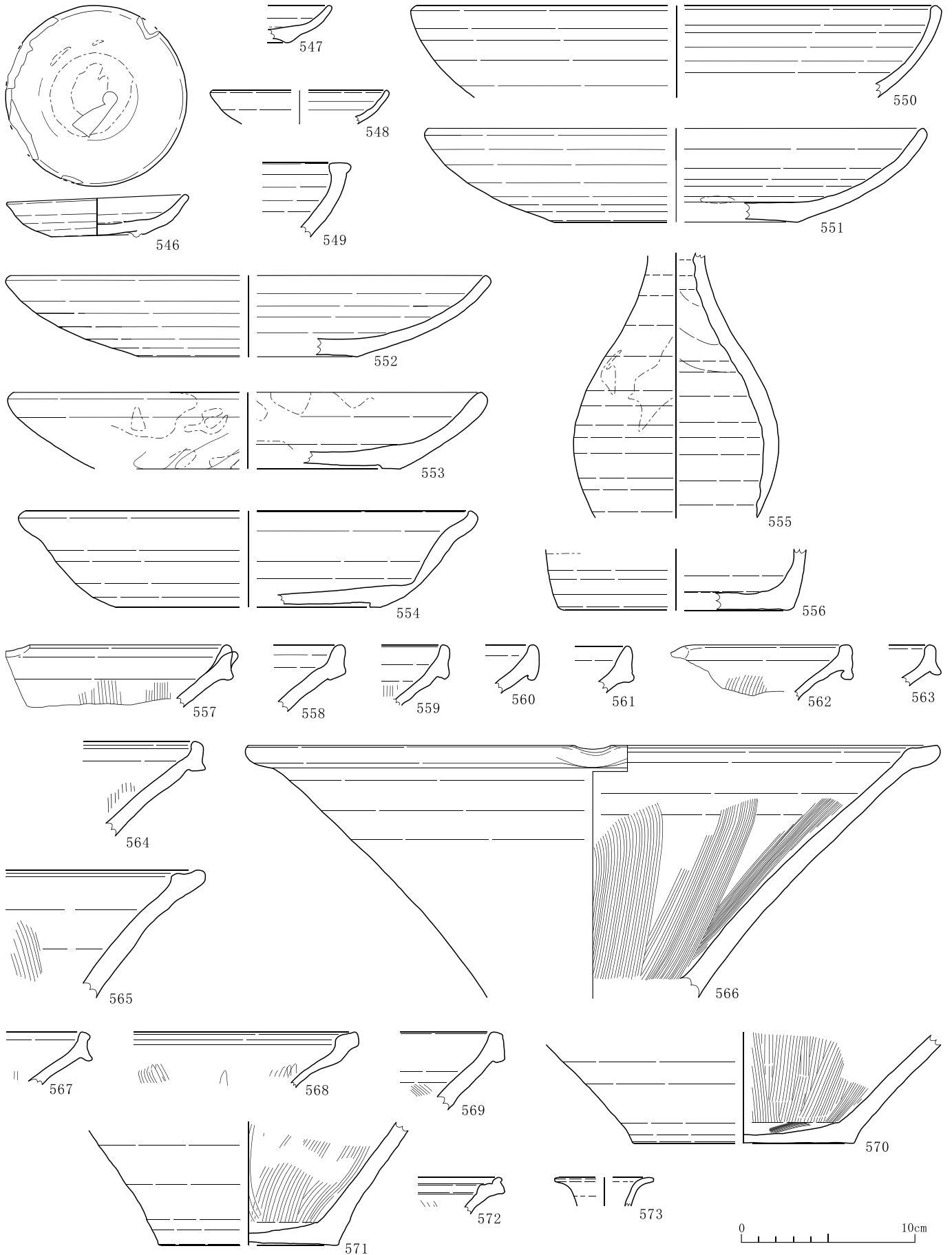


西斜面中SV7Ⅲ層(523~545)



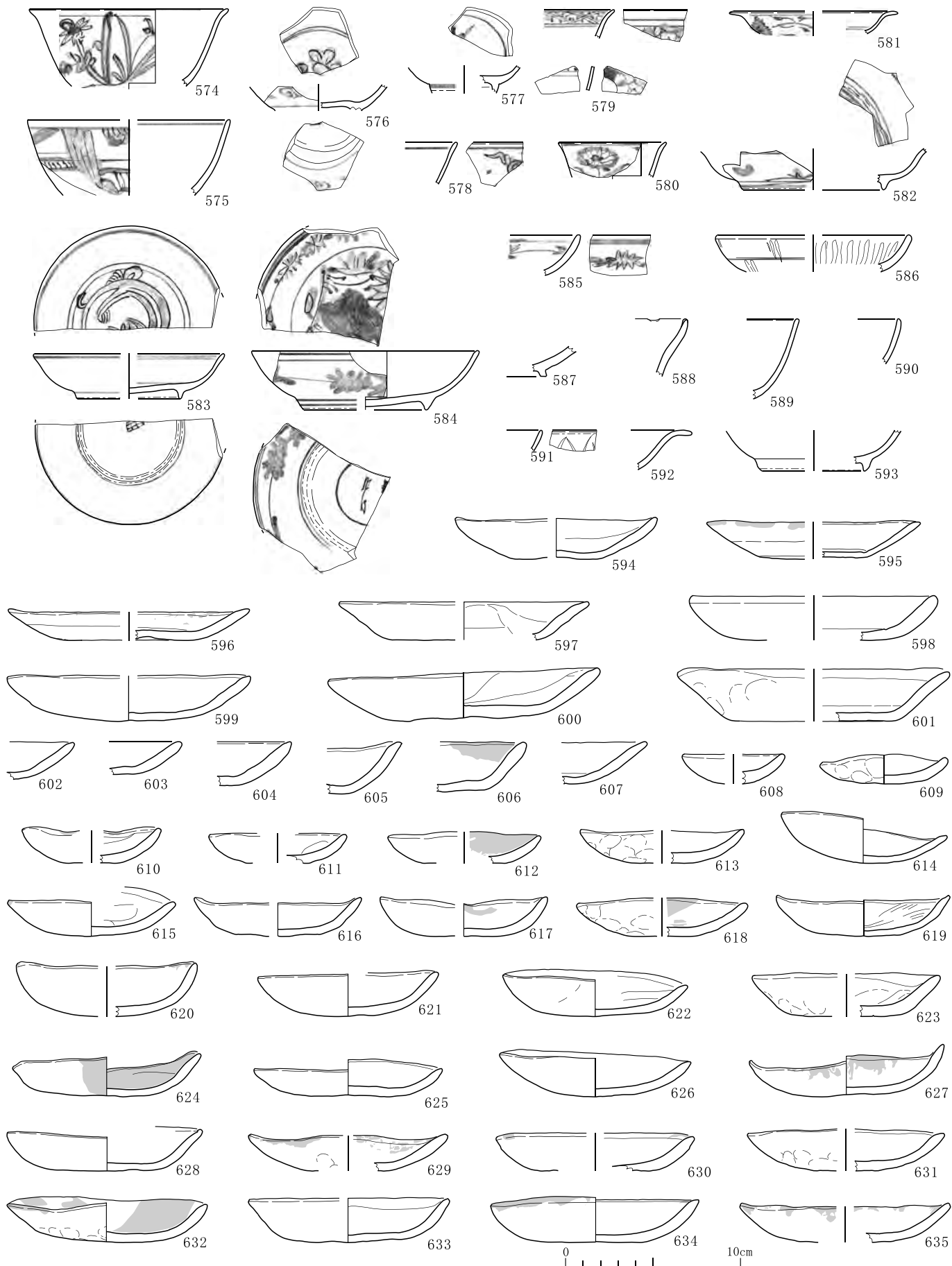
第30図 遺物実測図(9)

西斜面中SV7Ⅲ層(546~573)



第31図 遺物実測図(10)

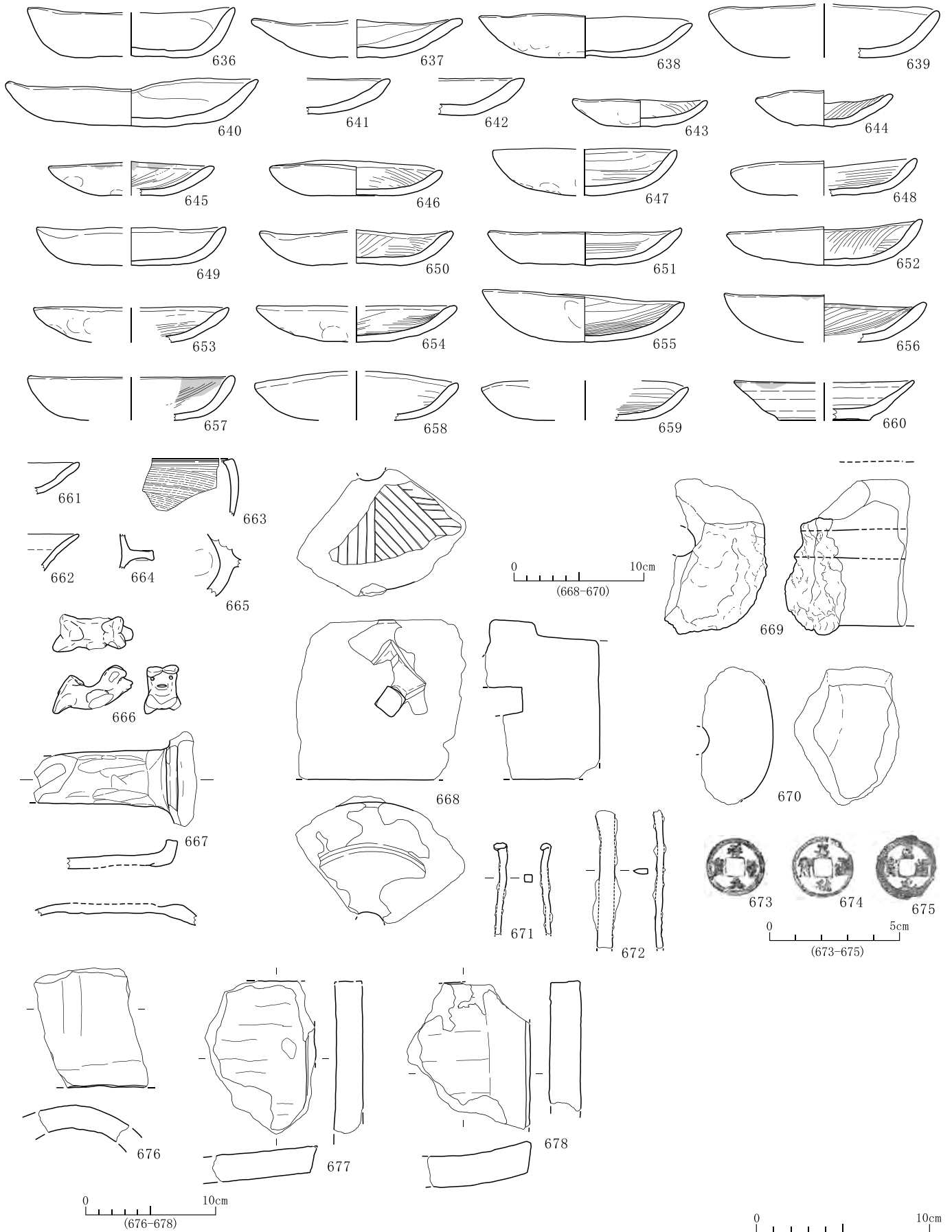
西斜面中SV7Ⅲ層(574~635)



第 32 図 遺物実測図 (11)

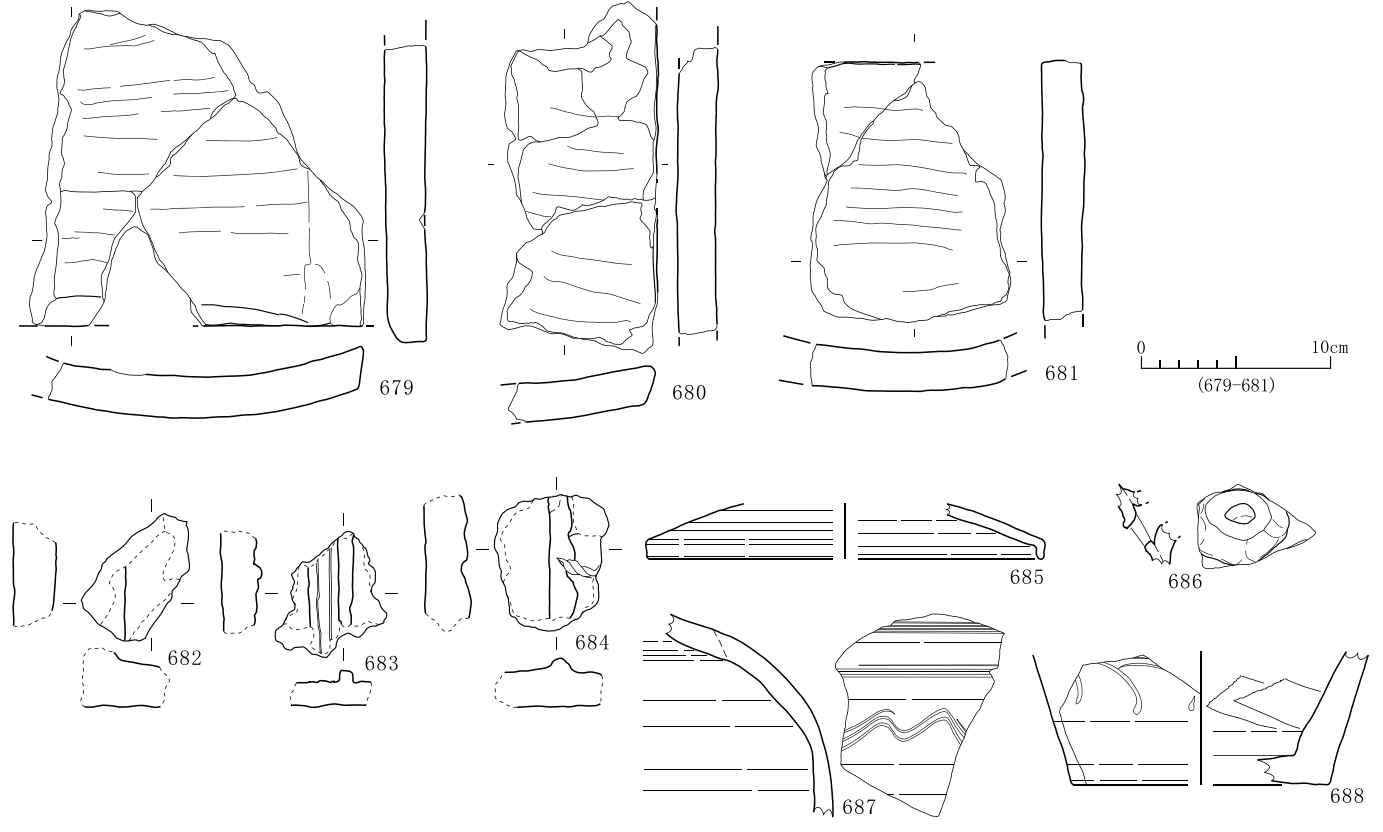


西斜面中SV7Ⅲ層(636~678)

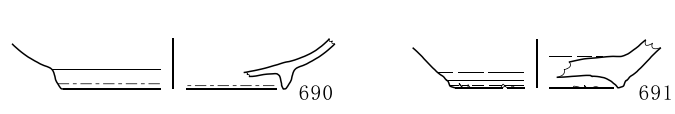
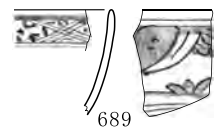


第33図 遺物実測図(12)

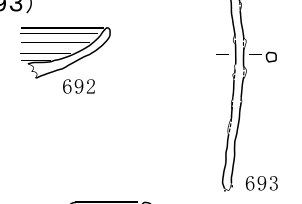
西斜面中SV7Ⅲ層(679~688)



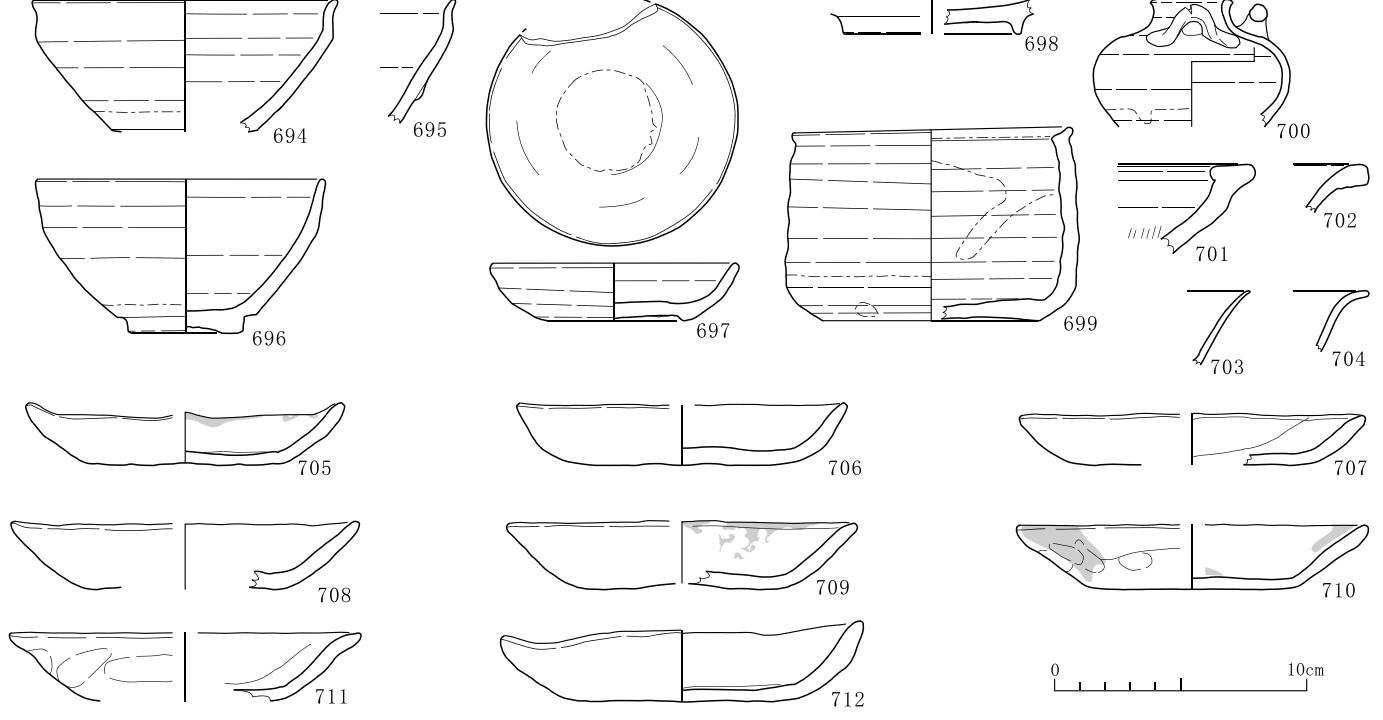
西斜面中SV7Ⅰ・Ⅱ層(689~691)



西斜面中SV7Ⅰ層・攪乱(692~693)

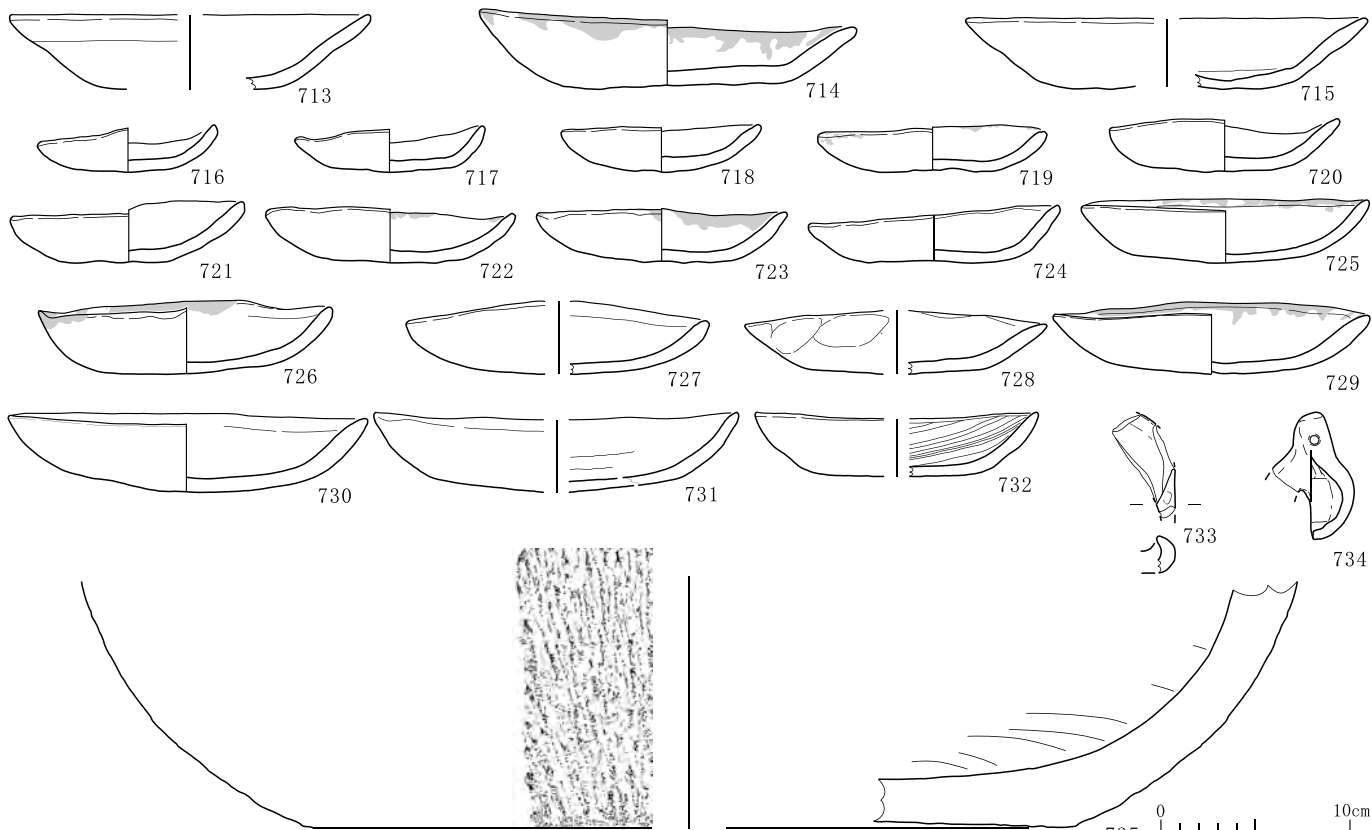


西斜面中SX25埋土(694~712)

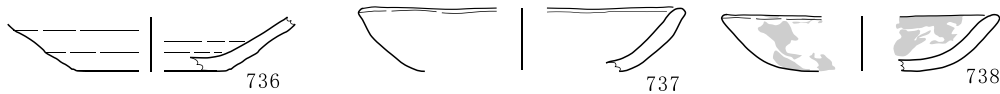


第34図 遺物実測図(13)

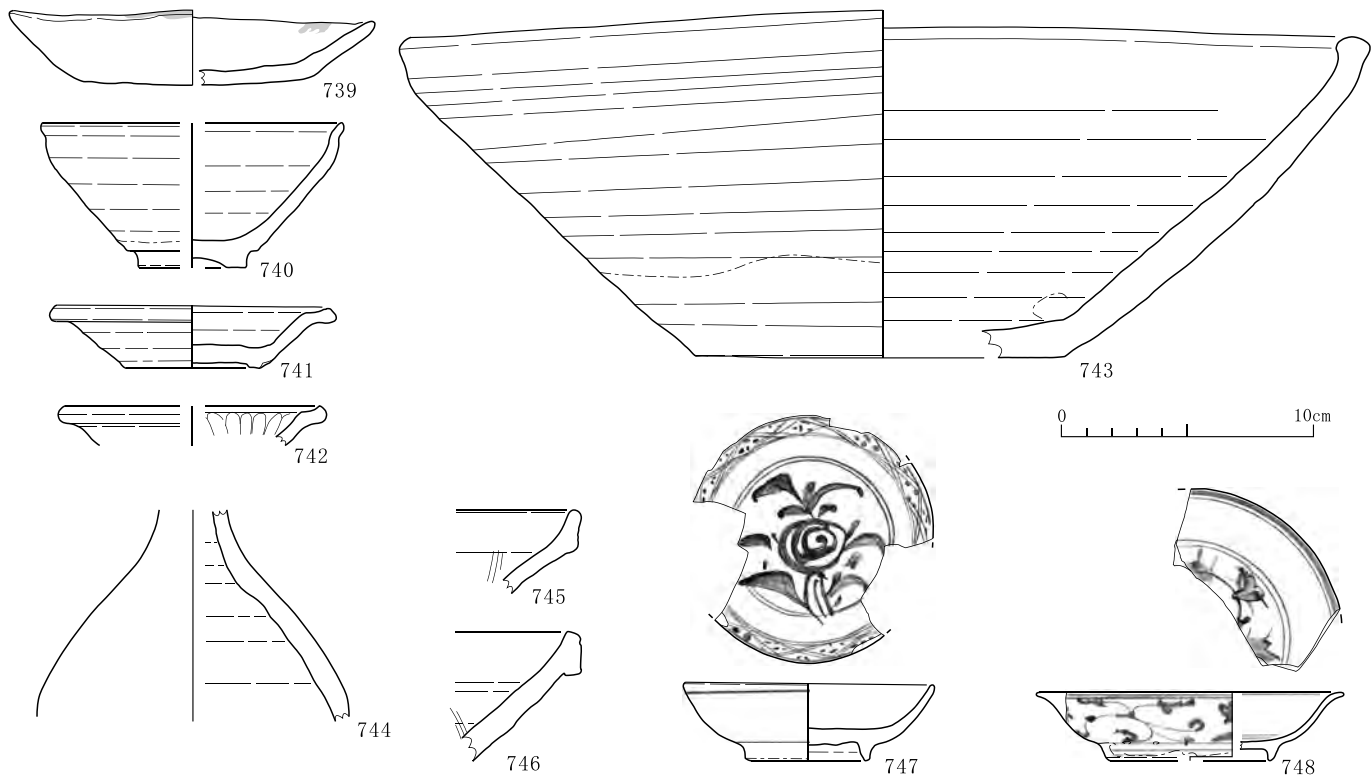
西斜面中SX25埋土(713~736)



西斜面中皿層ほか(737~738)

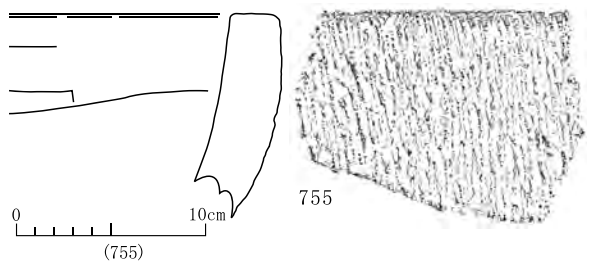
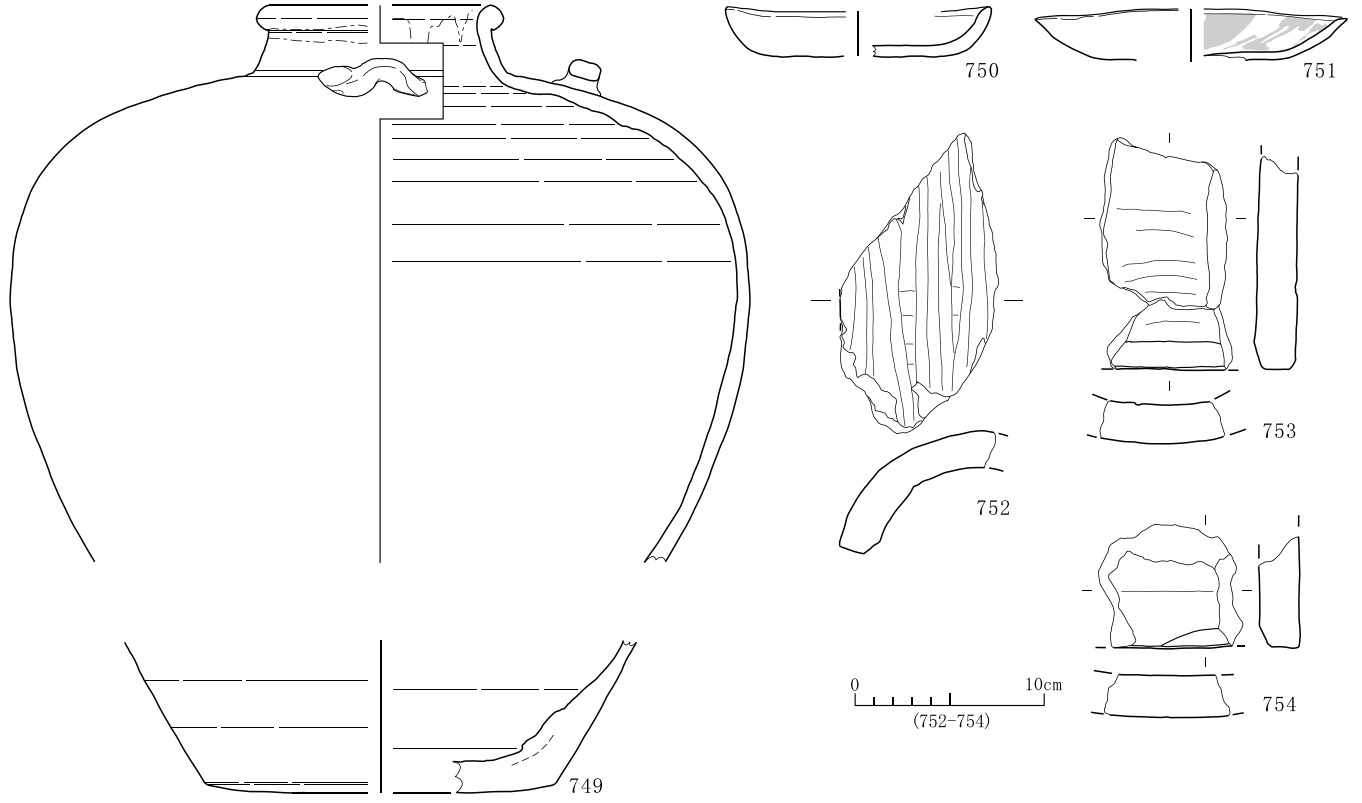


西斜面南皿層(739~748)

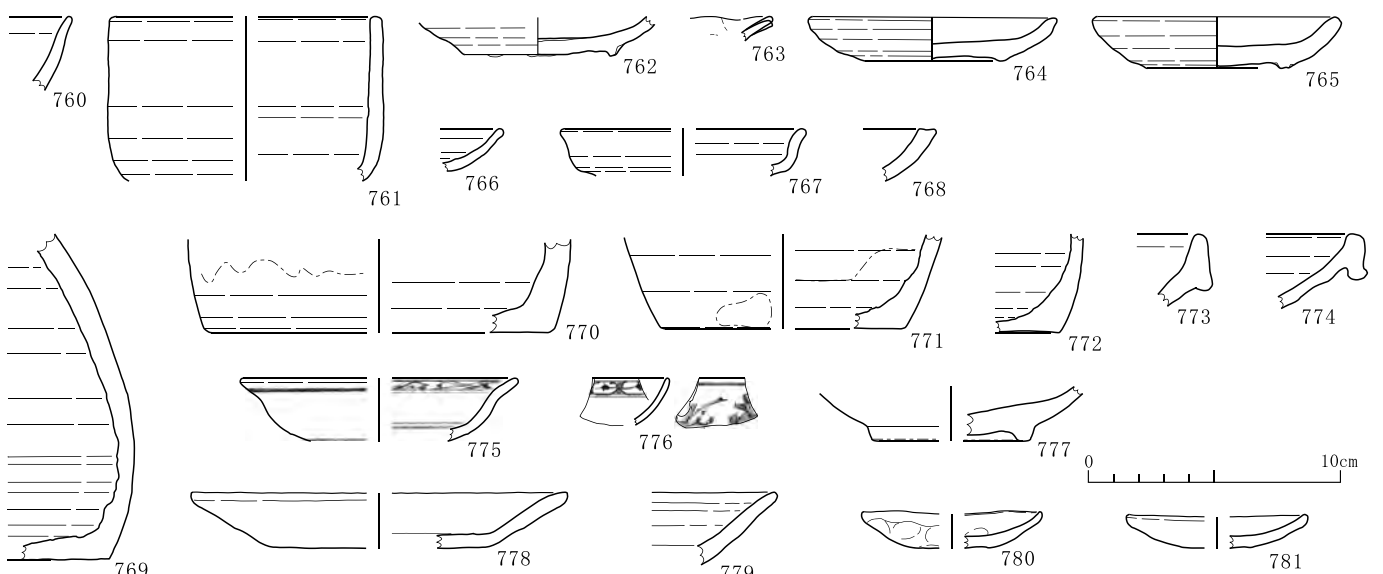
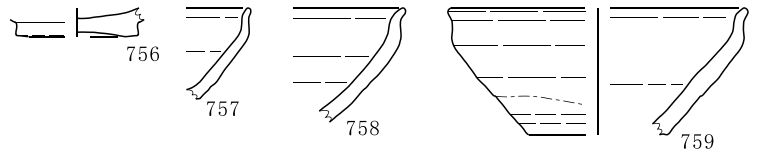


第35図 遺物実測図(14)

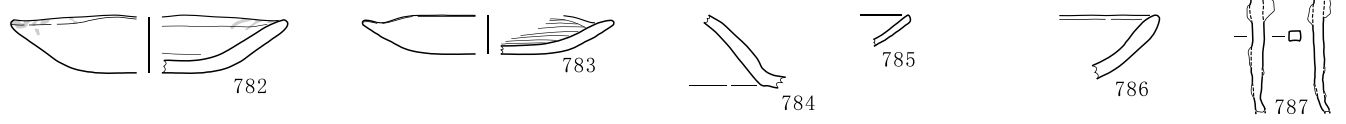
西斜面南Ⅲ層(749~755)



西斜面南Ⅰ・Ⅱ層(756~785)

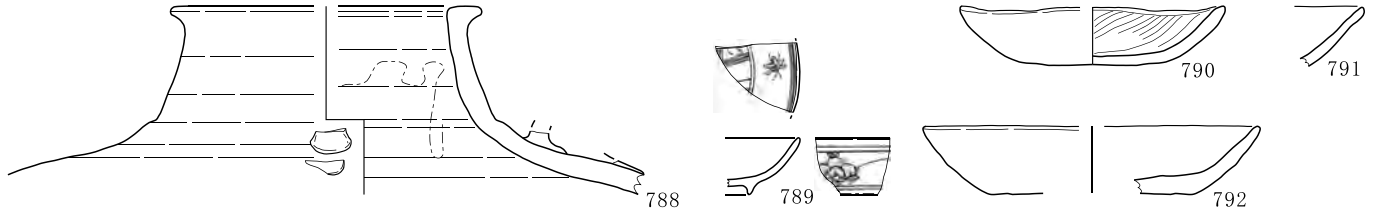


西斜面南Ⅰ層(786~787)

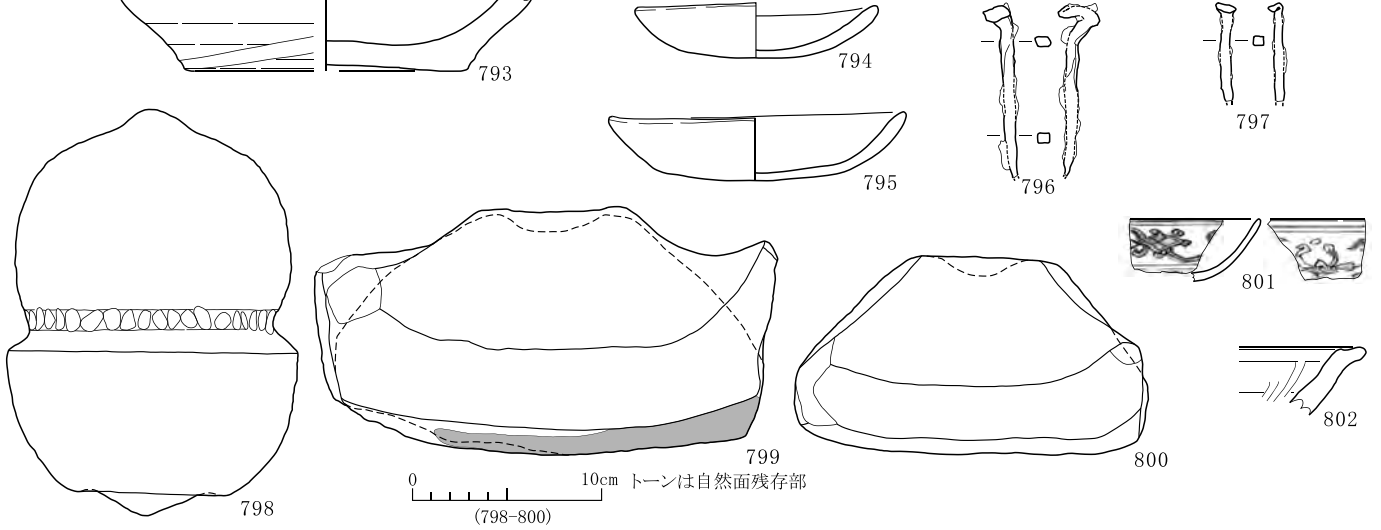


第36図 遺物実測図(15)

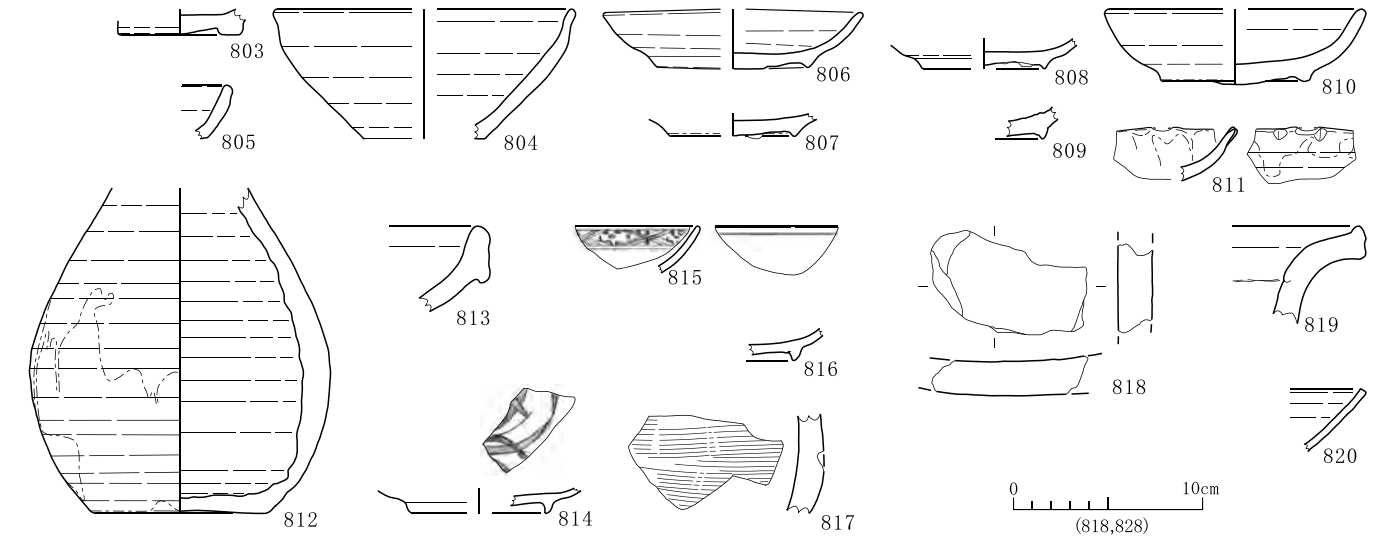
西斜面Ⅲ層(788~793)



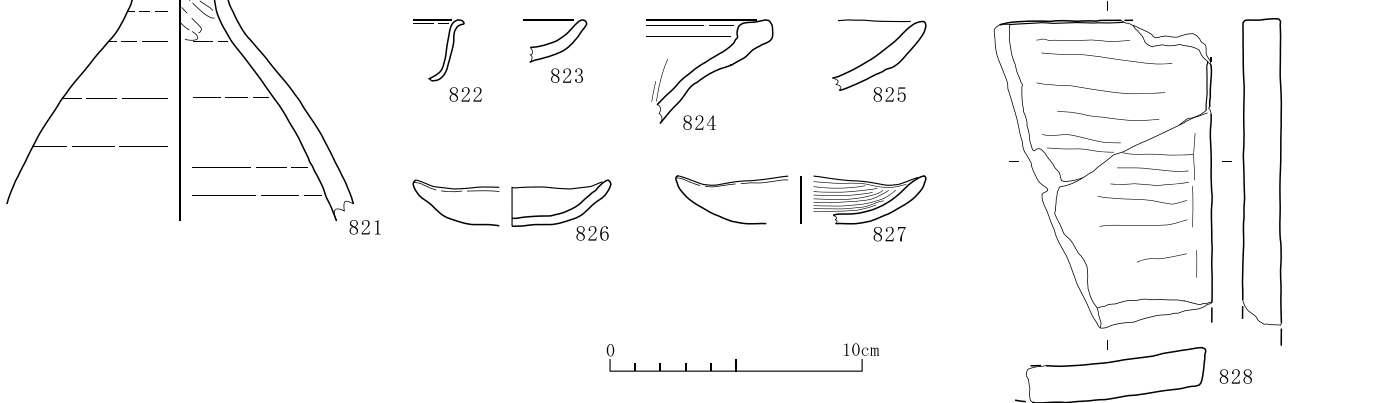
西斜面Ⅰ層(794~802)



南斜面SV30Ⅲ層(803~820), Ⅰ層(821)

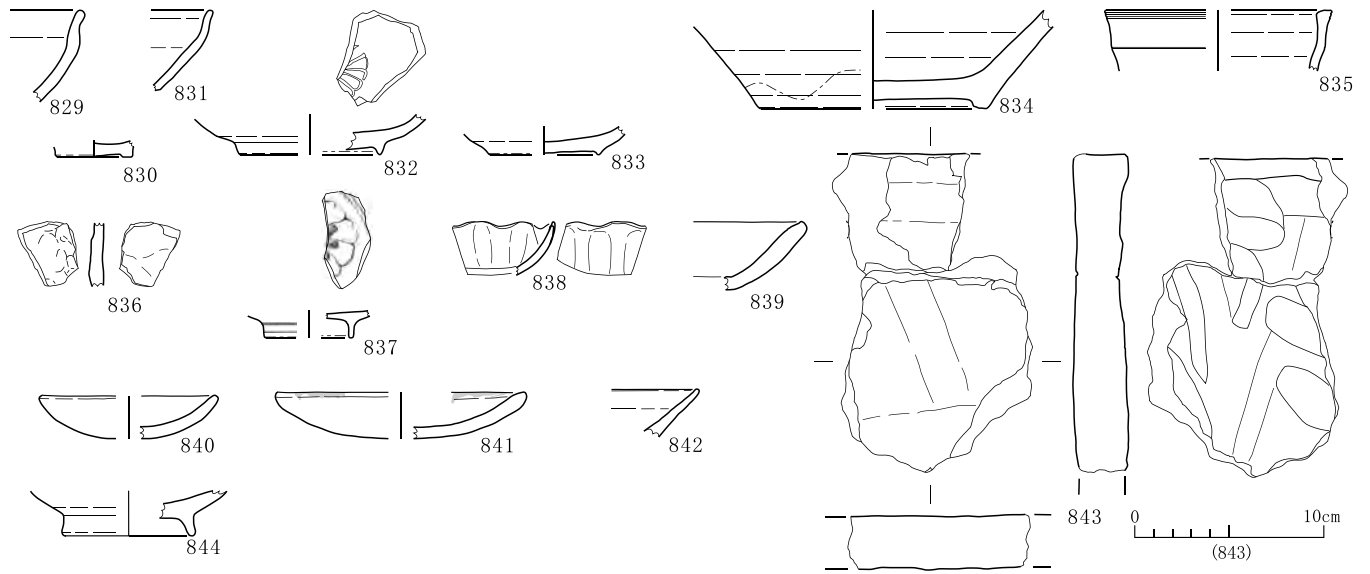


南斜面SX43Ⅲ層(822~828)

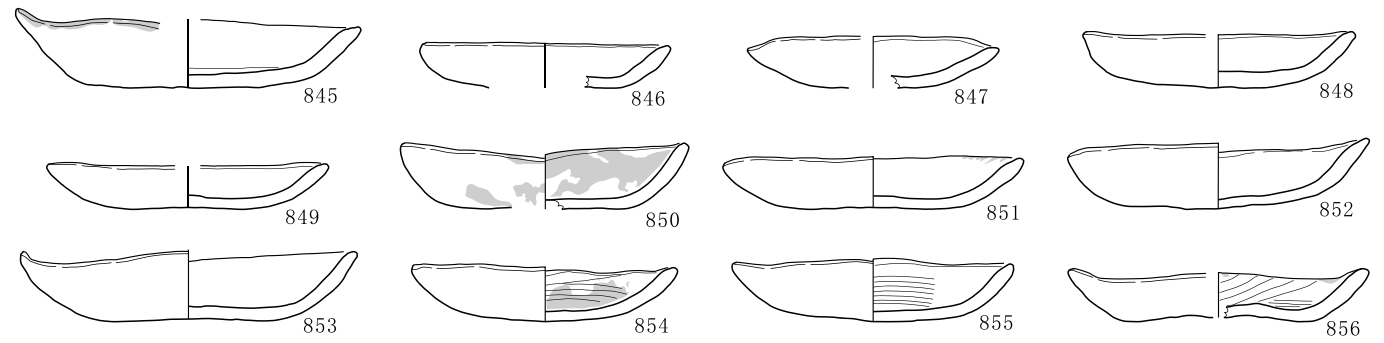


第 37 図 遺物実測図 (16)

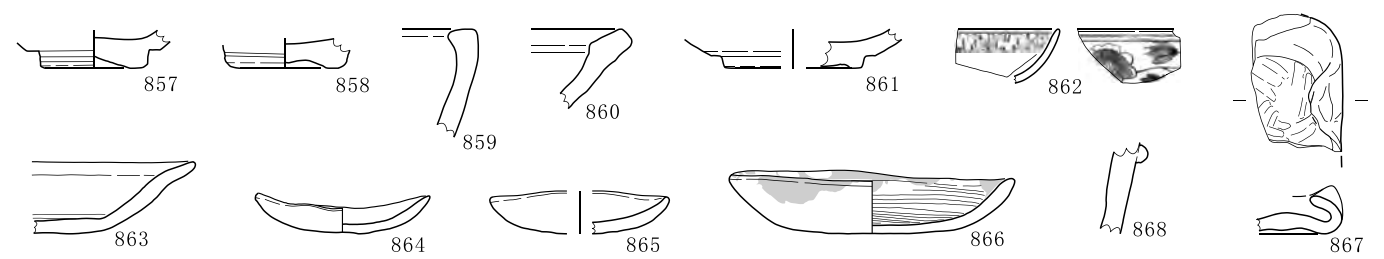
南斜面SX43 I・II層(829~844)



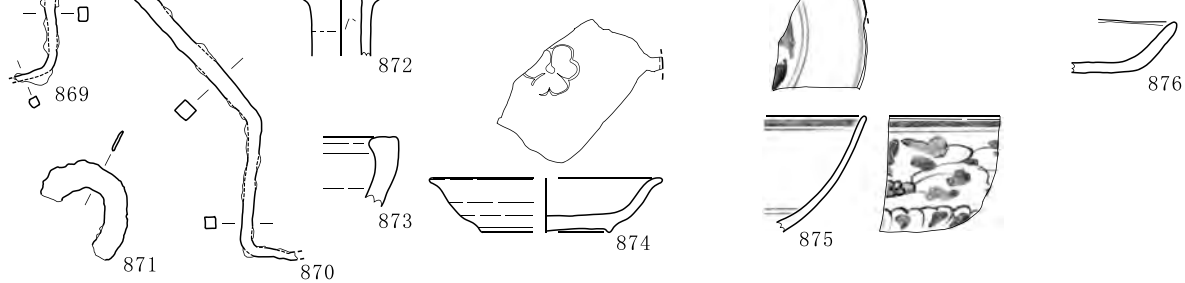
南斜面Ⅲ層(845~856)



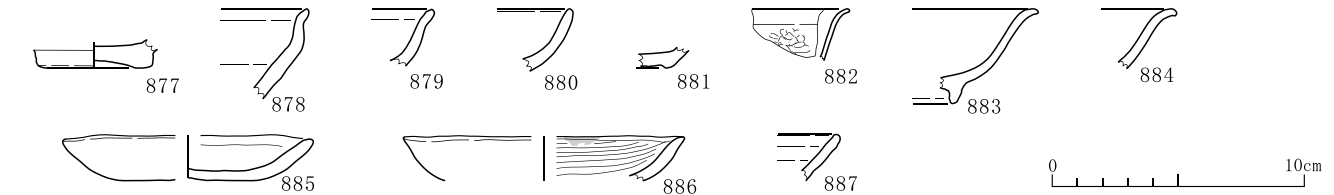
南斜面 I・II層(857~873)



南斜面攪乱(874~876)

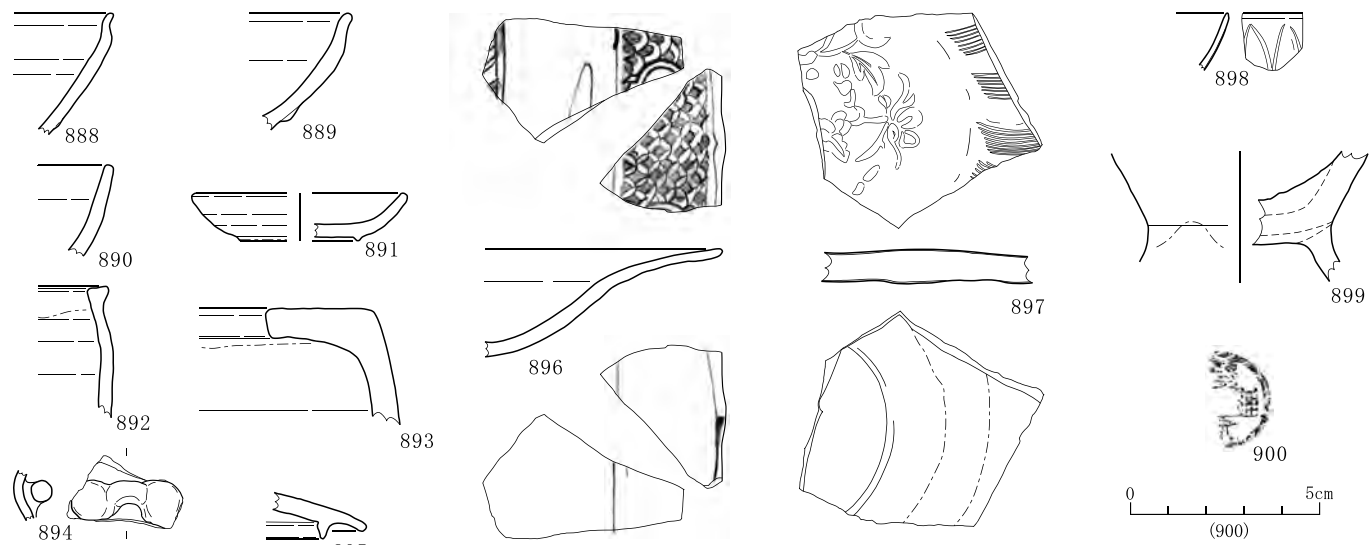


A地区焼土層(877~887)

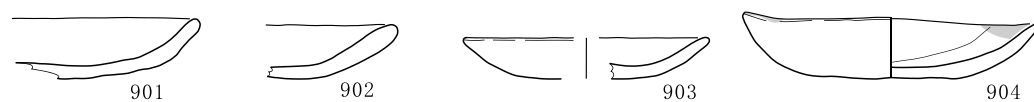


第38図 遺物実測図(17)

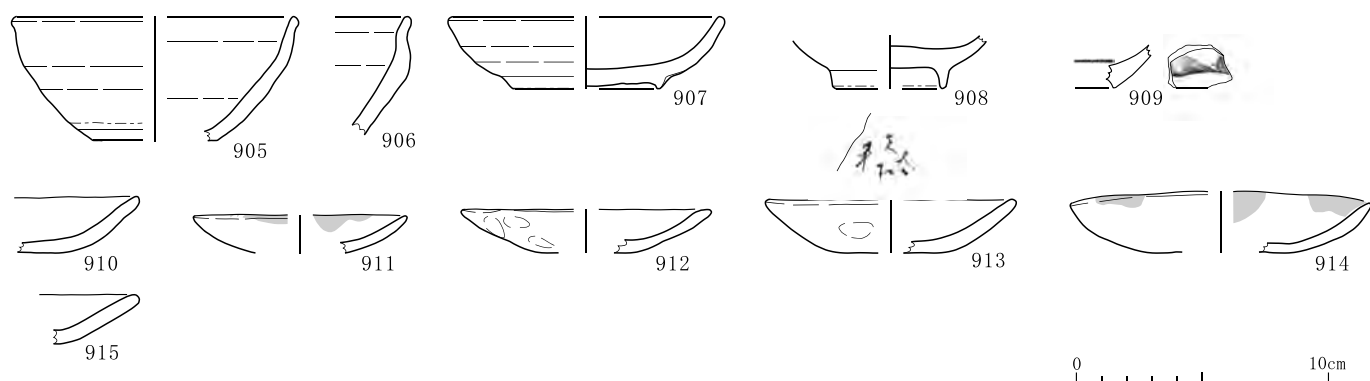
A地区 I 層・攪乱(888~900)



E地区 I・II層(901~904)



E地区 I 層(905~915)



第 39 図 遺物実測図 (18)



番号	小地区	遺構	グリッド	層位	種類	器種	時期・分類	底部	内面	外面	口径	高台(底)径	器高	備考	写真
1	平坦地北		G42	I・II層	大窯	天目茶碗	第3段階	内反高台	鉄釉	鉄釉+錆釉	-	4.0	-		
2	平坦地北		G42	I・II層	大窯	小天目茶碗	第3段階	残存無	鉄釉	鉄釉+濃い錆釉	(8.0)	-	-		22
3	平坦地北		G42	I・II層	大窯	小杯	第2段階	付高台	鉄釉	鉄釉	(6.7)	(3.3)	3.1		22
4	平坦地北		G42	I・II層	大窯	端反皿	第1段階	残存無	灰釉	灰釉	-	-	-	被熱	
5	平坦地北		G42	I・II層	大窯	丸皿	第2段階	付高台	灰釉	灰釉	(10.8)	(6.1)	2.7		
6	平坦地北		G42	I・II層	大窯	丸皿	第2段階	残存無	灰釉	灰釉	-	-	-		
7	平坦地北		G42	I・II層	大窯	椀	第2～3段階	削込高台	鉄釉	鉄釉	-	(5.8)	-		
8	平坦地北		G42	I・II層	大窯	水指	第1～2段階	残存無	無釉	錆釉	(13.3)	-	-	9と同一個体	24
9	平坦地北		G42	I・II層	大窯	水指	第1～2段階	平底	無釉	錆釉	-	(6.9)	-	8と同一個体	24
10	平坦地北		G42	I・II層	大窯	德利	第3～4段階	残存無	鉄釉	鉄釉	(4.2)	-	-		24
11	平坦地北		G42	I・II層	大窯	播鉢	第3段階後半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		25
12	平坦地北		G42	I・II層	大窯	播鉢	第3段階後半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		
13	平坦地北		G42	I・II層	大窯	風炉	第3～4段階	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-	14と同一個体	26
14	平坦地北		G42	I・II層	大窯	風炉	第3～4段階	平底・脚付	錆釉	錆釉	-	(23.9)	-	13と同一個体	26
15	平坦地北		G42	I・II層	大窯	花生	大窯	残存無	無釉	無釉	(7.8)	-	-	拓器質	26
16	平坦地北		G42	I・II層	大窯	染付	碗	残存無			-	-	-		27,28
17	平坦地北		G42	I・II層	染付	碗	E群	残存無	四方襷文	暗花文	-	-	-		
18	平坦地北		G42	I・II層	染付	碗	E群	高台			-	(3.9)	-		17
19	平坦地北		G42	I・II層	白磁	皿	E群	残存無	-	-	-	-	-		
20	平坦地北		G42	I・II層	白磁	皿	E群	高台	-	-	-	6.0	-		
21	平坦地北		G42-43	I・II層	中国製陶器	鉢	16C後半～17C	平底	緑色釉+黄色釉+褐色釉	緑色釉	-	-	-	華南三彩	29
22	平坦地北		G42	I・II層	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	12.3	-	2.6	タール痕	
23	平坦地北		G42	I・II層	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(13.7)	-	2.7		
24	平坦地北		G42	I・II層	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	-	-	-		
25	平坦地北		G42	I・II層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	8.9	-	1.9		
26	平坦地北		G42	I・II層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	9.7	-	1.9		
27	平坦地北		G42	I・II層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	10.4	-	2.0	タール痕	
28	平坦地北		G42	I・II層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	11.5	-	1.9	タール痕	
29	平坦地北		G42	I・II層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(12.0)	-	2.4	タール痕	
30	平坦地北		G42	I・II層	土師器	皿	III-12	-	-	-	(10.8)	(7.3)	2.0	ロクロ成形・タール痕	
31	平坦地北		G42	I・II層	土師器	皿	III	-	-	-	-	-	-	ロクロ成形・タール痕	
32	平坦地北		G42	I・II層	土師器	皿	III	-	-	-	(12.9)	(8.0)	2.5	ロクロ成形	
33	平坦地北		G42	I・II層	銅製品	金具	-	-	-	-	-	-	-	長径2.3cm・厚さ0.2cm・孔径0.5cm	
34	平坦地北		G42	I・II層	古瀬戸	四耳壺	後期IV	高台	灰釉	灰釉	-	(12.6)	-		31
35	平坦地北		G42	I・II層	土師器	皿?		残存無	-	-	-	-	-		
36	平坦地北		G37	I層	大窯	風炉	第3～4段階	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		26
37	平坦地北		G37	I層	鉄製品	鉄釘	-	-	-	-	-	-	-	残存長5.3cm・幅0.6cm	
38	平坦地北		G37	I層	石製品	碗	-	-	-	-	-	-	-	幅6.2cm	30
39	平坦地北		G37	I層	連房	播鉢	第10～11小期	-	錆釉	錆釉	-	-	-		25
40	池北東	SV29	G3,10	黒色粘土	大窯	德利	第2～3段階	平底	無釉	錆釉+鉄釉	-	-	-		24
41	池北東	SV29	G3,10	黒色粘土	大窯	播鉢	第3段階後半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		
42	池北東	SV29	G3,10	黒色粘土	染付	大皿(ツバ皿)	F群	残存無			-	-	-		27,28
43	池北東	SV29	G3,10	黒色粘土	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	-	-	-		
44	池北東	SV29	G3,10	黒色粘土	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	-	-	-		
45	池北東	SV29	G3,10	黒色粘土	土師器	不明		残存無			-	-	-		
46	池北東	SV29	G3,10	褐色粘質土(礫混)・底土	大窯	小天目茶碗	第1段階	残存無	鉄釉	錆釉	-	-	-		
47	池北東	SV29	G3,10	褐色粘質土(礫混)・底土	大窯	德利	第3～4段階	残存無	錆釉	鉄釉	-	-	-		
48	池北東	SV29	G3,10	褐色粘質土(礫混)・底土	大窯	播鉢	第4段階前半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		
49	池北東	SV29	G3,10	褐色粘質土(礫混)・底土	大窯	甕	大窯	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-	加工円盤(径3.2cm)	26
50	池北東	SV29	G3,10	褐色粘質土(礫混)・底土	染付	大皿(ツバ皿)	F群	残存無			-	-	-		
51	池北東	SV29	G3	埋土(礫層下粘土)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	-	-	-		
52	池北東	SV29	G3	埋土(礫層下粘土)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	-	-	-		
53	池北東	SV29	G3	埋土(礫層下粘土)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	-	-	-	タール痕	
54	池北東	SV29	G3,10	礫層	大窯	天目茶碗	第3段階	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-		
55	池北東	SV29	G3,10	礫層	大窯	丸皿	第2段階	残存無	灰釉	灰釉	-	-	-		
56	池北東	SV29	G3,10	礫層	大窯	椀	第2段階	削込高台	鉄釉	鉄釉	(10.2)	(5.5)	2.3		16
57	池北東	SV29	G3,10	礫層	大窯	花瓶	第1～3段階	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		26
58	池北東	SV29	G3	礫層	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	-	-	-		
59	池北東	SV29	G3	礫層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	-	-	-		
60	池北東	SV29	G3,10	礫層	銅製品	銭貨	寛永通寶	-	-	-	-	-	-	裏面「文」・径2.5cm	
61	池北東	SV29	G3,10	II層(礫層上・礫混シルト)	大窯	天目茶碗	第2段階	残存無	鉄釉	鉄釉+錆釉	-	-	-		
62	池北東	SX7	G3	暗褐色土(礫混・断割トレンチ)	大窯	天目茶碗	第3段階後半	残存無	鉄釉	鉄釉+錆釉	-	-	-		
63	池北東	SX7	G3	黒褐色粘土の上(断割トレンチ)	大窯	丸皿	第3段階前半	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-	被熱?	
64	池北東	SX7	G3	黒褐色粘土の上(断割トレンチ)	染付	碗	E群	残存無			-	-	-		
65	池北東	SX7	G3	直土	大窯	播鉢	第4段階前半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		

第3表 遺物観察表(1)

番号	小地区	遺構	グリッド	層位	種類	器種	時期・分類	底部	内面	外面	口径	高台(底)径	器高	備考	写真
66	池北東	SX7		I層	銅製品	銭貨	寛永通寶	-	-	-	-	-	-	径2.4cm	
67	池北東	SR1	G3	II層	大窯	天目茶碗	第2段階	内反高台	鉄釉	鉄釉	-	-	-	被熱	
68	池北東	SR1	G3	II層(黄色粘土・12層対応)	大窯	天目茶碗	第3段階	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-	被熱	
69	池北東	SR1	G3	II層	大窯	風炉	第3～4段階	平底・脚付	錆釉	錆釉	-	-	-		
70	池北東	SR1	G3	II層(黄色粘土・12層対応)	染付	小杯	-	高台	-	-	-	(2.2)	-		27,28
71	池北東	SR1	G3	II層(黄色粘土・12層対応)	白磁	小杯	-	残存無	-	-	-	-	-		
72	池北東	SR1	G3	II層	鉄製品	鉄釘	-	-	-	-	-	-	-	長さ4.2cm・幅0.4cm	
73	池北東	SR1	G3	II層(黄色粘土・12層対応)	灰釉陶器	椀	-	高台	-	-	-	(5.8)	-		
74	池北東	SR1	G3	I・II層	大窯	天目茶碗	第3段階後半	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-		
75	池北東	SR1	G3	I・II層	大窯	不明	第3段階前半	削出高台	鉄釉	無釉	-	(4.3)	-		
76	池北東	SR1	G3	I・II層	大窯	不明	第2段階	残存無	緑釉	緑釉	-	-	-		
77	池北東	SR1	G10	I・II層	白磁	小杯	-	残存無	-	-	-	-	-		29
78	池北東	SR1	G3	I・II層	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	-	-	-		
79	池北東	SR1	G3	I・II層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	-	-	-		
80	池北東	SR1	G10	I層	大窯	小天目茶碗	第1段階	輪高台	鉄釉	鉄釉+錆釉	-	(2.9)	-		22
81	池北東	SR1	G10	I層	大窯	端反皿	第1段階	残存無	灰釉	灰釉	-	-	-		
82	池北東	SR1	G10	I層	大窯	端反皿	第1段階	付高台	灰釉	灰釉	(16.0)	(8.7)	3.9		22
83	池北東	SR1	G10	I層	大窯	灯明皿	第2段階	平底	無釉	無釉	-	(3.9)	-		
84	池北東	SR1	G3	I層	染付	皿	B2群	残存無	-	-	-	-	-		27,28
85	池北東	SR1	G10	I層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	6.7	-	1.6		
86	池北東	SR1	G10	I層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(12.7)	-	2.6	タール痕	
87	池北東	SR1	G10	I層	土製品	土鏝	-	-	-	-	-	-	-	長さ3.9,径1.1	30
88	池北東	SR1	G10	I層	鉄製品	鉄釘	-	-	-	-	-	-	-	残存長11.4cm・幅0.9cm	32
89	池北東	SR1	G3	I層	鉄製品	鉄釘	-	-	-	-	-	-	-	残存長5.6cm・幅0.6cm	
90	池北東	SR1	G3	I層	鉄製品	鉄釘	-	-	-	-	-	-	-	残存長6.0cm・幅0.8cm	
91	池北東	SR1	G3	I層	連房?	小皿	近世?	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-		
92	池北東	SR1	G3	I層	銅製品	銭貨	寛永通寶	-	-	-	-	-	-	径2.2cm	
93	池北東	SR1	G3	I層	銅製品	銭貨	寛永通寶	-	-	-	-	-	-	径2.2cm	
94	池北東	SR1	G3	I層	銅製品	銭貨	寛永通寶	-	-	-	-	-	-	径2.3cm	
95	池北東	SR1	G3	I層	銅製品	銭貨	寛永通寶	-	-	-	-	-	-	径2.4cm	
96	池北東	SR1	G3	I層	銅製品	銭貨	寛永通寶	-	-	-	-	-	-	径2.3cm	
97	池北東	SR1	G3	I層	鉄製品	銭貨	寛永通寶	-	-	-	-	-	-	鉄銭	
98	池北東	SR1	G10	I層	銅製品	銭貨	寛永通寶	-	-	-	-	-	-	径2.2cm	
99	池北西	SV34	G39	I・II層	大窯	天目茶碗	第3段階後半	残存無	鉄釉	鉄釉+露胎	(10.9)	-	-		
100	池北西	SV34	G39	I・II層	大窯	天目茶碗	第3段階後半	残存無	鉄釉	鉄釉+露胎	(11.0)	-	-		21
101	池北西	SV34	G39	I・II層	大窯	天目茶碗	第4段階前半	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-		
102	池北西	SV34	G39	I・II層	大窯	端反皿	第1段階	残存無	灰釉	灰釉	(10.7)	-	-		
103	池北西	SV34	G39	I・II層	大窯	丸皿	第3段階前半	残存無	灰釉	灰釉	-	-	-		
104	池北西	SV34	G39	I・II層	大窯	稜皿	第3段階後半	残存無	灰釉	灰釉	-	-	-		22
105	池北西	SV34	G39	I・II層	大窯	徳利	第3～4段階	平底	鉄釉	鉄釉	-	(7.1)	-		24
106	池北西	SV34	G39	I・II層	大窯	搦鉢	第3段階後半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		
107	池北西	SV34	G39	I・II層	大窯	搦鉢	第3段階後半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		
108	池北西	SV34	G39	I・II層	常滑	不明	-	残存無	-	-	-	-	-		
109	池北西	SV34	G39	I・II層	染付	碗	E群	残存無	-	-	-	-	-		
110	池北西	SV34	G39	I・II層	白磁	ツバ皿	E群	残存無	-	-	-	-	-		29
111	池北西	SV34	G39	I・II層	白磁染付	皿	-	高台	-	-	(9.9)	(6.1)	2.4		27,28
112	池北西	SV34	G39	I・II層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(9.6)	-	2.3	タール痕	
113	池北西	SV34	G39	I・II層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(10.7)	-	-		
114	池北西	SV34	G39	I・II層	土師器	皿	D類	-	-	-	-	-	-		30
115	池北西	SV34	G39	I・II層	鉄製品	鉄釘	-	-	-	-	-	-	-	残存長6.6cm・幅0.4cm	
116	池北西	SV34	G39	I・II層	銅製品	銅滓	-	-	-	-	-	-	-	厚さ0.4cm	32
117	池北西	SV34	G39	I・II層	古瀬戸?	壺?	後期?	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		
118	池北西	SR1	G43	I・II層	大窯	天目茶碗	第1段階	残存無	鉄釉	鉄釉+不明	-	-	-		
119	池北西	SR1	G43	I・II層	大窯	天目茶碗	第2段階	残存無	鉄釉	鉄釉+錆釉	(10.7)	-	-		
120	池北西	SR1	G43	I・II層	大窯	天目茶碗	第2段階	内反高台	鉄釉	鉄釉+薄い錆釉	11.6	4.0	6.1		14
121	池北西	SR1	G43	I・II層	大窯	天目茶碗	第3段階	残存無	鉄釉	鉄釉+不明	-	-	-		
122	池北西	SR1	G43	I・II層	大窯	小天目茶碗	第3段階後半	残存無	鉄釉	鉄釉+不明	-	-	-		22
123	池北西	SR1	G43	I・II層	大窯	丸皿	第2段階	付高台	灰釉+印花文	灰釉	(10.3)	(6.1)	2.5		
124	池北西	SR1	G43	I・II層	大窯	丸皿	第2段階	付高台	灰釉	灰釉	(10.7)	(6.2)	2.5	被熱	
125	池北西	SR1	G43	I・II層	大窯	丸皿	第2段階	付高台	灰釉	灰釉	(8.8)	(5.5)	2.0	被熱	
126	池北西	SR1	G43	I・II層	大窯	丸皿	第3段階前半	付高台	灰釉	灰釉	8.0	4.3	2.5	被熱	15
127	池北西	SR1	G43	I・II層	大窯	稜皿	第3段階前半	削出高台	鉄釉	鉄釉	9.8	5.5	2.3		16
128	池北西	SR1	G43	I・II層	染付	皿	E群	残存無	-	-	-	-	-		27,28
129	池北西	SR1	G43	I・II層	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(13.5)	-	2.4		
130	池北西	SR1	G43	I・II層	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(14.4)	-	2.9		
131	池北西	SR1	G43	I・II層	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	13.6	-	2.5		
132	池北西	SR1	G43	I・II層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	7.1	-	1.5		
133	池北西	SR1	G43	I・II層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	9.4	-	1.9	タール痕	
134	池北西	SR1	G43	I・II層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	10.6	-	2.4	タール痕	
135	池北西	SR1	G43	I・II層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(11.0)	-	2.1	タール痕	
136	池北西	SR1	G43	I・II層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	9.4	-	1.8		
137	池北西	SR1	G43	I・II層	土師器	皿	III-9	-	-	-	6.8	2.9	2.0	ロクロ成形	20
138	池北西	SR1	G43	I・II層	土師器	皿	III-9	-	-	-	7.4	4.4	1.3	ロクロ成形	
139	池北西	SR1	G43	I・II層	土師器	皿	III-11	-	-	-	(10.5)	(4.8)	2.7	ロクロ成形・タール痕	
140	池北西	SR1	G43	I・II層	土師器	皿	III-12	-	-	-	11.1	7.0	2.5	ロクロ成形・タール痕	20

第4表 遺物観察表(2)

番号	小地区	遺構	グリッド	層位	種類	器種	時期・分類	底部	内面	外面	口径	高台(底)径	器高	備考	写真	
141	池北西	SR1	G43	I・II層	土師器	耳皿	III	-	-	-	-	-	-	ロクロ成形		
142	池北西	SR1	G43	I・II層	土製品	かわらけ?	-	-	-	-	-	(6.2)	-		30	
143	池南東	SR1	G5	III・IV層	大窯	天目茶碗	第3段階	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-			
144	池南東	SR1	G5	III・IV層	大窯	舟徳利	第2~3段階	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-		24	
145	池南東	SR1	G5	III・IV層	朝鮮製陶器?	碗	-	残存無	-	-	-	-	-	156と同一個体か		
146	池南東	SR1	G5	III層	大窯	天目茶碗	第3段階後半	内反高台	鉄釉	鉄釉+錆釉	11.4	4.7	6.7		14	
147	池南東	SR1	G6,13	III層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(13.2)	-	(1.9)	タール痕		
148	池南東	SR1	G6,13	III層?	鉄製品	不明	-	-	-	-	-	-	-	長さ5.1cm・幅4.2cm		
149	池南東	SR1	G5	(II・)III層	大窯	天目茶碗	第3段階	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-			
150	池南東	SR1	G5	(II・)III層	大窯	灯明皿	第1段階	平底	無釉	無釉	-	(5.1)	-			
151	池南東	SR1	G5	(II・)III層	大窯	鉢	大窯	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-		23	
152	池南東	SR1	G5	(II・)III層	大窯	鉢	第3段階後半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		23	
153	池南東	SR1	G5	(II・)III層	染付	皿	(C群)	残存無	-	-	-	-	-		27,28	
154	池南東	SR1	G5	(II・)III層	白磁	皿	E群	高台	-	-	-	-	-			
155	池南東	SR1	G5	(II・)III層	中国製陶器	鉢	16C後半~17C	平底	緑色釉+黄色釉+褐色釉	緑色釉	-	-	-	華南三彩	29	
156	池南東	SR1	G5	(II・)III層	朝鮮製陶器?	碗	-	残存無	-	-	-	-	-	145と同一個体か		
157	池南東	SR1	G5	(II・)III層	鉄製品	不明	-	-	-	-	-	-	-	長さ3.7cm・幅1.3cm		
158	池南東	SR1	G5	(II・)III層	銅製品	菊花形皿	-	-	-	-	-	-	-		32	
159	池南東	SR1	G5	(II・)III層	石製品	碁石(白)	-	-	-	-	-	-	-	長径1.6,短径1.4	30	
160	池南東	SR1	G5	(II・)III層	古瀬戸	口広有耳壺	後期IV	残存無	鉄釉	鉄釉	(11.0)	-	-		31	
161	池南東	SR1	G12	II・III層	大窯	灯明皿	第3段階後半~第4段階前半	残存無	錆釉	錆釉	(11.1)	-	-		22	
162	池南東	SR1	G12	II・III層	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(13.7)	-	(2.5)	タール痕		
163	池南東	SR1	G12	II・III層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(7.5)	-	(1.5)			
164	池南東	SR1	G12	東西サブトレ	石製品	碁石(黒)	-	-	-	-	-	-	-	長径2.2,短径1.8	30	
165	池南東	SR1	G5	II層	大窯	天目茶碗	大窯	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-	加工円盤(径2.8cm)	26	
166	池南東	SR1	G5	II層	大窯	鉢	大窯	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		23	
167	池南東	SR1	G5	II層	山茶碗(東濃型)	碗	大畑大洞4(新)	高台	-	-	-	-	-		30	
168	池南東	SR1	G13	I・II層	大窯	端反皿	第1段階	残存無	灰釉	灰釉	-	-	-			
169	池南東	SR1	G12	I・II層	大窯	丸皿	第3段階前半	付高台	灰釉	灰釉	(9.6)	(6.0)	(2.3)			
170	池南東	SR1	G13	I・II層	大窯	丸皿	第3段階	残存無	灰釉	灰釉	-	-	-			
171	池南東	SR1	G12	I・II層	大窯	皿?	第2~3段階	残存無	鉄釉	無釉	-	-	-	加工円盤(径3.0cm)	26	
172	池南東	SR1	G13	I・II層	白磁	小杯	-	残存無	-	-	-	-	-			
173	池南東	SR1	G11	I・II層	白磁	皿	E群	残存無	-	-	-	-	-			
174	池南東	SR1	G11	I・II層	白磁	皿	E群	高台	-	-	-	-	-			
175	池南東	SR1	G13	I・II層	白磁	皿	E群	残存無	-	-	-	-	-			
176	池南東	SR1	G11	I・II層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(8.2)	-	(1.6)			
177	池南東	SR1	G6	I・II層	鉄製品	鉄釘	-	-	-	-	-	-	-	残存長14.8cm・幅0.8cm	32	
178	池南東	SR1	G13	I・II層	鉄製品	鏝	-	-	-	-	-	-	-	長さ12.7cm・幅1.1cm	32	
179	池南東	SR1	G11	I・II層	銅製品	菊花形皿	-	-	金鍍金	金鍍金	4.7	1.6	2.2	金銅製	32	
180	池南東	SR1	G11	I・II層	銅製品	銭貨	天聖元寶	-	-	-	-	-	-	径2.5cm	32	
181	池南東	SR1	G11	I・II層	古瀬戸	水指	後期III・IV	残存無	(口)鉄釉	鉄釉	-	-	-		31	
182	池南東	SR1	G4,11	I層	大窯	天目茶碗	第3段階前半	残存無	鉄釉	鉄釉+露胎	(12.2)	-	-		21	
183	池南東	SR1	G13	I層	大窯	天目茶碗	第3段階前半	内反高台	鉄釉	鉄釉+薄い錆釉	-	(4.2)	-		21	
184	池南東	SR1	G6	I層	大窯	丸皿	第2段階	残存無	灰釉	灰釉	-	-	-			
185	池南東	SR1	G13	I層	大窯	灯明皿	第1段階	平底	無釉	無釉	-	-	-			
186	池南東	SR1	G4,11	I層	大窯	皿	第2段階	付高台	灰釉	灰釉	-	(6.3)	-			
187	池南東	SR1	G12	I層	大窯	皿	第2段階	付高台	灰釉	灰釉	-	(6.0)	-			
188	池南東	SR1	G12	I層	大窯	鉢	大窯	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-			
189	池南東	SR1	G12	I層	大窯	茶入	第3段階	残存無	鉄釉	鉄釉	(5.5)	-	-		26	
190	池南東	SR1	G13	I層	染付	碗	E群	残存無	-	-	-	-	-			
191	池南東	SR1	G12	I層	染付	碗	E群	残存無	-	-	-	-	-			
192	池南東	SR1	G12	I層	染付	皿	B1群	残存無	-	-	-	-	-		27,28	
193	池南東	SR1	G12	I層	青磁	碗	-	残存無	-	線描き連弁文	-	-	-		29	
194	池南東	SR1	G12	I層	白磁	小杯	-	高台	-	-	-	-	-			
195	池南東	SR1	G12	I層	白磁	皿	E群	残存無	-	-	-	-	-			
196	池南東	SR1	G13	I層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	-	-	-	タール痕		
197	池南東	SR1	G6	I層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	-	-	-			
198	池南東	SR1	G4-6	I層	灰釉陶器	皿	-	高台	-	-	-	(8.0)	-			
199	池南東	SR1	G11	I層	山茶碗(東濃型)	碗	大畑大洞4	高台	-	-	-	(4.8)	-		30	
200	池南東	SR1	G12	I層	古瀬戸	四耳壺	後期I・II	高台	無釉	灰釉	-	(10.5)	-		31	
201	池南東	SR1	G11	I層	銅製品	銭貨	寛永通寶	-	-	-	-	-	-	径2.2cm		
202	池南東	攪乱5	G13	攪乱	石	緑色片岩片	-	-	-	-	-	-	-	緑色片岩破片		
203	池南西	SR1	G22	III・IV層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	-	7.0	-	1.5		
204	池南西	SR1	G18	II・III層	染付	碗	E群	高台	-	-	-	4.3	-	饅頭心	27,28	
205	池南西	SR1	G18	II・III層	白磁	皿	E群	残存無	-	-	-	-	-			
206	池南西	SR1	G17	I・II層	大窯	灯明皿	第2段階	残存無	無釉	無釉	(9.5)	-	-		22	
207	池南西	SR1	G17	I・II層	大窯	香炉	第3段階後半	残存無	無釉	灰釉	-	-	-		26	
208	池南西	SR1	G17	I・II層	大窯	祖母懷壺	大窯	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		26	
209	池南西	SR1	G18	I・II層	染付	碗	-	残存無	-	-	-	-	-		27,28	
210	池南西	SR1	G18	I・II層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	-	-	-			
211	池南西	SR1	G21	I・II層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	-	8.9	-	2.2	タール痕	
212	池南西	SR1	G17	I・II層	鉄製品	不明	-	-	-	-	-	-	-	厚さ0.4cm		
213	池南西	SR1	G22	I層	大窯	天目茶碗	第3段階後半	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-			

第5表 遺物観察表(3)

番号	小地区	遺構	グリッド	層位	種類	器種	時期・分類	底部	内面	外面	口径	高台(底)径	器高	備考	写真
214	池南西	SR1	G19	1層	大窯	天目茶碗	第3段階	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-		
215	池南西	SR1	G17	1層	大窯	小杯	第1~2段階	削込高台	灰釉	灰釉	-	-	-		22
216	池南西	SR1	G22	1層	大窯	丸皿	第2段階	残存無	灰釉	灰釉	-	-	-		
217	池南西	SR1	G19	1層	大窯	丸皿	第2段階	残存無	灰釉	灰釉	-	-	-		
218	池南西	SR1	G17	1層	大窯	内禿皿	第3段階後半	残存無	灰釉	灰釉	-	-	-		
219	池南西	SR1	G17	1層	大窯	水注?	大窯	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-		26
220	池南西	SR1	G17	1層	大窯	播鉢	第3段階前半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		
221	池南西	SR1	G22	1層	大窯	播鉢	第3段階後半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		
222	池南西	SR1	G22	1層	大窯	香炉	第3段階後半	平底・脚付	灰釉	灰釉(底部無釉)	-	(7.3)	-		26
223	池南西	SR1	G17	1層	染付	碗	E群	残存無			-	-	-		
224	池南西	SR1	G17	1層	染付	碗	E群	残存無		暗花文	-	-	-		27,28
225	池南西	SR1	G19	1層	染付	皿	B1群	残存無			-	-	-		
226	池南西	SR1	G22	1層	青磁	碗		残存無		竈連弁文	-	-	-		29
227	池南西	SR1	G22	1層	青磁	不明		残存無			-	-	-	被熱	
228	池南西	SR1	G17	1層	白磁	皿	E群	高台	-	-	-	(5.9)	-		
229	池南西	SR1	G18	1層	白磁	皿	E群	高台	-	-	-	6.1	-		
230	池南西	SR1	G17	1層	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	-	-	-		
231	池南西	SR1	G19	1層	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	-	-	-		
232	池南西	SR1	G21	1層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	9.4	-	(1.8)	タール痕	
233	池南西	SR1	G21	1層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	9.8	-	(2.4)		
234	池南西	SR1	G21,22	1層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(9.7)	-	1.9	タール痕	
235	池南西	SR1	G17	1層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	-	-	-		
236	池南西	SR1	G22	1層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	-	-	-	タール痕	
237	池南西	SR1	G21,22	1層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	-	-	-		
238	池南西	SR1	G21,22	1層	土師器	皿	III	-	-	-	-	-	-	ロクロ成形	
239	池南西	SR1	G19	1層	土師器	皿		-	-	-	-	-	-		
240	池南西	SR1	G22	1層	銅製品	飾り金具?	-	-	-	-	-	-	-	径1.4cm	32
241	池南西	SR1	G22	1層	銅製品	銭貨	元祐通寶	-	-	-	-	-	-	径2.4cm	32
242	池南西	SR1	G17	1層	石製品	基石(黒)	-	-	-	-	-	-	-	長径1.8,短径1.6	30
243	池南西	SR1	G22	1層	山茶碗(尾張型)	碗	6型式	高台	-	-	-	(6.3)	-		30
244	池南西	攪乱	G17	攪乱	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(8.8)	-	(1.6)		
245	池南西	攪乱1・2	G17-18	攪乱	大窯	皿	第1~2段階	付高台	灰釉	灰釉	-	(5.0)	-		
246	池南西	攪乱1・2	G17-18	攪乱	大窯	播鉢	第3段階前半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		
247	池南西	攪乱1・2	G17-18	攪乱	染付	碗		残存無			-	-	-		
248	池南西	攪乱1・2	G17-18	攪乱	白磁	皿	E群	残存無	-	-	-	-	-		
249	池南西	攪乱1・2	G17-18	攪乱	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	-	-	-		
250	池南西	攪乱2	G17	攪乱	鉄製品	鉄釘	-	-	-	-	-	-	-	残存長11.2cm・幅0.5cm	32
251	池南西	攪乱7	G19	攪乱	大窯	灯明皿	第2段階	平底	無釉	無釉	-	(3.8)	-		
252	平地地南		G7	I・II層	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	-	-	-	タール痕	
253	平地地南		G8	I・II層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(9.4)	-	(1.9)		
254	平地地南		G7	I・II層	鉄製品	鉄釘	-	-	-	-	-	-	-	残存長5.9cm・幅0.6cm	32
255	平地地南		G8	I・II層	山茶碗(東濃型)	碗	大畑大洞4	高台	-	-	-	-	-		
256	平地地南		G14	I・II層	銅製品	銭貨	寛永通寶	-	-	-	-	-	-	径2.3cm	
257	平地地南		G7	1層	大窯	天目茶碗	第1段階	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-		
258	平地地南		G7	1層	大窯	天目茶碗	第1段階	削出輪高台	鉄釉	鉄釉+濃い錆釉	-	(4.1)	-		
259	平地地南		G7	1層	大窯	天目茶碗	第3段階後半	残存無	鉄釉	鉄釉+露胎	-	-	-		
260	平地地南		G7	1層	大窯	小天目茶碗	第3段階後半	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-		
261	平地地南		G15	1層	大窯	小天目茶碗	第3段階	削出輪高台	鉄釉	鉄釉+薄い錆釉	-	(2.1)	-		22
262	平地地南		G7	1層	大窯	丸皿	第4段階前半	削込高台	灰釉	灰釉	(6.9)	(4.1)	1.2		
263	平地地南		G14,15	1層	染付	皿	不明	残存無			-	-	-		27,28
264	平地地南		G14,15	1層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(7.2)	-	(1.7)		
265	平地地南		G7	1層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(9.6)	-	(1.8)		
266	平地地南		G7	1層	土製品	土鈴	-	-	-	-	-	-	-		
267	平地地南		G15	1層	土製品	土鈴	-	-	-	-	-	-	-	長さ4.7,径3.7	30
268	平地地南		G7	1層	瓦	軒平瓦	A類	-	-	-	-	-	-	瓦当接合面で剥離	32
269	平地地南		G7	1層	瓦	軒平瓦	-	-	-	-	-	-	-	瓦当接合面で剥離	
270	平地地南		G15	1層	須恵器	短頸壺		残存無	-	-	-	-	-		
271	平地地南		G14,15	1層	山茶碗(尾張型)	碗	6型式	平底	-	-	-	(5.4)	-		
272	平地地南		G7-8	1層	山茶碗(東濃型)	碗	不明	残存無	-	-	-	-	-		
273	平地地南		G14,15	1層	山茶碗(東濃型)	小碗	不明	残存無	-	-	-	-	-		
274	平地地南		G14,15	1層	古瀬戸	壺	後期III・IV	残存無		灰釉	(10.1)	-	-		31
275	平地地南		G7-8	1層	古瀬戸	壺	後期III・IV	高台		灰釉	-	(8.0)	-		31
276	平地地南	攪乱	G14,15	攪乱	大窯	天目茶碗	第3段階	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-		
277	北斜面		G44	1層	大窯	天目茶碗	第1段階	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-		
278	北斜面		G40	1層	大窯	天目茶碗	第2段階	残存無	鉄釉	鉄釉+錆釉	-	-	-		
279	北斜面		G40	1層	大窯	丸碗	第3段階後半	残存無	灰釉	灰釉	-	-	-		22
280	北斜面		G44	1層	大窯	丸皿	第2段階	付高台	灰釉	灰釉	(8.5)	(5.0)	2.3	摩耗	
281	北斜面		G40	1層	大窯	丸皿	第2段階	付高台	灰釉	灰釉	(10.8)	(6.4)	3.0		
282	北斜面		G40	1層	白磁	皿	E群	高台	-	-	-	(5.7)	-	高台内に線描き	
283	北斜面		G40	1層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	10.8	-	2.1		
284	北斜面		G40	1層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	9.2	-	1.8		
285	北斜面		G44	1層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	10.7	-	2.2	タール痕	19

第6表 遺物観察表(4)

番号	小地区	遺構	グリッド	層位	種類	器種	時期・分類	底部	内面	外面	口径	高台(底)径	器高	備考	写真
286	北斜面		G40	I層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(11.5)	-	2.3		
287	北斜面		G44	I層	土師器	皿	III-11	-	-	-	(11.7)	(7.2)	1.8	口クロ成形	
288	北斜面		G44	I層	銅製品	銭貨	淳化元寶	-	-	-	-	-	-	径2.3cm	32
289	北斜面		G44	I層	山茶碗(東濃型)	碗	大洞東1~脇之島3	残存無	-	-	-	-	-		30
290	北斜面	攪乱	G40,44	攪乱	大窯	天目茶碗	第1段階	残存無	鉄釉	鉄釉+錆釉	-	-	-		
291	北斜面	攪乱	G40,44	攪乱	大窯	天目茶碗	第4段階後半	残存無	鉄釉	鉄釉+露胎	-	-	-		21
292	北斜面	攪乱	G40,44	攪乱	大窯	丸皿	第3段階前半	残存無	灰釉	灰釉	-	-	-		
293	西斜面北	SV7	G45-48	III層(崩落礫層)	大窯	天目茶碗	第1段階後半	残存無	鉄釉	鉄釉+濃い錆釉	(11.2)	-	-		21
294	西斜面北	SV7	G45-48	III層(崩落礫層)	大窯	天目茶碗	第1段階後半	残存無	鉄釉	鉄釉+濃い錆釉	(10.8)	-	-		
295	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	天目茶碗	第1段階	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-		
296	西斜面北	SV7	G45-47	III層(崩落礫層)	大窯	天目茶碗	第1段階	輪高台	鉄釉	鉄釉+濃い錆釉	-	(3.8)	-		
297	西斜面北	SV7	G48	III層(崩落礫層)	大窯	天目茶碗	第2段階	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-		
298	西斜面北	SV7	G45-47	III層(崩落礫層)	大窯	天目茶碗	第2段階	内反高台	鉄釉	鉄釉+濃い錆釉	-	(3.8)	-		
299	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	天目茶碗	第3段階後半	残存無	鉄釉	鉄釉+薄い錆釉	(11.7)	-	-		21
300	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	天目茶碗	第3段階後半~第4段階前半	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-		
301	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	天目茶碗	第3段階後半	内反高台	鉄釉	鉄釉+露胎	-	4.6	-		21
302	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	天目茶碗	第3段階	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-		
303	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	天目茶碗	第3段階	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-		
304	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	天目茶碗	第3段階	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-		
305	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	天目茶碗	第3段階	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-		
306	西斜面北	SV7	G45-47	III層(崩落礫層)	大窯	天目茶碗	第3段階	内反高台	鉄釉	鉄釉+露胎	-	(4.1)	-		
307	西斜面北	SV7	G45-48	III層(崩落礫層)	大窯	天目茶碗	第3段階	残存無	鉄釉	鉄釉+露胎	(10.9)	-	-		
308	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	天目茶碗	第3段階	残存無	鉄釉	鉄釉	(11.5)	-	-		
309	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	天目茶碗	第3段階	残存無	鉄釉	鉄釉+濃い錆釉	-	-	-		
310	西斜面北	SV7	G48	III層(崩落礫層)	大窯	天目茶碗	第3段階	内反高台	鉄釉	鉄釉+薄い錆釉	-	(4.0)	-		
311	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	天目茶碗	第3段階	輪高台	鉄釉	鉄釉+露胎	(12.0)	(4.5)	6.6		14
312	西斜面北	SV7	G45-47	III層(崩落礫層)	大窯	天目茶碗	第3段階	残存無	鉄釉	鉄釉+薄い錆釉	(11.8)	-	-		
313	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	天目茶碗	第4段階前半	残存無	鉄釉	鉄釉+露胎	(11.7)	-	-		21
314	西斜面北	SV7	G45-47	III層(崩落礫層)	大窯	小天目茶碗	第1段階	輪高台	鉄釉	鉄釉+濃い錆釉	(8.0)	-	-		14
315	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	小天目茶碗	第1段階	残存無	鉄釉	鉄釉+薄い錆釉	(7.8)	-	-		
316	西斜面北	SV7	G45-47	III層(崩落礫層)	大窯	小天目茶碗	第1段階	残存無	鉄釉	鉄釉+薄い錆釉	(8.0)	-	-		22
317	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	小天目茶碗	第1段階?	削出輪高台	灰釉	底露胎	-	(2.4)	-		22
318	西斜面北	SV7	G45-47	III層(崩落礫層)	大窯	小天目茶碗	第2段階	内反高台	鉄釉	鉄釉+薄い錆釉	-	2.8	-		22
319	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	小天目茶碗	第3段階後半~第4段階前半	削出輪高台	鉄釉	鉄釉+露胎	5.4	2.3	2.8		22
320	西斜面北	SV7	G45-48	III層(崩落礫層)	大窯	小天目茶碗	第3段階	輪高台	鉄釉	鉄釉+露胎	8.3	3.4	4.0		14
321	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	小天目茶碗	第3段階	輪高台	鉄釉	鉄釉+濃い錆釉	7.4	3.1	3.5		
322	西斜面北	SV7	G45-47	III層(崩落礫層)	大窯	小天目茶碗	第3段階	残存無	鉄釉	鉄釉+薄い錆釉	-	-	-		
323	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	小天目茶碗	第3段階	残存無	鉄釉	鉄釉+露胎	-	-	-		
324	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	小天目茶碗	第3段階	残存無	鉄釉	鉄釉+露胎	-	-	-		22
325	西斜面北	SV7	G45-47	III層(崩落礫層)	大窯	小天目茶碗	第4段階前半	残存無	鉄釉	鉄釉+露胎	-	-	-		22
326	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	小碗	第3段階	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-		22
327	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	小杯	第3段階	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-		
328	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	端反皿	第1段階後半	付高台	灰釉・印花文	灰釉	(10.4)	(5.2)	2.4		15
329	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	端反皿	第1段階後半	付高台	灰釉	灰釉	(8.6)	(4.9)	2.1	小法量	
330	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	丸皿	第2段階前半	残存無	灰釉	灰釉	-	-	-	菊皿	22
331	西斜面北	SV7	G45-47	III層(崩落礫層)	大窯	丸皿	第2段階	付高台	灰釉・印花文	灰釉	-	(5.9)	-		
332	西斜面北	SV7	G45-47	III層(崩落礫層)	大窯	丸皿	第2段階	付高台	灰釉	灰釉	(10.7)	(6.5)	2.6		15
333	西斜面北	SV7	G48	III層(崩落礫層)	大窯	丸皿	第2段階	付高台	灰釉	灰釉	(10.3)	(5.8)	2.8		
334	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	丸皿	第2段階	付高台	灰釉	灰釉	(10.0)	(5.9)	2.7		
335	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	丸皿	第2段階	付高台	灰釉	灰釉	8.5	4.7	2.0		
336	西斜面北	SV7	G45-47	III層(崩落礫層)	大窯	丸皿	第2段階	付高台	灰釉	灰釉	(7.9)	4.5	2.0	小法量	15
337	西斜面北	SV7	G45-47	III層(崩落礫層)	大窯	丸皿	第2段階	残存無	灰釉	灰釉	-	-	-	小法量	
338	西斜面北	SV7	G45-47	III層(崩落礫層)	大窯	丸皿	第3段階前半	付高台	灰釉	灰釉	8.6	4.8	2.2		
339	西斜面北	SV7	G45-48	III層(崩落礫層)	大窯	丸皿	第3段階前半	付高台	灰釉	灰釉	8.6	4.6	2.0		15
340	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	丸皿	第3段階前半	付高台	灰釉	灰釉	(9.7)	(5.0)	2.1		
341	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	丸皿	第3段階前半	付高台	灰釉	灰釉	(8.0)	(5.0)	1.7	小法量	
342	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	丸皿	第3段階前半	残存無	灰釉	灰釉	-	-	-	小法量	
343	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	丸皿	第3段階	残存無	灰釉	灰釉	-	-	-	輪花風	
344	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	内禿皿	第3段階後半	削込高台	灰釉	灰釉	9.7	5.5	2.1		
345	西斜面北	SV7	G45-48	III層(崩落礫層)	大窯	内禿皿	第3段階後半	削込高台	灰釉	灰釉	9.7	5.4	2.3		
346	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	内禿皿	第3段階後半	削込高台	灰釉	灰釉	10.1	5.4	2.0		
347	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	内禿皿	第3段階後半	削込高台	灰釉	灰釉	(10.0)	(5.0)	2.1		
348	西斜面北	SV7	G45-48	III層(崩落礫層)	大窯	稜皿	第2~3段階	削込高台	鉄釉	鉄釉	-	(5.4)	-		
349	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	灯明皿	第1段階	平底	無釉	無釉	(9.2)	(4.0)	2.1		22
350	西斜面北	SV7	G45-47	III層(崩落礫層)	大窯	灯明皿	第2~3段階	平底	無釉	無釉	-	-	-		
351	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	灯明皿	第1段階	平底	無釉	無釉	(10.3)	(5.1)	2.3	被熱	22
352	西斜面北	SV7	G45-47	III層(崩落礫層)	大窯	皿	第2~3段階	付高台	灰釉	灰釉	-	-	-		
353	西斜面北	SV7	G45-47	III層(崩落礫層)	大窯	皿	第2~3段階	付高台	灰釉	灰釉	-	4.4	-		
354	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	皿	第3段階	付高台	灰釉	灰釉	-	(4.5)	-		
355	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	徳利	第3段階	残存無	鉄釉	鉄釉	(5.4)	-	-		24
356	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	徳利	大窯	残存無	鉄釉	鉄釉	(6.0)	-	-		24
357	西斜面北	SV7	G45-48	III層(崩落礫層)	大窯	水指・建水	第3段階前半	削込高台	錆釉	錆釉	(4.4)	(3.8)	3.2	拓器質	24
358	西斜面北	SV7	G45-47	III層(崩落礫層)	大窯	水指	大窯	残存無	口)錆釉	錆釉	-	-	-		24
359	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	水指	大窯	残存無	口)鉄釉	鉄釉	(11.7)	-	-		24
360	西斜面北	SV7	G45-47	III層(崩落礫層)	大窯	搦鉢	第1段階後半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		25
361	西斜面北	SV7	G47-48	III層(崩落礫層)	大窯	搦鉢	第2段階	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		25

第7表 遺物観察表(5)

番号	小地区	遺構	グリッド	層位	種類	器種	時期・分類	底部	内面	外面	口径	高台(底)径	器高	備考	写真
362	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	播鉢	第2段階	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		25
363	西斜面北	SV7	G45-48	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	播鉢	第3段階前半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		
364	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	播鉢	第3段階前半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		
365	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	播鉢	第3段階前半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		25
366	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	播鉢	第3段階前半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		
367	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	播鉢	第3段階後半	残存無	錆釉	錆釉	(30.4)	-	-		
368	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	播鉢	第3段階後半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		
369	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	播鉢	第3段階後半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		25
370	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	播鉢	第3段階後半	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-		
371	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	播鉢	第3段階後半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		
372	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	播鉢	第3段階後半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		
373	西斜面北	SV7	G48	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	播鉢	第3段階後半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		
374	西斜面北	SV7	G45-48	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	播鉢	第3段階後半	残存無	錆釉	錆釉	(39.2)	-	-		
375	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	播鉢	第3段階後半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		25
376	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	播鉢	第3段階	残存無	錆釉	錆釉	(34.6)	-	-		
377	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	播鉢	第4段階前半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		
378	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	播鉢	第4段階前半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		
379	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	播鉢	第4段階前半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		
380	西斜面北	SV7	G45-48	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	播鉢	第4段階前半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		
381	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	連房	播鉢	第2小期	平底	錆釉	錆釉	(30.5)	(11.4)	15.6		17
382	西斜面北	SV7	G48	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	壺	第1~2段階	残存無	鉄釉	鉄釉・底露胎	-	-	-		
383	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	壺	第2~3段階	残存無	鉄釉	鉄釉・底露胎	-	(13.2)	-		24
384	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	香炉	第3段階	平底・脚付	灰釉・底無釉	無釉	-	-	-		26
385	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	香炉	第4段階前半	残存無	黄瀬戸釉	黄瀬戸釉	-	-	-		26
386	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	蓋(鍋)	第4段階前半	-	錆釉	錆釉	(36.0)	-	-		26
387	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	茶壺	大窯	残存無	無釉	錆釉	-	-	-	妬器質・加工円盤(径約4cm)	26
388	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	風炉	第3~4段階	平底	錆釉	錆釉	-	-	-		26
389	西斜面北	SV7	G48	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	風炉	第3~4段階	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		26
390	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	染付	碗	E群	残存無	-	-	(11.8)	-	-	394と同一個体か	27,28
391	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	染付	碗	E群	残存無	-	-	-	-	-		27,28
392	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	染付	碗	E群	高台	-	暗花文	-	(3.3)	-	饅頭心	27,28
393	西斜面北	SV7	G45-48	Ⅲ層(崩落礫層)	染付	碗	E群	高台	-	字款(高台内)	-	4.0	-	饅頭心	27,28
394	西斜面北	SV7	G45-48	Ⅲ層(崩落礫層)	染付	碗	E群	高台	-	-	-	-	-	饅頭心・390と同一個体か	
395	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	染付	碗	E群	高台	-	-	-	3.8	-	饅頭心	27,28
396	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	染付	碗	-	残存無	四方襷文	五彩	-	-	-		27,28
397	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	染付	小碗	-	残存無	-	-	(9.0)	-	-		
398	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	染付	小杯	-	残存無	-	-	(5.7)	-	-		27,28
399	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	染付	小杯	-	残存無	-	-	-	-	-		
400	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	染付	皿	B1群	高台	-	唐草文	-	-	-		27,28
401	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	染付	皿	B1群	高台	十字花文	-	-	(4.6)	-		
402	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	染付	皿	E群	高台	-	-	(11.3)	(6.7)	2.4		
403	西斜面北	SV7	G45-48	Ⅲ層(崩落礫層)	染付	皿	E群	高台	-	-	(12.6)	(7.5)	2.7		27,28
404	西斜面北	SV7	G45-48	Ⅲ層(崩落礫層)	染付	皿	E群	残存無	-	-	-	-	-		
405	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	染付	皿	C群	碁笥底	-	-	-	(4.4)	-		27,28
406	西斜面北	SV7	G45-48	Ⅲ層(崩落礫層)	青磁	碗	-	高台	-	-	-	(3.8)	-		18
407	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	青磁	碗	-	高台	-	-	-	(4.3)	-		18
408	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	青磁	碗	-	高台	-	-	-	(4.2)	-		
409	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	青磁	皿	-	高台	シノギ	-	(10.2)	(4.4)	3.2	輪花	18
410	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	青磁	鉢?	-	残存無	-	-	-	-	-		29
411	西斜面北	SV7	G48	Ⅲ層(崩落礫層)	青磁染付	-	-	高台	-	高台内に圈線	-	(6.2)	-		29
412	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	青磁?	碗	-	高台	-	-	-	-	-		
413	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	白磁	碗	-	残存無	-	-	(10.1)	-	-		29
414	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	白磁	碗	-	残存無	-	-	-	-	-		
415	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	白磁	小杯	-	残存無	-	-	-	-	-		
416	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	白磁	小杯	-	残存無	-	-	-	-	-		29
417	西斜面北	SV7	G48	Ⅲ層(崩落礫層)	白磁	皿	E群	高台	-	-	(11.7)	(6.1)	2.9	端反	29
418	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	白磁	皿	E群	残存無	-	-	-	-	-	端反	
419	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	白磁	皿	E群	残存無	-	-	-	-	-	反り	29
420	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	白磁	皿	E群	高台	-	-	-	(5.9)	-	端反	
421	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	白磁	皿	E群	高台	-	-	(13.0)	(7.5)	2.8	丸	29
422	西斜面北	SV7	G45-48	Ⅲ層(崩落礫層)	白磁染付	皿	-	残存無	-	-	(10.9)	-	-	丸	
423	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	中国製陶器	鉢	16C後半~17C	残存無	緑色釉+黄色釉	緑色釉	-	-	-	華南三彩	29
424	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(11.7)	-	(3.0)		
425	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(11.8)	-	(2.5)		
426	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(11.8)	-	2.9		
427	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(12.6)	-	2.3		
428	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(12.8)	-	2.5		
429	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(13.0)	-	2.7		
430	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(13.0)	-	-	タール痕	
431	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(13.2)	-	(2.4)		
432	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(13.4)	-	2.5		
433	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(13.5)	-	2.4		
434	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	13.6	-	(3.1)	タール痕	
435	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(13.6)	-	2.8		
436	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	13.9	-	3.0	タール痕	19
437	西斜面北	SV7	G45-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(13.9)	-	2.3		
438	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(14.8)	-	-		
439	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(14.9)	-	2.4		

第8表 遺物観察表(6)

番号	小地区	遺構	グリッド	層位	種類	器種	時期・分類	底部	内面	外面	口径	高台(底)径	器高	備考	写真
440	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(16.4)	-	3.1		
441	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(16.5)	-	(2.3)		
442	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(16.8)	-	(2.8)		
443	西斜面北	SV7	G48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	-	-	-		
444	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	-	-	-		
445	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	-	-	-		
446	西斜面北	SV7	G48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	-	-	-		
447	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	5.7	-	(1.5)		
448	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	6.7	-	1.5		
449	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(6.7)	-	(1.4)		
450	西斜面北	SV7	G48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	7.3	-	1.7		
451	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(7.8)	-	1.5		
452	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(7.8)	-	1.5		
453	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(7.9)	-	(1.6)		
454	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	8.4	-	2.0	タール痕	
455	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	8.6	-	1.7		
456	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	9.1	-	2.0	タール痕	
457	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	9.4	-	1.9	タール痕	
458	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	9.4	-	2.4	タール痕	
459	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(9.4)	-	1.9		
460	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	9.5	-	2.1	タール痕	
461	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(9.8)	-	1.8		
462	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(10.4)	-	1.6	タール痕	
463	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(10.5)	-	1.9		
464	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	10.7	-	2.0	タール痕	
465	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	10.8	-	1.9		
466	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	10.8	-	2.3		
467	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	11.1	-	2.4	タール痕	
468	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	11.1	-	2.3	タール痕	19
469	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	11.2	-	2.1	タール痕	
470	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	11.2	-	2.1	タール痕	
471	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	11.2	-	2.6		
472	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	11.3	-	2.2	タール痕	
473	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	11.5	-	2.3	タール痕	
474	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(11.5)	-	2.3		
475	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	11.6	-	2.4	タール痕	
476	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(11.6)	-	2.1		
477	西斜面北	SV7	G48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(12.4)	-	-	タール痕	
478	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(12.5)	-	-		
479	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(12.7)	-	2.4	タール痕	
480	西斜面北	SV7	G48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(13.8)	-	2.6	タール痕	
481	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(15.0)	-	-		
482	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	-	-	-		
483	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	-	-	-		
484	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	-	-	(2.3)	タール痕	
485	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	-	-	-		
486	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(8.2)	-	(1.5)		
487	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	9.2	-	1.6		
488	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	9.4	-	2.1		
489	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(9.5)	-	2.0		
490	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	10.6	-	2.4	タール痕	
491	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	10.7	-	2.1	タール痕	
492	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(10.7)	-	(2.1)	タール痕	
493	西斜面北	SV7	G48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(10.8)	-	2.3	タール痕	
494	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	10.9	-	2.1	タール痕	
495	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(11.1)	-	(2.1)	タール痕	
496	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(11.1)	-	2.1	タール痕	
497	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	11.6	-	2.4		
498	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(11.7)	-	2.3		
499	西斜面北	SV7	G48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(11.7)	-	2.6		
500	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(11.9)	-	(2.0)	タール痕	
501	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	Ⅲ(-10)	-	-	-	-	-	-	ロクロ成形・タール痕	
502	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	Ⅲ	-	-	-	-	-	-	ロクロ成形・タール痕	
503	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	Ⅲ	-	-	-	-	-	-	ロクロ成形・タール痕	
504	西斜面北	SV7	G48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	Ⅲ	-	-	-	-	-	-	ロクロ成形	
505	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	Ⅳ(A類)	-	-	ヨコナデ	-	-	-		30
506	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	Ⅳ(A類)	-	-	ヨコナデ	-	-	-		30
507	西斜面北	SV7	G45-48	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿		-	鉾滓付着	-	-	-	-	とりべ	
508	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	内耳鍋		残存無	-	-	-	-	-		30
509	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	鍋		残存無	-	-	-	-	-		30
510	西斜面北	SV7	G48	Ⅲ層(崩落礫層)	鉄製品	鉄釘		-	-	-	-	-	-	残存長7.1cm・幅0.7cm	32
511	西斜面北	SV7	G48	Ⅲ層(崩落礫層)	鉄製品	刀子		-	-	-	-	-	-	残存長5.9cm・幅1.2cm・厚さ0.4cm	
512	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	鉄製品	刀子		-	-	-	-	-	-	残存長4.6cm・幅0.9cm・厚さ0.4cm	
513	西斜面北	SV7	G48	Ⅲ層(崩落礫層)	銅製品	不明		-	-	-	-	-	-	厚さ0.2cm	
514	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	銅製品	不明		-	-	-	-	-	-		
515	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	鉄製品	鉄滓		-	-	-	-	-	-	長さ3.8cm・幅3.6cm・厚さ2.2cm	

第9表 遺物観察表(7)

番号	小地区	遺構	グリッド	層位	種類	器種	時期・分類	底部	内面	外面	口径	高台(底)径	器高	備考	写真
516	西斜面北	SV7	G47-48	Ⅲ層(崩落礫層)	瓦	平瓦	-	-	-	-	-	-	-	前端部に面取り・厚さ1.6cm	
517	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	加飾壺		残存無	-	赤彩	-	-	-		
518	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	椀		残存無	-	-	-	-	-		
519	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	山茶碗(東濃型)	碗	大畑大洞4	残存無	-	-	(12.6)	-	-		30
520	西斜面北	SV7	G45-47	Ⅲ層(崩落礫層)	古瀬戸	平碗	後期Ⅲ	残存無	灰釉	灰釉	-	-	-		31
521	西斜面北	SV7	G47	Ⅰ層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(12.3)	-	2.3		
522	西斜面北	SV7	G48	Ⅰ層	瓦	平瓦	-	-	-	-	-	-	-	厚さ1.5cm	
523	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	天目茶碗	第1段階後半	残存無	鉄釉	鉄釉+濃い錆釉	(11.5)	-	-		21
524	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	天目茶碗	第3段階前半	残存無	鉄釉	鉄釉+薄い錆釉	(11.8)	-	-		
525	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	天目茶碗	第3段階後半	残存無	鉄釉	鉄釉+露胎	(11.7)	-	-		
526	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	天目茶碗	第3段階	内反高台	鉄釉	鉄釉+露胎	(11.3)	4.2	5.8		
527	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	天目茶碗	第3段階	内反高台	鉄釉	鉄釉+濃い錆釉	-	(4.0)	-		
528	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	天目茶碗	第4段階前半	残存無	鉄釉	鉄釉+露胎	-	-	-		
529	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	天目茶碗	第4段階前半	残存無	鉄釉	鉄釉+露胎	(11.8)	-	-		21
530	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	天目茶碗	第4段階後半	残存無	鉄釉	鉄釉+露胎	(11.2)	-	-		21
531	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	小天目茶碗	第2段階	内反高台	鉄釉	鉄釉+濃い錆釉	-	(3.1)	-		
532	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	小天目茶碗	第3段階前半	残存無	鉄釉	鉄釉+濃い錆釉	(8.0)	-	-		22
533	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	小天目茶碗	第3段階	残存無	鉄釉	鉄釉+露胎	-	-	-		22
534	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	小天目茶碗	第4段階前半	残存無	鉄釉	鉄釉+露胎	(7.2)	-	-		22
535	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	丸碗	第4段階前半	削出輪高台	鉄釉	鉄釉+露胎	(11.4)	4.3	5.7		14
536	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	端反皿	第1段階前半	残存無	灰釉	灰釉	-	-	-		22
537	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	反り皿	第3段階後半	残存無	灰釉	灰釉	-	-	-		
538	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	丸皿	第2段階	付高台	灰釉	灰釉	-	(6.3)	-		
539	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	丸皿	第2段階	残存無	灰釉	灰釉	(10.1)	-	-		
540	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	丸皿	第2～3段階	削込高台	鉄釉	鉄釉	-	(4.5)	-		22
541	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	丸皿	第3段階前半	付高台	灰釉	灰釉	10.2	5.8	2.7		
542	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	丸皿	第3段階前半	付高台	灰釉	灰釉	(9.4)	(5.8)	2.3	内底印花文	
543	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	丸皿	第3段階前半	削出高台	灰釉	灰釉	(9.2)	(5.7)	2.0	外底のみ無釉・口縁刻み	
544	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	丸皿	第3段階前半	残存無	灰釉	灰釉	-	-	-		
545	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	丸皿	第3段階後半	付高台	灰釉	灰釉	9.8	5.4	2.6		15
546	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	内禿皿	第3段階後半	削込高台	灰釉	灰釉	10.2	5.3	2.2	内底のみ拭い	15
547	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	内禿皿	第3段階後半	付高台	灰釉	灰釉	-	-	2.1	内底のみ拭い	
548	西斜面中	SV7	G32	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	灯明皿	第2段階	平底	無釉	無釉	(10.1)	-	-	拓器質	
549	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	鉢	第3～4段階	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-	口縁端部のみ無釉	23
550	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	大皿	第3段階前半	残存無	薄い鉄釉	薄い鉄釉	(29.9)	-	-	拓器質	23
551	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	大皿	第3段階後半	平底	無釉	薄い鉄釉	(28.4)	(14.1)	5.4	拓器質・外ヘラケズリ	16
552	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	大皿	第4段階前半	平底	無釉	無釉	(27.4)	(12.6)	4.7	拓器質・内外ヘラケズリ	23
553	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	大皿	第4段階前半	削込高台	錆釉	錆釉	(27.0)	(17.7)	4.4	外面ヘラケズリ	23
554	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	折縁大皿	第3段階前半	削込高台	錆釉	錆釉	(25.7)	(15.3)	5.6		16
555	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	徳利	第3～4段階	残存無	●	鉄釉	-	-	-		16
556	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	徳利	第3～4段階	平底	錆釉	錆釉	-	(13.0)	-		24
557	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	搦鉢	第2段階	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		
558	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	搦鉢	第3段階前半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		25
559	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	搦鉢	第3段階前半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		25
560	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	搦鉢	第3段階前半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		
561	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	搦鉢	第3段階前半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		
562	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	搦鉢	第3段階後半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		
563	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	搦鉢	第3段階後半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		
564	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	搦鉢	第3段階後半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		25
565	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	搦鉢	第3段階後半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		25
566	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	搦鉢	第3段階後半	残存無	錆釉	錆釉	39.7	-	-		17
567	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	搦鉢	第4段階前半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		25
568	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	搦鉢	第4段階前半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		25
569	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	搦鉢	第4段階後半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		25
570	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	搦鉢	第3～4段階	平底	錆釉	錆釉	-	(12.8)	-		
571	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	搦鉢	第3～4段階	平底	錆釉	錆釉	-	(10.3)	-		
572	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	連房	搦鉢	第1小期	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		25
573	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	備前?	徳利	-	残存無	-	-	(5.1)	-	-	焼締	
574	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	染付	碗	B群	残存無	-	-	(11.3)	-	-	端反	27,28
575	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	染付	碗	(E群)	残存無	-	-	(11.5)	-	-	饅頭心	27,28
576	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	染付	碗	E群	高台	-	-	-	-	-	饅頭心	
577	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	染付	碗	(E群)	残存無	-	-	-	-	-	饅頭心	
578	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	染付	碗	(E群)	残存無	-	-	-	-	-		
579	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	染付	碗	-	残存無	四方襷文	五彩	-	-	-		27,28
580	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	染付	小杯	-	残存無	-	-	(6.0)	-	-		27,28
581	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	染付	皿	B1群	残存無	-	-	(9.1)	-	-		27,28
582	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	染付	皿	(B2群)	高台	-	-	-	(8.0)	-		
583	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	染付	皿	E群	高台	-	-	(10.8)	(5.8)	2.6		17
584	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	染付	皿	E群	高台	-	-	(12.8)	(7.0)	3.4		18
585	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	染付	皿	E群	残存無	-	-	-	-	-		
586	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	青磁	皿	-	残存無	-	-	(11.0)	-	-		29
587	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	青磁	皿	-	高台	-	-	-	-	-		
588	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	青磁	鉢?	-	残存無	-	-	-	-	-		
589	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	白磁	碗	-	残存無	-	-	-	-	-		29
590	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	白磁	碗	-	残存無	-	-	-	-	-		
591	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	白磁	碗	-	残存無	-	連弁文	-	-	-		

第10表 遺物観察表(8)



番号	小地区	遺構	グリッド	層位	種類	器種	時期・分類	底部	内面	外面	口径	高台(底)径	器高	備考	写真
592	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	白磁	皿	E群	残存無	-	-	-	-	-		
593	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	白磁	皿	E群	高台	-	-	-	(5.8)	-		
594	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(11.3)	-	2.4		
595	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(12.1)	-	2.1	タール痕	19
596	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(13.5)	-	1.8	タール痕	19
597	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(14.0)	-	-		
598	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(13.8)	-	-		
599	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(13.8)	-	2.6		
600	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(15.2)	-	2.7		19
601	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(15.5)	-	3.0		
602	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	-	-	-		
603	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	-	-	-		
604	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	-	-	(2.5)		
605	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	-	-	-		
606	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	-	-	(2.8)	タール痕	
607	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	-	-	-		
608	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(5.5)	-	-		
609	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	7.0	-	1.6		
610	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(7.7)	-	(2.1)	タール痕	
611	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(7.7)	-	-	タール痕	
612	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(8.6)	-	-	タール痕	
613	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(9.2)	-	1.9		
614	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	9.3	-	(2.4)	タール痕	
615	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	9.4	-	2.1	タール痕	
616	西斜面中	SV7	G31	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(9.4)	-	2.2		
617	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(9.5)	-	(2.1)	タール痕	
618	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	9.6	-	2.1	タール痕	
619	西斜面中	SV7	G32	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	9.8	-	2.2	タール痕	
620	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	9.9	-	(3.0)	タール痕	
621	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	10.2	-	2.4		
622	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	10.4	-	2.4		
623	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(10.5)	-	2.5		
624	西斜面中	SV7	G32	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	10.6	-	2.2	タール痕	
625	西斜面中	SV7	G32	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	10.6	-	1.8		
626	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	10.8	-	2.4		
627	西斜面中	SV7	G32	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	10.9	-	2.4	タール痕	
628	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	11.0	-	(2.4)		
629	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(11.1)	-	-	タール痕	
630	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(11.1)	-	-	タール痕	
631	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(11.1)	-	(2.3)		
632	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	11.3	-	2.2	タール痕	
633	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(11.3)	-	2.5		
634	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	11.8	-	2.4	タール痕	
635	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(11.8)	-	-	タール痕	
636	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(11.8)	-	2.8		
637	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(11.9)	-	2.2		
638	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	12.1	-	2.4		
639	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(13.1)	-	(2.8)		
640	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	14.3	-	2.6		19
641	西斜面中	SV7	G32	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	-	-	-		
642	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	-	-	-		
643	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	7.6	-	1.6		
644	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	7.7	-	1.9		
645	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(9.3)	-	1.8	タール痕	
646	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	10.0	-	1.9		
647	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(10.5)	-	2.6		
648	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	10.7	-	2.0		
649	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(10.8)	-	2.2		
650	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(10.9)	-	2.1	タール痕	
651	西斜面中	SV7	G32	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	11.0	-	2.0		
652	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	11.1	-	2.4		
653	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	11.2	-	-	タール痕	
654	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	11.2	-	2.1		
655	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	11.5	-	2.8	タール痕	
656	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	11.5	-	-	タール痕	
657	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(11.5)	-	-	タール痕	
658	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(11.6)	-	-	タール痕	
659	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(11.8)	-	-		
660	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	Ⅲ-10	-	-	-	(10.2)	(5.3)	2.3	ロクロ成形・タール痕	20
661	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	Ⅲ-11	-	-	-	-	-	-	ロクロ成形	
662	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	IV	-	-	ヨコナデ	-	-	-		30
663	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	鍋		残存無	-	-	-	-	-		
664	西斜面中	SV7	G32	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	羽釜		残存無	-	-	-	-	-		30
665	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	羽釜?		残存無	-	-	-	-	-		30
666	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	土製品	犬形		-	-	-	-	-	-	体長4.6,体高2.8	20
667	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	土製品	十能?		-	-	-	-	-	-	残存長9.4cm・径3.3cm	20
668	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	石製品	上臼		-	-	-	(20.8)	-	(12.2)	砂岩	20
669	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	石製品	羽臼		-	-	-	(12.7)	-	-	砂岩	20
670	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	石製品	羽口		-	-	-	-	-	-	砂岩	
671	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	鉄製品	鉄釘		-	-	-	-	-	-	残存長5.3cm・幅0.4cm	32

第11表 遺物観察表(9)

番号	小地区	遺構	グリッド	層位	種類	器種	時期・分類	底部	内面	外面	口径	高台(底)径	器高	備考	写真
672	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	鉄製品	刀子	-	-	-	-	-	-	-	残存長7.9cm・幅0.8cm・厚さ0.3cm	
673	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	銅製品	銭貨	■●元寶	-	-	-	-	-	-	径2.2cm	32
674	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	銅製品	銭貨	嘉祐通寶か	-	-	-	-	-	-	径2.3cm	32
675	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	銅製品	銭貨	至道元寶か	-	-	-	-	-	-	径2.4cm	32
676	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	瓦	丸瓦	-	-	-	-	-	-	-	厚さ1.4cm	
677	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	瓦	平瓦	-	-	-	-	-	-	-	厚さ1.6cm	
678	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	瓦	平瓦	-	-	-	-	-	-	-	厚さ1.8cm	
679	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	瓦	平瓦	-	-	-	-	-	-	-	前端部に面取り・厚さ1.7cm	32
680	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	瓦	平瓦	-	-	-	-	-	-	-	厚さ1.5cm	
681	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	瓦	平瓦	-	-	-	-	-	-	-	厚さ1.7cm	
682	西斜面中	SV7	G33	Ⅲ層(崩落礫層)	壁土	壁土	-	-	-	-	-	-	-		
683	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	壁土	壁土	-	-	-	-	-	-	-		
684	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	壁土	壁土	-	-	-	-	-	-	-		
685	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	須恵器	蓋	7C後葉	-	-	-	(15.5)	-	-		
686	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	古瀬戸	水注	中期	残存無	無釉	灰釉	-	-	-		31
687	西斜面中	SV7	G31-33	Ⅲ層(崩落礫層)	古瀬戸	四耳壺	後期Ⅰ・Ⅱ	残存無	灰釉	灰釉	-	-	-		31
688	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅲ層(崩落礫層)	古瀬戸	梅瓶	後期Ⅲ・Ⅳ	平底	灰釉	灰釉	-	(10.2)	-		31
689	西斜面中	SV7	G33	Ⅰ・Ⅱ層	染付	碗	(E群)	残存無	-	-	-	-	-		
690	西斜面中	SV7	G33	Ⅰ・Ⅱ層	白磁	皿	E群	高台	-	-	-	(8.8)	-		
691	西斜面中	SV7	G33	Ⅰ・Ⅱ層	山茶碗(尾張型)	碗	5型式	高台	-	-	-	(6.4)	-		30
692	西斜面中	SV7	G31-32	Ⅰ層	大窯	灯明皿	第1段階後半	平底	錆釉	錆釉	-	-	-	拓器質	22
693	西斜面中	攪乱	G32	攪乱	鉄製品	鉄釘	-	-	-	-	-	-	-	残存長8.9cm・幅0.4cm	
694	西斜面中	SX25	G33	埋土	大窯	天目茶碗	第2段階	残存無	鉄釉	鉄釉+薄い錆釉	(11.9)	-	-		21
695	西斜面中	SX25	G33	埋土	大窯	天目茶碗	第2段階	残存無	鉄釉	鉄釉+薄い錆釉	-	-	-		
696	西斜面中	SX25	G33	埋土	大窯	天目茶碗	第3段階後半	内反高台	鉄釉	鉄釉+露胎	11.3	4.2	6.1		14
697	西斜面中	SX25	G33	埋土	大窯	内禿皿	第3段階後半	削込高台	灰釉	灰釉	9.6	5.4	2.3	内底のみ無釉	15
698	西斜面中	SX25	G33	埋土	大窯	中皿	第2~3段階	付高台	鉄釉+藁灰	鉄釉	-	(6.8)	-		22
699	西斜面中	SX25	G33	埋土	大窯	建水	第3段階	平底	口)鉄釉・胴~)露胎	口~腰)鉄釉・底)露胎	11.3	8.6	7.6	口縁端部)無釉	16
700	西斜面中	SX25	G33	埋土	大窯	耳付水注	第3段階後半~第4段階前半	残存無	鉄釉	鉄釉	(2.9)	-	-		26
701	西斜面中	SX25	G33	埋土	大窯	播鉢	第3段階後半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		25
702	西斜面中	SX25	G33	埋土	陶器(不明)	大皿	-	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-	拓器質	
703	西斜面中	SX25	G33	埋土	白磁	小杯	-	残存無	-	-	-	-	-		
704	西斜面中	SX25	G33	埋土	白磁	皿	E群	残存無	-	-	-	-	-		
705	西斜面中	SX25	G33	埋土	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(12.4)	-	2.3	タール痕	
706	西斜面中	SX25	G33	埋土	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(12.8)	-	2.5		19
707	西斜面中	SX25	G33	埋土	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(13.5)	-	1.9		
708	西斜面中	SX25	G33	埋土	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(13.5)	-	2.7		
709	西斜面中	SX25	G33	埋土	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(13.7)	-	2.6	タール痕	
710	西斜面中	SX25	G33	埋土	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(13.7)	-	2.6	タール痕	19
711	西斜面中	SX25	G33	埋土	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(13.8)	-	-		
712	西斜面中	SX25	G33	埋土	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	14.0	-	2.7		19
713	西斜面中	SX25	G33	埋土	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(14.1)	-	(3.0)		
714	西斜面中	SX25	G33	埋土	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(14.7)	-	2.9	タール痕	19
715	西斜面中	SX25	G33	埋土	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(15.6)	-	2.8		
716	西斜面中	SX25	G33	埋土	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	6.9	-	1.7		
717	西斜面中	SX25	G33	埋土	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	7.3	-	1.7		
718	西斜面中	SX25	G33	埋土	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	7.7	-	1.7		19
719	西斜面中	SX25	G33	埋土	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	8.7	-	1.7	タール痕	
720	西斜面中	SX25	G33	埋土	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	8.9	-	2.0		19
721	西斜面中	SX25	G33	埋土	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	9.0	-	2.0		
722	西斜面中	SX25	G33	埋土	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	9.6	-	2.1	タール痕	
723	西斜面中	SX25	G33	埋土	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	9.7	-	2.1	タール痕	19
724	西斜面中	SX25	G33	埋土	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	9.7	-	2.0		
725	西斜面中	SX25	G33	埋土	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	11.2	-	2.4	タール痕	
726	西斜面中	SX25	G33	埋土	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	11.5	-	2.7	タール痕	
727	西斜面中	SX25	G33	埋土	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(11.8)	-	-		
728	西斜面中	SX25	G33	埋土	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(11.8)	-	-		
729	西斜面中	SX25	G33	埋土	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	12.4	-	2.7	タール痕	19
730	西斜面中	SX25	G33	埋土	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	14.2	-	2.9		
731	西斜面中	SX25	G33	埋土	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(14.3)	-	(3.0)		
732	西斜面中	SX25	G33	埋土	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(11.1)	-	2.4		
733	西斜面中	SX25	G33	埋土	土師器	耳皿	-	-	-	-	-	-	-		
734	西斜面中	SX25	G33	埋土	土製品	土鈴	-	-	-	-	-	-	-	長さ5.0cm・径3.4cm	30
735	西斜面中	SX25	G33	埋土	石製品	鉢	-	平底	-	-	-	(40.7)	-	笏谷石	20
736	西斜面中	SX25	G33	埋土	山茶碗(尾張型)	碗	12型式	平底	-	-	-	(5.8)	-		30
737	西斜面中		G32	Ⅲ層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(12.7)	-	-		
738	西斜面中		G31,32	灰白色土断割	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(10.7)	-	2.3	タール痕	
739	西斜面南	Ⅳ層	G34	黒色土	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	14.3	-	2.9	タール痕	
740	西斜面南		G28,34	Ⅲ層	大窯	天目茶碗	第2段階	内反高台	鉄釉	鉄釉+薄い錆釉					
741	西斜面南		G28,34	Ⅲ層	大窯	折縁皿	第4段階前半	削出高台	灰釉	灰釉					16
742	西斜面南		G28,34	Ⅲ層	大窯	折縁皿	第4段階前半	残存無	灰釉	灰釉	(10.1)	-	-	内ソギ菊皿	22
743	西斜面南		G28,34	Ⅲ層	大窯	鉢	第3~4段階	平底	鉄釉	~腰)鉄釉・底)錆釉	37.6	14.7	12.7	口縁端部)無釉	16
744	西斜面南		G28,34	Ⅲ層	大窯	徳利	第3~4段階	残存無	錆釉	鉄釉?	-	-	-	被熱	

第12表 遺物観察表(10)

番号	小地区	遺構	グリッド	層位	種類	器種	時期・分類	底部	内面	外面	口径	高台(底)径	器高	備考	写真
745	西斜面南		G28,34	Ⅲ層	大窯	播鉢	第3段階前半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		
746	西斜面南		G28,34	Ⅲ層	大窯	播鉢	第4段階前半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		25
747	西斜面南		G28,34	Ⅲ層	染付	皿	E群	高台	四方襷文		9.8	4.6	3.1	口内彎	18
748	西斜面南		G28,34	Ⅲ層	染付	皿	B1群	高台			(12.0)	(6.3)	2.7		17
749	西斜面南		G28,34	Ⅲ層	中国製陶器	壺		平底	露胎	口～腰鉄釉	(8.8)	(13.7)	-	焼締	18
750	西斜面南		G28,34	Ⅲ層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(10.4)	-	1.9		
751	西斜面南		G28,34	Ⅲ層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(12.4)	-	-	タール痕	
752	西斜面南		G28,34	Ⅲ層	瓦	丸瓦	-	-	-	-	-	-	-	厚さ1.4cm	
753	西斜面南		G28,34	Ⅲ層	瓦	平瓦	-	-	-	-	-	-	-	前端部に面取り・被熱・厚さ1.6cm	
754	西斜面南		G28,34	Ⅲ層	瓦	平瓦	-	-	-	-	-	-	-	前端部に面取り・厚さ1.6cm	
755	西斜面南		G28	Ⅲ層?(焼土混層直上)	石製品	鉢	-	残存無	-	-	(60.1)	-	(37.8)	笏谷石	20
756	西斜面南		G28,34	I・II層	大窯	天目茶碗	第2段階	内反高台	鉄釉	鉄釉+薄い錆釉				内底使用痕跡残存せず	
757	西斜面南		G27-28	I・II層	大窯	天目茶碗	第2段階	残存無	鉄釉	鉄釉+濃い錆釉	-	-	-		
758	西斜面南		G28,34	I・II層	大窯	天目茶碗	第3段階前半	残存無	鉄釉	鉄釉+薄い錆釉					
759	西斜面南		G28,34	I・II層	大窯	天目茶碗	第4段階前半	残存無	鉄釉	鉄釉+露胎					21
760	西斜面南		G27-28	I・II層	大窯	丸碗	第3段階	残存無	鉄釉	鉄釉+不明	-	-	-		
761	西斜面南		G28,34	I・II層	大窯	筒形碗	第4段階前半	残存無	鉄釉	鉄釉	(10.4)	-	-	被熱?・織部風	14
762	西斜面南		G28,34	I・II層	大窯	丸皿	第2段階	付高台	灰釉	灰釉					
763	西斜面南		G27-28	I・II層	大窯	丸皿	第3段階	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-	輪花	
764	西斜面南		G28,34	I・II層	大窯	丸皿	第4段階前半	付高台	灰釉	灰釉					15
765	西斜面南		G28,34	I・II層	大窯	丸皿	第4段階前半	削出高台	灰釉	灰釉					15
766	西斜面南		G27-28	I・II層	大窯	灯明皿	第1段階	残存無	無釉	無釉	-	-	-		
767	西斜面南		G28,34	I・II層	大窯	皿	第3段階	残存無	灰釉	灰釉	(9.4)	-	-		22
768	西斜面南		G27-28	I・II層	大窯	鉢	大窯	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		
769	西斜面南		G28,34	I・II層	大窯	徳利	第2～3段階	平底	鉄釉	～腰鉄釉	-	-	-		
770	西斜面南		G28,34	I・II層	大窯	徳利	第2～3段階	平底	錆釉	～腰鉄釉・底錆釉	-	(13.4)	-		24
771	西斜面南		G28,34	I・II層	大窯	徳利	第3～4段階	平底	露胎?	鉄釉	-	(9.7)	-		24
772	西斜面南		G27-28	I・II層	大窯	徳利	大窯	残存無	錆釉	鉄釉+錆釉	-	-	-		
773	西斜面南		G27-28	I・II層	大窯	播鉢	第3段階前半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		
774	西斜面南		G28,34	I・II層	大窯	播鉢	第4段階前半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		
775	西斜面南		G28,34	I・II層	染付	皿	B2群	残存無	四方襷文		(10.8)	-	-		
776	西斜面南		G28,34	I・II層	染付	皿	E群	残存無			-	-	-		
777	西斜面南		G28,34	I・II層	朝鮮製陶器?	蕎麦茶碗		高台	-	-	-	(6.2)	-	強い被熱?	
778	西斜面南		G28,34	I・II層	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	(14.8)	-	2.2		
779	西斜面南		G28,34	I・II層	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	-	-	-		
780	西斜面南		G28,34	I・II層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(7.1)	-	1.4		
781	西斜面南		G28,34	I・II層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(7.0)	-	(1.3)		
782	西斜面南		G28,34	I・II層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(10.7)	-	2.1	タール痕	
783	西斜面南		G28,34	I・II層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(9.1)	-	(1.4)		
784	西斜面南		G28,34	I・II層	古瀬戸	蓋(壺)	中期	-	錆釉	灰釉	-	-	-		31
785	西斜面南		G28,34	I・II層	陶器(近世)	灯明皿	近世	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		
786	西斜面南		G28,34	I層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	-	-	-		
787	西斜面南		G34	I層	鉄製品	鉄釘	-	-	-	-	-	-	-	残存長5.1cm・幅0.5cm	32
788	西斜面	SV7	-	Ⅲ層(崩落礫層)	大窯	壺	大窯	残存無	口錆釉	錆釉	(11.2)	-	-		26
789	西斜面	SV7	-	Ⅲ層(崩落礫層)	染付	皿	E群	高台			-	-	-		27,28
790	西斜面	SV7	-	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(10.4)	-	2.4		
791	西斜面	SV7	-	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	Ⅲ(-11)	-	-	-	-	-	-	ロクロ成形	
792	西斜面	SV7	-	Ⅲ層(崩落礫層)	土師器	皿	Ⅲ-13	-	-	-	(13.0)	(8.1)	2.7	ロクロ成形	
793	西斜面	SV7	-	Ⅲ層(崩落礫層)	古瀬戸	播鉢	後期?	平底	残存なし	錆釉	-	11.1	-	使用痕跡・ツルツル	31
794	西斜面	SV7	-	I層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	9.4	-	2.1		
795	西斜面	SV7	-	I層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	11.5	-	2.6		
796	西斜面	SV7	-	I層	鉄製品	鉄釘	-	-	-	-	-	-	-	残存長6.8cm・幅0.5cm	
797	西斜面	SV7	-	I層	鉄製品	鉄釘	-	-	-	-	-	-	-	残存長3.9cm・幅0.4cm	
798	西斜面	SV7	-	I層	石製品	五輪塔	空風輪	-	-	-	-	-	-	花崗岩・径15.4cm・高さ21.5cm 花崗岩・下面に自然面	
799	西斜面	SV7	-	I層	石製品	五輪塔	火輪	-	-	-	-	-	-	残・一辺22.7cm・高さ12.9cm	
800	西斜面	SV7	-	I層	石製品	五輪塔	火輪	-	-	-	-	-	-	花崗岩・一辺18.1cm・高さ10.3cm	
801	(西斜面)	(SV7)	-	I層	染付	皿	E群	残存無			-	-	-		27,28
802	(西斜面)	(SV7)	-	I層	常滑	鉢?		残存無	-	-	-	-	-		
803	南斜面	SV30	G26	Ⅲ層	大窯	天目茶碗	第1段階	輪高台	鉄釉	鉄釉+錆釉	-	-	(4.7)		
804	南斜面	SV30	G26	Ⅲ層	大窯	天目茶碗	第3段階前半	残存無	鉄釉	鉄釉+錆釉	(11.6)	-	-		21
805	南斜面	SV30	G26	Ⅲ層	大窯	小天目茶碗	第4段階前半	残存無	灰釉	灰釉(底部無釉)	-	-	-		22
806	南斜面	SV30	G26	Ⅲ層	大窯	丸皿	第2段階	付高台	灰釉	灰釉	(10.1)	(5.9)	2.2		
807	南斜面	SV30	G26	Ⅲ層	大窯	丸皿	第2～3段階	付高台	灰釉	灰釉	-	(5.0)	-		
808	南斜面	SV30	G26	Ⅲ層	大窯	丸皿	第2～3段階	付高台	灰釉	灰釉	-	-	4.8		
809	南斜面	SV30	G26	Ⅲ層	大窯	丸皿	第2～3段階	付高台	灰釉	灰釉	-	-	-	被熱	
810	南斜面	SV30	G26	Ⅲ層	大窯	丸皿	第3段階前半	付高台	灰釉	灰釉(高台内拭い)	(10.0)	(5.8)	2.9	被熱	
811	南斜面	SV30	G26	Ⅲ層	大窯	輪花皿	第3段階前半	残存無	鉄釉・灰釉流し	鉄釉・灰釉流し	-	-	-		22
812	南斜面	SV30	G26	Ⅲ層	大窯	徳利	第3～4段階	平底	錆釉	鉄釉(底部無釉)	-	6.7	-		16
813	南斜面	SV30	G26	Ⅲ層	大窯	播鉢	第3段階後半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		

第13表 遺物観察表(11)

番号	小地区	遺構	グリッド	層位	種類	器種	時期・分類	底部	内面	外面	口径	高台(底)径	器高	備考	写真
814	南斜面	SV30	G26	Ⅲ層	染付	皿	不明	高台			-	(5.3)	-		
815	南斜面	SV30	G26	Ⅲ層	染付	皿	E群	残存無	四方襷文		-	-	-	口)内彎	
816	南斜面	SV30	G26	Ⅲ層	白磁	皿	E群	高台	-	-	-	-	-		
817	南斜面	SV30	G26	Ⅲ層	瓦器	火鉢?	-	残存無	-	-	-	-	-		30
818	南斜面	SV30	G26	Ⅲ層	瓦	平瓦	-	-	-	-	-	-	-	厚さ1.4cm	
819	南斜面	SV30	G26	Ⅲ層	常滑	甕	5型式	残存無	-	-	-	-	-		
820	南斜面	SV30	G26	Ⅲ層	山茶碗(東濃型)	碗	大洞東1~脇之島3	残存無	-	-	-	-	-		
821	南斜面	SV30	G26	I層	大窯	德利	第3~4段階	残存無	錆釉	鉄釉	-	-	-		
822	南斜面	SX43	G24	Ⅲ層	大窯	小杯	第3段階	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-		
823	南斜面	SX43	G24	Ⅲ層	大窯	丸皿	第3段階前半	残存無	灰釉	鉄釉	-	-	-		
824	南斜面	SX43	G24	Ⅲ層	大窯	搦鉢	第4段階前半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		
825	南斜面	SX43	G24	Ⅲ層	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	-	-	-		
826	南斜面	SX43	G24	Ⅲ層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(7.6)	-	1.7		
827	南斜面	SX43	G24	Ⅲ層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(9.8)	-	1.8		
828	南斜面	SX43	G24	Ⅲ層	瓦	平瓦	-	-	-	-	-	-	-	厚さ1.5cm	
829	南斜面	SX43	G24	I・II層	大窯	天目茶碗	第3段階	残存無	鉄釉	鉄釉+不明	-	-	-		
830	南斜面	SX43	G24	I・II層	大窯	小天目茶碗	第1段階	輪高台	鉄釉	鉄釉+濃い錆釉	-	(2.9)	-	831と同一個体	
831	南斜面	SX43	G24	I・II層	大窯	小天目茶碗	第2段階	残存無	鉄釉	鉄釉+濃い錆釉	-	-	-	830と同一個体	
832	南斜面	SX43	G24	I・II層	大窯	丸皿	第1~2段階	付高台	灰釉+印花文	灰釉	-	(5.5)	-		
833	南斜面	SX43	G24	I・II層	大窯	丸皿	第2~3段階	付高台	灰釉	灰釉(高台内無釉)	-	(4.3)	-		
834	南斜面	SX43	G24	I・II層	大窯	鉢	第3段階	削込高台	鉄釉	錆釉+露胎	-	(9.0)	-		23
835	南斜面	SX43	G24	I・II層	大窯	香炉	第3段階	残存無	灰釉	灰釉	(8.9)	-	-		26
836	南斜面	SX43	G24	I・II層	大窯	不明	大窯	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		
837	南斜面	SX43	G24	I・II層	染付	碗	E群	高台	-	-	(3.5)	-	-	饅頭心	
838	南斜面	SX43	G24	I・II層	青磁	皿		残存無			-	-	-		
839	南斜面	SX43	G24	I・II層	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	-	-	-		
840	南斜面	SX43	G24	I・II層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(6.9)	-	1.7		
841	南斜面	SX43	G24	I・II層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	9.7	-	1.8	タール痕	
842	南斜面	SX43	G24	I・II層	土師器	皿	Ⅲ	-	-	-	-	-	-	ロクロ成形・タール痕	
843	南斜面	SX43	G24	I・II層	瓦	飾り瓦	-	-	-	-	-	-	-	表面;ナデ・裏面;ヘラ状工具による削り取り・厚さ2.9cm	32
844	南斜面	SX43	G24	I・II層	灰釉陶器	碗		高台	-	-	-	(5.1)	-		
845	南斜面		G26-27	Ⅲ層	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	13.5	-	2.9	タール痕	
846	南斜面		G26-27	Ⅲ層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	9.5	-	1.8	タール痕	
847	南斜面		G26-27	Ⅲ層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(9.8)	-	(1.9)	タール痕	
848	南斜面		G26-27	Ⅲ層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(10.6)	-	2.1		
849	南斜面		G26-27	Ⅲ層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	10.9	-	1.9		
850	南斜面		G26-27	Ⅲ層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	11.1	-	2.5	タール痕	
851	南斜面		G26-27	Ⅲ層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	11.7	-	2.0	タール痕	
852	南斜面		G26-27	Ⅲ層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	11.8	-	2.4		
853	南斜面		G26-27	Ⅲ層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	13.1	-	2.8		
854	南斜面		G26-27	Ⅲ層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	10.3	-	2.3	タール痕	
855	南斜面		G26-27	Ⅲ層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	10.9	-	2.4		
856	南斜面		G26-27	Ⅲ層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(11.5)	-	1.9	タール痕	
857	南斜面		G26-27	I・II層	大窯	天目茶碗	第3段階	内反高台	鉄釉	鉄釉+露胎	-	3.9	-		
858	南斜面		G25-26	I・II層	大窯	天目茶碗	第4段階前半	内反高台	鉄釉	鉄釉+露胎	-	3.9	-		21
859	南斜面		G26-27	I・II層	大窯	鉢	第3段階	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-		
860	南斜面		G26-27	I・II層	大窯	搦鉢	第4段階前半	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		
861	南斜面		G26-27	I・II層	大窯	不明	大窯	削出輪高台	鉄釉+錆釉	鉄釉+錆釉	-	(5.4)	-		
862	南斜面		G26-27	I・II層	染付	皿	E群	残存無	四方襷文		-	-	-	被熱	27,28
863	南斜面		G26-27	I・II層	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	-	-	-		
864	南斜面		G26-27	I・II層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	6.8	-	(1.3)		
865	南斜面		G26-27	I・II層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(7.0)	-	(1.6)		
866	南斜面		G26-27	I・II層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	11.2	-	2.3	タール痕	
867	南斜面		G26-27	I・II層	土師器	耳皿		-	-	-	-	1.9	-		20
868	南斜面		G25-26	I・II層	瓦器	火鉢?	-	残存無	-	-	-	-	-		30
869	南斜面		G27-28	I・II層	鉄製品	鉄釘	-	-	-	-	-	-	-	幅0.6cm	
870	南斜面		G27-28	I・II層	鉄製品	鉄釘	-	-	-	-	-	-	-	幅0.6cm	
871	南斜面		G27-28	I・II層	銅製品	切羽	-	-	-	-	-	-	-	厚さ0.1cm	32
872	南斜面		G25-26	I・II層	古瀬戸	瓶子	後期Ⅲ・Ⅳ	残存無	錆釉	鉄釉	-	2.5	-		31
873	南斜面		G23-24	表土	大窯	鉢	第3段階	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-		23
874	南斜面	攪乱	G26-27	攪乱	大窯	端反皿	第1段階	付高台	灰釉	灰釉(高台内無釉)	(9.0)	(5.0)	2.2		15
875	南斜面	攪乱	G26-27	攪乱	染付	碗	E群	残存無			-	-	-		27,28
876	南斜面	攪乱	G26-27	攪乱	土師器	皿	M4類	-	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-	-		30
877	A地区	(G11)	焼土層	大窯	天目茶碗	第2段階	内反高台	鉄釉	鉄釉+濃い錆釉	-	4.2	-	-		
878	A地区	(G11)	焼土層	大窯	天目茶碗	第3段階	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-	-		
879	A地区	(G11)	焼土層	大窯	天目茶碗	第3段階	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-	-		
880	A地区	(G11)	焼土層	大窯	丸皿	第2段階	残存無	灰釉	灰釉	-	-	-	-		
881	A地区	(G11)	焼土層	大窯	皿	第2~3段階			鉄釉	鉄釉	-	-	-		
882	A地区	(G11)	焼土層	白磁	小杯		残存無	線描き	-	-	-	-	-		29
883	A地区	(G11)	焼土層	白磁	皿	E群	高台	-	-	-	-	-	-	被熱	
884	A地区	(G11)	焼土層	白磁	皿	E群	残存無	-	-	-	-	-	-	被熱	
885	A地区	(G11)	焼土層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	-	(9.7)	-	1.7		
886	A地区	(G11)	焼土層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	-	(11.0)	-	-	タール痕	

第14表 遺物観察表(12)

番号	小地区	遺構	グリッド	層位	種類	器種	時期・分類	底部	内面	外面	口径	高台 (底)径	器高	備考	写真
887		A地区	(G11)	焼土層	山茶碗 (東濃型)	碗	大畑大洞4(新)	残存無	-	-	-	-	-		
888		A地区	-	I層	大窯	天目茶碗	第3段階後半	残存無	鉄釉	鉄釉+錆釉	-	-	-		
889		A地区	-	I層	大窯	天目茶碗	第3段階後半	残存無	鉄釉	鉄釉+露胎	-	-	-		
890		A地区	-	I層	大窯	丸碗	第1段階	残存無	灰釉	灰釉	-	-	-		22
891		A地区	-	I層	大窯	丸皿	第3段階後半	付高台	灰釉	灰釉	(8.2)	(4.7)	1.9		
892		A地区	-	I層	大窯	建水	第3~4段階	残存無	口)鉄釉	鉄釉	-	-	-		24
893		A地区	-	I層	大窯	風炉	第3~4段階	残存無	錆釉	錆釉	-	-	-		26
894		A地区	-	I層	大窯	耳付水注	大窯	残存無	鉄釉	鉄釉	-	-	-		
895		A地区	-	I層	大窯	蓋(土瓶)	大窯	-	(口)錆釉	錆釉	-	-	-		26
896		A地区	-	I層	染付	ツバ皿	F群	残存無			-	-	-		27,28
897		A地区	-	I層	青磁	盤・鉢		残存無			-	-	-		29
898		A地区	-	I層	白磁	碗		残存無	-	錆連弁文	-	-	-		29
899		A地区	-	I層	古瀬戸	瓶子	後期I・II	高台		灰釉	-	-	-		31
900		A地区	-		攪乱	銅製品	銭貨	開元通寶	-	-	-	-	-	径2.5cm	32
901		E地区	-	I・II層	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	-	-	(2.4)	タール痕	
902		E地区	-	I・II層	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	-	-	(2.2)		
903		E地区	-	I・II層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(9.5)	-	(1.7)		
904		E地区	-	I・II層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	11.5	-	2.4	タール痕	
905		E地区	-	I層	大窯	天目茶碗	第3段階後半	残存無	鉄釉	鉄釉+露胎	(11.0)	-	-		21
906		E地区	-	I層	大窯	天目茶碗	第3段階後半	残存無	鉄釉	鉄釉+露胎	-	-	-		
907		E地区	-	I層	大窯	丸皿	第3段階前半	付高台	灰釉	灰釉	(10.7)	(5.8)	2.8		15
908		E地区	-	I層	染付	碗	E群	高台		「天下太平」(高台内)	-	(4.2)	-	饅頭心	27,28
909		E地区	-	I層	染付	皿	C群	碁笥底			-	-	-		
910		E地区	-	I層	土師器	皿	B2類	-	ヨコナデ	-	-	-	(2.2)		
911		E地区	-	I層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(8.4)	-	-	タール痕	
912		E地区	-	I層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(9.8)	-	(1.7)		
913		E地区	-	I層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	(9.7)	-	(2.1)		
914		E地区	-	I層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	11.8	-	(2.4)	タール痕	
915		E地区	-	I層	土師器	皿	C2類	-	一方向ナデ	-	-	-	-		

第15表 遺物観察表(13)

小地区	遺構	グリッド	層位	大 窯 製 品																							
				天目茶碗	小天目茶碗	丸碗	小碗	小杯	端反皿	反り皿	丸皿	稜皿	内禿皿	折縁皿	灯明皿	皿	大皿	鉢	徳利	水注	茶入	壺	蓋	風炉	香炉	挿鉢	不明
平坦地北		G35,37	I																								
平坦地北		G37	I	1						1										1		1			1		
平坦地北		G42	I・II	1	2			1	2			7	1				4				3					2	2
平坦地北		G42-43	I・II																							2	
池北東	SV29	G3	III	2				1	1			1				2				4						5	
池北東	SV29	G3	礫層	1							2	1				2		4	5							1	1
池北東	SV29	G3	II	1											1				1							1	2
池北東	SX7	G3	II		1										2											3	
池北東	SX7	G3	I・II																								
池北東		G3	II	2																							2
池北東		G3	I・II	5					1						2				2								5
池北東		G3	I	1					1						5		1				6					4	
池北東	G10護岸	G10							3												1				1	1	
池北東		G10	I・II																							1	1
池北東		G10	I		1				2					1	4		1	3			2					2	1
池北西	SV34	G39	I～III	4				1	1		4				1		1	3								3	2
池北西		G43	I・II	8					1		8	1				6					4					5	1
池南東		G4	II・III															1									
池南東		G4-6	I													1											
池南東		G4,11	I	1												1											
池南東		G5	III・IV	3					1		1					2			3							1	3
池南東		G5	II	1							2				1	1		2	3		1					2	2
池南東		G5	I												1											2	2
池南東		G6	II・III																								
池南東		G6	I								1																
池南東		G6,13	III												1												
池南東		G11	IV						1										1								
池南東		G11	I・II	2					1	2					2		1	1							1		
池南東		G11	I															2								1	1
池南東	攪乱8	G11	攪乱																							1	1
池南東		G12	III・IV	1												1											
池南東		G12	II・III						1																		1
池南東		G12	I・II	1		1			2		4					5		1	1								1
池南東		G12	I	3					2		7					7		2	1		1					1	6
池南東		G13	I・II	1					1		2					2											
池南東		G13	I	2							1				1	4											1
池南東	攪乱5	G13	攪乱																							1	
池南西		G17	I・II						1		1				1	3			1			1			1		
池南西		G17	I						1		1			1		1										2	6
池南西	攪乱	G17	攪乱													1											
池南西	攪乱1・2	G17-18	攪乱													2										2	
池南西		G18	II・III																								1
池南西		G18	I・II								1																2
池南西		G18	I	1							1					2									1		
池南西	攪乱1	G18	攪乱												1												
池南西		G19	I	5							1																
池南西	攪乱6	G19	攪乱	1																							
池南西	攪乱7	G19	攪乱															1									
池南西		G21	下層遺構																								
池南西		G21	I・II																								1
池南西		G21-22	I																								
池南西		G22	IV													1											
池南西		G22	I	4							2					1	1								1	3	2
平坦地南		G7	I・II																1								
平坦地南		G7	I	3	1							1							3								1
平坦地南	攪乱4	G7	攪乱																								3
平坦地南		G7-8	I																								2
平坦地南	攪乱3	G7,14	攪乱													1											
平坦地南		G8	I・II																								
平坦地南		G14	I																								
平坦地南		G14-15	I・II																								
平坦地南		G14-15	I	2							1					2			2							1	1
平坦地南		G14-15	攪乱	1																							
平坦地南		G15	I・II																								
平坦地南		G15	I						1																		
平坦地南		G20	I																								1

第 16 表 遺物集計表 ( 1 ) - 1

染付				青磁				白磁				中国製陶器	朝鮮製陶器	土師器皿	須恵器	灰釉陶器	山茶碗(尾張型)	山茶碗(東濃型)	古瀬戸製品	常滑産陶器	土師器	瓦器	金属製品	石製品	土製品	瓦	壁土	不明	合計
碗	小杯	皿	不明	碗	皿	鉢	不明	碗	小杯	皿	染付皿																		
																		1		3			1						5
														9									1						15
5			2			1	1			5		1	282	1			1					1				1	1	336	
			2				1		1			35	1															42	
		2	2									3	57	1		2		1	3			2						89	
												133										1						151	
											1					1						1						9	
								1				3																10	
											1	82										1						84	
	1									1		1			1								1					10	
			1						1	1						2	1	1										22	
1		2	5						1	1		2	1	21					1			13				1	1	68	
																	1											7	
									1			1	26															30	
			6				1					2	29	1								13		1		1	1	71	
1										1	1	1	89						4			4			1			122	
6	1	1	8									3	283				1			1	3					1		342	
													2	37														40	
															3	1												5	
												1						1										4	
			3							1			8				1	4		1		3			1			37	
		1								1		1	58				1					2	1					81	
												4										1						10	
												15										1						16	
			1									20										2						24	
												74										6					5	86	
												2																4	
			1							3		2	1	29				1				4				1		52	
											1	1	7	1		1	2					1						16	
											1	1	2					2				1						9	
1			2							1							1	1	1									9	
			1		1								40		1		1	1					1			1		48	
3		1	3				2						20	1			2					7	1			1		57	
1		2	4		4				2	2		1	102				4	7		1	1	10				1	2	175	
			1						1	2		1	34				1					24					1	71	
1	1		3		2					2			47			1		1				4				5		76	
													7															8	
1													31							1		6					12	60	
5			5							4		7	66					1					1			5		107	
										1			1									1						4	
3					1					2			29					2				1					3	45	
1										1			1														1	5	
1			1										6														8	19	
			3							1		2	19					1				2					5	38	
												2															4	7	
		1	2							1		4	30									5						49	
										1		1	8									1					1	13	
					1								7					1										10	
													3															3	
											1		23				3					1						29	
													172															172	
													20															21	
			2		1		1					2	53				1					4			1	3		82	
													3									1						5	
			2									1	20									8			2	3		45	
												2																5	
			2										7				1	1	4	1			1					19	
													7				1											9	
													1					1										2	
													4									1						5	
													6										1					7	
			1							2			8				1	2	3									26	
													6															1	
												2	5	1				2			3	1		1				6	
													7															16	
																												8	

第16表 遺物集計表(1)-2





染付				青磁				白磁					中国製陶器	朝鮮製陶器	土師器皿	須恵器	灰釉陶器	山茶碗(尾張型)	山茶碗(東濃型)	古瀬戸製品	常滑産陶器	土師器	瓦器	金属製品	石製品	土製品	瓦	壁土	不明	合計	
碗	小杯	皿	不明	碗	皿	鉢	不明	碗	小杯	皿	染付皿	不明																			
			2							1					51																57
															2																6
		2	1						1			1			7				1	1									1	24	
															50	1		1					3	1	1					69	
															16								1							17	
9		7	20	1	1			1	2	11		6			1,665	5	1	2		1	10								1,902		
2		2	2	2						1	1	2			124															164	
			2							2					19								4							37	
															28															32	
16	3	11	15	2		1	1	3	1	16		11	1	1	2,074	1		2	4	5		67	1			7		1	2,489		
			3		1					4		2			337				1	1		4				3			389		
															61															61	
5	1	7	8		1					4		5			956		1	2	1	2		23	1	2	9	15			1,125		
3	1	6	9		1			3		1					660	2			16			9	1		8	29			849		
															151															151	
			1												75			1	1			1			13	3			132		
2		2	3				1	1		2		4			1,215		1				4	1	2		1	37	17		1,358		
															24															24	
		6	9						1	1		4			873			1			2	28	1	2	1	24			983		
																						1					17			19	
															145															145	
															18															18	
															2															2	
1		3	3									1			437	2		3	1			7	1	2					509		
		4	3							1		2		1	196			1	1	1		2			12	2			261		
															71							1								72	
															30															30	
		1	2												131			1				5	3						154		
2		1										2			26					5		1				1			40		
1					1		1					1			107		1			1		1	2		2				139		
			1									1			43								4		1				56		
															57															57	
									1													1				1				3	
1												1						1	2			1	6						22		
1		2	1		2				1	4								1	1	2		2	18		1	1	3		78		
															6															6	
															585															585	
		1			2										267			1	1			14							294		
1		1	1									1			45								1						56		
1							1			1		1							2			3	1		2				35		
		3	4	3					1	2		1			78			1	4			1	1					2	114		
	2	4	5			1		1		1		6	1		193	1	1		2	2		3							296		
																						1								2	
1		1	3									1			140							3			1				161		
															75							1								80	
76	10	75	160	15	12	3	10	10	16	86	2	93	8	6	13,143	21	6	19	38	73	26	29	9	379	25	10	102	176	8	16,162	

第17表 遺物集計表(2)-2

# 第5章 自然科学分析

## 第1節 池泉遺構SR1・柵状遺構SX25の珪藻化石群集

藤根 久 (パレオ・ラボ)

### 1. はじめに

珪藻は、10~500  $\mu\text{m}$ ほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形や刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている（小杉，1988；安藤，1990）。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においても、わずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境（例えばコケの表面や湿った岩石の表面など）に生育する珪藻種が知られている。こうした珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、過去の堆積物の堆積環境について知ることができる。ここでは、千畳敷遺跡A地区の池堆積物中の珪藻化石群集を調べ、堆積環境について検討した。

### 2. 試料と方法

試料は、A地区の池堆積物及び整地層土壌の10点である（第18表・第41図）。各試料について以下の処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作製した。

No.	遺構	土層	特徴	備考
1	SR1	①層上	黒褐色 (2.5Y3/2) やや有機質な粘土	
2	SR1	①層上	黒褐色 (2.5Y3/1) 有機質粘土	
3	SR1	①層上	暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 有機質粘土	
4	SR1	①層上	暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト質粘土、有機質	
5	SR1	①層上	黒褐色 (2.5Y3/1) 有機質粘土	
6	SR1	①層上	オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト質粘土	
7	SR1	④層	暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 粘土質シルト、土壌	
8	SR1	③層	暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 礫混じり粘土質シルト、土壌	
9	SR1	④層	黒褐色 (2.5Y3/1) 砂混じり粘土質砂、土壌	
12	SX25	埋土	黒色 (2.5Y2/1) 礫混じりシルト質粘土	遺構内から哺乳類の骨片出土

第18表 珪藻分析試料一覧

(1) 湿潤重量約0.5gを取り出し、秤量した後ビーカーに移して30%過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。(2) 反応終了後、水を加え1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を5回ほど繰り返した。(3) 懸濁残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットで適量取り、カバーガラスに滴下し乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入しプレパラートを作製した。なお、分析No. 12は、海水種珪藻化石が検出されたため、再度確認するために同一試料から採取して処理し、分析No. 12aとNo. 12bとした。

作製したプレパラートは顕微鏡下600倍および1500倍で観察し、珪藻化石200個体以上について同定・計数した。なお、珪藻化石の少ない試料はプレパラート全面を観察した。珪藻殻は、完形と非完形（原則として半分程度残っている殻）に分けて計数し、完形殻の出現率として示した。また、試料の処理重量とプレパラート上の計数面積から堆積物1g当たりの殻数を計算した。

### 3. 珪藻化石の環境指標種群

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉（1988）および安藤（1990）が設定した環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広布種（W）として、海水～汽水種は不明種（?）としてそれぞれ扱った。また、破片のため属レベルの同定にとどめた分類群は、その種群を不明（?）として扱った。以下に、小杉（1988）が設定した海水～汽水域における環境指標種群と安藤（1990）が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

〔外洋指標種群 (A) 〕 : 塩分濃度が35‰以上の外洋水中を浮遊生活する種群である。

〔内湾指標種群 (B) 〕 : 塩分濃度が26～35‰の内湾水中を浮遊生活する種群である。

〔海水藻場指標種群 (C1) 〕 : 塩分濃度が12～35‰の水域の海藻や海草 (アマモなど) に付着生活する種群である。

〔海水砂質干潟指標種群 (D1) 〕 : 塩分濃度が26～35‰の水域の砂底 (砂の表面や砂粒間) に付着生活する種群である。この生育場所には、ウミナシ類、キサゴ類、アサリ、ハマグリ類などの貝類が生活する。

〔海水泥質干潟指標種群 (E1) 〕 : 塩分濃度が12～30‰の水域の泥底に付着生活する種群である。この生育場所には、イボウミナシ主体の貝類相やカニなどの甲殻類相が見られる。

〔汽水藻場指標種群 (C2) 〕 : 塩分濃度が4～12‰の水域の海藻や海草に付着生活する種群である。

〔汽水砂質干潟指標種群 (D2) 〕 : 塩分濃度が5～26‰の水域の砂底 (砂の表面や砂粒間) に付着生活する種群である。

〔汽水泥質干潟指標種群 (E2) 〕 : 塩分濃度が2～12‰の水域の泥底に付着生活する種群である。淡水の影響により、汽水化した塩性湿地に生活するものである。

〔上流性河川指標種群 (J) 〕 : 河川上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらは、殻面全体で岩にぴったりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことがない。

〔中～下流性河川指標種群 (K) 〕 : 河川の中～下流部、すなわち河川沿いで河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種には、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

〔最下流性河川指標種群 (L) 〕 : 最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種には、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになるためである。

〔湖沼浮遊生指標種群 (M) 〕 : 水深が約1.5m以上で、岸では水生植物が見られるが、水底には植物が生育していない湖沼に出現する種群である。

〔湖沼沼沢湿地指標種群 (N) 〕 : 湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい種群である。

〔沼沢湿地付着生指標種群 (O) 〕 : 水深1m内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地において、付着の状態に優勢な出現が見られる種群である。

〔高層湿原指標種群 (P) 〕 : 尾瀬ヶ原湿原や霧ヶ峰湿原などのように、ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

〔陸域指標種群 (Q) 〕 : 上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である (陸生珪藻と呼ばれている)。

#### 4. 結果および考察 (第19表・第40図・写真図版33)

堆積物から検出された珪藻化石は、海水種が8分類群7属6種、汽水種が2分類群2属2種、淡水種が85分類群23属62種3変種であった。これらの珪藻化石は、海水域における4環境指標種群 (A、B、C1、E1)、淡水域における4環境指標種群 (K、N、O、Q) に分類された (第18表)。これら珪藻化石群集の特徴からⅠ～Ⅷ帯に分帯された。以下では、各珪藻帯における珪藻化石の特徴と堆積環境について述べる。

##### Ⅰ帯 (分析No. 12)

堆積物1g中の珪藻殻数は $1.8 \times 10^4$ 個および $6.9 \times 10^3$ 個、完形殻の出現率は34.5%および23.3%である。全体としては淡水種が多いが、海水種～汽水種を含む。環境指標種群では、いずれも陸域指標種群(Q)がやや比較的多く検出され、沼沢湿地付着生指標種群(O)のほか、外洋指標種群(A)、内湾指標種群(B)、海水藻場指標種群(C1)、海水泥質干潟指標種群(E1)も検出された。堆積環境としては沼沢湿地を伴うジメジメとした陸域環境と考えられる。ただし、何らかの原因により海～汽水種珪藻が混じる状況があったことが分かる。なお、基盤層はチャートからなるため、これら海～汽水種珪藻化石は含まない。

海～汽水種の珪藻化石が混じる可能性としては、海～汽水域の土壌の混入、海産物に伴った付着土の混入等が考えられる。

#### II帯(分析No. 8、9)

堆積物1g中の珪藻殻数は $1.2 \times 10^4$ 個および $4.1 \times 10^3$ 個、完形殻の出現率は15.4%および50.0%である。全体的に検出された珪藻化石は少ない。環境指標種群では、陸域指標種群(Q)が比較的多く検出され、その他は広布種などである。

こうしたことから、ジメジメとした陸域環境と推定される。

#### III帯(分析No. 7)

堆積物1g中の珪藻殻数は $4.0 \times 10^4$ 個と多く、完形殻の出現率は25.5%である。全体的に検出された珪藻化石は少ない。環境指標種群では、陸域指標種群(Q)が比較的多く検出され、沼沢湿地付着生指標種群(O)を伴う。

こうした環境指標種群の特徴から、沼沢湿地を伴うジメジメとした陸域環境と推定される。

#### IV帯(分析No. 1～6)

堆積物1g中の珪藻殻数は $3.7 \times 10^4$ 個～ $1.3 \times 10^6$ 個、完形殻の出現率は26.2%～72.3%である。全体的に珪藻化石殻が多い。環境指標種群では、沼沢湿地付着生指標種群(O)が特徴的に多く、陸域指標種群(Q)を伴う。

こうした環境指標種群の特徴から、ジメジメとした陸域を伴う沼沢湿地環境と推定される。

#### 5. おわりに

A地区の池堆積物10点の珪藻分析を行った。その結果、これら珪藻化石群集の特徴からI～IV帯に分帯された。I帯では、堆積環境としては沼沢湿地を伴うジメジメとした陸域環境と考えられた。しかし、何らかの原因により海～汽水種の珪藻化石が混入したことが分かった。II帯は、珪藻化石が少なく、ジメジメとした陸域と考えられた。III帯は、珪藻化石が少なく、沼沢湿地を伴うジメジメとした陸域環境と推定された。IV帯は、ジメジメとした陸域を伴う沼沢湿地環境と推定された。

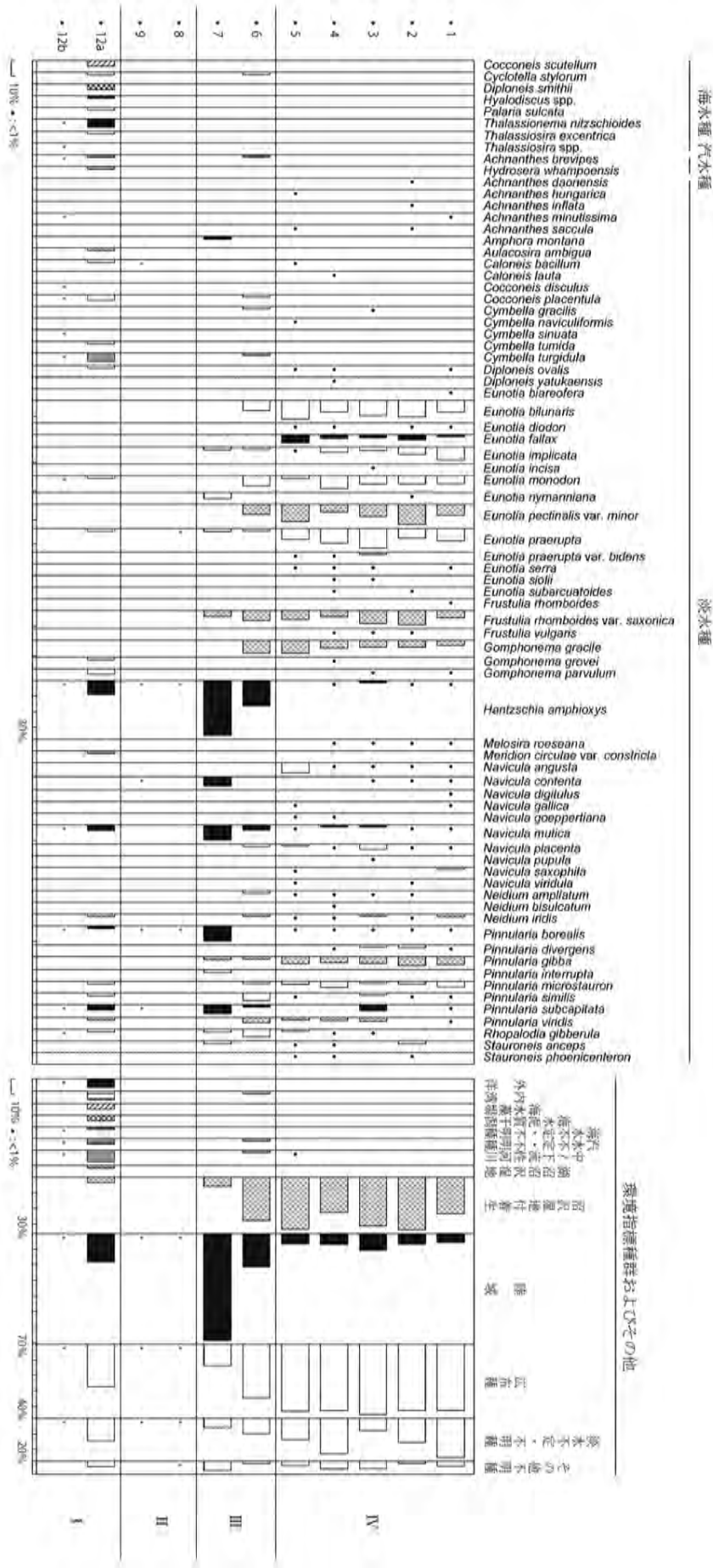
#### 引用文献

- 安藤一男(1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.  
小杉正人(1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.

No.	分類群	種群	1	2	3	4	5	6	7	8	9	12a	12b
1	<i>Cocconeis</i>	<i>scutellum</i>	C1									2	
2	<i>Cyclotella</i>	<i>stylorum</i>	B					1				1	
3	<i>Diploneis</i>	<i>smithii</i>	E1									2	
4	<i>Hyalodiscus</i>	spp.	?									1	
5	<i>Palaria</i>	<i>sulcata</i>	B									1	
6	<i>Thalassionema</i>	<i>nitzschioides</i>	A									3	3
7	<i>Thalassiosira</i>	<i>excentrica</i>	B									1	
8	<i>T.</i>	spp.	?										1
1	<i>Achnanthes</i>	<i>brevipes</i>	?					1				1	2
2	<i>Hydrosera</i>	<i>whampoensis</i>	?									1	
1	<i>Achnanthes</i>	<i>daonensis</i>	W		1								
2	<i>A.</i>	<i>hungarica</i>	K					1					
3	<i>A.</i>	<i>inflata</i>	W		1								
4	<i>A.</i>	<i>minutissima</i>	W	1									1
5	<i>A.</i>	<i>saccula</i>	W		1			1					
6	<i>A.</i>	spp.	?		1		1	2					
7	<i>Amphora</i>	<i>montana</i>	Q						1				
8	<i>Aulacosira</i>	<i>ambigua</i>	N									1	
9	<i>A.</i>	spp.	?	1									
10	<i>Caloneis</i>	<i>bacillum</i>	W					2			1		
11	<i>C.</i>	<i>lauta</i>	W				1						
12	<i>Cocconeis</i>	<i>disculus</i>	W										1
13	<i>C.</i>	<i>placenta</i>	W						1			2	1
14	<i>Cymbella</i>	<i>gracilis</i>	W			1			1				
15	<i>C.</i>	<i>naviculiformis</i>	W					1					
16	<i>C.</i>	<i>sinuata</i>	K										1
17	<i>C.</i>	<i>tumida</i>	W									1	
18	<i>C.</i>	<i>turgidula</i>	K						1			3	1
19	<i>C.</i>	spp.	?							1		2	
20	<i>Diploneis</i>	<i>ovalis</i>	W	1			1	2				1	
21	<i>D.</i>	<i>yatukaensis</i>	Q				2						
22	<i>Epithemia</i>	spp.	?							1			
23	<i>Eunotia</i>	<i>biareofera</i>	W	1									
24	<i>E.</i>	<i>bilunaris</i>	W	16	22	20	15	29	4				
25	<i>E.</i>	<i>diodon</i>	W	1	2		2	1					
26	<i>E.</i>	<i>fallax</i>	Q	3	7	4	5	13					
27	<i>E.</i>	<i>implicata</i>	W	18	10	5	7	1	1	1			
28	<i>E.</i>	<i>incisa</i>	W			1							
29	<i>E.</i>	<i>monodon</i>	W	11	11	11	17	5	4			1	1
30	<i>E.</i>	<i>nymmanniana</i>	W		1				2				
31	<i>E.</i>	<i>pectinalis</i> var. <i>minor</i>	O	15	27	16	10	27	4				
32	<i>E.</i>	<i>praerupta</i>	W	17	13	26	19	17	1	1	2	1	
33	<i>E.</i>	<i>praerupta</i> var. <i>bidens</i>	O			3	2	2					
34	<i>E.</i>	<i>serra</i>	O	2		2	1	1					
35	<i>E.</i>	<i>siolii</i>	W			1	1						
36	<i>E.</i>	<i>subarcuatooides</i>	W		1		1						
37	<i>E.</i>	spp.	?	39	24	10	28	20	3		1	3	
38	<i>Frustulia</i>	<i>rhombooides</i>	W	2									
39	<i>F.</i>	<i>rhombooides</i> var. <i>saxonica</i>	O	10	19	17	8	14	4	2			
40	<i>F.</i>	<i>vulgaris</i>	W		1	2	1						
41	<i>Gomphonema</i>	<i>gracile</i>	O	7	9	9	10	20	5				
42	<i>G.</i>	<i>grovei</i>	W				1					1	
43	<i>G.</i>	<i>parvulum</i>	W	2		1						2	
44	<i>G.</i>	spp.	?	2	1	2	4	3	2				1
45	<i>Hantzschia</i>	<i>amphioxys</i>	Q	2	2	3	1		10	18	3	5	7
46	<i>Melosira</i>	<i>roeseana</i>	Q	2	1	1	1						
47	<i>Meridion</i>	<i>circulae</i> var. <i>constricta</i>	K									1	
48	<i>Navicula</i>	<i>angusta</i>	W	1	1	2	1	16					
49	<i>N.</i>	<i>contenta</i>	Q	1	1	2				3		1	
50	<i>N.</i>	<i>digitulus</i>	W	1									
51	<i>N.</i>	<i>gallica</i>	W	1				1					
52	<i>N.</i>	<i>goeppertiana</i>	W				1	1					
53	<i>N.</i>	<i>mutica</i>	Q	1	1	3	3	2		5		2	2
54	<i>N.</i>	<i>placenta</i>	W	2	2	7	1	3	1				
55	<i>N.</i>	<i>pupula</i>	W			1							
56	<i>N.</i>	<i>saxophila</i>	W	3				1					
57	<i>N.</i>	<i>viridula</i>	W		1			2					
58	<i>N.</i>	spp.	?	1									
59	<i>Neidium</i>	<i>ampliatum</i>	W		2	1	1	1	1				
60	<i>N.</i>	<i>bisulcatum</i>	Q				1						
61	<i>N.</i>	<i>iridis</i>	O	4	2	3	2	1	1			1	
62	<i>Nitzschia</i>	spp.	?			1	2	1		1	1		
63	<i>Pinnularia</i>	<i>borealis</i>	Q	1	2	1	1	1		5	5	1	3
64	<i>P.</i>	<i>divergens</i>	W	2	4	3	1						
65	<i>P.</i>	<i>gibba</i>	O	11	12	9	8	11	1	1			
66	<i>P.</i>	<i>interrupta</i>	W						1				
67	<i>P.</i>	<i>microstauron</i>	W	8	4	3	8	5	1			1	
68	<i>P.</i>	<i>similis</i>	W	1	1	3	3	2	3			1	
69	<i>P.</i>	<i>subcapitata</i>	Q	2		8			1	3		2	1
70	<i>P.</i>	<i>viridis</i>	O	1		5	4	4	2		1	1	
71	<i>P.</i>	spp.	?	8	6	3	11	3	1	1	1	2	1
72	<i>Rhopalodia</i>	<i>gibberula</i>	W		4	2	1	3	3	1	1	1	1
73	<i>Stauroneis</i>	<i>anceps</i>	W				2	1					
74	<i>S.</i>	<i>phoenicenteron</i>	O		1		1	1					
75	<i>S.</i>	<i>smithii</i>	W					1					
76	<i>S.</i>	spp.	?	1									
77	<i>Stephanodiscus</i>	spp.	?	1								1	
78	<i>Surirella</i>	<i>linearis</i>	W	1	4	2	2	6					
79	<i>S.</i>	<i>ovata</i>	W		1		2						
80	<i>S.</i>	<i>tenera</i>	W					1					
81	<i>S.</i>	spp.	?				1	2					
82	<i>Synedra</i>	<i>capucina</i>	W									1	
83	<i>S.</i>	<i>rumpens</i>	W					1					
84	<i>S.</i>	<i>ulna</i>	W									1	2
85	<i>S.</i>	spp.	?				1						
86		Unknown	?	7	3	10	10	7	1	3	1	2	
1		外洋	A									3	3
2		内湾	B						1			3	
3		海水藻場	C1									2	
4		海水泥質干潟	E1									2	
5		淡水不定・不明種	?									1	1
6		汽水不定・不明種	?						1			2	2
7		中～下流性河川	K					1	1			4	2
8		湖沼沼沢地	N									1	
9		沼沢地付着生	O	50	70	64	46	81	17	3		2	
10		陸域	Q	12	14	22	14	16	13	35	8	5	13
11		広布種	W	90	88	92	86	104	21	7	2	1	15
12		淡水不定・不明種	?	53	32	16	46	33	6	3	2	2	8
13		その他不明種	?	7	3	10	10	7	1	3	1	2	
		海水種										11	4
		汽水種										2	2
		淡水種										1	24
		合計		205	204	194	192	235	58	48	12	8	50
		合計		212	207	204	202	242	61	51	13	8	30
		完形殻の出現率(%)		65.6	65.2	65.2	64.9	72.3	26.2	25.5	15.4	50.0	34.5
		堆積物1g当たり殻数(個)		3.9E+05	1.3E+06	4.2E+05	3.9E+05	8.9E+05	3.7E+04	4.0E+04	1.2E+04	4.1E+03	1.8E+04

第19表 珪藻化石産出表

(種群は、小杉(1988)および安藤(1990)による)



第 40 図 珪藻化石分布図

## 第2節 池泉遺構SR1の花粉分析

森 将志 (パレオ・ラボ)

### 1. はじめに

池泉遺構SR1の埋土及び整地層において、花粉分析用の試料が採取された(第41図)。以下では、採取された試料の花粉分析結果を示し、遺跡周辺の古植生について検討した。なお、同一試料を用いて珪藻分析も行われている(第1節参照)。

### 2. 試料と方法

分析試料は、計6点で(第20表)、これらの試料から、次の手順で花粉分析を行った。

試料(湿重量約3~4g)を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処

No.	遺構	土層
1	SR1	①層上
2	SR1	①層上
3	SR1	①層上
4	SR1	①層上
5	SR1	①層上
6	SR1	①層上

第20表 花粉分析試料一覧

理(無水酢酸9:濃硫酸1の割合の混酸を加え20分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡は、この残渣よりプレパラートを作製して行った。プレパラートは樹木花粉が200を超えるまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。また、保存状態の良好な花粉を選んで単体標本(PLC. 1271~1279)を作製し、写真を図版に載せた。なお、単体標本はパレオ・ラボに保管されている。

### 3. 結果(写真図版34)

分析試料から検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉23、草本花粉15、形態分類のシダ植物胞子2の総計40である。これらの花粉・胞子の一覧を第21表に、花粉分布図を第42図に示した。分布図において、樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を、草本花粉および胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。図表においてハイフン(-)で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。また、バラ科やマメ科の花粉には樹木起源と草本起源の両方が含まれるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

いずれの試料においてもクリ属とシイノキ属-マテバシイ属の産出が目立つ。クリ属は6~45%の産出率を示すが、No. 3とNo. 6ではやや産出が少ない。シイノキ属-マテバシイ属は29~92%の産出率である。その他の樹木花粉では、マツ属複維管束亜属やスギ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属などの産出が見られ、それぞれ0.5~8%、0~11%、0.5~5%、0~6%の産出率である。

草本花粉については、いずれの試料においても産出が少なく、好湿性のサジオモダカ属(No. 5)やキカシグサ属(No. 1)、ミツガシワ属(No. 1)、栽培植物のベニバナ属(No. 6)などがわずかに産出している。

### 4. 考察

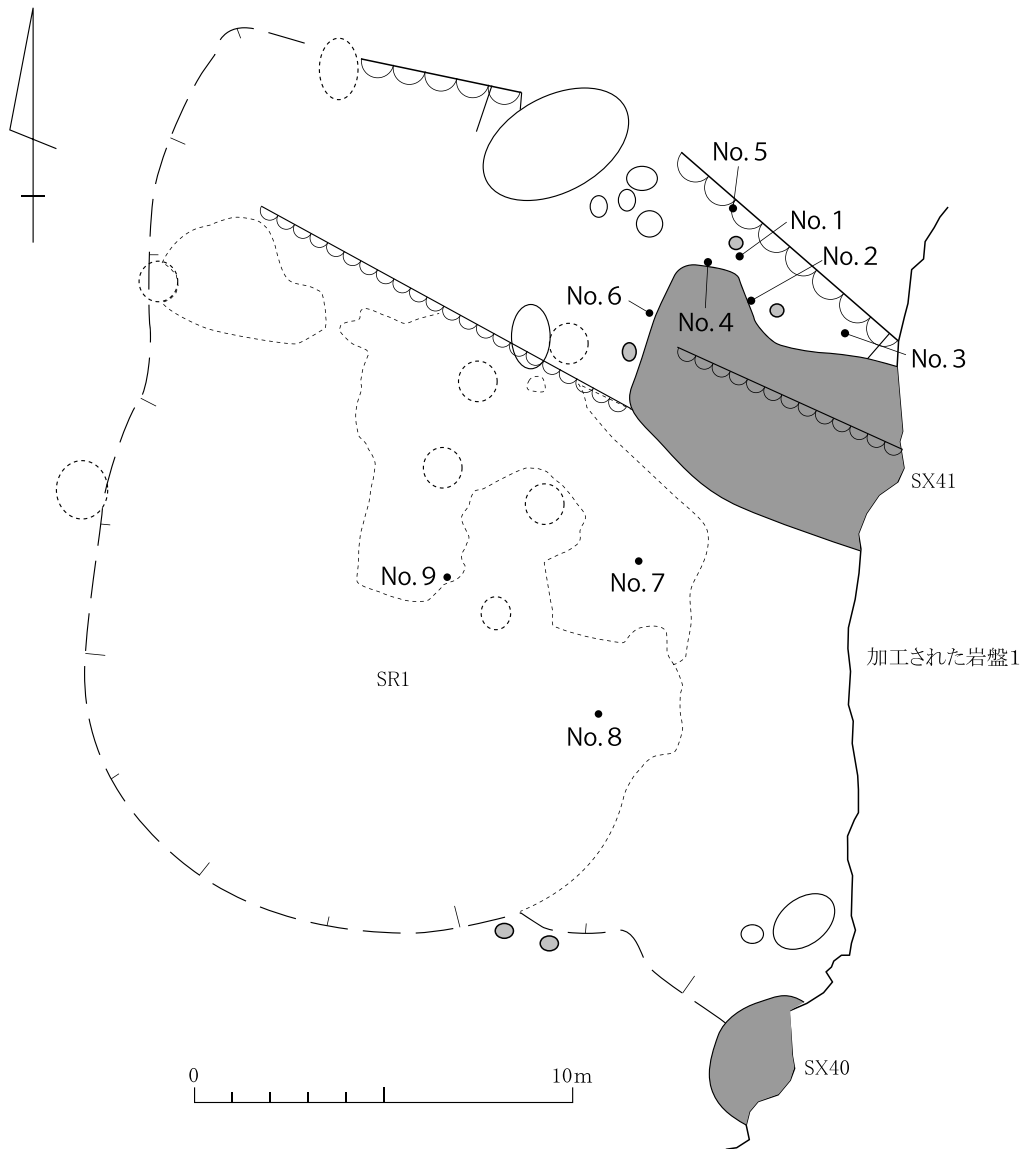
検鏡の結果、いずれの試料においてもシイノキ属-マテバシイ属の産出が目立ち、コナラ属アカガシ亜属を伴っている。よって、A地区の池遺構周辺の山斜面にはシイノキ属-マテバシイ属を主体とし、カシ類を伴った照葉樹林が広がっていたと考えられる。また、ほとんどの試料においてクリ属の産出も目立つ。クリについては、虫媒花で花粉を広範囲に散布しない点が知られており(吉川, 2011)、クリ属花粉の多産は、池遺構のすぐそばにクリの木かクリ林が存在していた可能性を示唆している。クリ属以外にはマツ属複維管束亜属やコナラ属コナラ亜属のある程度の産出が見られるが、クリ属を含め、これらは陽樹を含む分類群である。池遺構周辺の山斜面や山麓の比較的明るい場所に

は、クリやニヨウマツ類、コナラといった陽樹からなる二次林も分布していたと思われる。

草本花粉は産出が少なく、A地区の池遺構周辺では下草が刈り取られるなど、比較的整備されていた状況が推測される。草本花粉の産出が少ない中でも、好湿性のサジオモダカ属 (No. 5) やキカシグサ属 (No. 1)、ミツガシワ属 (No. 1) などの産出が見られた。これらは池周辺の湿地的環境の場所に生育していたと思われる。また、栽培植物のベニバナ属がわずかに産出しており、ベニバナの栽培も行われていたであろう。ただし、居館内での栽培は考え難く、居館外の山麓などで栽培されていたのであろうか。

#### 引用文献

吉川昌伸 (2011) クリ花粉の散布と三内丸山遺跡周辺における縄文時代のクリ林の分布状況. 植生史研究, 18, 65-76.

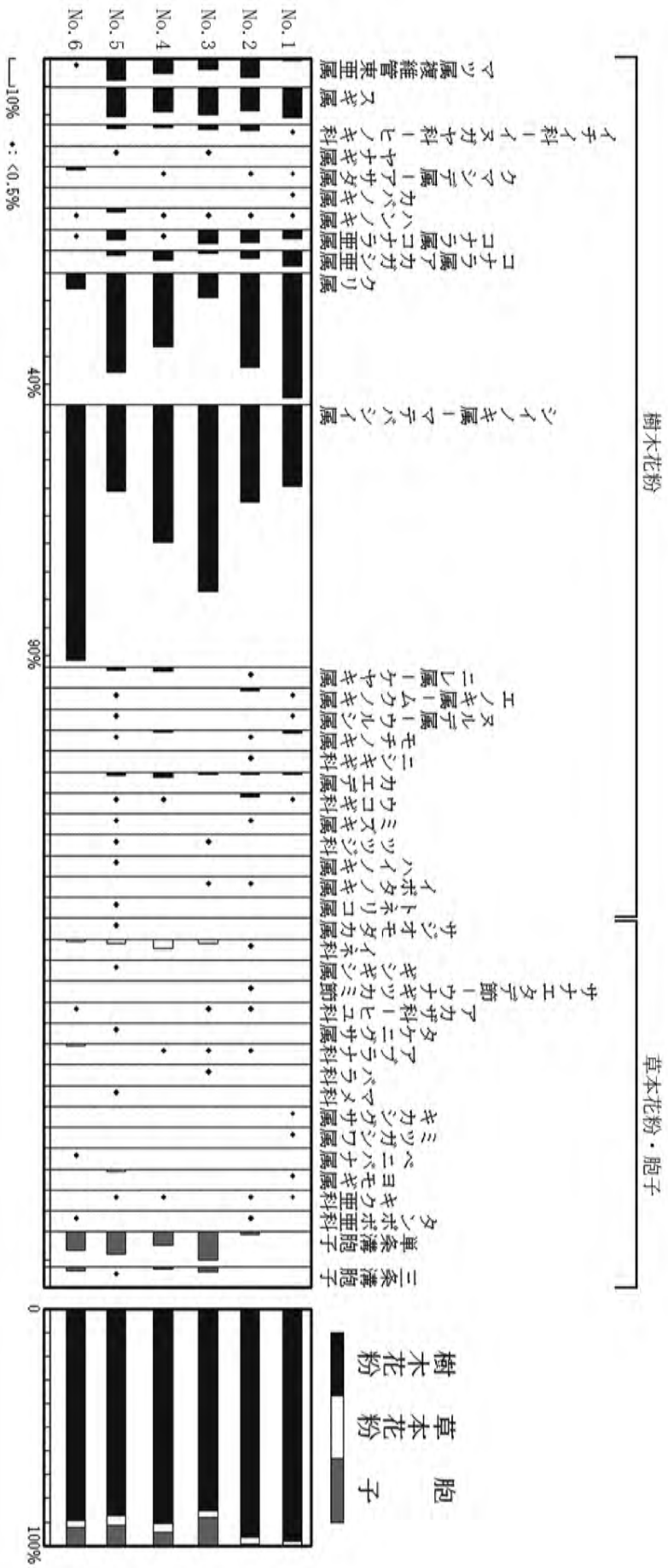


第 41 図 分析土壌サンプル採取位置図



学名	和名	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6
樹木							
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	2	15	8	12	17	1
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	24	18	20	20	23	-
Taxaceae—Cephalotaxaceae—Cupressaceae	イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	1	4	3	2	3	-
<i>Salix</i>	ヤナギ属	-	-	1	-	1	-
<i>Carpinus—Ostrya</i>	クマシデ属—アサダ属	1	1	-	1	-	2
<i>Betula</i>	カバノキ属	1	-	-	-	-	-
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	1	1	1	1	3	1
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	7	10	10	1	8	1
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	12	6	2	8	4	-
<i>Castanea</i>	クリ属	97	73	18	60	77	12
<i>Castanopsis—Pasania</i>	シイノキ属—マテバシイ属	64	76	137	112	67	191
<i>Ulmus—Zelkova</i>	ニレ属—ケヤキ属	-	1	-	3	2	-
<i>Celtis—Aphananthe</i>	エノキ属—ムクノキ属	1	2	-	-	1	-
<i>Rhus—Toxicodendron</i>	ヌルデ属—ウルシ属	1	-	-	-	1	-
<i>Ilex</i>	モチノキ属	2	1	-	2	1	-
Celastraceae	ニシキギ科	-	1	-	-	-	-
<i>Acer</i>	カエデ属	2	2	2	4	3	-
Araliaceae	ウコギ科	1	3	-	1	1	-
<i>Cornus</i>	ミズキ属	-	1	-	-	1	-
Ericaceae	ツツジ科	-	-	1	-	1	-
<i>Symplocos</i>	ハイノキ属	-	-	-	-	1	-
<i>Ligustrum</i>	イボタノキ属	-	1	1	-	-	-
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	-	-	-	-	1	-
草本							
<i>Alisma</i>	サジオモダカ属	-	-	-	-	1	-
Gramineae	イネ科	-	1	4	8	4	2
<i>Rumex</i>	ギシギシ属	-	-	-	-	1	-
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria—Echinocaulon</i>	サナエタデ節—ウナギツカミ節	-	1	-	-	-	-
Chenopodiaceae—Amaranthaceae	アカザ科—ヒユ科	-	1	1	-	-	1
<i>Macleaya</i>	タケニグサ属	-	-	-	-	1	-
Brassicaceae	アブラナ科	-	1	1	1	-	2
Rosaceae	バラ科	-	-	1	-	-	-
Leguminosae	マメ科	-	-	-	-	1	-
<i>Rotala</i>	キカシグサ属	1	-	-	-	-	-
<i>Menyanthes</i>	ミツガシワ属	1	-	-	-	-	-
<i>Carthamus</i>	ベニバナ属	-	-	-	-	-	1
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	1	-	-	-	2	-
Tubuliflorae	キク亜科	1	1	-	1	1	-
Liguliflorae	タンポポ亜科	-	1	-	-	-	1
シダ植物							
monolete type spore	単条溝孢子	-	2	24	12	20	15
trilete type spore	三条溝孢子	-	-	4	2	1	3
Arboreal pollen	樹木花粉	217	216	204	227	216	208
Nonarboreal pollen	草本花粉	4	6	7	10	11	7
Spores	シダ植物孢子	-	2	28	14	21	18
Total Pollen&Spores	花粉・孢子総数	221	224	239	251	248	233
Unknown pollen	不明花粉	3	3	12	6	6	-

第 21 表 産出花粉孢子一覧表



樹木花粉の樹木花粉総数、草本花粉・胞子は算出花粉胞子総数を基数として百分率で算出した

第 42 図 花粉分布図

### 第3節 池泉遺構SR1出土の炭化種実

バンダリ スダルジャン・佐々木由香 (パレオ・ラボ)

#### 1. はじめに

岐阜県岐阜市に位置する岐阜城千畳敷遺跡から出土した炭化種実の同定結果を報告し、当時の利用植物や植生、栽培状況について検討した。

#### 2. 試料と方法

試料は、池泉遺構SR1の整地層IV(SR1④)層から採取した堆積物(分析No. 11)である。堆積物の層相は、オリーブ褐色(2.5Y4/3)炭化物混じりシルト質粘土である。遺構の年代は、16世紀である。

試料は、1.0mmと0.5mm目の篩を用いて1000ccを水洗した。炭化種実の抽出・同定・計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。なお、オオムギ炭化種子2点を放射性炭素年代測定用の試料(PLD-26064)とした。

#### 3. 結果(第22表・写真図版35)

同定の結果、木本植物は得られなかった。草本植物のマメ科炭化種子と、ヒエ炭化有ふ果・炭化種子、イネ炭化種子、キビ炭化種子、アワ炭化種子、オオムギ炭化種子の6分類群が見いだされた(第22表)。この他、科以上の詳細な同定ができなかった炭化種実を不明とした。科以上に細分する識別点が残存していない一群を同定不能炭化種実とした。種実以外には炭化した子囊菌がみられたが、同定の対象外とした。

分析No. 11からはヒエ炭化種子が破片を含めて約650点と多産し、オオムギ炭化種子が破片を含めて約300点とこれに次いだ。このほか、キビ炭化種子が少量、マメ科炭化種子とヒエ炭化有ふ果、イネ炭化種子、アワ炭化種子がわずかに得られた。

また同定不能炭化種実も破片で270点と多かった。次に、産出した分類群の炭化種実の記載と図版を掲載し、同定の根拠とする(同定不能炭化種実と子囊菌は除く)。

##### (1) マメ科 Fabaceae sp. 炭化種子

半割であるが、完形ならば上面観・側面観ともに楕円形、表面は平滑。臍は残存していない。長さ3.9mm、残存幅3.2mm。

##### (2) ヒエ Echinochloa crus-galli (L.) Beauv. var. frumentacea (Roxb.) W. Wright 炭化有ふ果・炭化種子

イネ科有ふ果は紡錘形。横方向に細かい顆粒状の模様がある。壁は薄い。長さ1.6mm、幅1.4mm。種子は、側面観が卵形ないし楕円形、断面は片凸レンズ形であるが、厚みは薄くやや扁平である。胚は幅が広くうちわ型で、長さは全長の2/3程度と長い。任意に抽出した種子10点の大きさは、長さ1.4~1.9mm(平均1.6±0.2)、幅1.2~1.8mm(平均1.5±0.2)。

##### (3) イネ Oryza sativa L. 炭化種子 イネ科

上面観が両凸レンズ形、側面観は楕円形。一端に胚が脱落した凹みがあり、両面に縦方向の2本の浅い溝がある。長さ3.7mm、幅2.2mm。

##### (4) キビ Panicum miliaceum L. 炭化有ふ果・炭化種子 イネ科

側面観は球形、断面は片凸レンズ形で厚みがある。胚の長さは全長の1/2程度と短い。胚は幅が広

	位置 遺構 分析No. 水洗量(cc)	A地区	
		IV(SR1④)層	
		11	
		1000	
分類群			
マメ科	炭化種子	(1)	
ヒエ	炭化有ふ果	2	
	炭化種子	598	(53)
イネ	炭化種子	3	(7)
キビ	炭化種子	22	
アワ	炭化種子	2	
オオムギ	炭化種子	153	(137)
同定不能	炭化種実		(270)
子囊菌	炭化子囊	15	

(括弧内は破片数)

第22表 炭化種実一覧

いうちわ型。任意に抽出した種子10点の大きさは、長さ1.6~2.1（平均 $1.8 \pm 0.2$ ）mm、幅1.4~2.2mm（平均 $1.8 \pm 0.3$ ）。

(5)アワ *Setaria italica* P.Beauv. 炭化種子 イネ科

上面観は楕円形、側面観は円形に近い。腹面下端中央の窪んだ位置に細長い楕円形の胚がある。胚の長さは全長の2/3程度。長さ1.3mm、幅1.1mm。

(6)オオムギ *Hordeum vulgare* L. 炭化種子 イネ科

側面観は長楕円形。腹面中央部には上下に走る1本の溝があるが、溝の両端は欠損している。背面の下端中央部には三角形の胚がある。断面は円形となる（Jacomet, 2006）。任意に抽出した種子10点の大きさは、長さ4.1~6.5mm（平均 $5.4 \pm 0.7$ ）、幅2.5~3.5mm（平均 $3.1 \pm 0.3$ ）、厚さ1.6~2.7mm（平均 $2.3 \pm 0.3$ ）。

#### 4. 考察

S R 1の整地層からは炭化種実が多産した。ほとんど穀類で、明らかな栽培植物はヒエと、イネ、キビ、アワ、オオムギである。特にヒエとオオムギが多産した。これらは炭化していたため、畑で生育していた果実が熟を受け、果皮の部分は失われて種子の状態に炭化したか、近くで保管されていた種子が何らかの要因で炭化して畑内に堆積したなどの可能性が考えられる。マメ科は栽培植物と野生植物双方の可能性もある。

#### 引用文献

Jacomet, S. and collaborators Archaeobotany Lab. (2006) Identification of cereal remains from archaeological sites. 2nd edition, IPAS, Basel Univ

## 第4節 石垣S V30前面の堆積土の植物珪酸体

米田恭子（パレオ・ラボ）

### 1. はじめに

石垣S V30を覆う土から、壁材と推定される粘質土が検出された。ここでは、粘質土に含まれるイネ科植物を検討する目的で植物珪酸体分析を行った。

### 2. 試料と方法

試料は、石垣S V30前から採取された粘質土（分析No. 10）である。

試料を実体顕微鏡で観察したところ、植物遺体らしき白色物は観察されなかった。そこで、以下の手順にしたがって処理を行い、土壌中に含まれる植物珪酸体の抽出を試みた。

試料約1g（秤量）をトールビーカーにとり、30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行った。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去した。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製した。同定および計数は、機動細胞珪酸体を中心とした植物珪酸体について200個に達するまで行った。

### 3. 結果（写真図版36）

観察された植物珪酸体を第23表に示した。

分析No.	試料名	遺構	機動細胞珪酸体				不明植物珪酸体	
			イネ	ネザサ節型	ササ属	ウシクサ族	棒状型	ポイント
10	壁材？	SV30前堆積粘土	76	58	13	8	35	10

（計200個体カウント）

第23表 植物珪酸体個数

検鏡の結果、イネの機動細胞珪酸体が76個検出された。次いでネザサ節型の機動細胞珪酸体が58個、ササ属の機動細胞珪酸体が13個、ウシクサ族の機動細胞珪酸体が8個得られた。このほかに、棒状型の不明植物珪酸体が35個、ポイント型の不明植物珪酸体が10個検出された。なお、棒状型とポイント型の不明植物珪酸体は、すべてのイネ科植物に類似した形態の植物珪酸体が出現するため（近藤，2010）、由来した分類群の同定は不可能である。

### 4. 考察

石垣S V30前で採取された粘質土（分析No. 10）について植物珪酸体分析を行った結果、イネの機動細胞珪酸体が最も多く含まれていた。

イネ科植物の葉身に形成される機動細胞珪酸体は、土壌中から検出される場合は通常、単体の状態で観察される。しかし、今回の分析では連結した状態を保ったイネの機動細胞珪酸体も観察されており、稲藁が土壌に混和されていた可能性がある。

ネザサ節型の機動細胞珪酸体は、イネに次いで多く検出された。アズマネザサなどのネザサ節型のササ類が、遺跡周辺の森林の林縁部など日のあたる開けたところに分布を広げていたと推察される。また、ススキやチガヤなどのウシクサ族も同様に、森林の林縁部などの日のあたる開けた所に草地を形成していたと思われる。ササ属型のササ類（スズタケ、ミヤコザサなど）については、森林の下草的存在として生育していたとみられる。

これらのイネ科植物が生育する環境下にあった粘質土に、補強などの目的で稲藁が混和され、壁材として利用された可能性が考えられる。

### 引用文献

近藤鍊三（2010）プラント・オパール図譜．167p，北海道大学出版会．

## 第5節 榊状遺構 S X25埋土の寄生虫卵分析

森 将志 (パレオ・ラボ)

### 1. はじめに

岐阜県岐阜市に所在する岐阜城千畳敷遺跡において、用途不明の遺構が検出された。この遺構がトイレ遺構である可能性を検討する目的で寄生虫卵分析を行った。

### 2. 試料と分析方法

分析試料は、榊状遺構 S X25埋土から採取された黒色 (2.5Y2/1) 礫混じりシルト質粘土1点である。この試料について、以下の手順にしたがって寄生虫卵分析を試みた。

計量した試料に、10%の水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46%のフッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離 (比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離) を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理 (無水酢酸9:1濃硫酸の割合の混酸を加え20分間湯煎) を行う。水洗後、この残渣に適容量のグリセリンを加えて計量した。この残渣からプレパラートを作製し、プレパラート全面に渡り検鏡した。なお、試料1g中の寄生虫卵含有数は、次式で求める。

$$X = BD/AC$$

X: 試料1g中の寄生虫卵含有数、A: 分析に用いた試料の重量(g)、B: 濃縮試料+グリセリンの重量(g)、C: 濃縮試料+グリセリンのうち、封入に用いた重量(g)、D: プレパラート中の寄生虫卵数

	SX25
分析に用いた試料(g)	3.6300
残渣+グリセリン(g)	1.0421
封入に用いた量(g)	0.0165
寄生虫卵個数	0

第24表 寄生虫卵分析試料計量値

### 3. 分析結果

計量し、検鏡した結果を第23表に示す。プレパラート全面を検鏡しても、寄生虫卵は1つも検出されなかった。

### 4. 考察

寄生虫卵を検出するために行う前処理は、花粉を検出するために行う方法と同一である。今回の分析試料では、寄生虫卵のみならず花粉の産出も確認できなかった。一般的に花粉は湿乾を繰り返す環境に弱く、酸化的環境に堆積すると紫外線や土壌バクテリアなどによって分解され消失してしまう。そのため、堆積物が酸素と接触する機会が多い堆積環境や保存環境では花粉化石が残りにくい。今回の分析試料には花粉化石が含まれていないことから、試料が酸化的環境に晒されていた時期があったと推測される。一方、寄生虫卵はキチン質の卵殻をもつが、花粉と同様に湿乾を繰り返す環境や乾燥した環境で分解される (金原, 2004)。今回の分析試料は酸化的環境に晒されたと推察されるため、試料に寄生虫卵が含まれていたとしても分解されてしまった可能性がある。よって、今回の分析結果からトイレ遺構などについて言及するのは難しい。

### 引用文献

金原正明 (2004) 寄生虫卵分析. 安田喜憲編「環境考古学ハンドブック」: 419-429, 朝倉書店.

## 第6節 池泉遺構SR1 整地層の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一

Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・藤根 久

### 1. はじめに

池泉遺構SR1の底を形成する整地層IV(SR1④)層から検出された炭化種子について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。なお、この遺構から検出された炭化種子について種実同定を行っている(第3節参照)。

### 2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第25表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製1.5SDH)を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

測定番号	遺構・土層	試料データ	前処理
PLD-26064	SR1④層	種類:炭化オオムギ炭化種子 その他:1粒	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N) サルフィックス処理

第25表 放射性炭素年代測定試料および処理

### 3. 結果(第43図)

第26表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位対比( $\delta^{13}\text{C}$ )、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代を、第41図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代(yyBP)の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差( $\pm 1\sigma$ )は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、および半減期の違い(<sup>14</sup>Cの半減期 $5730 \pm 40$ 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

<sup>14</sup>C年代の暦年較正には0xCal4.1(較正曲線データ:IntCal13)を使用した。なお、 $1\sigma$ 暦年代範囲は、0xCal1の確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に $2\sigma$ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

### 4. 考察

試料について、同位体分別効果の補正および暦年較正を行った。その結果、 $1\sigma$ 暦年代範囲において1522-1575calAD(51.6%)、1585-1590calAD(3.7%)、1625-1640calAD(12.8%)、 $2\sigma$ 暦年代範囲において1497-1506calAD(2.3%)、1512-1601calAD(72.6%)、1616-1644calAD(20.5%)で

あった。

1  $\sigma$  暦年代範囲において確率の高い範囲では、16世紀前半～後半の年代範囲を示す。

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-26064	-28.26 $\pm$ 0.21	316 $\pm$ 17	315 $\pm$ 15	1522AD(51.6%)1575AD 1585AD( 3.7%)1590AD 1625AD(12.8%)1640AD	1497AD( 2.3%)1506AD 1512AD(72.6%)1601AD 1616AD(20.5%)1644AD

第 26 表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

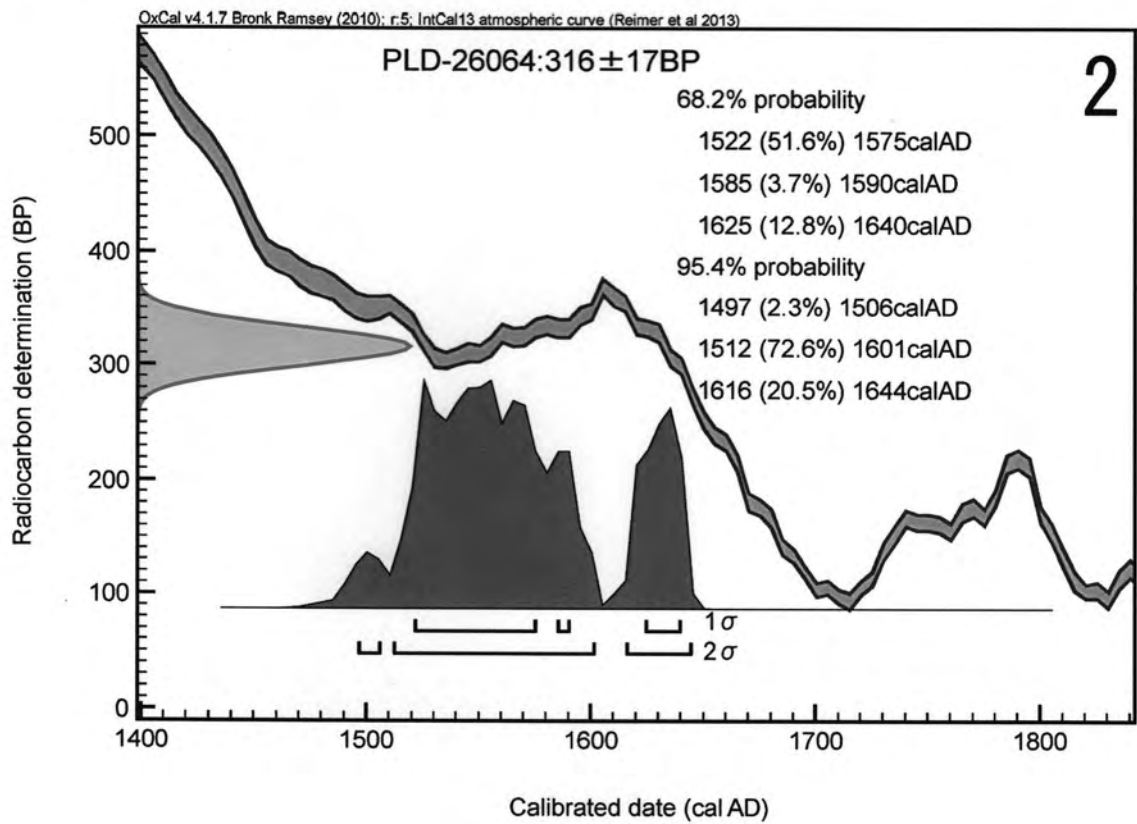
#### 参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫(2000) 放射性炭素年代測定の基礎. 日本先史時代の $^{14}\text{C}$ 年代編集委員会編「日本先史時代の $^{14}\text{C}$ 年代」:3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafliðason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, RaA., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.





第 43 図 曆年較正図

## 第6章 発掘調査成果のまとめ

### 第1節 A地区の構造

(A地区の外部) A地区は谷川の北側に位置する平坦地で、西、南、北側は石垣(SV7・30・31)で、東側は加工された岩盤で区画される。岩盤の規模は南北約30m、高さ30m以上で西端は垂直に立ち上がり、表面は屏風のように凹凸がある。谷川に面する南斜面は西から盛土(SX49)、虎口状遺構(SX43)、石垣(SV30)、階段(SX43)で構成される。虎口状遺構は石積み・階段状遺構・平坦面・礎石から成る遺構で、川の対岸のC地区の調査(H26年度)でも類似する遺構が見つかった。また平坦面がほぼ同レベルであることから橋に関連する遺構の可能性が高く、庭園のあるA地区と館の中心建物があるC地区とは橋で結ばれた一体の空間として使用されていたと考えられる。

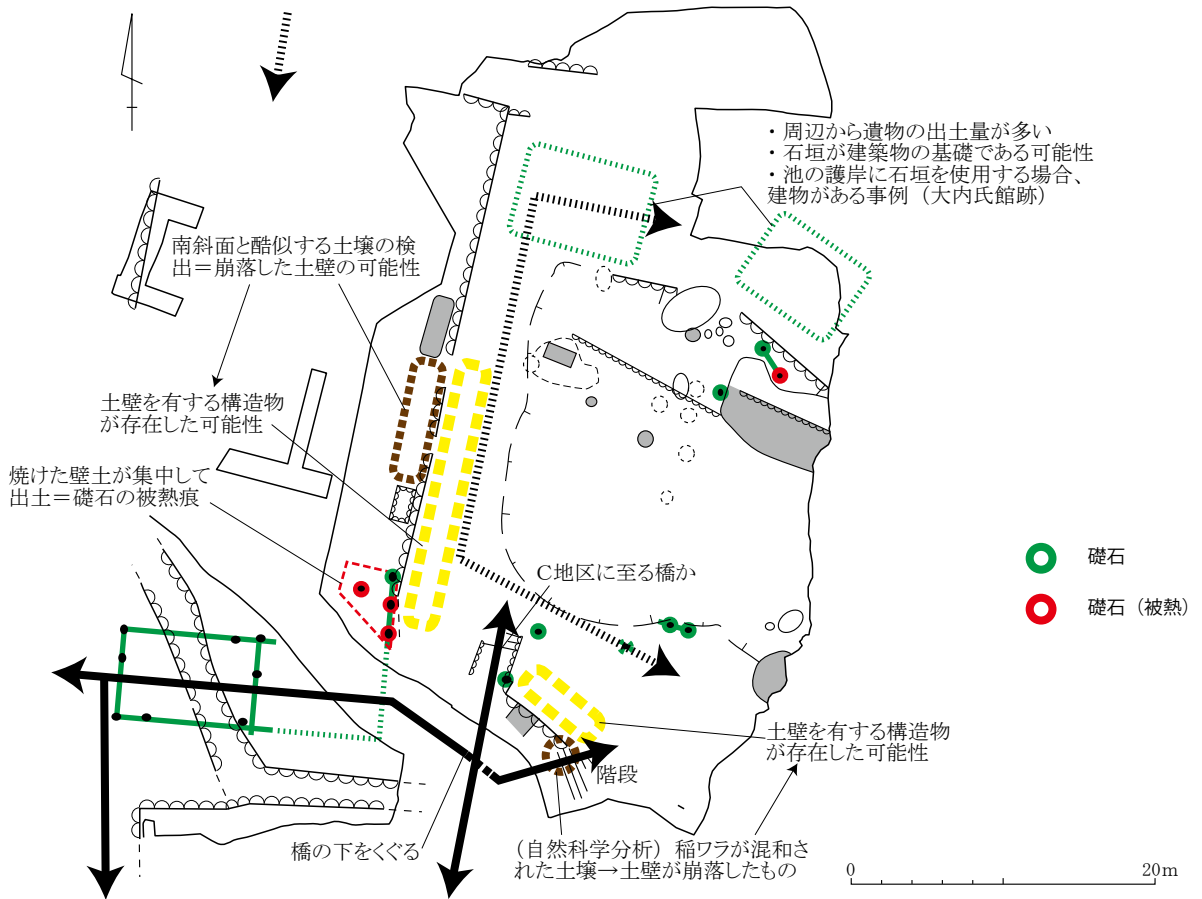
(池泉遺構) 平坦地の中央、東側岩盤に接して池(SR1)が広がる。規模は東西約20m、南北約21m。岩盤とそこから流れ落ちる滝を背景にしている。北側は石垣(SV29・34)と巨石(景石4)で護岸され、南側は礎石(礎石23・24)の周辺で円礫敷きが見られることから州浜が広がっていた可能性がある。西側は不明である。岩盤際には滝受け施設と考えられる集石遺構(SX40)と岬状遺構(SX41)がある。北側の滝の水は岬状遺構に落ち、石垣(SV29)の前を西流し、景石4で南へ方向を変え池へと注いだと考えられる。岬状遺構から西に延びる石列(SV6)を境に南北で約5cmの段差があり、水の動きに変化を付けている。南側の滝は集石遺構から直接池へ注いだと考えられる。A地区北側の谷からも水を引き入れていた可能性があり、石垣(SV35)、石列(SV43)周辺が取り入れ口の可能性がある。排水は明瞭な遺構は検出されていないが、園池北西の集石遺構(SX2)と石垣(SV7)前面にある集石遺構(SX44)が排水に関連する遺構と考えられる。排水方法は、地面に浸透させる。あるいは木樋などを使用して他へ水を流していた可能性がある。南側石垣(SV30)前面の集石遺構(SX45)も排水に関連する可能性がある。池の水深は中心部と周辺の礎石のレベルから最大で約50cmである。堆積物の珪藻化石分析により常時池全体に水を湛えていたわけではなかったようである。

(建物) 池の南側の礎石23・24周辺、多数の遺物が出土した北西部、北東部の石垣(SV29)の上部に建物が想定できる。石垣(SV29)は裏込め礫から高さ2m以上になり、その上に建物があったと推測される。石垣前面には複数の礎石(礎石26・27・28)があり、池へ張り出す構造であった可能性がある。南側の石垣(SV30)の前面で土壁の可能性のある稲藁が入った粘質土が検出された。同様の粘質土は西側石垣前面でも検出され、塀や壁のある回廊が巡っていたと考えられる。

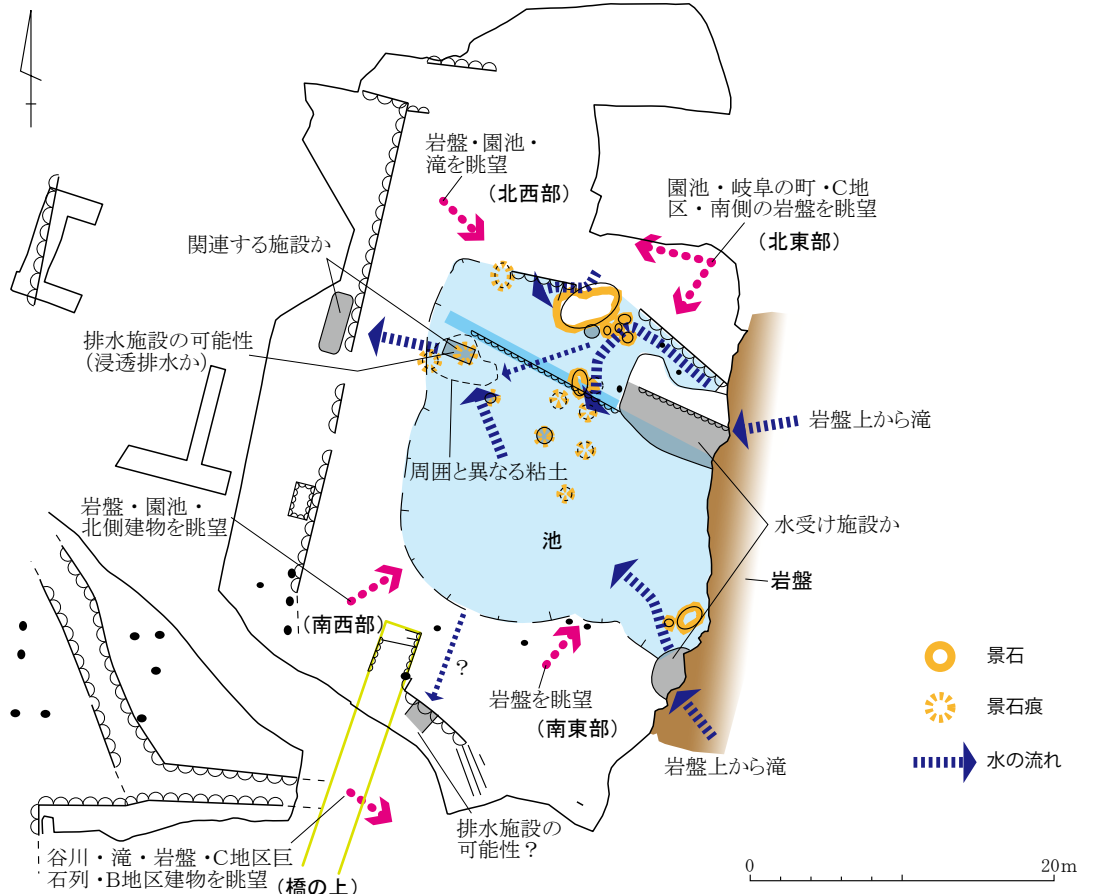
(動線) A地区への入口は2箇所が想定できる。一つは谷川に面した南斜面の階段の使用で、巨石が立ち並ぶ入口を進み、水路を渡り、左手に南に張り出したに築山のような盛土、鏡石を配した石垣を見つ谷川に架かる橋を潜り、階段を上がりA地区へと至る。もう一つは谷川に架かる橋を使用してC地区からA地区へと至るルートである。A地区内では園池の西を通り、北側へと移動したと考えられる。

(視点場) A地区の中では建物が想定できる北東・北西・南東部の3箇所と南西部が視点場として挙げられる。南東部は正面に巨大な岩盤と南側の滝が間近で見られ、合わせて池の対岸の建物や景石、水の流れが鑑賞できる。南西部と北西部からは岩盤全体とその前に広がる池が一望できる。北東部は石垣の上からの眺望となる。岩盤と北側の滝が間近に見え、その向こう池、谷川の対岸の館の中心建物。西を見れば岐阜の町、長良川、伊吹山も一望できる。最大の眺望ポイントはC地区へと架かる橋の上からである。ここからは、谷川上流の滝や水の流れ、周辺の加工された岩盤、C地区の巨石列とその東奥にあるB地区の建物などが一体になった景色が見られる。

### 建築物と動線



### 園池と視点場



第44図 A地区の構造

## 第2節 出土遺物の傾向（第45図）

今回の調査ではグリッド状の小地区を設定し、出土遺物を取り上げた。発掘作業を行っている時から西斜面での出土量は膨大であることは認識していたが、整理作業の過程でグリッド毎の集計を行ったところ、特徴的な傾向を看とれたので、ここに報告をする。

グリッドは第2図のように設定をした。過年度の試掘トレンチが多数設定、掘削されているので、空白エリアが生じる。よって、既試掘トレンチを基準にして、適当な大きさに細分し、図のように設定した次第である。グリッドと呼称しているが、実際は小地区を細分しているようなもので、個々面積も異なる。この点を考慮し、1㎡あたりの出土量を計算して集計、分析を行った。なお、出土数は全て接合後の破片数で、戦国期上層の遺物の大多数を占める大窯製品、輸入陶磁器、土師器皿を対象とした。

出土グリッドが判明する出土遺物は、A地区全体で大窯製品1,366点（9%）、輸入陶磁器519点（4%）、土師器皿13,143点（87%）を数え、合計数は1㎡あたり14.5点となる。平成19・20年度の試掘調査での出土量16.0点/㎡と近似した数値である（註1）。

グリッド毎の1㎡あたりの出土量で、A地区平均より多いグリッドは、G42、G3、G43、G45～48、G31～33、G28、34、G26、27である。これらは平坦地北の南西角、池北東の北東角、池北西の北西角、西斜面の全て、南斜面の南半にあたる。このうち出土量が特に多いグリッドはG42、G47、G48、G33であるが、G42、G47、G48は隣り合っており、この一画は特に集中しているといえる。G42周辺の地形や遺構は、公園造成時の削平により不明であるが、平坦地北西部周辺に建物が存在した可能性が高いと考える。前節で指摘しているとおり、西斜面中の上部に当たる平坦地西辺にも建物の存在した可能性があり、G33の遺物はそこを由来とすると考えられる。

大窯製品、輸入陶磁器、土師器皿の比率については、平坦地上で土師器皿が低率となるグリッドが見られるが、出土数が少ないことによる可能性がある。ただ池南東にあたるG12では、245点（6.8点/㎡）と一定数出土しているにも関わらず、大窯製品21%、輸入陶磁器13%、土師器皿66%と、大窯製品、輸入陶磁器が占める割合が高いが、原因は不明である。それ以外のグリッドでは、A地区全体の比率とほぼ同じで、場所による偏差が見られるわけではない。

A地区以外の周辺の調査区における出土傾向と比較してみると、1㎡あたりの出土点数では、量が多い地区（A・E）と少ない地区（B・C・D・F）があることが分かる。これは遺跡の中央を西流する谷川の北と南にあたる。ちなみに千畳敷2次調査（平坦地②・E地区の北に位置）は緊急調査であったため下層遺構も調査を行っており、比較対象としては適当ではないが、41.4点/㎡と多くの遺物が出土している。

次に大窯製品、輸入陶磁器、土師器皿の3種の比率に注目すると、土師器皿の比率が80%を超える高率な地区（A・BⅡ・E・F）と低率の地区（BⅠ・BⅢ・C・D）に大別できる。F地区は出土量の絶対数が少なく、本来の様相を示していない可能性が高いため除外すると、BⅡ地区以外は先の出土量による傾向と同様である。これら2点の傾向は各平坦地の性格を反映していると思われる。

註1 岐阜市教育委員会・（財）岐阜市教育文化振興事業団 2009 『岐阜城跡』

小地区	グロブ	大窯 点/㎡	輸入 点/㎡	土師器皿 点/㎡	合計 点/㎡	大窯 輸入(点/㎡)				土師器皿(点/㎡)				比率		
						2	4	6	8	20	40	60	80	0%	50%	100%
平坦地北	G37	0.241	0.000	0.435	0.676											
	G42	3.158	1.528	26.802	31.489											
池北東	G3	2.628	1.081	13.392	17.102											
	G10	0.639	0.281	1.408	2.329											
池北西	G39	0.758	0.152	3.367	4.277											
	G43	1.809	1.138	15.691	18.638											
池南東	G4	0.238	0.263	4.906	5.406											
	G5	1.092	0.285	2.215	3.592											
	G6	0.079	0.046	2.873	2.998											
	G11	1.314	0.612	2.765	4.692											
	G12	1.413	0.886	4.487	6.786											
	G13	0.425	0.380	3.657	4.463											
池南西	G17	1.106	1.106	5.225	7.436											
	G18	0.244	0.271	1.263	1.778											
	G19	0.243	0.324	1.823	2.389											
	G21	0.053	0.053	4.574	4.680											
	G22	0.427	0.171	5.269	5.867											
平坦地南	G14	0.160	0.048	0.450	0.658											
	G15	0.200	0.127	0.661	0.988											
	G20	0.036	0.000	0.249	0.285											
	G7	0.491	0.179	1.390	2.060											
	G8	0.045	0.045	0.202	0.292											
北斜面	G40	0.401	0.212	1.799	2.412											
	G44	1.484	0.118	6.678	8.280											
西斜面北	G45	1.948	0.721	18.909	21.577											
	G46	3.643	1.399	22.151	27.192											
	G47	5.965	2.025	52.727	60.717											
	G48	5.215	1.732	45.139	52.087											
西斜面中	G31	1.670	0.526	17.391	19.586											
	G32	1.759	0.544	19.663	21.966											
	G33	3.103	1.061	60.045	64.209											
西斜面南	G34	1.976	0.452	18.683	21.111											
	G28	2.416	0.529	17.512	20.457											
南斜面	G27	0.693	0.203	16.198	17.094											
	G26	1.793	0.584	16.402	18.779											
	G25	0.248	0.050	5.170	5.467											
	G24	1.031	0.229	5.733	6.992											
A地区全体		1.380	0.524	12.626	14.530											

第45図 出土遺物集計グラフ

地区	平坦地	面積 (㎡)	出土点数				1㎡あたりの出土点数				比率		
			大窯	輸入	土師器皿	計	大窯	輸入	土師器皿	計	大窯	輸入	土師器皿
A	⑦	1,412	2,066	752	16,493	19,311	1.5	0.5	11.7	13.7	11%	4%	85%
B I	⑨	304	29	11	56	96	0.1	0.0	0.2	0.3	30%	11%	58%
B II	⑩	203	74	29	1,087	1,190	0.4	0.1	5.4	5.9	6%	2%	91%
B III	⑪	103	35	13	114	162	0.3	0.1	1.1	1.6	22%	8%	70%
C	⑧	235	333	106	973	1,412	1.4	0.5	4.1	6.0	24%	8%	69%
D	⑥	177	111	89	231	431	0.6	0.5	1.3	2.4	26%	21%	54%
E	④	47	47	10	520	577	1.0	0.2	11.1	12.3	8%	2%	90%
F	①	20	1	0	10	11	0.1	0.0	0.5	0.6	9%	0%	91%
合計		2,501	2,696	1,010	19,484	23,190	1.1	0.4	7.8	9.3	12%	4%	84%

第27表 各地区の出土遺物集計表

## 第7章 考察

### 史跡岐阜城跡の庭園遺構に関する所見－A地区の園池遺構を中心として－

京都造形芸術大学歴史遺産学科教授

仲 隆裕

#### 1. はじめに

史跡岐阜城跡における発掘調査は、史跡指定を受けた平成23年に先立って、岐阜城千畳敷遺跡（岐阜城跡山麓居館跡）調査として昭和59年（1984）に第1次調査が実施された。これは織田信長居館伝承地の西側山麓部を対象とした調査であったが、その後、居館の全体像を明らかにするとともに、その成果に基づいて適切な史跡整備を行っていくことを目的として、順次発掘調査が重ねられてきた。

本稿では、本報告書で述べられるA地区（平坦地⑦）の園池遺構を主として、居館跡で検出された庭園遺構について所見を述べることとする。但し、岐阜城は廃城時に石垣の一部が崩され、庭石も抜き取られるなどの破城の行為が行われたとみられることから、遺構の残存状況は必ずしも良好であるとは言えない。そこで、往時の庭園の意匠については、ルイス・フロイスの記録や、当時の他の庭園遺跡との比較によって考察することとしたい。

#### 2. 調査以前の状況

A地区は、発掘調査着手以前は疎林の平坦地であり、南西付近にかつて公園施設として便所が設けられていた。調査区北辺には現在のロープウェイ駅舎から三重塔へ至る園路（階段）が東西方向に設置されていた。南辺は東西方向に流れる谷川の槻谷で画されている。この槻谷の「平成の滝」正面に架かる橋から北に向かって岩壁の山裾を通り、敷地北辺の階段に接続する園路が、東辺となっていた。西側は段差でE地区と画されている。

この平坦地の北辺ほぼ中央部に、長さ4.2m以上、幅2.3mもの巨石（景石4）が露頭しており、これが庭園の立石ではないかと予想され、平成19・20年以降、順次発掘調査が進められてきた。

平成20年の段階では、園池の存在が確認されたものの、その規模や形状は未確定であった。北岸を構成すると見られる州浜（拳大の表面がよく摩耗した玉石が敷き詰められている護岸）についても、その遺構面が西から東へ向かって低くなっていることから、遣水の可能性もあるとも推測されるなど、疑問点が少なくなかったのである。

#### 3. 園池の規模と形状

平成25年度の調査において、この園池のほぼ全容が発掘され、池（SR1）は平坦地⑦のほぼ中央に位置し、南北約21m、東西約20mの規模を持つものであることが判明した。但し、池の西から南にかけては後世の攪乱により遺構面が削平されており、わずかに残る護岸の裾部の痕跡をたどって遺構図が描かれている（別添図3参照）。



写真1 平成20年度調査時におけるA地区の庭園遺構検出状況（西から東を見る）

この庭園で注目されることは、東側に屹立する岩壁の存在である。調査以前、この岩壁の裾部には園路が設置されていたが、これは岐阜公園の整備において造成されたものであり、1600年以前の段階では池水がこの岩壁に接していたことが明らかとなった。

また、池の北辺はほぼ中央に巨石（景石4）があり、その東西にそれぞれ石垣が取りつき、ハの字型の直線的な形状の汀線となる。これに対し、西から南にかけての汀線はゆるやかに屈曲していたと推定される。この汀は、ところどころに小石が敷き詰められていた痕跡がみられることから、礫敷き州浜であったものと考えられよう。

なお、池底には湛水のための造成土が見られ、その表面は小石を打ち込んで仕上げられていたものと観察される。園池は中央部で深くなっていたものと見られ、水深は最大でも50cm程度であったものと推察される。

排水については、明瞭な排水施設は確認されなかったが、西岸やや北寄りの集石遺構（S X 2）の可能性が考えられる。それはこの集石遺構周辺にのみ他とは異なる粘土が打たれており、防水対策が念入りに行われていたとみられるからである。この遺構はオーバーフロー排水の施設であると現時点では推定しておきたい。

#### 4. 岩壁と滝（写真2・3・4）

庭園の池を造る方法としては、湧水地点を選びこれを水源として湛水させること、あるいは流入水を堰き止めて湛水することがあり、また両者を組み合わせることもある。

本園池の場合、池底には粘土層が構築されていることから湧水の可能性は低く、造成土（盛土）を掘削し、防水層を構築したところへ水を導いているものと考えられる。ではその水源はどこにあったのであろうか。

まず当初に想定された給水源は、東側岩盤の北端部に現在も見られる滝水であった。これは現在、北に向かって排水路が伸びているが、かつては南に向かう導水路が存在していたのではないかと予測されたのである。しかし、発掘調査の結果、ここから南に向かう流路は存在せず、園池には接続していないことが確認された。園池の北東部は高さ2m以上の石垣（S V 29）で区画され、この石垣は岩壁に取りついており、水路あるいは滝と見られる遺構は確認されなかったのである。

この石垣の直下では、園池内（池底面）に礎石が複数確認されていることから、石垣上には懸け造りもしくは張り出し縁を有する建造物が存在していたものと考えられる（後述）。

但し、景石4西側の石垣は複雑な形状をしており、東西方向に設けられた石垣は直接景石4に取りつかず、南に矩折れして取りつき、しかも段差をもって接続しているのである。これが導水施設の一部である可能性もあるが、ここに取りつく水路状施設は確認されていない。この遺構の解釈については後述したい。

では水源はどこにあったのであろうか。それは岩壁を伝い落ちる滝水であったと考えられる。

この岩壁はチャート質の露頭岩盤である。その層理は風化によって自然剥離することから加工痕跡を見分けることは困難であるが、少なくとも2筋の溝状の窪みが観察される。現在においても降雨時にはここに流水が見られることから、これが園池の水源として機能していたといえよう。この2つの落水については、それぞれその直下において石敷き遺構が確認されている（岬状遺構S X 41、



写真2 調査以前からあるA地区東側岩盤の北端の滝（西から）

集石遺構S X 40)。これらは水受けの施設であったとみてよいであろう。

なお、岩壁を伝う滝を持つ庭園の類例は少ないが、岐阜県内で大規模な事例としては、多治見市の永保寺庭園があげられる。

永保寺には、夢窓疎石が正和2年(1313)から文保3年(1317)にかけて住しており、庭園は疎石の作であると伝える。庭中に屹立する自然の岩盤は「凡音巖」と呼ばれ、十六羅漢の石像が点在する。その頂上には「靈擁殿」という六角堂が建てられ、この堂の麓からは背後から取り入れられた水が岩盤を流れ落ち、「臥龍池」に注ぎ込む。この池は心字池とも呼ばれ、ここに架かる「無際橋」という反橋は中央部に屋形を持つ亭橋であり、「水月堂」という観音殿に導かれる。

永保寺の岩盤と比較すると、この岐阜城の岩壁はより規模が大きく、その高さは約30m以上あり、立面形状は台形である。2つの溝の上端部付近は植栽に覆われているが、踏査したところ南北方向の溝も観察された。これが水路遺構である可能性もある。

この水路は、雨天時にのみ集水し滝水を流すものであったのだろうか。それとも谷川などから導水していたのだろうか。

後者であるとする、水源は槻谷であることがまず想定される。この場合、かなり上流からの導水となる。いまひとつの可能性として、この岩壁をまわりこんだ背後に存在する谷(滝)が挙げられよう。この谷は途中で滝壺も形成されていることから、ここから樋を用いて導水していた可能性もあるだろう。いずれにしても比高差30mが必要であり、大掛かりな導水施設が設けられていたと考えなければならない。

永禄12年(1569)岐阜城を訪れ、信長の居館の様子を記したルイス・フロイスは「下の山麓に溜池があって、そこから水が部屋に分流しています。そこに美しい泉があり、他の場所にも、宮殿の用に思いのまま使用できる(泉があります)」と記している<sup>(1)</sup>。

この「溜池」がどこに存在していたのかは不明であるが、溜池からの分水は溝や木樋(懸樋)で行われていたものと推察される。このフロイスの記述について、アルカラ版書簡集における該当箇所では「その山からは水が豊富に流れ落ちていましたが、それはいくつかの広間に管で配水されており、美しい水口となって、他の場所でも家事のために思いどおりに使えるようになっています」とあるからである<sup>(2)</sup>。

懸樋は現在においても多く用いられており、絵画資料においても数多くの懸樋の事例を見ることができる<sup>(3)</sup>。たとえば13世紀末に成立したとされる『一遍上人絵伝』には、山中に木樋による水道施設が設けられている姿が描かれている(巻9第11紙)。14世紀の絵巻物でも、『融通念仏縁起絵巻』には豊富な滝水から木樋で水船に水を導いている様子が描かれている(上巻第4-5紙)。



写真3 石垣S V 34・35・43、石敷S X 48



写真4 永保寺庭園



岩壁の水路痕跡に関しては、さらに精査の上、実測図の作成を行うなど、今後も検討を継続する必要がある。

## 5. 岬と遣水（写真5・6）

岩壁を伝って落とされた滝水は現在のところ2筋と推定される。南側の滝水はその直下にある集石遺構（S X40）に落ちていたとみられる。北側についても、滝の直下に岬状遺構（S X41）がみられるが、これは規模が大きく、東西7.0m、南北約2.0mの出島（岬）状の遺構である。

S X41は北岸が石組みの護岸であり、南岸は州浜護岸となっている。断ち割り調査によって、この岬状遺構の下層には池底を覆う石敷が確認されたことから、のちに改修によって追加されたものであると考えられる。

先述したように、園池護岸北岸は、ほぼ中央に巨岩の景石4が位置し、その東西にハの字型に石垣が伸びる。景石4は池底の整地層の上に据えられていると考えられる。

平成19・20年度の調査では、この景石4の南方部で発掘調査が行われ、池底が東から西に向かって傾斜していることが確認されていた。平成25年度の調査においてもこのことが確認されている。つまり、岬と思われる遺構と北側の石垣との間は、水が東から西に向かって流れる構造、つまり遣水となっていると判断してよいであろう。

この流れは景石4の東側に据えられた景石7～10に当たって南側に流れを変え、景石3によって左右に分けられて池に注ぎ込むものと見られる。それは景石3の付近で池底に小さな段差があり、そのライン上には石列（S V6）が据えられているからである。

このような水の流れの景が演出されているのは、3でもふれたように、北岸に建物が建てられていたからであろう。発掘調査によって、北岸付近からは土師器皿や大窯製品などが出土している。また池中の礎石は被熱していることから、直上に柱が立てられていたものと判断される。これらを考えあわせると、石垣S V29の上部には、宴遊のための建物が存在していたと考えられよう。但し、S V29の上端部は崩落（もしくは破城行為）によって原状をとどめていないことから建物痕跡は確認されていない。

先述のように、この建物が石垣上に建ち、懸け造りもしくは張り出し縁を有していたと想定するならば、景石4の西側の石垣の段差については、建物と庭園との接点部における何らかの施設であった可能性が考えられる。そこで想起されることは、先に見たように、建物近くに「泉」あるいは「美しい水口」があったとするフロイスの記述である。

14世紀初頭に描かれた『法然上人絵伝』には、建物の縁先に手水鉢（あるいは手水桶）が据えられ、そこに筧によって導水がなされている姿が数多く描かれている（たとえば16巻14紙）。また、『松崎天神縁起絵巻』（13世紀）には、懸樋で水を導き、桶に落としてこれを溢流させて泉の景を表した池庭の様子が描かれている（巻2第15紙）。園池にせりだした建物からこの風情を鑑賞しているのである。また、『春日権現絵巻』（14世紀）には、水圧を利用した筧の様子が描かれている（巻9第7紙）。

以上のような絵画資料の場面<sup>(4)</sup>を参照してみると、筧の姿が「泉」として認識されることは不自然ではないと思われる。フロイスのいう建物近くの「泉」とは筧であった可能性が考えられるのである。

## 6. フロイスの見た庭園

ここで、フロイスの庭園に関する記述をアルカラ版書簡集から抽出してみたい。以下、高木洋氏の訳文から引用させていただく。

まず、フロイスは信長がこの居館を整備した理由について「きわめて裕福であり、他の国主が何事

においても彼を凌ぐことなく」「その偉大さを示すため、またその愉楽のために、地上の樂園としてこの宮殿の建設を決定した」「それは美濃の人が『極楽』といい、信長がきわめて多額の金子をつぎ込んだ、彼の樂園なのです」と記している。フロイスは、信長が居館を造営したのは彼の権力の誇示と自身の愉楽のためである、としている。

石垣で囲まれた居館は広大で、広場や長い階段のアプローチがあり、「内部の部屋や大広間は（まるで）クレタの迷宮で、すべてが巧妙に、思いのままに作られていた」と記される。フロイスの記述は、一応は入り口から順に観察した内容が述べられているようであるが、フロイス自身も「私は後で記述するためにこの宮殿の様子を記憶しようとしたのですが目にするものがあまりに多く、第2のものの壮大さと完璧さは、その前に心に留めておいたものを忘れさせました」と記しているように、整然としてはいない。この点は、フロイスの記述から館の空間構成を読み解こうとする際に留意すべきであろう。

庭園についても、座敷に縁があることを述べたあと、「この縁の外側には5、6美しい庭がありますが、すべてが珍しいもので、新しく、何か雪のように白いもので作られており、小さな空間をなしています」と記しているが、一つの建物の周囲に5、6の庭園があったのか、館全域に5、6の庭園が存在していたのか、判然としない。「これらの庭のあるものには1パルモの深さで水が溜められており、その底には小石と雪白の砂が敷かれていて、たくさんの種類の魚が泳ぎまわっていました」と記述されることから、おそらくは后者であろう。そして、池を持つ庭は複数あったのであろう。

A地区の園池に関する記述と考えられるものは、「池の中央の表情豊かな石の上には、各種の薫り高い草花が生えていました」という描写である。景石3は南北方向でいえば北寄りに位置するが、東西方向ではほぼ中央に位置することから、この石は景石3に該当する可能性がある。但し、C地区の園池遺構においても景石の抜き取り痕跡が確認されていることから、現時点で断言することはできない。

フロイスの記述については、館全域の構成と照らし合わせ、さらに検討を重ねていくことが必要である。

## 7. 南岸と建物（写真7・8）

建物遺構は、園池南岸にも想定される。それは南側の滝が落ちていたと想定される集石遺構（SX40）にごく近い位置である。但し、礎石は2石しか確認されておらず、その規模は不明である。

その他、建物としてはこのA地区の南東隅部での存在が想定されるが、園池西側については西辺の石垣近くにまで園池が伸びていたと考えられる。

園池の西岸から南岸にかけては護岸の石組みは確認されておらず、池底が緩やかに傾斜し、礫が敷かれた州浜護岸であったと見られる。

礫敷きの州浜は、奈良時代の平城宮東院庭園で見られるように、日本の庭園では古くから行われた護岸意匠である。発掘調査で確認されている平安時代の庭園遺構においては、園池の護岸は礫敷き州浜であることが主流であり、平等院庭園で11世紀の創建期のものと考えられる礫敷きの州浜が発掘調査で確認されている<sup>(6)</sup>ほか、岩手県平泉町の毛越寺庭園の護岸も礫敷き州浜である。このような州浜護岸を主体とする庭園は、室町時代や戦国期・安土桃山時代においても、公家の庭園の意匠として継承されていたことは、室町時代を通じて存続した京都の二条家（二条殿跡）の園池遺構の発掘調査成果にうかがうことができる。

一方、室町時代においては石組護岸が発達し、戦国期武将の居館においてはこれが主流となっていたとみられる<sup>(7)</sup>。岐阜県の東氏館の園池（15世紀）、福井県の一乗谷朝倉氏遺跡（16世紀中葉：永禄10年頃）の諏訪館跡庭園や朝倉館跡庭園の園池、広島県の吉川元春館跡の園池（16世紀後半：慶長5

年以前)、東京都の八王子城跡御主殿の園池(16世紀)などは、いずれも石組護岸を主体とする園池である。

これら戦国大名の居館は、室町将軍邸や管領邸に範をとっていたとされる<sup>(8)</sup>が、将軍邸の庭園遺構の発掘調査成果は部分的に行われているに過ぎず、不明な点が多い。しかしながら絵画資料で見ると、たとえば旧町田家本や上杉家本の洛中洛外図屏風には、将軍邸や管領邸の庭園は州浜護岸と石組護岸を併用する園池の姿として描かれている<sup>(9)</sup>。

州浜護岸と石組護岸を併用する園池の事例は皆無ではなく、岐阜県の江馬氏館跡庭園は石組護岸を主とするが一部には州浜があり、現在発掘調査が進行中である大分県の大友氏館跡の園池もまた、石組護岸と州浜護岸を併せ持つ。但し、これは本庭園より先行する事例ではない可能性が高い。山口県の大内氏館跡庭園は、石組の遣水を持つ瓢箪型の園池で、護岸は小振りの石組であり、一部は玉石敷きであった。これは足利義尹を迎えた明応9年から永正4年(1500~1507)頃の作庭の可能性がある。

このような概観から、園池が北半部で巨石を含む石組や石垣による護岸を有し、南半部で礫敷き州浜による護岸を有しているという本庭園の構成は、室町将軍邸を意識したものであり、他の戦国居館の園池より積極的に州浜意匠を取り入れているように見受けられる。

## 8. おわりに

平成26年12月までの調査成果によれば、岐阜城山麓部の居館は斎藤氏三代(道三、義龍、龍興)の時代に生まれ、これを引き継いだ信長が大規模に改修していることがおよそ明らかとなった。発掘調査は、居館推定地内を整備地区およびAからF地区の7地区に区分して行われてきた。全体像の解明にはさらに期間を要するが、現時点での見解では、本居館は山麓斜面部に7段11面の平坦面を造成して生まれ、これらが建物・施設等で連結されることによってひとまとまりの居館を構成しているものと解釈される(第5図参照)。

本稿で注目した点は、ルイス・フロイスの記録にみられるように、本居館には永禄12年の時点で複数の庭園が営まれていたことについてである。

戦国期、地方領主である武家の居館には威信財として、また愉楽のための庭園を備えることは必須であり、信長もそのような環境で育成されたとみられる。岐阜城に先立つ永禄6年(1563)の小牧山城における信長居館の遺構は後世の削平によって遺構の検出がみられないが、里村紹巴の記録から何らかの庭園が構築されていたと見られる。永禄11年(1568)に足利義昭を奉じて上洛した信長は、西芳寺の庭園を再興させており、また翌年には義昭の二条城築城に際しては庭園に名石である藤戸石を搬入し、後年(元亀元年:1570)には東山殿から九山八海石をも搬入するなど、作庭に関わっている。岐阜の居館整備前後の信長の事績を見ると、作庭に関する彼の見識は相当に高かったものと推察されよう。

信長が安土城に移った天正4年(1576)以降も岐阜城は存続していることから、一連の発掘調査で検出された庭園遺構のすべてが信長在城時の造営にかかるものであるとは断言できない。しかし、慶長5年(1600)に落城した際のもものとみられる焼土が随所で確認されていることから、これが作庭の下限となろう。

本稿ではA地区の庭園についてのみ所見を述べたが、これを含めて他の地区の庭園遺構について簡潔に所感を記しておきたい。

A地区(平坦地⑦)の庭園遺構は、石垣で囲われた平坦な地に作られており、西に聳える岩盤からの滝水を受ける池庭で、これに臨んで建物が複数存在していた可能性がある。ここは宴遊を伴う施設であり、室町将軍邸における庭園の意匠を継承しつつ、禅宗寺院の永保寺で見られるような大規模な滝を組み込むことで、規模においても意匠においても新機軸を打ち出した創意に富んだ庭園であった

と推察される。

B地区は、谷川と自然の岩壁に挟まれた傾斜地で、3つの段差のある平坦面（平坦地⑨から⑪）が造成された区域である。ここで確認された庭園遺構は下から三段目の平坦地⑪に営まれた小さな池庭で、池底には長良川の白砂が敷き詰められていることが確認されている。ルイス・フロイスの記述から推測すると、ここは茶室に伴う露地の一部である可能性が考えられる。

C地区は、A地区とB地区との間に位置し（平坦地⑧）、中心建物があったと想定される地区である。ここで確認された庭園遺構（平坦地⑧b）は池庭で、中心建物から鑑賞するものであったと推定される。この中心建物は主殿の機能を備え、のち豊臣秀吉の時代に成立する対面所に相当する施設であったと推測される。

現時点において、なお発掘調査が進行中であり、考察も確定的なものではない。信長居館の構成については、先行する室町將軍邸や管領邸、各地の戦国武将の居館における調査事例のほか、秀吉期の事例と比較しつつ、さらに検討・考察していく必要があると考える。

- 註
- (1) ルイス・フロイス『日本史』、松田毅一・川崎桃太訳、中央公論社
  - (2) 高木洋氏のご教示による。
  - (3) 仲隆裕(2008)初期茶座敷における手水施設に関する一考察、茶の湯研究「和比」第5号、不審菴文庫
  - (4) 同上
  - (5) 京都市文化財保護課編(1990)『京都の庭園 遺跡にみる平安時代の庭園』、京都市
  - (6) 宗教法人平等院編(2003)『史跡及び名勝平等院庭園保存整備報告書』、宗教法人平等院
  - (7) 奈良国立文化財研究所編(1998)『発掘庭園資料』、奈良国立文化財研究所
  - (8) 小野正敏(1997)『戦国城下町の考古学』、講談社
  - (9) 浅野二郎・仲隆裕・藤井英二郎(1988)書院造庭園に関する研究—その1：初期書院造庭園と会所・泉殿の庭園、造園雑誌51(5)



写真 5  
S X 41 に類似する岬の事例（平等院庭園）  
執筆者撮影



写真 6  
園池北側を石垣とする類例（大内氏館跡）  
山口市教育委員会 提供



写真 7  
平安時代の州浜の事例<sup>(5)</sup>（高陽院庭園）



写真 8  
州浜護岸と石組み護岸を併用する事例  
（江馬氏館跡庭園）  
飛騨市教育委員会 提供

